

徳川政権の成立過程における関ヶ原の役の政治的位置

水野 伍貴

序章	本稿の目的と研究史	1
第一節	本稿の目的	1
第二節	本稿における用語整理	3
第三節	近年の研究成果とその課題	4
第四節	本稿の構成	7
第五節	本稿における史料の扱いと進め方	8
第一章	秀吉が整えた「遺言体制」の検討―その成立と五大老・五奉行の力関係を中心に―	14
はじめに		14
第一節	五大老・五奉行と武家官位制	15
第二節	五大老・五奉行の呼称について	22
第三節	秀吉遺言覚書に見る五大老・五奉行の職掌	29
第四節	「遺言体制」の成立過程	35
第五節	「遺言体制」の改変	54
結語		57

第二章	家康の私婚問題と石田三成の失脚―石田三成襲撃事件の検討を中心に―	69
はじめに	69
第一節	権力闘争のはじまり	70
第二節	家康の私婚問題	75
第三節	石田三成襲撃事件の検討	82
第四節	事件の背景	85
第五節	事件前夜の動静	86
第六節	前田利家の死と事件の勃発	89
第七節	伏見入城後の三成の動静	94
第八節	事件の展開と収束	96
第九節	「厚狭毛利家文書」からみる和解交渉	102
第十節	事件後の動静	109
結語	112
第三章	会津征討の歴史的位置づけ―加賀征討との関係性の検討―	125
はじめに	125
第一節	庄内の乱と家康権力の伸張	126
第二節	家康暗殺計画の風聞	132
第三節	家康の大坂入城と「遺言体制」の改変	134

第四節	前田利長の対応と軍事的緊張	141
第五節	長岡氏の赦免	147
第六節	征討の回避と事件の収束	153
第七節	加賀征討から会津征討へ	156
第八節	糾明使の派遣と上杉氏の回答	159
第九節	糾明使帰還後の展開	164
結語		170
第四章	西軍の結成過程と目的についての一考察	183
はじめに		183
第一節	佐和山引退後の石田三成	183
第二節	関ヶ原前夜の石田三成	187
第三節	「内府ちかひの条々」からみる西軍の目的	196
第四節	西軍の挙兵に対する徳川家康の反応	202
第五節	西軍の評価の再検討	206
結語		210
第五章	本戦後の国割に関する一考察	218
はじめに		218
第一節	関ヶ原の役後の領国再編成	220

第二章	慶長五年十月・十一月の国割	229
第三節	長岡氏に対する領知目録の交付	233
第四節	諸侯に対する領知宛行状の発給	237
結語		243
終章	関ヶ原の役の位置づけ	253

序章 本稿の目的と研究史

第一節 本稿の目的

本稿の目的は、豊臣秀吉の死から関ヶ原の役にかけて豊臣政権内で繰り広げられた権力闘争の実態を解明することによって、関ヶ原の役の歴史的位置づけをおこなうことにある。

豊臣政権から徳川政権へ移行する過程に関する研究の近年の成果として、笠谷和比古氏の研究が主著として挙げられる。

笠谷和比古氏は、徳川家康は関ヶ原の役で勝利した後、慶長八年（一六〇三）の征夷大將軍任官を経て、幕府を開設したが、豊臣秀頼も依然として、関白型公儀に君臨する者としての権威を依然として保持しており、江戸開幕から大坂の陣までの政治構造を「二重公儀体制」と定義し、豊臣氏の滅亡によって、徳川氏はようやく公儀の一元化を達成したとした⁽¹⁾。

笠谷氏は、慶長五年九月十五日の美濃国関ヶ原における勝利において、豊臣系大名たちの軍事的比重は著しく高く、論功行賞によって国持大名に昇格した彼らは、家康に臣従しながらも、秀頼に対する忠誠は維持していたため、西国を中心として全国三分の一の地域を占める豊臣系大名を背後に控えた豊臣氏は、徳川氏に匹敵しうる存在であったとした。

管見の限りでは、笠谷氏の「二重公儀体制」に賛同する意見はみられない。これは豊臣氏が一大名に止まらないう特殊な地位にあったことは示しながらも、公儀という面においては理論的な解釈に止まり、具体的事例が示されていないことに起因しているよう。

関ヶ原の役後の豊臣氏の権力に対する過大評価はあったものの、豊臣氏が一大名に止まらない特殊な地位にあったとする笠谷氏の指摘は、その後の研究に継承された。例えば、藤田達生氏は慶長十六年三月二十七日の後陽成天皇から後水尾天皇への譲位と、翌日の徳川家康と豊臣秀頼の二条城での会見をもって、実質的な豊臣氏からの徳川氏の政権交代と位置づけた⁽²⁾ように、家康の征夷大將軍就任をもって盤石な徳川政権が誕生したという見方ではなく、徳川政権は段階的にその権力を伸張させたという見方に变化した。

また、笠谷氏は、関ヶ原の役後の全国的な領知配分に際して、領知配分・給付の主体は依然として豊臣秀頼であって、家康の名をもってすることはできなかったため、家康は領知配分・給付の主体が誰かという問題を意図的に曖昧にしたと指摘し⁽³⁾、この主張も大きな影響を与えた。

そして、藤井譲治氏も同様の立場で、関ヶ原の役後の領知配分は、実質的には家康による領知宛行にもかわらず、豊臣政権の枠組みを無視しえない状況があったと指摘し、家康が所持した領知宛行権に限界があったとしている⁽⁴⁾。

笠谷氏の研究以降、関ヶ原の役の勝利が徳川政権の誕生に直結するという見方は見直しが進んでいる。その一方で、家康が所持した領知宛行権に限界があったとする点など、徳川政権の確立にあたっての課題がいくつか示されたことで、なぜ家康は征夷大將軍に就任し、幕府を開くことが出来たのかという点が曖昧となっている。

この問題を解決するには、豊臣政権内で繰り広げられた権力闘争の実態の解明と、関ヶ原の役の歴史的位置づけをおこなうことが不可欠である。例えば、関ヶ原の役で家康が戦った相手（の大將）は誰かと問われた場合、人によって、石田三成、毛利輝元、あるいは豊臣秀頼など、様々な答えが返ってくる。これは、関ヶ原の役での家康の勝利が何を意味するのかが曖昧であることを示している。豊臣政権から徳川政権への移行期を語る上で根本的な問題であり、これを解決することは非常に有意義であると筆者は考える。

第二節 本稿における用語整理

本稿では一般的に用いられる「関ヶ原の戦い」や「関ヶ原合戦」といった呼称ではなく、「関ヶ原の役」と表記している。徳川家康らと石田三成らの戦いは、慶長五年（一六〇〇）九月十五日の関ヶ原の戦い、一日だけの出来事ではないからである。九月十五日の関ヶ原の戦いに至るまでには、伏見城の戦いをはじめとする幾多の前哨戦がおこなわれ、各地方でも局地戦が並行しておこなわれた大規模な大乱であった。

明治二十六年（一八九三）刊行の参謀本部編纂『日本戦史・関原役』は、凡例で「此書ノ主トスル所ハ慶長五年庚子九月十五日関ヶ原ノ一戦ナリ、然レトモ此年此役ニ関スルノ戦、殆ント全国ニ涉リ其数大小四十余ニ及フ、皆之ヲ集録セサルヲ得ス、乃チ宜ク庚子役ト題スヘキカ如キ者ナレトモ、関ヶ原ノ名已ニ人口ニ膾炙シ且其主タル所ナルヲ以テ、彼ニ従ハスシテ此ヲ取レリ」^{（5）}と、総体的な大乱を「関原役（関ヶ原の役）」と呼称する理由を説明し、また、九月十五日の関ヶ原の戦いは「本戦」と呼称している。本稿ではこれに倣って総体的な大乱を「関ヶ原の役」、九月十五日の関ヶ原の戦いを「本戦」と呼称したい。

続いて、石田三成らが挙兵した後の各軍の呼称について整理をおこないたい。三成らを豊臣軍、家康ら徳川軍とした見方もあるが、家康も豊臣秀頼に対する奉公を掲げている以上、家康も秀頼の臣下であり、豊臣軍となる。また、三成らも二大老・四奉行による公儀を自称しているため、秀頼を推戴していることはいうまでもなく、豊臣軍となる。関ヶ原の役は、実質的には家康が徳川政権の礎を築いた戦いであるが、表面上は豊臣政権内の権力闘争であるため、家康らも、三成らも共に豊臣軍となる。本稿では『日本戦史・関原役』に倣って、家康らを「東軍」、三成らを「西軍」と呼称したい。

第三節 近年の研究成果と課題

豊臣秀吉が健在な時期において、豊臣政権が秀吉の独裁制であったという見解は、（そのあり方については研究者による見解の違いがみられるが、独裁制そのものについては）先行研究において一致している。

例えば、跡部信氏は、秀吉が健在の時の豊臣政権について、秀吉の独裁制を前提としつつも、家康・三成ら後に五大老・五奉行を担う者たちが秀吉に意見をし、その意向を変化させ、政権の安定に尽力していた一面を指摘している（⁶）。

一方、山本博文氏は、秀吉の独裁制を強調し、秀吉の命令を諸大名に伝達する「取次」の存在に着目した「取次」論を提唱（⁷）。「取次」が秀吉と大名の意思伝達を取り持つとともに、大名の「指南」もおこない、秀吉は「取次」を通じて大名を統制したとしている。

そのため、豊臣政権は、政治機構が未成熟であったといわれることがあるが、徳川政権において老中制が整うのは、徳川家光の治世である寛永十年代であり、初代・二代の時は政治機構が整っていない方が普通であった。しかし、豊臣政権は、秀吉が歿する慶長三年の時点で、跡継ぎの秀頼は六歳であった。秀吉は死を直前にして政治機構の構築を迫られることとなり、設けられたのが五大老・五奉行である。

五大老については、文禄四年（一五九五）に豊臣秀次が切腹した直後の成立とする見方（⁸）もあつたが、慶長三年八月二十八日付毛利輝元起請文前書案の「もし今度被成御定候五人之奉行之内」（⁹）の文言などをもって秀吉の死の直前の成立であると跡部信氏によって指摘されている（¹⁰）。

また、五大老の職掌は、堀越裕一氏の研究（¹¹）を整理すると次の四つに区分できる。まず、第一に現状維持を旨とする知行安堵状の発給、第二に朝鮮からの撤兵、第三に大名間相論の解決、第四に反乱や謀反への対処である。最初の一つ目が平常時であるのに対し、残り三つが非常時のものである。全てに共通している点は、秀吉死後の政局の安定を保つことであり、秀頼が成長した後は秀頼に移行されることが予想される役割である。五大老

は、秀吉死後の政局を安定させることを使命として設置され、主な役割は五奉行では解決できない次元にある非常事態への対処だったといえる。

谷徹也氏は、家康や五奉行の政務実態に着目し、慶長四年九月以前は、「遺言」「誓紙群」に規定された政権運営が行われていたが、慶長四年九月の家康の大坂入城以降、その枠組みは溶解したと指摘した⁽¹²⁾。また、中野等氏は、秀吉が歿する前後に大老衆・奉行衆が提出した誓紙から、秀吉の遺言の内容を整理し、慶長三年九月三日付の十人連判誓紙は、不安定ながら関ヶ原の役直前まで合議政治を支えたと指摘している⁽¹³⁾。

秀吉死後の権力闘争においては、笠谷和比古氏が慶長四年閏三月に加藤清正ら七将が石田三成の暗殺をはかり襲撃したとされる事件（通称 石田三成襲撃事件）において、三成が逃げ込んだ場所が伏見の家康邸ではなく、伏見城内の三成邸である点を明らかにし⁽¹⁴⁾、光成準治氏は『厚狭毛利家文書』を用いることで事件像を鮮明なものとするともに、事件の対立構造が毛利・四奉行と、徳川・七将に発展した点を指摘した⁽¹⁵⁾。両者の成果によつて、この事件は新しい事件像が浮かび上がってきているといつていいであろう。なお、この事件については第二章で取り上げる。

関ヶ原の役の勃発後においては、会津征討軍を率いる家康が、豊臣系大名を下野国小山に集めて開いた軍議「小山評定」に関する議論が活発である。笠谷和比古氏は、慶長五年七月二十五日に催された小山評定の時点では、三奉行（増田長盛・長束正家・前田玄以）による「内府ちかひの条々」はまだ小山に届いておらず、石田三成・大谷吉継たちだけによる挙兵という認識のもとに議論が進められたため、同月二十九日頃に三奉行が三成らに加担していることが明らかとなつて、小山評定における議論の前提が覆ってしまった時、東海道筋に居城を構える豊臣系大名たちが離反するのを防げたのは山内一豊の献策にあったと指摘した⁽¹⁶⁾。小山評定の段階で諸将が家康に味方するのは至極当然であり、むしろ、山内一豊ら豊臣系大名たちが居城を家康に進上したところこそが、結果的に東軍の分裂を防いだと、山内一豊の献策にその重点を置いたのである。

なお、「小山評定」は、その存否をめぐって、虚構説を唱える白峰旬氏⁽¹⁷⁾と、肯定的な立場をとる本多隆成氏⁽¹⁸⁾を中心として平成二十四年(二〇一二)から論争が十年以上続き、途中から肯定的な立場として笠谷和比古氏⁽¹⁹⁾、藤井讓治氏⁽²⁰⁾、筆者⁽²¹⁾も加わっている。

また、近年では西軍の再評価が進んでおり、白峰旬氏は、毛利輝元・宇喜多秀家の二大老と石田三成・増田盛・長束正家・前田玄以の四奉行による公儀が樹立したと主張する⁽²²⁾。中野等氏も「秀頼を推戴する新たな『公儀』の成立」⁽²³⁾と述べ、堀越祐一氏も「秀頼を擁する三成方は、いわば『政府軍』であり」⁽²⁴⁾と述べるなど、近年では西軍を「公儀」と評価する方が多数派といえる。しかし、筆者はこの評価に賛同できない。家康は依然として諸大名の支持を失っておらず、西軍を「公儀」と評価した場合、この理由が説明できないからである。この問題については、第四章で取り上げる。

本戦後の領国再編成(国割)については、家康は福島正則ら豊臣系大名に対して「御恩」の名のもとに加増を行いながら、遠隔地(西国)へ追いやったとする通説⁽²⁵⁾に対して笠谷和比古氏は、姫路・岡山・広島をもって僻遠の地とみなすことはできないと、豊臣系大名が要衝の地を与えられている点を指摘し、また、本戦において豊臣系大名が占めた戦力と功績の割合の大きさから、戦後に西国で豊臣系国持大名が多数誕生したことを指摘すること、関ヶ原の役後の豊臣秀頼の立場、家康権力の評価および、豊臣政権から徳川政権へ移行する過程において新たな視点を示した⁽²⁶⁾。また、前述のように笠谷氏や藤井讓治氏によって、家康が所持した領知宛行権に限界があった点が指摘されている。しかし、慶長八年の征夷大將軍任官に至るまでに、家康は領知宛行権における課題を克服できたか否かという点が曖昧となっている。第五章ではこの問題にとり組む。

このように、石田三成襲撃事件、小山評定、国割といった個別での議論は盛んな一方で、秀吉死後から関ヶ原の役にかけての権力闘争を総体的に捉えた研究は管見の限りではみられない。そのため、注目された個々の事件の詳細は少しずつ解明されてきているが、その事件が権力闘争全体においてどのような位置づけとなっているの

かといった視点が抜け落ちており、さらには関ヶ原の役の歴史的な位置づけがおこなわれないという問題がある。堀越祐一『豊臣政権の権力構造』（吉川弘文館、二〇一六年）は、豊臣政権の確立から関ヶ原の役後の「豊臣体制」の解体をテーマとして扱っており、五大老・五奉行の職掌をはじめとして、本稿の執筆において多くの示唆を得た。ところが、堀越氏の研究でさえ、関ヶ原の役については、関ヶ原での決戦は家康の本意ではなかったと言及するに止まり²⁷⁾、その後の「豊臣体制」の解体を①慶長五年十二月二十日の関白職返還、②豊臣「氏爵」体制の無実化、③豊臣武家官位制の改変の三点に求めている。つまり、徳川政権成立に向かうための布石は、全て家康が関ヶ原の役後におこなった施策にあったとされており、関ヶ原の役の位置付けはおこなわれていない。ゆえに本稿では、秀吉死後から関ヶ原の役にかけての権力闘争を総体的に捉え、実態を解明することによって、関ヶ原の役の歴史的な位置づけをおこなう。

第四節 本稿の構成

次に各章の位置づけを示し本稿の構成を示したい。本稿は既発表論文を基に加筆・修正・再構築して構成されている。既発表論文を発表順に挙げ、本稿との関係性は次のとおりである。

- ① 『『豊臣秀吉遺言覚書』』による政治構造と五大老・五奉行の役割」（拙著『秀吉死後の権力闘争と関ヶ原前夜』日本史史料研究会企画部、二〇一六年）（以下『拙著』と表記）第一章。
- ② 「前田利家の死と石田三成の失脚」（『拙著』）第二章。
- ③ 「加賀征討と会津征討の連動性」（『拙著』）第三章。
- ④ 「佐和山引退後における石田三成の動向」（『拙著』）第四章。
- ⑤ 「関ヶ原の役の歴史的意義——豊臣秀頼政権における五奉行の立ち位置を通して」（『拙著』）第四章。

⑥ 「秀吉死後における家臣間の対立構造と推移」(渡邊大門編『戦国・織豊期の諸問題』歴史と文化の研究所、二〇一八年) 第二章。

⑦ 「加賀征討へ向かう動静の再検討——会津征討との対比を通して」(『十六世紀史論叢』一一号、二〇一九年) 第三章。

⑧ 「関ヶ原前夜の長岡氏」(『研究論集 歴史と文化』第四号、二〇一九年) 第三章。

⑨ 「徳川・前田の和解と石田三成の失脚」(渡邊大門編『日本中近世の権力と社会』歴史と文化の研究所、二〇二〇年) 第二章。

⑩ 「秀吉『遺言体制』の成立と変遷——五大老・五奉行を中心に(上)」(『十六世紀史論叢』十四号、二〇二一年) 第一章。

⑪ 「秀吉『遺言体制』の成立と変遷——五大老・五奉行を中心に(下)」(『研究論集 歴史と文化』第七号、二〇二一年) 第一章。

⑫ 「関ヶ原合戦後の国割に関する一考察」(『十六世紀史論叢』十六号、二〇二二年) 第五章。

第五節 本稿における史料の扱いと進め方

前掲のテーマに取り組むにあたって本稿では、書状や日記、いわゆる一次史料を中心に論を進めていくが、必要に応じて二次史料も活用していく。

二次史料と一言に言っても、同時代の人物が後日・後年に回想して記した覚書から、後世の人物が編纂した軍記まで様々である。そこで本稿で扱う二次史料をいくつか挙げ、本稿での扱い方を述べたい。

伊達政宗の家臣伊達成実による『伊達日記』や、前田利家の老臣村井長頼の子である村井長明(長之)の覚書

『亜相公御夜話（利家公御代之覚書）』と『象賢紀略（利長公御代のおぼえ書）』は、同時代の人物が記した覚書である。また、後述するように一つ書きの形式がとられている点も評価でき、二次史料の中でも上位に位置づけられる。

『看羊録』は、朝鮮の儒者姜沆の記録であり、孝宗五年（一六五四）に門人の手によって編集され、二年後に刊行された。姜沆は、慶長二年（一五九七）に藤堂高虎の軍に捕らえられて大洲に拘留。翌年六月には伏見に移送されている。慶長五年四月二日に伏見を離れ、同年五月十九日に釜山へ着いて帰国している。藤原惺窩ら日本側の人物との交流はあるものの、姜沆が把握している（日本の）政治的情報の正確性は、当時の人々の風聞の域を出ない。しかし、日本にいなながらも朝鮮国王宣祖への上奏文を明の使者王建功に託して、日本の歴史・地理、文禄・慶長の役に従軍した諸大名の情報などを報じ、日本と戦うにあたっての私見を述べているように、姜沆の情報収集の目的は国王に上奏するためのものであり、姜沆なりに正確な情報を掴もうとしていたことは想像に難くない。『看羊録』の記述のみをもって、その内容を歴史的事実とするのは危険であるが、当時の人々の認識（風聞）を知る上では有益な史料といえる。

『細川忠興軍功記』は、細川家臣牧丞太夫によって編纂された覚書であり、寛文四年（一六六四）に成立。ただし、寛文九年に別人による加筆もおこなわれている。一つ書きの形式がとられ、条目の末尾に情報源（語り手）が示されている箇所が所々みられる点は情報の信頼性を高めている。しかし、記述されている事件等の日にちにについては誤りもみられる。また、慶長五年七月十七日晚に忠興のもとへ七月九日付の小笠原少斎（秀清）の書状が届いたとする記述があるが、少斎から報じられた内容に七月九日以降の出来事が記されており、疑わしい記述も一部みられる。こうした点においては注意が必要であるが、中には忠興本人から聞いたとする条目もみられるように、当事者から発せられた情報を集約したものと考えられる。

『慶長年中ト斎覚書』は、家康の侍医板坂ト斎（如春）の覚書である。ト斎は天正十九年（一五九一）に家康

に拝謁し、関ヶ原の役に従軍している。文中に八丈島から来た者が、宇喜多秀家が正保年中（一六四五～四八）までは存命であり、嫡子（秀高）は死去したと語ったとする記載があるため、秀高が歿した慶安元年（一六四八）以降から、卜齋が歿する明暦元年（一六五五）までの間に成立したと考えられる。家康の侍医による記録である点は評価に値するが、石田三成の制裁を訴えた七将のメンバーに誤りがあるほか、東軍諸将が小山から反転西上した日を七月二十八日とするなど、所々で誤りがみられる。後年の記載による記憶違いのほか、家康顕彰のバイアスなどから脚色がおこなわれた可能性も考慮しなくてはならない。家康の侍医による記録という点を過大評価して記載内容を全面的に信用するのは避けるべきであり、ほかの史料と記載された情報を比較しながら用いる必要がある。

『関原軍記大成』は、宮川忍斎（尚古）によって正徳三年（一七一三）に成立した軍記である。豊臣秀吉の業績の大略で始まり、秀吉の死から徳川家康の征夷大將軍任官までを詳細に叙述。現在の通説の大元となっていると言っている。

若狭小浜藩主酒井忠勝の命によって林羅山・鷲峰父子が編纂した『関原始末記』（明暦二年（一六五六）成立）をもとに編纂され、幾度の改題、増補を経て成立したのが、『関原軍記大成』である。宮川忍斎は、延宝三年（一六七五）から正徳三年の春にかけて諸将の戦功の真偽を確かめるために諸国から記録や伝承を集めており、これらの情報が『関原始末記』に肉付けされている。

宮川忍斎は、信憑性のある説（誤説と断定できない説）は真偽をつけ難いため、その諸説を列記し、誤説と判断できるものは説として挙げなかったとしているので、情報の取捨選択がおこなわれている。しかし、関ヶ原の役から一世紀経っているほか、用いられた情報の質も高いとは決していえない。『関原軍記大成』は、大量の情報を有し、通説を体系的に把握する上では便利であるが、記載内容を信用して、ほかの史料との比較がないまま事実とするのは避けるべきである。本書では、論拠として用いることは避け、通説を紹介するにあたって用いてい

る。

二次史料を用いるにあたっては、①同時代の人物によるものか否か、②その人物の立場、③史料の作成意図、④記述方法、⑤成立時期の五つの要素を考慮していく。『伊達日記』と『象賢紀略』はともに同時代の人物によるものであるが、『伊達日記』は関ヶ原の役の最中、伊達政宗が白石城を攻略した後、家康が小山から江戸へ引き返したのを受けて上杉領への侵攻を止めたところで記述が終わっており、それから間もなく成立したと考えられる。それに対して、『象賢紀略』は村井長明の子である長時が、長明の覚書をまとめたことで成立しているため、成立時期には差がある。また、同時代の人物の手によるものであっても、御家の顕彰というバイアスがかかっている点是否めず、その点は十分に考慮しなくてはならない。史料の作成意図という面では、『看羊録』が最も評価できるが、前述のとおり、姜沆は正確に情報を掴めていない。その人物が正確な情報を得やすい立場にあったかという点も重要である。

史料の記述方法については、『慶長年中ト斎覚書』や『関原軍記大成』のように物語形式で書かれているほうが事件を体系的に捉えやすいが、物事の前後を繋げるために書き手の推測が入る可能性がある。一方で、一つ書きの形式は物事が淡々と書き並べられているので、そうした可能性は低くなるといえる。

以上、七点の二次史料を、五つの要素を考慮して筆者が信憑性を高いと判断した順に挙げた（ただし、『看羊録』は当時の風聞を知る上での活用に止める）。そのほかの二次史料も同様に信憑性を踏まえた上で配慮をおこないながら活用していく。

註

（１）笠谷和比古「徳川幕府の成立と慶長間の二重公儀体制」（同『関ヶ原合戦と近世の国制』思文閣出版、二〇〇〇年）。

- (2) 藤田達生「徳川將軍家の創出」(同『日本近世国家成立史の研究』校倉書房、二〇〇一年)(初出二〇〇〇年)。
- (3) 笠谷和比古「関ヶ原合戦後の地政学的状況」(同『関ヶ原合戦と近世の国制』思文閣出版、二〇〇〇年)。
- (4) 藤井譲治『徳川將軍家領知宛行制の研究』(思文閣出版、二〇〇八年)。
- (5) 参謀本部編『日本戦史・関原役』(元真社、第三版一九一一年)一頁。
- (6) 跡部信「秀吉独裁制の権力構造」(同『豊臣政権の権力構造と天皇』戎光祥出版、二〇一六年)(初出二〇〇九年)。
- (7) 山本博文『幕藩制の成立と近世の国制』(校倉書房、一九九〇年)。
- (8) 岩沢愿彦『前田利家』(吉川弘文館、一九六六年)など。
- (9) 慶長三年八月二十八日付毛利輝元起請文前書案「四奉行宛」『大日本古文書 家わけ第八 毛利家文書之三』東京大学出版会、一九九七年)九六二号。
- (10) 前掲註(6)。
- (11) 堀越祐一「豊臣五大老の実像」(山本博文他編『豊臣政権の正体』柏書房、二〇一四年)。
- (12) 谷徹也「秀吉死後の豊臣政権」(『日本史研究』六一七号、二〇一四年)。
- (13) 中野等「慶長三年の豊臣政権」(『織豊期研究』第二十一号、二〇一九年)。
- (14) 笠谷和比古「豊臣七将の石田三成襲撃事件」(同『関ヶ原合戦と近世の国制』思文閣出版、二〇〇〇年)(初出同年)。
- (15) 光成準治『関ヶ原前夜 西軍大名たちの戦い』(KADOKAWA、二〇一八年)(初出二〇〇九年)。
- (16) 笠谷和比古『関ヶ原合戦と大坂の陣』(吉川弘文館、二〇〇七年)二九〇―二九二頁。
- (17) 白峰旬「いわゆる小山評定についての諸問題——本多隆成氏の御批判を受けての所見、及び、家康宇都宮

在陣説の提示」(『別府大学院紀要』一九号、二〇一七年)など。

(18) 本多隆成「歴史研究と研究史——徳川氏研究の事例から」(『織豊期研究』第二二号、二〇二〇年)など。

(19) 笠谷和比古「関ヶ原合戦と大坂の陣」(笠谷和比古編『徳川家康——その政治と文化・芸能』宮帯出版社、二〇一六年)。

(20) 藤井讓治「慶長五年の『小山評定』をめぐる」(『龍谷日本史研究』四二号、二〇一九年)。

(21) 拙稿「小山評定の歴史的意義」(『地方史研究』三八六号、二〇一七年)。拙著『関ヶ原への道——豊臣秀吉死後の権力闘争』(東京堂出版、二〇二一年)。

(22) 白峰旬「豊臣公儀としての石田・毛利連合政権」(『史学論叢』四六号、二〇一六年)。

(23) 中野等『石田三成伝』(吉川弘文館 二〇一六年) 四三八頁。

(24) 堀越祐一「関ヶ原合戦と家康の政権奪取構想」(同『豊臣政権の権力構造』吉川弘文館、二〇一六年)。

(25) 二木謙一『関ヶ原合戦——戦国のいちばん長い日』(中央公論新社、二〇二一年) 二二六頁(初出一九八二年)。

(26) 前掲註(3)。

(27) なお、この指摘は既に筆者が拙稿「秀吉死後の権力闘争と会津征討」(和泉清司編『近世・近代における地域社会の展開』岩田書院、二〇一〇年)にておこなっている。

第一章 秀吉が整えた「遺言体制」の検討

―その成立と五大老・五奉行の力関係を中心に―

はじめに

豊臣政権の運営は、山本博文氏⁽¹⁾や跡部信氏⁽²⁾の研究に代表されるように豊臣秀吉の独裁で行われてきた。豊臣政権の中枢機構の未確立を指摘した山本氏は、秀吉の命令を諸大名に伝達する「取次」の存在に着目した「取次」論を提唱した。絶対的権力者の秀吉は、「取次」を通じて大名を統制したとし、秀吉の独裁制を強調している。それに対して、跡部氏は、徳川家康・石田三成ら後に五大老・五奉行を担う者たちが秀吉に意見をし、その意向を変化させ、政権の安定に尽力していた一面を指摘。また、秀吉の独裁制の下で家康・三成らが五大老・五奉行の前身となる活動をしていた点にも言及した。このように独裁の行われ方については意見が分かれるものの、秀吉が絶対的な地位にあり、あらゆる施策が秀吉から発せられたという点は変わらない。

絶対的権力者である秀吉が死に臨んだ時、跡継ぎの秀頼は六歳であり、秀吉の代わりを務めるには若年であった。そのため、絶対的権力者の死期が近づくにつれて、その穴を埋めるための政治機構の構築が急務となった。そして、設けられたのが五大老・五奉行である。

堀越祐一氏は五大老の役割を整理し、五大老の役割は、五奉行では解決できない次元にある非常事態への対処であり、領知宛行においても現状維持の安堵状が大半であり、政権における主導権を通説ほど有していなかった点が示された。そして、五大老は日本で最も有力な大名たちが今後とも変わりなく豊臣政権を支持していくことを形として表したものと定義した⁽³⁾。また、(第二節で詳述するが)一次史料において五大老・五奉行が、それぞ

れ「奉行」「年寄」と二通りの呼称がある問題を、堀越氏は、三成ら奉行衆が五大老を「奉行」と呼称し、自ら（五奉行）を「年寄」と自称、また逆に家康も五奉行を「奉行」と呼称しており、史料の書き手によって呼称が変わると整理している。

近年では、秀吉歿後の政権運営の考察として、谷徹也氏⁽⁴⁾や、中野等氏⁽⁵⁾の論考がある。谷氏は、家康や五奉行の政務実態に着目し、慶長四年（一五九九）九月以前は、「遺言」「誓紙群」に規定された政権運営が行われていたが、慶長四年九月の家康の大坂入城以降、その枠組みは溶解したと指摘した。中野氏は、秀吉が歿する前後に大老衆・奉行衆が提出した誓紙から、秀吉の遺言の内容を整理した。そして、慶長三年九月三日付の十人連判誓紙は、不安定ながら「関ヶ原」直前まで合議政治を支えたと指摘している。

谷氏・中野氏の論考は、秀吉歿後の政権運営の推移を具体的に考察し、研究を前進させている。だが、五大老・五奉行の成立過程や、谷氏が「その枠組みは溶解した」とする慶長四年九月の家康の大坂入城以降の情勢などは言及がなく、解明の余地が残されている。また、堀越氏の研究によつて、五大老が政権における主導権を通説ほど有していなかった点が示されたものの、五大老・五奉行の力関係については曖昧なものとなっている。

したがって、本章では、先行研究を踏まえながら、秀吉が死に臨んで整えた「遺言体制」といふべき政治構造について、その成立過程を明らかにする。また、五大老・五奉行の構成員の力関係についても明らかにすること、で、「遺言体制」の正確な理解へと繋げ、権力闘争の背景を明らかにする（ただし、行論上、慶長四年九月の家康の大坂入城以降の情勢については、第三章で後述する）。

第一節 五大老・五奉行と武家官位制

五大老は、武家清華家の家格を有する諸侯で構成されている。一方の五奉行は、秀吉の直属の吏僚的な性格を

持った大名で構成されている。五大老・五奉行の構成員は次の通りである（6）。

五大老

徳川家康	内大臣	二百四十万二千石
前田利家	権大納言	七十七万石（長男利長領、二男利政領を含む）
宇喜多秀家	権中納言	四十七万四千石
上杉景勝	権中納言	九十一万九千石
毛利輝元	権中納言	百二十万五千石

五奉行

前田玄以	徳善院僧正	五万石
浅野長政	弾正少弼	二十一万七千石
増田長盛	右衛門尉	二十万石
石田三成	治部少輔	十九万四千石
長束正家	大蔵大輔	五万石

後に関ヶ原の役で衝突する徳川家康と石田三成を例に、五大老と五奉行の構成員が就任した官位および石高を比較すると、徳川家康が正二位、内大臣、二百四十万二千石であったのに対し、石田三成は従五位下、治部少輔、十九万四千石であった。家康の石高は五大老の中でも抜きん出ているが、五大老と五奉行の構成員の間で、官位と石高の両面で明確な差があったことに変わりはない。こうした背景があつてか、通説では五奉行が五大老の下

部組織として位置づけられているが、それは正しいのであろうか。

慶長の役という対外戦争の最中に絶対的権力者を失った豊臣政権にとって、家康ら有力な諸侯の協力は混乱を避ける上で必要不可欠であったといえよう。しかし、秀吉自身、織田氏の権力を篡奪した経験をもっていることから、諸侯に秀頼の補佐を委ねる危うさも分かっていたはずである。『一五九八年十月三日付、長崎発信、フランシスコ・パシオのイエズス会総長宛、一五九八年度、日本年報』(以下『九八年度年報』と表記)は、秀吉の家康に対する警戒を次のように記している。

「史料1」(7)

国王(太閤様)は、伏見に滞在していた(一五九八年)六月の終りに赤痢を患い、よくあることだが、時ならず胃痛を訴えるようになった。当初は生命の危険などまったく懸念されはしなかったが、上記のように八月五日に病状は悪化して生命は絶望とされるに至った。だが太閤様はこの時に及んでも、まるで健康体であるかのように、不屈の剛気と異常な賢明さで、「従来、万事においてそうであったのだが」身辺のことを処理し始めた。そして太閤様は、自分(亡き)後、六歳になる息子(秀頼)を王国の後継者として残す(方法)について考えを纏めあげた。太閤様は、関東の大名で八カ国を領有し、日本中でもっとも有力、かつ戦さにおいてはきわめて勇敢な武将であり、貴顕の生まれで、民衆にもっとも信頼されている(徳川)家康だけが、日本の政権を篡奪しようと思えば、それができる人物であることに思いを致し、この大名(家康)に非常な好意を示して、自分と固い契りを結ばせようと決心して、彼が忠節を誓約せずにはおれぬようにした。

秀吉の家康に対する好意は、警戒心の裏返しとしてある点が興味深い。また、『浅野家文書』には、病床の秀吉が傍らにいた奉行衆・女房衆に語った遺言を記した覚書(8)があり、その中で家康は「りちき」と評されている。しかし、大老衆の中で秀家を除いた四人が「りちき」と評されており、秀吉が家康を律儀者と思っていたというよりは、秀頼を盛り立てて欲しいという願望から出た言葉であろう。なお、秀家に「りちき」という表現が用い

られていないのは、「幼少より御取立被成候之間、秀頼様之儀ハ御遁有間敷候」とあるように、拘束力があるため必要がなかったであろう。

『一五九九年十月十日付、日本発信、巡察師アレシヤンドウロ・ヴァリニャーノのイエズス会総長宛、一五九九年度、日本年報』(以下『九九年度年報』と表記)には次の記述がある。

「史料2」(9)

ところで太閤様は(先年記したように)、驚異的な賢慮をもって日本国全土の体制を整えた。彼はこれによって、己が権力ある国が、自分の幼少の息子が成年に達するまで続くことを軽々しい予測なしに確信したのであった。彼は大名たちを親戚関係によって己が一族と縁組みさせ、また自分が定めたことは順次後代に至るまで誠実に遵守すべきことを誓約するように強制した。これによって日本人は、太閤様の息子が父親の相続権をわきまえるにふさわしい年齢に達するまでは、自分たちは安全で静かな平和を維持するであろうと考えた。彼は日本人の間でもっとも権力をもった八カ国の国主(徳川)家康の孫娘を自ら息子(秀頼)と結婚させて、家康に主君(秀頼)の後見役と、日本国全土の統治を任せ、その同僚として四名の重立った家老を与えた。彼はこうすることによって多くの者がこの榮譽に参画し、国家を統治する権力においては同等のようにして互いに平和を保つようにした。なぜなら彼は、彼らが血縁と姻戚関係の非常に緊密な絆によって結ばれていることを知って、彼らに意見の不一致や不和の余地は少しも残っていないと考えたからである。しかし、彼は五大老の権力が強すぎはしないかと疑問を抱き、彼が大いなる榮譽へ拔擢した寵臣たちの中から、五(奉行)を選んだ。(五奉行)は主君なる己が息子(秀頼)のことを特別に面倒を見てやり、また家族のこゝとや、さらには日本全土のことを司って、重要な事項のすべてを(徳川)家康とその四名の同僚に報告させることにした。それゆえ後者の五(奉行)が、日本国の統治者としての榮譽ある称号と名前を得ていた。しかし誰よりも太閤様の寵愛を得ていた(徳川)家康が頭となっていた後者の五(大老)が国家全体の鍵を掌

握し、統治権を司っていた。

イエズス会の宣教師たちは、家康と同等の立場の者をつくるために五大老を置き、また五大老を牽制するために五奉行を置いたと捉えていた。彼らは、秀吉が「新八幡」として祀られることを希望していた事も把握している⁽¹⁰⁾ことから、強力な情報ルートを有していたと推測できる。また、イエズス会の宣教師であるジョアン・ロドリゲスが、病床の秀吉に謁見を許されている⁽¹¹⁾点は、イエズス会側が得ている情報の信憑性が高いことを裏付けている。秀吉の遺言の中でも政権運営に関する部分については、伝聞に基づいたものと考えられるため、どこまで真相を語っているかは分からないが、秀吉が家康をはじめとする有力な諸侯の力を警戒しており、五大老の力を牽制するために直臣で固められた五奉行が設けられたというのは真相を突いているのではないだろうか。

また、大名間の立場の高下を論ずる場合、奉行衆のような秀吉の直属の大名を武家官位制のみをもって評価することは適切とはいえない。確かに、豊臣政権の大名統制は、朝廷の官位を利用した武家官位制が一つの柱となっている。撰関家である豊臣家を頂点とし、次に太政大臣や近衛大将になる資格を有する家格である「清華成」を果たした大名家（武家清華家）がその下に位置する。徳川家康ら大老衆が武家清華家にあたる。その次に侍従以上に任官した「公家成」の大名が位置し、その下が四位・五位の「諸大夫成」の大名である。

武家清華家の大老衆と、諸大夫の奉行衆では格の違いは歴然としており、秀吉の直臣と諸侯との比較において、武家官位制は立場の高下をはかる指標として必ずしも適切とはいえない。周知のように、秀吉は関白を頂点とする政権を樹立した。そのため、豊臣政権には必然的に朝廷の制度に順応しなくてはならない部分が少ないから生じることとなる。増田長盛と石田三成は、後陽成天皇の聚楽第行幸の際に秀吉に随身する騎馬行列の左右の先頭を務めた⁽¹²⁾ように、秀吉の従者としての性格を有している。朝廷の制度では、関白の従者は諸大夫の家格であったため、秀吉を周囲で補佐する三成や長盛の官位は、職務の必要上、諸大夫に止められたといえよう。

また、秀吉直臣と諸侯との関係をみても、武家官位制が立場の高下を必ずしも正確に反映したものではないことがわかる。三成は、「公家成」の大名である島津氏の奏者を務め、指南も行っている⁽¹³⁾。島津龍伯は島津忠恒・義弘へ宛てた文面で、奉行衆について「徳善院・増田殿・長束殿」と述べ、三成の敬称は「治少様」としている⁽¹⁴⁾。島津氏が後見的な立場にある三成を特別な存在として認識していることが分かるほか、ほかの奉行衆に対しても殿付の敬称を用いている点も重要である。

次いで、権中納言に任官した宇喜多秀家・上杉景勝・毛利輝元と、奉行衆の関係をみていきたい。次の史料は、秀吉の死の翌月に宇喜多秀家が西笑承兌に宛てた書状である。

「史料3」⁽¹⁵⁾

先刻者、安国寺被成御同道御出候処、令他出候て、彼判形令遅々候、おとな衆皆々判被「一ハ、我等式も今夕判可仕候、未相調候ハ、明日ニ可仕候者共、御返事次第候、呉々不存候て遅々令迷惑候、恐惶謹言

九月三日

秀家（花押）

西笑承兌は安国寺恵瓊とともに連判者（大老衆・奉行衆）の判形を集めており、それに対して秀家は、「おとな衆」（奉行衆）の判形が揃ったところで、自らも花押を据えたと告げている。秀家は、自身の方が奉行衆よりも立場が上であるという自覚があったようである。『一五九九年—一六〇一年、日本諸国記』（以下『日本諸国記』と表記）において、五大老が「上級奉行」、五奉行が「下級奉行」と表現されている⁽¹⁶⁾ように、第三者が客観的にみた場合、大老衆が奉行衆よりも上位であることは明らかであり、秀家の認識は現実と乖離したものではなかった。

しかし、慶長五年（一六〇〇）七月二十九日に出された三奉行（前田玄以・増田長盛・長束正家）の連署状には、「大坂之事西の丸へ輝元被移」、「其上景勝申談候者」⁽¹⁷⁾とあるほか、その翌日付の大谷吉継書状も「年寄衆・輝元・備前中納言殿・島津此外関西之諸侍」、「島津・輝元・備前中納言殿・小西御鉄砲・弓衆今日取寄候」⁽¹⁸⁾と、

輝元や景勝に対して敬称を省いている。

三成と増田長盛は、上杉景勝の奏者を務めており、文禄三年（一五九四）の秀吉の上杉邸御成に際して三成・長盛からの連絡を待っていた景勝は「自御両所（三成・長盛）何共不被仰越、無御心元存候」（¹⁹）と述べ、「御手透候者、治少有御同心、御越御見廻頼入候」とも記しているように、秀吉（あるいは豊臣政権）との関係を円滑にするために、三成・長盛の協力は不可欠であった。

一方の毛利輝元も、毛利家の相続問題に伴う毛利秀元への領地割譲において「寄退之儀、増田右衛門尉殿・石田治部少輔殿得指南、如此候」（²⁰）と述べており、長盛と三成の指南によって決まったとしている。また長盛と三成は、毛利秀元に対して「然者、松寿殿為惣領可有御馳走候、隆景・元春毛利家如被取立候、可有御覚悟候、殊秀頼様御奉公之段勿論に御座候」（²¹）と、毛利家の後継者である松寿丸（秀就）を小早川隆景・吉川元春が毛利家を支えたように覚悟をもって仕えることや、秀頼に対する奉公を説いているように、相続問題において長盛と三成は毛利氏を指南する立場であり、輝元も両者に依存している。

武家官位制は、諸侯の立場の高下をはかる上では指標となりえるが、秀吉直臣については、その人物の周囲（秀吉や諸侯）との関係性から個々にその権力を評価する必要がある。

また、諸侯同士の比較においても武家官位制が絶対的な指標になるとは言い難い事例がある。宇喜多秀家・毛利輝元は共に権中納言であるが、こうした場合は任官順が連署の序列に反映される（²²）ため、秀家の方が輝元より上位となる。しかし、輝元の家臣である内藤周竹（隆春）書状によると、秀吉は歿する前に「東西八家・輝兩人、北国ハ前田、五畿内ハ五人之奉行無異儀候ハ、一向不可有別儀候」と語ったとあり（²³）、輝元は家康、利家と並ぶ存在として位置づけられている。

もっとも、この言葉に如何ほど実効性があったかは疑問がある。しかし、周知のとおり秀家・輝元は共に関ヶ原の役で西軍であったが、総大将を務めたのは輝元である（²⁴）。また、前述の内藤周竹書状によると「宇喜多事

をハ輝元被懸目候へ、万一相違之事共候ハ、頸をねち切候へ」と、秀吉は輝元に秀家の後見を命じていた。

そして、輝元は権中納言の任官順で秀家、景勝より後れを取っているため、連署の序列は両者より下であるものの、八月五日付で秀吉が大老衆への遺言を記した直筆御判書⁽²⁵⁾の宛所の序列は、家康、利家、輝元、景勝、秀家の順であり、輝元は三番目に位置づけられている。また、早稲田大学図書館所蔵の秀吉遺言覚書⁽²⁶⁾も同様の序列となっている。秀吉が輝元を三番目の実力者として位置づけていたことは疑いなく、前述の「東西八家・輝両人、北国ハ前田、五畿内ハ五人之奉行」という秀吉の言葉は、何ら根拠なく発せられたものではなく、自身の構想に基づいて発せられたといえよう⁽²⁷⁾。

後掲する伊達政宗の書状（史料11）にも「北国・東国之諸大名」という文言がみられるように、地方区分として東国大名、西国大名、北国大名という概念が当時あったといえる。秀家も輝元も共に西国大名であるが、西国の代表となり得るのは輝元であり、秀家の方が輝元より絶対的に優位であったわけではない。諸侯同士の比較においても武家官位制が絶対的な指標になるとは言い難く、経済的实力や、これまでの政権内での立場などを加味しておこなう必要がある。

豊臣政権において、武家官位制は立場の高下をはかる上で一定の指標になりえるが、絶対的とは言い難い。特に秀吉直臣については、個々の政治的立場から評価する必要がある。三成と輝元・景勝の関係をみると、三成が必ずしも彼ら有力大名の下に位置していたわけではない。こうした点や、秀吉の有力大名に対する警戒心、そして前述の内藤周竹書状において「五畿内ハ五人之奉行」と、五奉行は家康、利家、輝元と並ぶ存在であるばかりか、地方を任された家康らとは異なり中央を任されている点を踏まえると、秀吉が五奉行を五大老の下部組織としたとは考え難い。

第二節 五大老・五奉行の呼称について

秀吉の遺言を記した史料は三点存在する。一点目は『毛利家文書』にあり、秀吉が大老衆へ宛てた直筆御判書の写⁽²⁸⁾である(以下「遺言A」とする)。残り二点は覚書であり、『浅野家文書』の覚書⁽²⁹⁾(以下「遺言B」とする)と、早稲田大学図書館所蔵の覚書⁽³⁰⁾(以下「遺言C」とする)が存在する。「遺言B」は「太閤様被成御煩候内ニ被為 仰置候覚」と題され、文末には「右一書之通、年寄衆・其外御そはに御座候女房衆達御聞被成候」とあり、病床の秀吉が傍らにいた奉行衆・女房衆に対して語った遺言を文書にしたものである。「遺言C」は、清水亮氏によると家康に近い政治的立場にあった宮部長熙(または継潤)によつて家康に職務を知らせるために作成されたという⁽³¹⁾。つまり、「遺言B」と「遺言C」は秀吉の遺言を書き留めたものに相違ないが、作成者の主観が入ったものであり、それは「大老」「奉行」の呼称において顕著に表されている。

五大老・五奉行は、その呼称に関して阿部勝則氏による問題提起⁽³²⁾と、堀越裕一氏の反論⁽³³⁾がある。阿部勝則氏は、「遺言B」を論拠に当時は五奉行が「年寄」、五大老が「奉行」と呼称されたとした。しかし、堀越裕一氏の反論により、三成ら奉行衆が五大老を「奉行」と呼称し、自ら(五奉行)を「年寄」と自称。一方で家康は、慶長四年中頃に五奉行を「年寄」と呼んだ一例⁽³⁴⁾を除けばその呼称を用いておらず、その後は一貫して五奉行を「奉行」と呼称しており、また自身を「奉行」と呼称したことは一度としてなかったことが明らかにされた。

「遺言B」は奉行衆を「年寄」、大老衆を「奉行」と記し、「遺言C」は奉行衆を「奉行」、大老衆については「五人」と記されている。この違いは、「遺言B」が奉行衆である浅野氏の視点で作成され、「遺言C」は徳川氏に近い立場の宮部氏が作成した故に生じたものと考えられる。従つて、「大老」「奉行」の呼称において、真に秀吉の意思が反映されているのは秀吉の発給文書である「遺言A」のみといえる。

「史料4」(「遺言A」)

返々、秀より事たのミ申候、五人のしゆたのみ申候／＼、いさい五人の物ニ申わたし候、なこりおしく候、以上

秀より事なりたち候やうに、此かきつけ候しゆとして、たのミ申候、なに事も此ほかにわおもいのこす事なく候、かしく

八月五日

秀吉御判

いへやす

ちくせん

てるもと

かけかつ

秀いへ

まいる

「遺言A」は追而書で大老衆を「五人のしゆ（衆）」、奉行衆を「五人の物（者）」と呼んでいる。従って、秀吉の言葉からは、役職（五大老・五奉行）の名称を確認することができない。

秀吉の死から十日後の八月二十八日、毛利輝元が、石田三成・増田長盛・長束正家・前田玄以の四奉行に宛てた誓紙では大老衆は「奉行」と記されている^{（35）}。この誓紙は末尾に「右けしたる分、はしめの案、かた付ハ治少より也、使安国寺」とあるように、原案や加筆は三成の手によって成されているため、文面は四奉行の意思が反映されているが、これに判形を加えた輝元は四奉行側の考えを甘受したとみることができる。

このほか、輝元は、関ヶ原の役の最中の慶長五年七月二十九日に真田昌幸へ宛てた書状で奉行衆を「年寄」と呼称^{（36）}、二日前の七月二十七日付で青木重吉（一矩）へ宛てた書状でも、奉行衆は「年寄」、大老衆は「奉行」と記されている^{（37）}。もともと、七月二十九日付真田昌幸宛て書状の文面も奉行衆（三奉行）の主導で作成され

た可能性が高く⁽³⁸⁾、それを踏まえると七月二十七日付青木重吉宛ての書状も奉行衆の主導で文面が作成された可能性が高くなるが、輝元がそれに判形を加えている点は重要である。奉行衆を「年寄」、大老衆を「奉行」とする呼称を輝元は認めていたといえよう。

また、文面も秀家が作成したと考えられる「史料3」でも、奉行衆が「おとな衆」と呼称されている点は注目される。輝元や秀家は、奉行衆を豊臣政権の「年寄」とする秩序を認めていたといえよう。「史料3」において大老衆・奉行衆の判形を集めていた西笑承兌も奉行衆を「長男衆」と呼称している⁽³⁹⁾。

輝元や秀家は、奉行衆を「年寄」とする呼称を認めていたが、輝元の家臣である内藤周竹は、奉行衆を「五人之奉行」と呼称。上杉景勝のほか、諸大名の中でも奉行衆の立場を尊重していた伊達政宗や加藤清正も奉行衆を「奉行」と呼称している⁽⁴⁰⁾。

寺社勢力も奉行衆を「奉行」と呼称している。『義演准后日記』慶長五年三月十七日条には「三奉行衆上洛云々」⁽⁴¹⁾と記されている。また、『北野社家日記』同年七月十七日条には「大坂御城へ御奉行衆悉被籠由申来、輝元も上洛在之由申来」⁽⁴²⁾とあり、「御奉行衆」が全て大坂城へ籠ったとした後に「輝元」と続くので「御奉行衆」は増田長盛ら三奉行を指しているよう。

このように、五奉行、あるいは五奉行に近い立場にいる者を除いては、五奉行を「奉行」と呼称するのが一般的であったといえる。『九八年度年報』に「太閤様はその後、四奉行に五番目の奉行として浅野弾正を加え、一同の筆頭とした」⁽⁴³⁾とあるように、秀吉の死に際して、従来から秀吉を支えていた四名の吏僚に、浅野長政を加えて機構として整備したのが五奉行であった。五奉行の成立には、秀吉が健在の時から延長があり、秀頼の若年を理由として急拵えで設けられたものではない。実際、『義演准后日記』慶長三年三月九日条、同年四月四日条においても、前田玄以・増田長盛・長束正家が「三奉行」と呼称される事例が確認できる⁽⁴⁴⁾ように、秀吉の生前から三成らは「奉行」であった。つまり、五奉行を「奉行」と呼称するのは、彼らの「年寄」としての立場を認

めるか否かというよりは、秀吉の代からの延長によるところが大きく、むしろ、こちらの方が自然であったといえよう。

しかし、例外として鍋島氏は五奉行を「年寄」、五大老を「奉行」と呼称している。

〔史料5〕（45）

幸便之条、一書令啓候、生札帰国之後、相かハる儀無之候、過半、内府様御存分之まゝニ罷成体候、大納言殿、去四日御遠行候、御息肥前殿、内府様別而被仰談候故、年寄衆五人之内、是又、過半家康ニ被申入之由申候、備前殿、中国まで相すミ、悦申儀候、今少、石治少、被仰事共候けに候、是も御無事ニ可成と存候、其面普請彼是不可有油断事、肝要候、右之分ニ、未二三人も依不相济体候、たゞ今も弓鎗取あハせ、走あひ候儀、やミ不申候、かハる儀候ハ、早速可申越候、此書面喜清次殿へ懇ニ可被申候、恐々謹言

鍋加守

閏三月七日

直茂（花押）

鶴善右

久弥五左

御宿所

（傍線筆者、以下同じ）

〔史料6〕（46）

以上

急度用飛札候、仍御奉行中御年寄衆御間御沙汰ニ付而、此比伏見・大坂さわかしく雑説申、此五三日は石治少一人御迷惑之体候つれ共、是も昨日相済、当分ハ御静謐之儀ニ候、然は鉄炮之者可被差上由申下候へ□、先以相控候様可然存候、委は加州より被仰遣候、猶替儀候は追々可申入候、恐惶謹言

信濃守

閏三月九日

清茂（花押）

豊州様

生札

生三 まいる

両史料は、加藤清正ら七将が石田三成の制裁を訴えた騒動の最中に出されたものである。「史料5」傍線部より、利長と家康は、とりわけ「仰談」ていたので「年寄衆五人」の内の多くが家康に（親睦を）申し入れたとあるため、文脈上、「年寄衆五人」の中に家康と利長は含まれないであろう。「年寄」を五大老とするのであれば、家康と利長を除いた「三人」という書き方になるのではないだろうか。また、「史料6」には「奉行」「年寄」ともに登場するが、鍋島清茂（勝茂）が「御奉行中」を先に記している点も、「奉行」が五大老であり、「年寄」が五奉行を指しているのではないかと思われる。よって本稿では「史料5」「史料6」の「年寄」は五奉行と措定する（47）。

一方、五大老については、僅かではあるが五大老を「年寄」と呼称した事例は存在する。

「史料7」（48）

猶以申候、昨日 御前へ罷出候、御気色一段能御座候、可御心安候、貴殿御煩之様子、具申上候、御養生専一之由 御意候、富左・羽下被存候、定可被申候

御捻之通、具令披見候、仍最前不出衆、今日いづれも可被下之由、徳善院方申来候由、尤存候、我々年寄相添可申候由承候、御隔心かましく存候、不及其儀候間、いづれも御渡尤候、其上御普請ニ付置申候間、御六ヶ敷御座候とも、被仰付御渡尤候、恐々謹言

七月廿二日

家（花押）

秀吉の死の一ヶ月前に家康が前田利家に宛てた書状であり、この史料によると家康は自身を「年寄」と呼称している。家康が自身を豊臣政権の最有力者であることを自覚していた表れといえよう。また、加藤清正や島津龍

伯も五大老を「年寄」と呼称している。まずは清正の事例をみていきたい（49）。

「史料8」（50）

以上

去十七日之御状、今日廿日戌刻令拝見、并奉行衆・年寄衆方之書状、色々一ツ書共、被入御念被差越段、一入令満足候、従是も、以飛脚大作罷下候様子申入候キ、定而可為参着候、中／＼其許への彼仁心指念も有之間敷候、いづれも書状共不被能返事之旨、一段之御分別ニ候、口上ニ被仰越候段、直ニ承存寄通申入候間、可有其御心得候、猶、斎藤伊豆守かた方可申入候、恐々謹言

加主

八月廿日

清正（花押）

松井佐渡殿

有吉四良右衛門殿

御返報

文中にある「奉行衆・年寄衆方之書状」とは、八月四日付の四奉行連署状（51）および二大老連署状（52）を指している。「史料8」のみでは、「奉行」「年寄」がいづれを指すか判然としないが、清正が七月二十七日付で松井康之らへ宛てた書状（53）に「越中殿御身上之儀、秀頼様方曲事ニ被思召候由にて、丹後国へ隣国衆を差遣、城請取候へと、従奉行衆被申付候由候」「丹後へ遣、上使衆への触状之写進之候」とあり、三奉行が別所吉治に丹後攻撃を命じた書状の写（54）が清正から康之らに提供され、康之らは「御奉行衆方触折紙之写被見置候、忝存候事」（55）と礼を述べていることから、「奉行」は奉行衆を、「年寄」は大老衆を指していることが分かる。

島津龍伯は、慶長三年十一月六日の書状で「御老中衆并御奉行衆方御感状候」（56）と記している。龍伯は後年の書状で「去之年随御奉行衆之下知、既至濃州大柿、当家も令出陣」（57）と記していることから、「奉行」は奉行衆

を指していることが分かるので、「老中」は大老衆を指すといえる。

家康、清正、龍伯の事例はあるものの、家康に近い政治的立場にあった宮部氏の作成と考えられている「遺言C」においても五大老に「年寄」の呼称が用いられず「五人」と記されているように、一般的には五大老を「年寄」と呼称することはなかったと思われる。あくまで五大老は豊臣家の家政からみれば枠外存在であり、厳密にいうならば「奉行」「年寄」といった役職の概念ではなく、諸侯を代表した五人衆として捉えるのが妥当と思われる。家康、清正、龍伯の事例は、あくまで個人の主観によって記されたものであって、五奉行サイドおよび西笑承兌などの一部の者が五大老を「奉行」と呼称したのを除けば、五大老に「奉行」「年寄」といった呼称を用いない方が大多数だったのではないだろうか。

三 秀吉遺言覚書に見る五大老・五奉行の職掌

前述のように、秀吉が五奉行を五大老の下部組織としたとは考え難く、五大老と五奉行は相互に補完し合うように権限が分けられていた。

「遺言A」は、五大老に宛てた書状であるため、五大老に後事を頼む内容となっているが、直臣で構成された五奉行はすでに委細を託されていた。書かれた内容が、病床の秀吉の筆によるものであり、長文を書ける体調だったかという点を留意しなくてはならないが、五大老は秀頼を支えていくことを頼まれた簡単な内容にとどまつており、委細を託された五奉行と比較すると秀吉との距離が感じられる。「遺言A」には、五大老を五奉行より絶対的優位に位置づけ、五大老が五奉行を使役する体制を構想していたという印象はない。

次に「遺言B」を見ていきたい。「遺言B」は、秀吉の発給文書ではないものの、秀吉の言葉を書き留めたものであるため、五大老・五奉行、それらを構成する面々に期待された役割を細かく知ることができる。「遺言B」は

全十一ヶ条のうち、一条目は家康に関する内容で、二条目が前田利家、三条目が徳川秀忠、四条目が前田利長、五条目が宇喜多秀家、六条目が上杉景勝と毛利輝元、七条目と八条目、九条目が五奉行、十条目が伏見の統治、十一条目が大坂の統治といった順で記されている。内容は次の通りである。

「史料9」（「遺言B」）

太閤様被成御煩候内ニ被為 仰置候覺

① 一内府久々ちきなる儀を御覽し被付、近年被成御懇候、其故 秀頼様を孫むこになされ候之間、秀頼様を御取立候て給候へと、被成 御意候、大納言殿年寄衆五人居申所にて、度々被 仰出候事

② 一大納言殿ハおさなともたちより、りちきを被成御存知候故、 秀頼様御もりに被為付候間、御取立候て給候へと、内府年寄五人居申所にて、度々被成 御意候事

③ 一江戸中納言殿ハ 秀頼様御しうとになされ候條、内府御年もよられ、御煩氣にも御成候者、内府のことく、秀頼様之儀、被成御肝煎候へと、右之衆居申所にて被成 御意候事

④ 一羽柴肥前殿事ハ、大納言殿御年もよられ、御煩氣にも候間、不相替 秀頼様御もりに被為付候條、外聞実儀忝と存知、御身ニ替り肝を煎可申と被 仰出、則中納言ニなされ、はしたての御つふ、吉光之御脇指被下、役儀をも拾万石被成御許候事

⑤ 一備前中納言殿事ハ、幼少より御取立被成候之間、秀頼様之儀ハ御遁有間敷候條、御奉行五人にも御成候へ、又おとな五人之内へも御入候て、諸職おとなしく、臍肩偏頗なしに御肝煎候へと、被成 御意候事

⑥ 一景勝、輝元御事ハ、御りちきに候之間、秀頼様之儀御取立候て給候へと、輝元へハ直に被成 御意候、景勝ハ御国ニ御座候故、皆々ニ被為 仰置候事

⑦ 一年寄共五人の者ハ、誰々成共背御法度申事を仕出し候ハ、さけさやの躰にて罷出、双方へ令異見、入魂之様ニ可仕候、若不屈仁有之而きり候ハ、おいはらとも可存候、又ハ 上様へきられ候とも可存と、其

外ハつらをはられ、さうりをなおし候共、上様へと存知、秀頼様之儀大切ニ存知、肝を煎可申と、被成 御意候事

一年寄為五人、御算用聞候共、相究候て、内府、大納言殿へ懸御目、請取を取候而、秀頼様被成御成人、御算用かた御尋之時、右御両人之請取を懸 御目候へと、被成 御意候事

一何たる儀も、内府、大納言殿へ得御意、其次第相究候へと、被成 御意候事

一伏見ニハ内府御座候て、諸職被成御肝煎候へと 御意候、城々留守ハ徳善院、長束大蔵仕、何時も内府てんしゆまでも、御上り候ハんと被仰候者、無氣遣上可申由、被成 御意候事

一大坂ハ 秀頼様被成御座候間、大納言殿御座候て、惣廻御肝煎候へと被成 御意候、御城御番之儀ハ、為皆々相勤候へと被 仰出候、大納言殿てんしゆまでも、御上り候ハんと被仰候者、無氣遣上可申由、被成 御意候事

右一書之通、年寄衆、其外御そはに御座候御女房衆達御聞被成候、以上

(付番筆者、以下同じ)

五大老メンバーの役割を整理すると、まず、伏見に家康を、大坂には利家を配置して監督を命じた。また、両者はすでに老齢に達しているため、後任に息子の秀忠と利長が定められている。

なお、石田三成や浅野長政が失脚したあと、石田重家や浅野幸長（長慶）が奉行職に就いていないように、大老・奉行職は個人に与えられたものであり、基本的に世襲はできなかったと思われる。例外として、秀吉が遺言で指定した秀忠と利長のみが父親の大老職を継ぐ権利を有しており、基本的に成員の脱退は員数の減少を意味した。

十条目、十一条目に、家康と利家は希望すれば天守に至るまで城に上がることができるとある。これは、秀吉が徳川家康と前田利家を、それぞれ伏見と大坂の監督者として、城主を任せても良いほど信頼しているという比

喩表現と考えられる。江戸期以前の天守は城主の居住のシンボルであった（58）。『フロイス日本史』には次の記述がみられる。

「史料 10」（59）

（前略）このようにして（引用者註…関白は）我らを（引用者註…大坂城天守の）第八階まで伴った。その途中の各階で、彼はそこに蔵されている財宝についてこう語った。「貴殿らが今見ているこの室には金が充滿している。別の部屋には銀、ここには絹糸、ダマスコ織。あの部屋には茶の湯の器が、彼方の室には大小の刀剣や立派な武具が充滿している」と。ある一室を通ると、そこには十着ないし十二着の新しい紅色のヨーロッパ風の外套が紐で吊してあった。それらは日本ではきわめて稀で、当国の産ではないため重宝がられているのである。さらに関白は錠がかかった非常に長い多数の大函を開いて我らに見せたが、それを見た我らは互いに顔を見合わせて文句なしに驚嘆した。我らが目撃したものは予期し想像していたことを凌駕していたからである。日本には折畳み寝台もふつうの寝台もなく、それらに寝る習慣もないにもかかわらず、二、三台の組立寝台アルマードス（そう称してよいが）が見られた。それらは金糸で縫い付けられており、ヨーロッパでは高価な寝台にのみ使用される他のあらゆる立派な装飾が施されていた。（中略）こう述べると関白は立ち上がり、種々の別の階段から降り始めた。そして我らは同所からそちらに秘された幾つかの部屋のところで立ち止まり、関白はさらに自分が平素夫人と寝る場所を見せた。（後略）

『フロイス日本史』から大坂城天守も城主の居所としての機能を有していたことがわかる。秀吉は城主の居所である天守に至るまで上がっても良いと述べることで、家康と利家に対する信頼を表現したのである。しかし、この文言は後掲する「史料 22」にみられる「宇喜多事をハ輝元被懸目候へ、万一相違之事共候ハ、頸をねち切候へ」と同様に比喩表現であり、文言どおりに登城の許可を与えられたと考えるまいが良いだろう。

そして十条目、十一条目で登城の許可が記されていることは、逆にいえば家康と利家は伏見城、大坂城の内に

居所を構えることが不可能だったことを示している。このことは、慶長四年閏三月に三成が失脚したのち、伏見城に入城した家康を『多聞院日記』が「十三日午刻、家康伏見之本丸へ被入由候、天下殿ニ被成候、目出候」⁽⁶⁰⁾と表現したのを見れば、それ以前の家康は伏見城を居所としていなかったことが裏づけられる。

一方で前田玄以と長束正家は伏見城の留守居に指名されている。十一条目で大坂城の番を任された「皆」の指す範囲がわかりづらいが、「遺言C」に「大坂城右奉行共内式人宛留守居事」とあることから、五奉行を指しているといえる。五大老はあくまで諸侯の代表であり、豊臣家の財産である城は直臣である五奉行に委ねられたということだろう。

宇喜多秀家については、五大老に身を置きながらも、五奉行の話し合いにも参画する権限が与えられ、五大老と五奉行の仲が円滑に運ぶように仲介者の役割が期待された。一方で、毛利輝元と上杉景勝には特別な役割は与えられていない。

一方の五奉行は、秀吉の定めた法度に違反した者の取り締まりや、財政管理を委ねられた。七条目は、如何なる屈辱を味わっても耐えよと大袈裟な表現が用いられているが、秀吉は法度に違反した者であっても殺害することなく平和的に解決することを望み、その前提で五奉行を法の番人とした。慶長四年五月十一日付けで五大老が、前年に出された禁制を家中に遵守させる旨を改めて奉行衆に誓約している⁽⁶¹⁾ことから、五奉行が豊臣政権の法の番人だったことが裏づけられる。のちに家康の罪を弾劾する「内府ちかひの条々」が、毛利輝元と宇喜多秀家の二大老からではなく、増田長盛・長束正家・前田玄以の三奉行から出されたのは、このためである。

奉行衆による財政管理は、家康の独裁的権力が築かれつつあった慶長五年二月においても確認することができ。慶長五年二月一日、家康は森忠政の知行宛行状（加増転封）を大老衆の連署ではなく一人で発給している⁽⁶²⁾。忠政の新たな知行地十三万七千五百石は、田丸忠昌が治めていた川中島四万石に豊臣家の直轄領を加えたものであった。その際に増田長盛・長束正家・前田玄以の三奉行は、家康の意向であるとして田丸忠昌に忠政へ御蔵米

を渡すように指示している⁽⁶³⁾。長岡忠興に杵築六万石を加増した際も、三奉行から知行目録が出されている⁽⁶⁴⁾ように、家康は一人で知行宛行をおこないながらも、奉行衆の協力は不可欠であった。

このように、直臣で固められた五奉行には、城を含めて豊臣家の財政が委ねられ、秀吉の遺命を遵守させる役割も担うなど、その職務は豊臣家の家政を司ることにあつた。一方で五大老の職掌はというと、「遺言A」からは秀頼を支えていくという漠然としたものしか確認できず、「遺言B」からも家康・利家といった個人に対して与えられた役割は確認がとれるものの、五大老としてのまとまった職掌は確認できない。

また、家康と利家の役割も、五大老のものと同じく抽象的といわざるを得ない。両者が伏見・大坂の監督を任されて重きをなしたことはわかるものの、政務としての具体性は、利家が秀頼の守役を任されたこと以外は見えてこない。また、九条目の内容は裏を返すと、家康・利家の意向を伺えさえすれば、物事は五奉行が動かすことができたことを示している。このことは、「史料2」にある「さらには日本全土のことを司って、重要な事項のすべてを（徳川）家康とその四名の同僚に報告させることにした」とも重なる。堀越祐一氏は、五大老の役割は日本でも最も有力な大名たちが今後変わりなく豊臣政権を支持していくことを形として表したものとした⁽⁶⁵⁾が、筆者も同じ見解である。五大老には、五奉行のように具体的な職掌がなかったのではないだろうか。

前述のように、五奉行は、従来から秀吉を支えていた四人の吏僚に、浅野長政を加えて機構として整備したものであり、秀吉が健在の時から延長であつた。八条目において、成人した秀頼から財政について尋ねられた時、家康・利家の承認を得た文書を披露するよう指示されているように、秀頼が成人したあとも秀頼を支えていくことが前提となっていたのである。

『九八年度年報』には、秀吉は五奉行に対して「主君（秀頼）が時至れば日本の国王に就任できるよう配慮すべきこと、すべての大名や廷臣を現職に留め、自分が公布した法令を何ら変革することなきようにと命じた」とある。秀吉が諸大名の地位や法令など豊臣政権のあらゆる事柄において現状維持を望み、現状維持された体制が

秀頼に引き継がれるよう五奉行へ託したといえる。いわば、五奉行は豊臣家の家老というべき存在であり、彼らが「年寄」を自称し、五大老を「奉行」と呼称したのには、豊臣家の直臣という自負と、五大老は臨時的なものにすぎないという思いが背景としてあったのではないか。

秀頼が成人したあとも補佐していくことが前提となっていた五奉行に対して、諸侯の代表である五大老は、秀頼の成長に伴い役目を終えることが前提となっていたのだろう。先行研究から五大老の役割を整理すると次のようになる。

まず、第一に現状維持を旨とする知行安堵状の発給である。第二に朝鮮からの撤兵、第三に大名間相論の解決、第四に反乱や謀反への対処が挙げられる。一つ目が平常時であるのに対し、残り三つが非常時のものである。全てに共通している点は、秀吉死後の政局の安定を保つことであり、秀頼が成人したあとは秀頼に移行されることが予想される役割である。五大老は、秀吉死後の政局を安定させることを使命として設置され、主な役割は五奉行では解決できない次元にある非常事態への対処だったのである。

現在確認されている、家康が五奉行を「年寄」と呼称した唯一の事例は、慶長四年六月一日付宗義智宛五大老連署状写であり、宗義智に朝鮮出兵における損害を補うために米一万石を与えとし、「年寄四人」から発給される切手を使って受け取るようにと伝えている⁽⁶⁶⁾。五大老連署状の発給過程について谷徹也氏は、慶長四年正月十日に前田利家が秀頼を奉じて大坂へ下向し、五大老の構成員が伏見・大坂に分かれたあとは、必ずしも寄合を必要としなくなり、伏見・大坂間で意見の調整が持たれてから、日付を遡及して作成された正文が行き来して、判形が加えられて発給に至ったと指摘している⁽⁶⁷⁾。

これは、五大老連署状の文面に大老衆の意向がどれだけ反映されていたのかという点で重要となる。前述のように家康自身は奉行衆を「年寄」と呼ぶ気はなかったことは明白であることから、宗義智宛ての五大老連署状の文面は奉行衆サイドで作成され、それに五大老が判形を加えた可能性が高い。また、慶長五年五月に長束正家が

毛利輝元に対して知行安堵状の加判を求めている事例⁽⁶⁸⁾もあることから、平常時における五大老連署状の文面が奉行衆の主導で作成されていた可能性はより高まってくる。

これまで見てきたように、五大老の役割は、五奉行では解決できない次元にある非常事態への対処と、五奉行の政務に対する承認が中心となっている。秀吉は主として政務を五奉行の側に託したといえるが、五大老衆と五奉行の間には、官位と石高の両面で明らかな差があり、客観的にみた場合、五大老が五奉行よりも実力を有していることは明らかであった。また、非常事態には五大老の持つ権威が不可欠だった以上、避けられないことだったのだろう。

だが、「遺言A」の「いさい（委細）五人の物（者）に申しわたし候」という言葉が表しているように、豊臣政権や豊臣家に関わる主要な部分が五奉行に委ねられていた点は重要である。「史料2」にも「（五奉行）は主君なる己が息子（秀頼）のことを特別に面倒を見てやり、また家族のことや、さらには日本全土のことを司つて」とあり、これと合致している。官位と石高では五大老のほうが上だったが、政務・財政など実質的なものは五奉行に託された。五奉行が諸大名に豊臣政権の法令を遵守させる役割を担い、また「内府ちかひの条々」が奉行衆から出されている点を踏まえると、直臣で構成された五奉行の側に秀頼の意向を代弁する役割があったと考えられる。

第四節 「遺言体制」の成立過程

では、五大老・五奉行をはじめとする「遺言体制」は、如何にして整えられ、また、秀吉の死後にどう変化したのだろうか。その成立・変遷の過程を見ていきたい。慶長三年七月一日に伊達政宗は、九州に下向している石田三成に対して、秀吉の容体をはじめとする動静を三ヶ条で報じている

「史料 11」(69)

一上様御機色于今無御本腹、御膳なともしか／＼参候ハぬ由、公私之迷惑此事候、定而各より具ニ可被申越候

一五日以前、江戸内府・増右・徳善院、奥へ召候而、御煩たとへ今度御本腹候共、自然不慮も御さ候時のためにて候間、被 仰出由候、御詮ニハ 秀頼様いまた御幻少之義ニ御さ候間、大閤様以来者、内府・大納言あつけ御申候間、御うしろ見なされ、如何様にもとりたて御申あるへき由、被 仰出候、然上、間之悪衆も不残中をなおり、一統ニ御奉公可申上由、御意ニ候

一大坂へ 秀頼様被成御移徒候て、北国・東国之諸大名、悉可罷越之旨候、依之家共の引領とて、銀子・御俵粮、各ニ被下候、一昨日廿八日、江戸内府へ各被召集、米・銀之御朱印拝領、其上為 御詮中なをし御さ候、如何共可申○無之候而、一座之一和仕候、雖然、争心底和談可仕候哉、貴殿御上候者、浅弾と御中之義も可被仰出候、御理御申上事候者、一往者 御詮を相立申上候間、拙子も愚存言上仕度候、返々何事も御上之砌、奥底懇に可得貴意候間、先々如此候、恐惶謹言

七月朔日 政宗（花押影）

石治少様

人々御中

一条目より、この頃の秀吉は快復の兆しなく、食欲もなかったという。六月二十七日付で西笑承兌が上杉景勝へ宛てた書状には「大閤様春已来度々御煩ニ候、従当月二日腹中少被成御煩、其以後□参食候、此間者御食事も参り候、常より減申候、此分候者弥以可為御験氣候間可被御心安候」(70)とあり、六月二日に胃腸を患って食欲をなくしたが、二十七日頃には食欲を取り戻したので、このままいけば快復するのではないかと見通しを述べている。秀吉が食欲を取り戻したとする点は「史料 11」と反対のことを述べているが、承兌は「其元へハ風説可在之

存、懇ニ申入候」と述べているので、会津にいる景勝が動揺しないように配慮した可能性が考えられる。「史料1」には七月四日（西暦八月五日）に秀吉の病状が悪化したとあるので、政宗が述べるように、秀吉に食欲はなく、快復の兆しもなかったのではないだろうか。また、承兌が「従当月二日腹中少被成御煩」と述べた点も「史料1」に五月末（西暦六月末）に赤痢を患い、胃痛を訴えるようになったとあるので間違いないだろう。

二条目より、六月二十五日頃に家康・増田長盛・前田玄以が秀吉に呼ばれて遺言を伝えられた。幼少の秀頼の後見は、家康と利家が務めて盛り立てること、また、諍いを抱えている諸大名は全て関係を改善し、団結して秀頼に奉公することが命じられた。この記述から、秀吉は六月下旬には「遺言体制」を整え始めていたといえよう。

三条目より、秀頼は大坂へ移り、北国大名・東国大名は秀頼に従って大坂へ異動するように命じられた。前述の西笑承兌の書状には「東国・北国之御衆ハ於大坂御屋敷可被参之由候、九州・中国之衆ハ伏見ニ可為御屋敷之由候」とあり、毛利輝元の書状にも「東国衆之儀者在太坂、西国衆の儀者在伏見と 大閤様御置目候」（71）とある。北国大名・東国大名は大坂、西国大名は伏見へ、諸大名の屋敷は分けられた。政権の中心を伏見あるいは大坂に一本化するのではなく、大坂と伏見に分ける体制をこの時から準備していたといえる。

東国大名の政宗は異動の対象であった。異動にあたっては、銀子・米が下賜され、その朱印状を拝領するため該当する諸大名は六月二十八日に徳川邸に召集された。徳川邸では、秀吉の意向である諸大名の関係改善が図られた。しかし、政宗が述べるように表面的な和談でしかなかった。これと同様の記述は『九八年度年報』にもみられる。

「史料12」（72）

それから太閤様の希望によって、家康は誓詞をもって約束を固め、また列座の他の諸侯も皆同様に服従と忠誠の誓詞を差し出すことを要求され、彼らは太閤様の嗣子に対しては、嗣子が成人した後には、その政権を掌握できるように尽力することを、また家康に対しては、その間尊敬と恭順の意を表することを誓った。さ

らに太閤様は、その他の（より身分の）低い諸侯が、家康の屋敷で同じように誓うことを命じ、加えて、家臣たちの心を自分に固く結びつけ、彼らが太閤様の嗣子に対して忠誠を尽くすようにと、金銀その他高価な品々を数多く分かち与えた。太閤様は非常に気前よく寛大さを示して、寡婦や古くからの下僕のような貧しい私人のことにも思い及び、それぞれの身分に応じて何らかの品を授けた。太閤様はその後、四奉行に五番目の奉行として浅野弾正を加え、一同の筆頭とした。次いで太閤様は、奉行一同が家康を目上に仰ぐよう、また主君（秀頼）が時至れば日本の国王に就任できるよう配慮すべきこと、すべての大名や廷臣を現職に留め、自分が公布した法令を何ら変革することなきようにと命じた。また確固たる平和と融合―これなくしてはいかなる国家も永続できぬ―が諸侯の間に保たれるようにと、一同に対し、旧来の増悪や不和を忘却し、相互に友好を温めるようにと命じた。

また、『慶長年中ト斎記』にも家康邸で諸大名の関係改善が図られたとする記述がみられる。

「史料 13」（73）

慶長三年七月に西国の侍ハ伏見、東国の侍ハ大坂につめ、秀頼公を守立可申と御遺言の由、家康公へ諸大名集候所へ家康公出御、此時日本の諸大名今日始て半分主程に敬候、諸人の中にて増田右衛門尉、徳善院両使、御意の通りを手を付畏り、主の如くに敬被申上候、五人の御家老、五人の奉行も此時定期候、此日の座上ハ毛利宰相也、振廻出酒宴、景勝・義宣・政宗三人の中直しも此日也、秀忠公ハ勝手に御座候、一日間を置候て加賀大納言利家の亭へ右の衆御集り、霊社上巻の起請文御書候事

『慶長年中ト斎記』は七月としているが、「史料 11」から六月二十八日の出来事とみていいだろう。『慶長年中ト斎記』は、政宗の和談の相手は上杉景勝と佐竹義宣としている。景勝は未だ会津に在国していたが、「史料 11」三条目で政宗は「貴殿御上候者、浅弾と御中之義も可被仰出候」と、三成が帰還したら浅野長政との和談も取り沙汰されるであろうと述べていることから、この時の和談の相手は浅野長政ではなかったことになるので、相手

は景勝・義宣とみてよいと思われる。

『慶長年中卜斎記』は二日後、この時に集まった諸大名が前田利家邸で誓紙を提出したとしている。慶長三年七月二日付の島津龍伯の起請文案（⁷⁴）が残されており、このことを指しているのではないだろうか。

それから約半月後の七月十五日、諸大名が前田利家邸において秀吉の遺品と金子を下賜され、豊臣家の奉公衆（直臣）は、増田長盛邸で金子を下賜された。その際に諸大名と奉公衆は、次の誓紙を提出している。

「史料 14」（⁷⁵）

敬白天罰靈社上卷起請文前書事

一奉対^① 秀頼様御奉公之儀、大閤様御同前二不可存疎略事
付、表裡別心毛頭存間敷事

一御法度・御置目之儀、今迄如被 仰付、弥不可相背事^②

一公儀御為を存上者、対諸傍輩、私之遺恨を企、不可及存分事^③

一傍輩中不可立其徒党候、公事篇・喧嘩・口論之儀、自然雖在之、親子・兄弟・奏者・知音たり共、依怙最
肩不存、如御法度可致覚悟事^④

一御暇之儀不申上、為私下国仕間敷事^⑤

右条々若私曲偽於申上者、忝も此靈社上卷起請文御罰各可罷蒙者也、仍前書如件

慶長三年七月十五日

右、大納言殿にて御道具并金子被下候内、各へ被仰付候跡書也

「史料 15」（⁷⁶）

敬白靈社起請文前書事

一奉対^① 秀頼様御奉公之儀、大閤様御同前二不可存疎略事

一^② 御法度・御置目之儀、今迄如仰付、弥不可相背事

一^③ 傍輩中不可立其徒党候、公事篇・喧嘩・口論之儀、自然雖有之、親子・兄弟・知音たり共、依怙曩肩を不存、如御法度可致覚悟事

右条々若偽於申上者、忝も此靈社起請文御罰各可罷蒙者也、仍前書如件

慶長三年七月十五日

右、増田右衛門尉所にて、金子被下候時、被仰付候跡書也

諸大名と奉公衆で利家邸と長盛邸と分けられているのは、諸侯を監督するのが五大老であり、奉公衆を監督するのが五奉行という管轄を明確にする意味があつたのであろう。「史料14」は、秀頼への奉公、法度・置目の遵守、私戦の禁止、徒党の禁止、勝手な下国の禁止が誓約されている。一方、「史料15」は、「史料14」の三条目と五条目にあたる条目を欠き、一条目の付けたりと四条目の「奏者」の文言が無い違いがある。これは、中野等氏が指摘するように発給者が諸大名か奉公衆であるかによることで生じた差異であろう(77)。

それから七日後の七月二十二日、家康が自身を「年寄」と称した「史料7」が登場する。「最前不出衆」は、十五日の誓紙提出に参上しなかった者たちとみていいだろう。二十二日に前田玄以から参上しなかった者に対しては遺品が下賜される旨が利家に伝えられ、それを利家が家康に報告した。利家は「年寄」である家康に立ち会いを要請したが、家康は「不及其儀」と、気兼ねせずに配分をおこなって欲しいと返答している。慶長三年七月の段階で大老衆としての動きを一次史料から確認できるのは、家康と利家のみといえる。

また「史料14」の誓紙は毛利輝元も提出しており、前書案が『毛利家文書』に残されている(78)。宛所は家康と利家であり、輝元でさえ諸大名と同様に兩名に誓紙を出していることを踏まえると、この段階での諸侯の代表は五大老の五人ではなく、家康・利家の二人のみであった可能性もでてくる。

しかし、毛利輝元の前書案には「右ハ加賀使にての事」とあり、利家の使者が輝元の判形をもらいに来たもの

と思われる。利家邸に集められた諸大名とは異なり、輝元が一線を描く存在であった点も留意しなくてはならない。そして、文禄四年（一五九五）八月三日付で家康・秀家・景勝・利家・輝元・小早川隆景が諸侯を統制するための五ヶ条の定書に連署している（⁷⁹）ように、五人以上を諸侯の代表とする事例は三年前からみられることから、慶長三年七月の段階で輝元が大老衆に含まれていた可能性を否定することはできない（⁸⁰）。

また、『慶長年中卜斎記』の記述「五人の御家老、五人の奉行も此時定り候」を全面的に信用するのであれば、五大老・五奉行の成立は、徳川邸で諸大名の関係改善が図られた六月二十八日となろう。もつとも、『慶長年中卜斎記』は覚書という史料的人格からか誤りもみられるため、全面的に信用することはできないが、五奉行については七月頃の成立が確認できる。

前述のように五奉行は、秀頼の若年を理由として急拵えで設けられたものではなく、秀吉が健在の時から延長であるが、『九八年度年報』に「四奉行に五番目の奉行として浅野弾正を加え、一同の筆頭とした」とあるように、浅野長政が奉行衆に列した時期が成立の指標となろう（⁸¹）。長政は、慶長三年七月七日に秀吉の病氣平癒の祈禱を依頼する書状に玄以・長盛とともに連署している（⁸²）。また、この三名の連署は、島津義弘に宛てられた七月八日付の書状（⁸³）、七月十五日付の書状（⁸⁴）からも確認でき、七月十五日付の書状には「長大越州御検地ニ逗留候、石治少九州へ被相越候間、為三人申入候」とあるので、長束正家と石田三成も連署する立場にあったことがわかる。実際に七月十七日付の書状では三成も連署に加わっている（⁸⁵）。よって、七月七日頃には五奉行が成立していた可能性があり、同月十五日には成立が明確となる。「史料12」に五奉行が、諸大名の関係改善が図られた直後に成立したように書かれている点も傍証となろう。

一方、五大老の成立が一次史料から明確となるのは八月五日である。「遺言A」「遺言C」が八月五日付で作成されており、五大老の構成員が明記されている。

「史料16」（「遺言C」）

覚

一内府^①

利家

輝元

景勝

秀家

此五人江被仰出通口上。付、縁辺之儀、互可被申合事

一内府三年御在京事。付、用所有之時ハ、中納言殿御下之事^②

一奉行共五人之内、徳善院・長束大両人ハ一番ニして、残三人内老入宛伏見城留守居之事、内府惣様御留守居之事^③

一大坂城右奉行共内式人宛留守居事^④

一秀頼様大坂被成御入城候てより、諸侍妻子大坂へ可相越事^⑤
以上

八月五日

八月五日が五大老の成立において一つの画期であつたことは間違いない。だが、「遺言C」で大老衆が相互に縁組を命じられた点については、八月十四日付内藤周竹書状⁽⁸⁶⁾によると、八月一日に秀吉が諸大名を集めて能を催した際に、輝元が秀家との縁組を命じられているため、八月五日に新たに浮上した話ではない。秀吉の遺言は、八月五日までに秀吉が命じてきたものを体系的にまとめたのが大部分と考えられ、五大老の構成員が定まるのも八月五日から遡ることができないのではないだろうか⁽⁸⁷⁾。

八月五日は、家康・利家と五奉行の間で誓紙が交わされている。まずは、家康・利家が提出した誓紙をみてい

きたい。

「史料 17」(88)

敬白天罰靈社上卷起請文前書事

一^①奉対 秀頼様御奉公之儀、大閤様御同前二不可存疎略事
付、表裏別心毛頭存間敷事

一^②御法度・御置目之儀、今迄如被仰付、弥不可相背候、各相談之儀者多分二可相付事

一^③公儀御為存候上者、対諸傍輩、私二遺恨を企、不可及存分事

一^④傍輩中不可立其徒党候、公事篇・喧嘩・口論之儀、自然雖在之、親子・兄弟・縁者・親類・知音・奏者たり共、依怙臆負を不存、如御法度可致覚悟事

一^⑤御知行方之儀、秀頼様御成人之上、為御分別不被仰付以前二、不寄誰々御訴訟雖有之、一切不可申次之候、況手前之儀不可申上候、縦被下候共、拝領仕間敷事

一^⑥対御奉公衆誰々、讒言、子細雖有之、同心不可申候、何時も直二申届、可随其候、自然不相届儀、承届候者、無隔心可令異見候、事二より同心無之候共、遺恨二存間敷事

一^⑦公私共、以談密被申聞儀、一切不可有他言事

一^⑧此方一類并家来之者共、自然背御法度、不相届族於有之者、無隔心被申聞候者、可有執着候事
右条々、若私曲偽於有之者、忝も此靈社起請文御罰深厚二可罷蒙者也、仍前書如件

慶長三年八月五日

武蔵内大臣 家康

加賀大納言 利家

但、前書誓紙同前一通宛

徳善院

浅野弾正少弼殿

増田右衛門尉殿

石田治部少輔殿

長束大蔵大輔殿

「史料14」と重複している点が多く、それに家康・利家に関係した事柄を付加された形となっている。家康・利家が諸大名の誓紙を取りまとめ、そして、両者も諸侯の代表として五奉行に誓約したという位置づけであろう。秀頼への奉公、法度・置目の遵守、私戦の禁止、徒党の禁止といった前半の四ヶ条は「史料14」と同一の趣旨であるが、五条目以降は「史料14」にはない内容である。五条目は大名領知の現状維持であり、秀頼が成人するまで家康・利家是如何なる取次も行わないこと、自身に対する加増があつたとしても辞退することを誓約した。六条目は、如何なる子細があつても奉公衆に関する讒言に同心しないこと（奉公衆への不介入）を誓約。七条目は、密談による決定は他言しないこと（政権内での機密保持）、八条目では、一門や家来が法度に背いた場合は、隠すことなく申告すること（家中の監督）を誓約した。また、二条目も「各相談之儀者多分ニ可相付事」の文言が付加されている。

「史料18」（89）

敬白天罰靈社上巻起請文前書事

一奉対^① 秀頼様御奉公之儀、大閣様御同前ニ不可存疎略事

付、表裏別心毛頭存間敷事

一御法度・御置目等諸事、如今迄たるべき儀勿論候、并公事篇之儀、為五人難相究儀者、家康・利家得御意、然上お以急度伺上意、可隋其事^②

一傍輩中不可立其徒党候、公事篇・喧嘩・口論之儀、自然雖在之、親子・兄弟・縁者・親類・知音・奏者たり共、依怙臙肩を不存、如御法度可致覺悟事

一対諸傍輩、私ニ遺恨お企、不可及存分事

一五人間之儀、互無隔心、別而令入魂、公儀御為可然様ニ可申談候、自然中説於有之者、以直談可相濟事

一諸事申談儀、多分ニ付而、可相究候

但、五人之中不私、子細在之候而相究候者、殘為衆中可相究候、至尔時参会之衆中少分にて相究儀有之共、不私相究候上者、存分有之間敷事

一御算用之儀、手前之事者不及申、私曲存間敷候、何之御代官前も依怙臙肩不存、有様ニ承届、公儀御為可然様ニ可申付事

一公私共、以御談密被仰聞儀、一切他言不可仕事

一此方一類并家来之者共、自然背御法度、不相届族於有之者、無隔心被仰聞候者、可忝存事
右条々、若私曲偽於有之者、忝も此靈社起請文御罰深厚ニ可罷蒙者也、仍前書如件

慶長三年八月五日

長東大藏大輔

増田右衛門尉

石田治部少輔

浅野弾正少弼

徳善院

家康公

利家公

五奉行の誓紙も前半の四ヶ条は、前後するものの「史料17」と同一の趣旨である。ただし、二条目の法度・置

目について、家康ら諸大名および奉公衆が「今迄如仰付、弥不可相背」であるのに対し、「如今迄たるべき儀勿論」となっている。五奉行が法度・置目を司る立場にあったことを窺わせる。また、五奉行の手に負えない訴訟の場合、家康・利家の了解を得て、最終的には上意（秀吉の意向）を伺うことになっている。この記述から、五大老・五奉行制は、秀吉の死後に備えて整えられたものでありながらも、「史料18」を交わした時点（秀吉存命中）も現行であったことがわかる。

五条目は、五奉行の執政は五人の話し合いで行うこと、六条目は多数決による採決が記されている。五奉行が多数決による合議制をとっていたことがわかる。七条目は、財政の適正な処理であり、「遺言B」八条目と同一の趣旨である。八条目の政権内での機密保持、九条目の家中の監督は「史料18」にもみられる。

『義演准后日記』慶長三年八月七日程には「伝聞、大閤御所御不例不快□云々、玆事／＼、祈念之外無他事、浅野弾正・増田右衛門尉・石田治部少輔・徳善院・長束大蔵大輔五人ニ被相定、日本国中ノ儀申付了、昨日右五人縁辺ニ各罷成云々、是御意也」⁽⁹⁰⁾とあり、五奉行は国政を託され、相互に縁組をして結束を強めるように命じられたという。義演は、五奉行が縁組を命じられたのは八月六日としているが、国政を託された日は記していない。おそらく五日ではないだろうか。なお、五奉行の縁組については『九八年度年報』にも記されている。

「史料19」⁽⁹¹⁾

（前略）太閤様は彼らが来訪したことを聞くと、奉行の一人に命じて、一行の航海が無事であったことに祝意を表させるとともに、ロドウリーゲス師に対してのみ謁見を許し、他の人々は引見したくないと伝えさせた。司祭は国王に見えるまでに非常に多くの庭や広場、住居や部屋を通過せねばならなかったので、帰りに案内者なしに出口を見つめることは困難（だと思われ）た。ロドウリーゲス師がついに宮廷内の寝所に達したところ、太閤様は、純絹の蒲団の間で、枕（に頭をのせて）横臥し、もはや人間とは思えぬばかり全身痩せ衰えていた。（中略）その翌日、記述の五奉行の息子や娘たちの間で婚姻が行われることになっていたの

で、太閤様はその荘厳な結婚式に、ロドウィグス師が列席することを望んだ。(後略)

八月中に婚礼があったように記されているが、実際は縁談が浮上したのみと思われる。『九八年度年報』には当時の秀吉の病状が鮮明に記されており、ジョアン・ロドリゲスが秀吉に謁見した時、秀吉は起き上がることもままならず、全身痩せ衰えていた。五奉行が縁組を命じられたとされる八月六日は、安国寺惠瓊の書状によると、秀吉の体調は少し良くなり、夜に家康・利家・輝元・秀家が秀吉の御前に召し出されて「日本国已来之事、中国置目等」について命じられている(92)。

その二日後の八月八日、家康・利家が再び五奉行に誓紙を提出している。

「史料 20」(93)

敬白天罰起請文前書事

一 今日御直ニ被 仰出候趣、少も不存忘 秀頼様へ御奉公可仕候事

一 武蔵守にも御錠之通、具ニ申聞候、是又 秀頼様へ御奉公不存疎略可仕事

一 以御談密被仰出儀、不可致他言事

右条々、若私曲偽於申上者、忝も此靈社起請文御罰深厚ニ可罷蒙者也、仍前書如件

慶長三年八月八日

家康

徳善院

浅野弾正少弼殿

増田右衛門尉殿

石田治部少輔殿

長束大蔵大輔殿

「今日御直ニ被 仰出候趣」とあることから、家康・利家がこの日(八日)も秀吉の御前に召し出されたとい

える。利家も同様の誓紙を提出している（94）が、二条目は「肥前守にも御詮之通、具申聞候、是又 秀頼様へ不存疎略御奉公可仕事」となっており、家康・利家は、後継者である秀忠・利長に対して秀吉の「御詮」を遵守させることを誓約している。

そして、徳川秀忠・宇喜多秀家・前田利長も同日に誓紙を提出している。

「史料 21」（95）

敬白天罰靈社上巻起請文前書事

一奉対^① 秀頼様御奉行之儀^{（公）}、大閣様御同前ニ不可存疎略事

但、表裏別心毛頭存間敷事

一御法度・御置目之儀、今迄如被 仰付、弥不可相背候、各相談之儀者、多分ニ相付候事^②

一公儀御為お存候上者、対諸傍輩、私ニ遺恨お企、不可及存分事^③

一傍輩中不可立其徒党候、公事篇・喧嘩・口論之儀、自然雖有之、親子・兄弟・縁者・親類・知音・奏者たり共、依怙最負不存、如御法度可致覚悟事^④

一御暇之儀不申上、為私下国仕間敷事^⑤

一御知行方之儀、 秀頼様御成人之上、為御分別不被 仰付以前者、諸侯御奉公之浅深ニよつて御訴訟之子細も在之候者、公儀御為ニ候条、 内府并長衆五人致相談、多分ニ付而、随其可有其賞罰候、但、手前之儀者少も申分無御座事^⑥

一対御奉公衆誰々、讒言之子細雖有之、同心仕間敷候、但、仁ニよつて直談ニ可申理候、自然不相届儀、承届候者、無隔心可令異見候、事ニより同心無之候共、遺恨ニ存間敷事^⑦

一公私共ニ、以談密被申聞儀、一切不可有他言事^⑧

一此方一類并家来之者共、自然背御法度、不相届族於有之者、無隔心被申聞候者、可有祝着候事^⑨

一昨日、内府・利家并長衆お以、被仰聞通、弥以少も不存忘 秀頼様へ御奉公可仕事

右条々、若私曲偽於有之者、忝も此靈社起請文御罰深厚ニ可罷蒙者也、仍而前書如件

慶長三年八月八日

江戸中納言

備前中納言

越中宰相

但し、三人なから別紙也

徳善院

浅野弾正少弼殿

増田右衛門尉殿

石田治部少輔殿

長束大蔵大輔殿

一条目の秀頼への奉公、二条目の法度・置目の遵守、三条目の私戦の禁止、四条目の徒党の禁止、七条目の奉公衆への不介入、八条目の政権内での機密保持、九条目の家中の監督といった内容は、「史料17」と類似している。五条目は勝手な下国の禁止となっており、「史料17」にはみられない。これは、「遺言C」に「内府三年御在京事。付、用所有之時ハ、中納言殿御下之事」とあるように、上方常駐が義務づけられていた家康と、その代理として帰国することが想定されていた後継者（秀忠）との立場の違いによるものである。勝手な下国の禁止に宇喜多秀家も誓約している点は重要であり、七月十五日の誓紙で輝元もこれに誓約している。秀家・輝元には帰国が許されておき、五大老の中でも違いがあった。

十条目からは、前日（八月七日）に秀忠・秀家・利長が、家康・利家・五奉行を前に、秀頼への忠節を誓約していたことが分かる。そして、秀忠・利長が、五大老の秀家と同等の扱いを受けた点も注目に値する。これは、

家康・利家が秀吉と同世代であったことに由来すると考えられる。「史料7」の追而書に「貴殿御煩之様子、具申上候、御養生專一之由 御意候」、「遺言B」四条目に「大納言殿御年もよられ、御煩気にも候間」とあるように、秀吉が歿する一ヶ月前に利家も病床にあり、『義演准后日記』慶長三年十二月三日条に「伝聞、加賀大納言煩以外云々」⁽⁹⁶⁾と、十二月も病床にあったことが確認できるように、利家の病は重く、秀頼が成人する前に徳川家と前田家で世代交代が起きることは予測できることであつた。そのため、徳川・前田の次代を担う者からも誓約を取る必要があつたのである。秀吉にとっては、家康・秀忠を合わせて徳川家であり、利家・利長を合わせて前田家であつた。秀忠・利長と同じタイミングで秀家も奉公を説かれているのは、「遺言B」に「幼少より御取立被成候之間」とあるように秀家が秀吉の猶子であつたことや、秀忠と同世代であつたことから、次代の政權を担う人材として大きな期待があつたものと思われる⁽⁹⁷⁾。

六条目は知行配当についてであり、大きな改変が認められる。「史料17」では、秀頼が成人するまでは家康・利家は如何なる取次も行わない現状維持となっていたが、ここでは公儀のためとして、家康と五奉行による相談と多数決に拠つて論功行賞を行うとしている。

また、同日に利家も秀忠らと同文の誓紙を五奉行に提出しており⁽⁹⁸⁾、中野等氏は「知行方之儀」の審議メンバーに利家が自ら加わらない点を誓約したと位置づけている⁽⁹⁹⁾。

秀吉は八月九日にも家康らを御前に召し出している。次の史料は内藤周竹が息子又二郎へ宛てた書状である。

「史料22」⁽¹⁰⁰⁾

返々普請衆こそ延引無興迄ニ而候、其元ニ罷居候時之事、さても／＼無勿体由事と計存候

去十二水野と申人下着候、大閤様御氣分趣佐石へ被仰下候条々

① 一去九日大名衆被召寄御対面候、御身ハ上段ニ御座候て種々之かり物を被敷、けうそくニ被寄懸、青キこそて紅之うらニ付たるをめされ、そはにハ女しゆ五人露庵計うち計祇候

一^②左座ハ家康・前田殿・伊達・宇喜多・宰相様五人、右ハ殿様御一人計之由候

一^③御煩難有御快氣との御物語、重々被仰候時之御声、いかにもかすかに被仰候て、御一期後之事共被仰候時ハ扇にて畳をたゝかせられ、いつもの御気色之様ニ御座候

一^④家康へ之御意にハ、毛利と被仰合候子細ハ備中清水城被召詰候砌、信長を明智任存分候故、御神文被執替候、終毛り表裏事本式者と被思召之由候、西国之儀被任置之由候、頃実子被成出来之由候間、御家之儀をハ松寿様へ被進候へ、相宰相様へハ出雲・石見両国ニ今銀山被副被進之由候、本銀山之儀ハ輝元可被知召之由候、宇喜多娘之儀ハ御親類にて候間、一兩年被召置候之条、松寿様へ被進之候、宇喜多事をハ輝元被懸目候へ、万一相違之事共候ハ、頸をねち切候へ、輝元本式者之事に而、毎事可有用捨候、家康可被申付候、無左ハ草陰より大間頸を切すると宇喜多ニ被仰聞候

一^⑤家康と被仰合候子細をハ殿様へ被成御物語之由候、両家無ニ被仰談候へハおひろい事ハ無氣遣候、人ニ被成候する事をも不被知召候へ共、おひろいを各めされ置候へハ王位すらぬ事にて候、東西ハ家・輝兩人、北国ハ前田、五畿内ハ五人之奉行無異儀候ハ、一向不可有別儀候、高麗之儀被引取之由候、乍去おひろい御存分出来候ハ、弓矢ニめされ候するも可為御気分候無別条候とて御盃被召出候、今日計之御対面御残多之由候て各へ御酒被進之、内へ被入候つか、又家・輝兩人計被呼帰、立ながら被仰事にハ、いつも被成御きゝたる事は弥不可有忘却候、頼そよ／＼と被仰候て御手打被合たると被仰下候、佐石被聞候て被申事ニも如此明白なる事前代未聞之事候、余きれはなれたる御気分にて候而ハ結句可被成御快氣と之被申事候、日本初より名将にて候よし、天下其沙汰之由申候

(後略)

二条目より、召し出されたのは、家康、利家、伊達政宗、秀家、輝元、毛利秀元であった。三条目より、秀吉は、快復は難しいと幽かな声で話したが、死後の事などを話す際は、扇で畳をたたきながら、いつもの調子であ

ったという。一条目には、この日の秀吉は脇息に寄りかかっていたとあるので、「史料19」にある寝たきりの状態よりは良くなっていたのであろう。

四条目には、秀吉が輝元と話し合った内容を家康に伝えたとある。内容は、①本能寺の変後の和睦を結んだ時から、秀吉は輝元を「本式者」（正しい人）と思ってきたこと。②「西国之儀」を輝元に任せること。③輝元に実子松寿丸が生まれたので、毛利家は松寿丸に継がせて、秀元には出雲国・石見国に当時「今銀山」と称された銀山を副えて与え、石見銀山は輝元が領有すること¹⁰¹。④秀家の娘を松寿丸に嫁がせること。⑤輝元は秀家のことを目にかけてやること、そして万が一、秀家に「相違之事」があった場合は首を斬ること。しかし、輝元は「本式者」であるため容赦するだろうから、その時は家康が行うようにと（秀吉は家康に）伝えた。そして、家康もそうしない場合は、草葉の陰から秀吉が秀家の首を斬ると、秀家に言い聞かせた。

秀吉が家康に伝えた話（輝元と話し合った内容）には、毛利家の相続問題も含まれていた。松寿丸の家督相続や、秀元の出雲・石見の拝領については、八月十四日付内藤周竹書状¹⁰²からも確認できるが、「宰相様江ハ出雲・石見銀子山被相除之、被進候へと被仰渡之由候」と、八月一日の裁定では秀元への配分には銀山が全く含まれていなかったのに対して、「史料22」では「今銀山」が含まれており、変更箇所がみられる。「史料22」の指す秀吉・輝元の話し合いは八月一日以降であることがわかり、前述の安国寺恵瓊の書状¹⁰³に「中国置目」の文言がみられることから、六日夜のことではないかと思われる。

五条目によると、秀吉が家康と話し合った内容も輝元に伝えられた。それに加えて①両家（徳川・毛利）が相談し合えば秀頼の事は心配ないこと。②秀吉は秀頼が成人するのを見届けることはできないが、各々が秀頼を支えてくれれば「王位」は廃れないこと。③東国と西国は家康と輝元、北国は前田利家、五畿内は五奉行が間違はなく扱うならば問題はないこと。④朝鮮からは引き揚げるが、秀頼が政務を執り行うようになれば、秀頼の判断次第で再び出兵もあることが秀吉の口から語られた。

五日から九日にかけては、秀吉の遺言が出されたのを皮切りに、大老衆と奉行衆との間でくり返し誓紙のやりとりが行われ、秀吉の口からも大老衆にくり返し遺言が語られた。部分的な変更を伴いながらも、これまで秀吉が命じてきたものを再確認しながら「遺言体制」を整えていく時期であった。しかし、八月十日からは状況が一変する。上方不在の上杉景勝を除いた四大老は、八月十日付で次の誓約をしている。

「史料23」(104)

条々

一^①上様長々御煩付而、御失念も在之様ニ御座候間、御知行方其外御仕置等之事、最前被 仰定ことくたるべき事

一^②自今以後之儀者、如何様之儀被 仰出候共、御請ハ先申上、以御本復之上、慥得御諚、可随其之事

一^③御知行方并御仕置等之事、今度重疊被 仰出、以誓紙相定候通、不可有相違候事
以上

慶長三

八月十日

輝元

秀家

利家

家康

知行配当や仕置については、これまでの取り決めに遵守し、今後は秀吉から如何なる命が下されても実行には移さずに、秀吉の快復を待つて改めて真意を確認してから実行に移すことが誓約された。「史料23」は、「遺言体制」更新の凍結であり、これまでの誓紙とは明らかに流れが異なる。理由は、一条目にあるように秀吉が正常な判断ができないことによる。そのため、今後は秀吉が何を言っても「遺言体制」は変更しないと、更新を凍結さ

せたのである。秀吉が精神耗弱していた様子は、『九八年度年報』にも記されている。

「史料 24」⁽¹⁰⁵⁾

太閤様の容態は九月三、四日までやや持ち直し、奉行とごく近親の者以外は誰も近づくことができず、その間というのは、もっぱら、数組の（諸侯の）婚姻に関する配慮とか、国家が息子（秀頼）のために、いっそう固められるために、誓詞を（諸侯に）要求するといったことで過ぎていった。だが九月四日には、（太閤様の）容態は悪化し、（伏見城では）すべての門で厳しい警備態勢が続き、同月十四日には太閤様は息を引き取ったかと思われるほどになった。しかもなお十五日には太閤様は意識を回復し、狂乱状態となって、その間、種々様々の愚かしいことを口走った。だが息子（秀頼）のことに關しては、息子を日本の国王に推挙するようにと、最期の息を引き取るまで、賢明に、かつ念を押して語っていた。こうして、太閤様はついに、その翌朝未明に薨去した。

「史料 23」は、正常な判断ができない秀吉を目の当たりにした五奉行が、更新の凍結をはかって、秀吉の意思を介さずに文面を作成して大老衆に誓約させたようにも感じられる。しかし、『九八年度年報』は秀吉が狂乱状態となった日を八月十五日（西暦九月十五日）としており、「史料 23」より日にちが後となる⁽¹⁰⁶⁾。また、『九八年度年報』は、狂乱状態となっても秀頼のことに關しては賢明に語っていたとも記しており、「史料 22」にも前日（八月九日）の秀吉が、いつもの調子で「遺言体制」について語っていた様子が記されているので、八月十日に突如として、五奉行が独断で証文の文面を作成しなければならぬほどの症状になったとは考え難い。また、「史料 23」が秀吉の意思を介さずに作成されたとすると、かなり不敬な内容となるため、自身の症状を危惧した秀吉が作成させたものではないかと思われる。いずれにしても、八月十日を境として秀吉が歿するまで「遺言体制」の更新はなく、完成となったのである。

第五節 「遺言体制」の改変

前節で述べたように「遺言体制」は、部分的な変更を伴いながらも、これまで秀吉が命じてきたものを再確認しながら整えられた。しかし「遺言体制」は、開始早々から家康と三成らの不和によって上手く機能しなかった。秀吉の死から十日後の八月二十八日、石田三成・増田長盛・長束正家・前田玄以の四奉行と毛利輝元は盟約を結んでおり、輝元は、五大老の中に四奉行と対立する者が出た場合、四奉行へ味方することを誓約した⁽¹⁰⁷⁾。宛所に浅野長政が含まれていないことや、五大老の構成員と四奉行の対立が起こることを想定しているように、この誓紙は、秀吉の死の直前に繰り返し交わされた誓紙とは性格を異にするものであり、派閥形成の初見といえる。この誓約において、四奉行と対立するとみられていた仮想敵とは、徳川家康であった。九月二日付内藤周竹書状には「五人之奉行と家康半不和之由」と記されている⁽¹⁰⁸⁾。

「遺言体制」では、知行配当は家康と五奉行の多数決、政務は五奉行の多数決となっていた。本来であれば最も協力し合わなければならぬ家康と四奉行の対立は、「遺言体制」を麻痺させたと考えられ、前述の内藤周竹書状には「御存命中被仰堅候事、も者や相違之分二候」と記されている⁽¹⁰⁹⁾。実際、秀吉が歿する前日（八月十七日）に五奉行が諸大名に対して家来を武装させることを禁止している⁽¹¹⁰⁾。『九八年度年報』に「大名たちがそれぞれ自衛のために、居城の守りを固め出したことが、民衆の噂（太閤様の死）を裏付けた」⁽¹¹¹⁾とあるように、諸大名が軍備を固めたのは自衛のためであって、家康と四奉行の争いが直接的な原因ではないようであるが、家康と四奉行が協力関係になかったため、政情が不安定となり、諸大名は自衛に動いたのではないだろうか。

こうした事態を打開するため、九月三日に大老衆・奉行衆が誓約を結び関係改善をはかっている。

「史料 25」⁽¹¹²⁾

敬白靈社上巻起請文前書之事

一^① 秀頼様御為存候上者、諸傍輩ニ対し、私之遺恨を企、不可及存分ニ事

一^② 此連判之衆中ニ対し、誰々讒言之子細在之共、同心不可申候、何時も直ニ申理、可随其候、自然不相届儀承付候者、無隔心可令異見候、事ニより同心無之候共、遺恨ニ者存ましき事

一^③ 傍輩中不可立其徒党候、公事篇・喧嘩・口論之儀、雖有之、親子・兄弟・縁者・親類・知音・奏者たりとも、依怙臆負を不存、如 御法度可致覺悟事

一^④ 此衆中之うわさ・あしさまニ被申聞仁、於在之ハ、則其申主をあらハし、互可申届候、左様ニ無之候て、拾人之外別人を近付、此衆中之うしろ事、あしさまニ取沙汰申ましき事

一^⑤ 諸事御仕置等之儀、其輕重をけつし、十人之衆中多分ニ付而、可相究事

一^⑥ 拾人之衆中と、諸傍輩之間ニおゐて、大小名ニよらず、何事ニ付ても、一切誓紙取かわすへからず、如此相定上、若誓紙あつかひ仕候衆ニ至てハ、其徒党を立、逆意之基眼前候条、各相談仕、曲事ニ可被仰付事

一^⑦ 対 秀頼様、誰々惡逆之子細、雖有之、出しぬき之生害不可有之候、其罪科之通申届、理之上を以、可有御成敗、縦其身にけのひ候共、其在所へ押寄、可被加 御成敗事

以上

右条々、若私曲偽於在之者、忝も此靈社上卷起請文之御罰、各深厚ニ可罷蒙者也、仍前書如件

慶長三年九月三日

長束大藏大輔

輝元

石田治部少輔

景勝

増田右衛門尉

秀家

浅野弾正少弼

利家

徳善院

家康

一条目の私戦の禁止と、三条目の徒党の禁止は、これまでの誓紙にもみられる項目であるが、それ以外は新たな内容となっている。二条目は、連署者十名に対する讒言は、如何なるものでも同心せず、子細があれば相互に意見し合い、その結果には従って私怨は抱かないとする。四条目も類似した内容となっている。家康と四奉行の対立が背景としてあり、今後は対立を起こさないようにすることを目的として作成されたと推測できる。

六条目では、連署者十名以外の者との誓紙のやり取りを禁止し、もし、徒党を形成していることが明らかになった場合でも、皆と相談した上で糾明すべきだとしている。七条目は、秀頼に対して謀反を起こそうとしている者が明らかになった場合でも、先んじて殺害に及ぶことを禁止し、合法的な手続きを経た上で処罰するとしている。これら二つに共通していることは、私戦による政敵殺害の抑止である。

五条目は、「諸事御仕置等之儀」は軽重を判断した上で、十名の多数決で決定するとある。八月八日の誓紙によって、知行配当は家康と五奉行の多数決、政務は五奉行の多数決となっていた⁽¹¹³⁾。それが十名の多数決という形に変更されたのである。「内府ちかひの条々」において「御奉行五人之一行二、為一人判形候事」⁽¹¹⁴⁾と弾劾されているように、家康が単独で発給した知行宛行状は違反となった。もともと「諸事御仕置等之儀」の具体的な内容は記されていないが、基本的に知行宛行状は五大老の連署で発給されている⁽¹¹⁵⁾点からも、「諸事御仕置等之儀」に知行配当が含まれており、家康は知行配当において他の大老衆に対する優位性を失ったといえよう。一方、五奉行も政務において五大老に介入の余地を与えたといえる。

結語

本章では、五大老・五奉行の力関係や、「遺言体制」の成立過程に力を入れて検討をおこなった。豊臣政権にお

ける立場の高下は、武家官位制のみをもって評価することはできず、石田三成ら直臣においては、その人物の周囲（秀吉や諸侯）との関係性、毛利輝元ら諸侯においては経済的実力などを加味した上で立場を評価する必要がある。

当時においても東国大名・北国大名・西国大名という地方区分があり、東国は家康、北国は利家、西国は輝元と代表者が定められた。輝元は武家官位制では五大老の中で最下位であるが、総合的な序列は三位といえよう。また、三成と輝元・景勝の関係をみた場合、三成が必ずしも輝元らに下位にたわけではない。先行研究では、こうした五大老・五奉行の構成員の力関係については言及されてこなかったが、本章の検討によって、その上下関係が複雑なものである点が明らかとなった。

秀吉の遺した「遺言体制」では、知行配当は家康と五奉行の多数決、政務は五奉行の多数決となっており、家康と五奉行は、他の大老衆に対して優位性を持っていた。しかし、八月二十八日に三成ら四奉行は輝元と盟約を結んで派閥を形成するなど、家康と四奉行の不和が表面化し、「遺言体制」は上手く機能しなかった。結果、九月三日の大老・奉行による連署誓紙において「遺言体制」の改変がおこなわれ、家康と五奉行の双方が優位性を放棄し、十名の多数決による政権運営が誕生した。「遺言体制」が改変されたあとは、体制のあり方をめぐる主導権争いはなくなったが、代わりに十人の中から政敵を排除する流れへと変化していく。

本章では、先行研究が言及しなかった「遺言体制」の成立過程を明らかにしたものとした。その結果、政権闘争の前段階として、「遺言体制」のあり方をめぐる主導権争いがあり、秀吉死後の政権運営が、秀吉の遺言どおりではなく、対立する陣営同士の協議と妥協によって生まれた体制でおこなわれたことが明らかとなった。

註

（１）山本博文『幕藩制の成立と近世の国制』（校倉書房、一九九〇年）。

(2) 跡部信「秀吉独裁制の権力構造」(同『豊臣政権の権力構造と天皇』戎光祥出版、二〇一六年)(初出二〇〇九年)。

(3) 堀越祐一「豊臣五大老の実像」(山本博文他編『豊臣政権の正体』柏書房、二〇一四年)。

(4) 谷徹也「秀吉死後の豊臣政権」(『日本史研究』六一七号、二〇一四年)。

(5) 中野等「慶長三年の豊臣政権」(『織豊期研究』第二十一号、二〇一九年)。

(6) 石高は「慶長三年大名帳」(『続群書類従』第二十五輯上 武家部、続群書類従完成会、一九五九年)に記載されている石高を基準とした。

(7) 「一五九八年十月三日付、長崎発信、フランシスコ・パシオのイエズス会総長宛、一五九八年度、日本年報」(松田毅一監訳『十六・十七世紀イエズス会日本報告集』第一期第3巻、同朋舎出版、一九八八年)(以下『日本報告集』と表記)一〇五頁。「」内はテキストにある補足語、()内は訳者の補足語、または注に入れるべき短文を指す。

(8) 豊臣秀吉遺言覚書(『大日本古文書 家わけ第二 浅野家文書』東京大学出版会、一九六八年、一〇七号)。

(9) 「一五九九年十月十日付、日本発信、巡察師アレシヤンドウロ・ヴァリニャーノのイエズス会総長宛、一五九九年度、日本年報」(『日本報告集』一一八、一一九頁)。

(10) 『日本報告集』一〇八頁。

(11) 『日本報告集』一〇八、一〇九頁。

(12) 「聚楽行幸記」(『戦国史料叢書1 太閤史料集』人物往来社、一九六五年)一〇六、一〇七頁。

(13) 前掲註(1)。

(14) (慶長四年)正月三日付島津龍伯事書「島津忠恒・義弘宛」(『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之二』東京大学出版会、一九五二年)(以下『島津二』と表記)一一四三号。

- (15) (慶長三年) 九月三日付宇喜多秀家書状「西笑承兌宛」「西笑和尚文案(紙背文書)」(『相国寺蔵西笑和尚文案』思文閣出版、二〇〇七年)〈以下『西笑』と表記〉三―六号。
- (16) 「一五九九年―一六〇一年、日本諸国記」(『日本報告集』一六八頁)。東光博英氏の御教示によると、「奉行」と日本語訳されている箇所には、一般的には「統治者」を意味する *governador* が用いられている。そして、五大老と五奉行を比較の形容詞 *maiores* (より有力な) と *menores* (それほど有力でない) で区別している。
- (17) (慶長五年) 七月二十九日付長束正家・増田長盛・前田玄以連署状「真田昌幸宛」「真田宝物館収蔵品目録長野県宝 真田家文書」一(松代藩文化施設管理事務所、二〇〇四年)〈以下『真田家文書』と表記〉四五号。
- (18) (慶長五年) 七月三十日付大谷吉継書状「真田昌幸・信繁宛」(『真田家文書』五三号)。
- (19) (文禄三年) 十月十七日付上杉景勝書状写「増田長盛宛」(『大日本古文書 家わけ第十二 上杉家文書之二』東京大学出版会、一九七一年) 八六一号。
- (20) 慶長四年正月二十三日付毛利輝元国割書「毛利秀元宛」「長府毛利家文書」(『特別展 五大老』大阪城天守閣、二〇〇三年)〈以下『五大老』と表記〉一〇七号。
- (21) 慶長四年正月二十三日付増田長盛・石田三成連署状「毛利輝元・秀元宛」「長府毛利家文書」(『五大老』一〇六号)。
- (22) 矢部健太郎「太閤秀吉の政権構想と大名の序列」(同『豊臣政権の支配秩序と朝廷』吉川弘文館、二〇一一年)〈初出二〇〇三年〉。
- (23) (慶長三年) 八月十九日付内藤周竹書状写「内藤又二郎宛」(『萩藩閥閥録』遺漏、マツノ書店、復刻版一九九五年、二九八頁)。
- (24) 加藤清正が九月二十九日付で鍋島直茂に宛てた書状(写)は「関東表之合戦輝元方敗軍二付而」と西軍を

「輝元方」としている（『直茂公譜孝補』十『佐賀県近世史料』第一編第一巻、佐賀県立図書館、一九九三年、七九〇頁）。

- (25) (慶長三年) 八月五日付豊臣秀吉自筆書状写「五大老宛」（『大日本古文書 家わけ第八 毛利家文書之三』東京大学出版会、一九七〇年）（以下『毛利家文書』と表記）九六〇号。

- (26) (慶長三年) 八月五日付豊臣秀吉遺言覚書案「早稲田大学図書館所蔵」（『五大老』一〇三号）。

- (27) 文禄四年七月付徳川家康・毛利輝元・小早川隆景連署起請文前書案（『毛利家文書』九五八号）の四条目は「坂東法度置目公事篇、順路憲法之上をもつて、家康可申付候、坂西之儀者、輝元并隆景申付候事」となっており、文禄四年の段階で坂東・坂西という地方区分と、それぞれを家康と、輝元・隆景に監督させるという構想はあった。

- (28) 前掲註（25）。

- (29) 前掲註（8）。

- (30) 前掲註（26）。

- (31) 清水亮「秀吉の遺言と「五大老」・「五奉行」」（山本博文・曾根勇二・堀新編『消された秀吉の真実』柏書房、二〇一一年）三〇九、三一三頁。

- (32) 阿部勝則「豊臣五大老・五奉行についての一考察」（『史苑』四十九巻二号、一九八六年）。

- (33) 堀越祐一「豊臣「五大老」・「五奉行」についての再検討——その呼称に関して」（同『豊臣政権の権力構造』吉川弘文館、二〇一六年）（初出二〇〇三年）。

- (34) 慶長四年六月一日付五大老連署状写「宗義智宛」「榊原家所蔵文書坤」（中村孝也『新訂徳川家康文書の研究』中巻、日本学術振興会、一九八〇年）（以下『家康文書』と表記）四一五頁。

- (35) 慶長三年八月二十八日付毛利輝元起請文前書案「四奉行宛」（『毛利家文書』九六二号）。

(36) (慶長五年) 七月二十九日付毛利輝元書状「真田昌幸宛」(『真田家文書』四九号)。

(37) (慶長五年) 七月二十七日付毛利輝元書状「青木重吉宛」「大阪城天守閣蔵」(『特別展豊臣と徳川』大阪城天守閣、二〇一五年、四二号)。

(38) 拙稿「関ヶ原の役と真田昌幸」(『研究論集 歴史と文化』第三号、二〇一八年)。

(39) (慶長三年) 十二月十九日付西笑承兌書状案「山口宗長宛」「西笑和尚文案」(『西笑』一一三号) には「浅弾・治少ハ大半当節廻可為上洛候、兩人より朝鮮衆へ被申越之趣案文御奉行衆・長男衆上り候」とある。

(40) 前掲註(23)。(慶長五年) 六月十日付上杉景勝書状「安田能元・甘糟景継・岩井信能・大石元綱・本庄繁長宛」(『越後文書宝翰集 毛利安田氏文書』新潟県立歴史博物館、二〇〇九年、四一五号) には、会津出征前夜、家康からの上洛要請に対して景勝が「第一家中無力、第二領分仕置之ため、秋中迄延引之趣、奉行衆へ令返答候処」と、増田長盛ら奉行衆に返答したとしている。(慶長五年) 八月三日付伊達政宗書状「井伊直政・村越直吉宛」(大日本古文書『伊達家文書』之二、七七二号) では、前田玄以・増田長盛・長束正家を「三奉行」と呼称。政宗は、三奉行に「御詞」を加えて味方に留めることが肝要であると述べ、家康が正当性を保つ上で三奉行を味方に留めておくことが不可欠と考えていた。また、清正は西軍によつて改易された長岡氏について註(53)で「越中殿御身上之儀、秀頼様方曲事ニ被思召候由にて」と述べているように、西軍を公儀として認めていた数少ない大名の一人であった。清正が奉行衆を「奉行」と呼称した事例については後述する。

(41) 『義演准后日記』第二(続群書類従完成会、一九八四年)へ以下『義演二』と表記一四六頁。「三奉行衆」が増田長盛・長束正家・前田玄以の三奉行を指すことは、『北野社家日記』慶長五年三月十六日条に「増田右衛門尉殿・徳善院・長束殿大坂方今日上洛と承」とあることから分かる(『北野社家日記』第五、続群書類従完成会、一九七二年へ以下『北野』と表記二二六頁)。

(42) 『北野』二七七頁。

(43) 『日本報告集』一〇七頁。

(44) 『義演准后日記』第一(続群書類従完成会、一九七六年)〈以下『義演一』と表記〉二一六、二二四頁。

(45) (慶長四年) 閏三月七日付鍋島直茂書状「鶴田善右衛門・久池井弥五左宛」(「鶴田家文書」『佐賀県史料集成』古文書編七巻、佐賀県立図書館、一九六三年、六八号)。

(46) (慶長四年) 閏三月九日付鍋島清茂(勝茂)書状「鍋島信房・石井生札・鍋島生三宛」(「坊所鍋島家文書」『佐賀県史料集成』古文書編十一巻、佐賀県立図書館、一九七〇年、一四一号)。

(47) ただし、九州武将の多くが奉行衆を「奉行」と呼称していることや、奉行衆を指す「奉行」が、大老衆を指す「年寄」よりも前に記されている事例が後掲する「史料8」から確認できるため、「史料5」「史料6」についても「年寄」が大老衆を指す可能性もある点を付言しておきたい。

(48) (慶長三年) 七月二十二日付徳川家康書状「前田利家宛」「村上氏旧蔵文書」(徳川義宣『新修 徳川家康文書の研究』第二輯、徳川黎明会、二〇〇六年) 図版二。翻刻は同書二六七頁および前掲註(2)を参考とした。

(49) 清正は(慶長三年)十一月十六日付加藤清正書状「島津義弘・島津忠恒・立花親成宛」(『島津二』九七四号)においても「日本御年寄衆・御奉行衆方、いつれの道にも引拂候へと被仰越候」と、大老衆を「年寄」と呼称している。

(50) (慶長五年) 八月二十日付加藤清正書状「松井康之・有吉立行宛」(『松井文庫所蔵古文書調査報告書』三、八代市立博物館未来の森ミュージアム、一九九八年)〈以下『松井三』と表記〉四四六号。

(51) (慶長五年) 八月四日付四奉行連署状写「松井康之宛」(『松井三』四四三号)。

(52) (慶長五年) 八月四日付宇喜多秀家・毛利輝元連署状写「松井康之宛」(『松井三』四四四号)。

(53) (慶長五年) 七月二十七日付加藤清正書状「松井康之・有吉立行宛」(『松井文庫所蔵古文書調査報告書』二、

八代市立博物館未来の森ミュージアム、一九九七年）（以下『松井二』と表記）四二四号。

(54) (慶長五年) 七月十七日付三奉行連署状写「別所吉治宛」(『松井二』四二三号)。

(55) (慶長五年) 七月晦日付松井康之・有吉立行連署状案「斎藤立本宛」(『松井二』四二五号)。

(56) (慶長三年) 十一月六日付島津龍伯書状「島津義弘・島津忠恒宛」(『島津二』一一四一号)。

(57) (慶長八年) 二月十九日付島津龍伯書状「島津忠恒宛」(『島津二』一一四六号)。

(58) 木戸雅俊「天下人の天主・天守——信長・秀吉から家康へ」(『十六世紀史論叢』一五号、二〇二一年)。

(59) フロイス著、松田毅一・川崎桃太訳『完訳フロイス日本史4豊臣秀吉篇』——秀吉の天下統一と高山右近の追放』中央公論社、二〇〇〇年) 一〇二、一〇五頁。「」内は原著者の補足語、() 内は訳者の補足語を指す。

(60) 『増補続史料大成』第四十二卷(臨川書店、一九七八年) 八三頁。

(61) 慶長四年五月十一日付五大老連署契約状写「四奉行宛」(『毛利家文書』一一一六号)。

(62) 慶長五年二月朔日付徳川家康書状写「森忠政宛」「森家先代実録」(『岡山県史』第二十五卷 津山藩文書、一九八一年、二七頁)。

(63) (慶長五年) 二月二十七日付三奉行連署状(影写本)「田丸忠昌宛」「田丸文書」(『岐阜県史』史料編 古代中世四、一九七三年、田丸文書二号)。

(64) 豊後国速見郡・由布院知行方目録(『松井文庫所蔵古文書調査報告書』一、八代市立博物館未来の森ミュージアム、一九九六年) 一一—二三号。

(65) 前掲註(6)。

(66) 前掲註(34)。

(67) 前掲註(4)。

- (68) (慶長五年) 五月五日付長束正家書状「堅田元慶宛」(『毛利家文書』一一三八号)。
- (69) (慶長三年) 七月朔日付伊達政宗書状写「石田三成宛」「諸家書状文書写」二(『仙台市史』資料編十一 伊達政宗文書二、二〇〇三年) 一〇三九号。
- (70) (慶長三年) 六月二十七日付西笑承兌書状案「上杉景勝宛」「西笑和尚文案」(『西笑』七七号)。
- (71) (慶長四年) 九月十三日付毛利輝元書状「毛利秀元宛」「長府毛利家文書」(『五大老』一二一号)。
- (72) 『日本報告集』一〇七頁。
- (73) 「慶長年中卜斎記」下之卷(『改定史籍集覽』第廿六冊、臨川書店、復刻版一九八四年) 八〇頁。
- (74) 慶長三年七月二日付島津龍伯起請文案「前田利家・徳川家康宛」(『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之三』東京大学出版会、一九五二年) 一四五九号。
- (75) 慶長三年七月十五日付諸大名請文前書写『慶長三年誓紙前書』(東京大学史料編纂所所蔵) (以下『誓紙前書』と表記)。
- (76) 慶長三年七月十五日付奉公衆請文前書写(『誓紙前書』)。
- (77) 前掲註(5)。
- (78) 慶長三年七月十五日付毛利輝元起請文前書案「徳川家康・前田利家宛」(『毛利家文書』九六二号)。
- (79) 文禄四年八月三日付徳川家康・宇喜多秀家・上杉景勝・前田利家・毛利輝元・小早川隆景連署定書「個人蔵」(『五大老』九六号)。

(80) 前掲註(27) 五条目では、家康と輝元は常時在京して秀頼に奉公し、もし帰国が必要な場合は交代で帰国し、必ずどちらかは在京することが誓約されている。この点は、家康の在京、利家の在坂という形で「遺言体制」に踏襲されている。また、坂東・坂西とした地方区分は、東国・北国・西国に形を変えながら踏襲されている。しかし、秀次事件直後の段階は、跡部信氏が前掲註(2)で指摘するように、国政にあずかる大老機構

の成立を意味するものではなく、五大老の萌芽とするのも過大評価と思われる。だが、秀次事件直後の誓約が五大老の下地となったことは確かであろう。

- (81) (慶長三年) 五月二十二日付豊臣秀吉朱印状写「寺沢正成宛」「鍋島文書」(名古屋博物館編『豊臣秀吉文書集』七、吉川弘文館、二〇二一年、五八一三号) には「猶徳善院・増田右衛門尉・石田治部少輔・長束大藏太輔可申候也」とあることから、慶長三年五月二十二日時点で五奉行が未成立であつたことがわかる。

- (82) 『義演一』二五八頁。

- (83) (慶長三年) 七月八日付前田玄以・浅野長政・増田長盛連署状「島津義弘宛」(『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之四』東京大学出版会、二〇一一年) (以下『島津四』と表記) 一八一〇号。

- (84) (慶長三年) 七月十五日付前田玄以・浅野長政・増田長盛連署状「島津義弘宛」(『島津四』一八一一号)。

- (85) (慶長三年) 七月十七日付前田玄以・浅野長政・石田三成・増田長盛連署副状「島津義弘宛」(『島津二』九七九号)。

- (86) (慶長三年) 八月十四日付内藤周竹書状写「内藤又二郎宛」(『萩藩閥閥録』第三卷、マツノ書店、復刻版一九九五年、一六六頁)。

- (87) 前述のように、五奉行は七月十五日には成立している。あくまで二次史料の記述である点を留意する必要があるが、「史料13」では、五大老と五奉行の成立を同時期とし、「史料2」では、五大老が五奉行に先立つて定まったような記述となっている。

- (88) 慶長三年八月五日付前田利家・徳川家康起請文前書写「五奉行宛」(『誓紙前書』)。「但、前書誓紙同前一通宛」とあるように本来は連名ではなく別々に誓紙を作成している。

- (89) 慶長三年八月五日付五奉行連署起請文前書写「徳川家康・前田利家宛」(『誓紙前書』)。

- (90) 『義演一』二七七頁。

(91) 『日本報告集』一〇八、一〇九頁。

(92) (慶長三年) 中秋初七(八月七日) 付安国寺恵瓊書状(影写本)『黄梅院文書』(東京大学史料編纂所蔵)。

(93) 慶長三年八月八日付徳川家康請文前書写「五奉行宛」(『誓紙前書』)。

(94) 慶長三年八月八日付前田利家請文前書写「五奉行宛」(『誓紙前書』)。

(95) 慶長三年八月八日付前田利長・宇喜多秀家・徳川秀忠請文前書写「五奉行宛」(『誓紙前書』)。「但し三人なから別紙也」とあるように本来は連名ではなく一人ずつ誓紙を作成している。

(96) 『義演一』三二二頁。

(97) 前掲註(79) 五条目に「乗物御赦免衆、家康・利家・景勝・輝元・隆景并古公家・長老・出世衆、此外雖為大名若年衆者可為騎馬」とあるように、六名の中で秀家だけが「若年衆」として乗物の使用を許可されていない。大老衆の中で秀家は「若年衆」として扱われていたことがわかる。

(98) 慶長三年八月八日付前田利家請文前書写「五奉行宛」(『誓紙前書』)。ただし、十条目の「昨日、内府・利家并長衆お以、被仰聞通、弥以少も不存忘 秀頼様へ御奉公可仕事」はみられない。この利家の誓紙にも五条目に勝手な下国の禁止がある。家康と同様に利家も上方常駐が義務づけられていたと思われるが、そうではなかったということなのであろうか。詳しいことは分からない。

(99) 前掲註(5)。

(100) 前掲註(23)。

(101) 秋山伸隆「戦国大名毛利氏の石見銀山支配」(岸田裕之編『中国地域と対外関係』山川出版社、二〇〇三年)によると、豊臣政権下の毛利氏領国の銀山は、「先銀山」あるいは「本銀山」とよばれる石見銀山と、「新銀山」あるいは「今銀山」「分国中出来之銀子山」などとよばれる、石見銀山以外の銀山、に区別されていたという。

- (102) 前掲註 (86)。
- (103) 前掲註 (92)。
- (104) 慶長三年八月十日付四大老連署契状案「宛所欠」(『毛利家文書』九六一号)。「誓紙前書」にも同内容のものが収められているが、こちらは発給者の最後(左端)に景勝の名が加えられ、五奉行が宛所とされている。宛所は五奉行と考えていいだろう。
- (105) 『日本報告集』一一一頁。
- (106) もつとも『九八年度年報』は、秀吉の命日を八月十六日(西暦九月十六日)としており誤差が生じている。
- (107) 前掲註 (35)。
- (108) (慶長三年) 九月二日付内藤周竹書状写「内藤又二郎宛」(『萩藩閥閥録』第三卷、マツノ書店、復刻版一九九五年、一六七頁)。
- (109) 前掲註 (108)。
- (110) (慶長三年) 八月十七日付五奉行連署状「真田信幸宛」「真田家文書」(『戦国遺文真田氏編』第二卷、東京堂出版、二〇一九年、三七三号)。(慶長三年) 八月十七日付五奉行連署状「分部光嘉宛」「大阪城天守閣蔵」(『テーマ展 乱世からの手紙——大阪城天守閣収蔵古文書選』大阪城天守閣、二〇一四年、五六号)。
- (111) 『日本報告集』一一〇頁。
- (112) 慶長三年九月三日付五大老五奉行連署起請文前書写(『毛利家文書』九六三号)。
- (113) 前掲註 (95) (98)。
- (114) 徳川家康違背事書写(『松井二』四一九号)。
- (115) 慶長四年二月五日付五大老連署知行宛行状案「小早川秀秋宛」(『毛利家文書』一一一八号) など。

第二章 家康の私婚問題と石田三成の失脚

―石田三成襲撃事件の検討を中心に―

はじめに

本章では、慶長三年（一五九八）八月に豊臣秀吉が歿してから慶長四年閏三月に石田三成が失脚するまでの期間をとりあげる。秀吉の死の直後から毛利輝元と三成ら奉行衆は盟約を結んでおり、輝元と宇喜多秀家の交流も確認できるように、のちに西軍に属することになる諸将の結束は早期から確認でき、家康も同様に派閥の構成に向けて動いた重要な時期にあたる。

家康と三成の両陣営の対立が形となって表れたのが、家康の私婚問題と、加藤清正ら七将が石田三成の暗殺をはかり襲撃したとされる事件（通称 石田三成襲撃事件）である。

序章でふれたように、一般的に石田三成襲撃事件と称される事件は、笠谷和比古氏と光成準治氏の先行研究の成果によって新しい事件像が浮かび上がってきている。笠谷氏は、『慶長年中卜斎記』や『関原軍記大成』の記述を基に石田三成が逃げ込んだ場所が伏見の家康邸ではなく、伏見城内の三成邸である点を明らかにした。光成準治氏は、『厚狭毛利家文書』を用いることで事件像を鮮明なものとするとともに、事件の対立構造が毛利・四奉行と徳川・七将に発展した点を指摘している。

しかし、未だ解明の余地も残されている。前田利家の死の直後、間髪を容れずに事件が起きている点は、先行研究では言及されていない。通説でいわれているように、利家が三成や加藤清正らの衝突を緩衝しており、利家が不在となったことで事件へと発展したとした場合、利家の死の同日に間髪を容れずに事件が起きている点が十分

に説明出来ていない。利家の死の同日に事件が起きた点は、利家の死が引き金となった可能性が大きいことを示しており、その究明は事件の詳細を明らかにする糸口であると筆者は考える。

また、先行研究では事件を三成と清正らの衝突としかみておらず、事件の意義については言及してこなかった点も課題である。ゆえに本章では、前田利家の死が契機となった理由を明らかにし、事件の経緯と意義を解明していく。

第一節 権力闘争のはじまり

第一章で述べたように、徳川家康と石田三成ら四奉行の不和によって「遺言体制」は開始早々からうまく機能しなかった。秀吉の死から十日後の慶長三年（一五九八）八月二十八日、石田三成・増田長盛・長束正家・前田玄以の四奉行に対して毛利輝元は次の内容を誓約している。

「史料1」⁽¹⁾

敬白 起請文前書之事

大閣様御他界以後、秀頼様へ吾等事無二可致御奉公覚悟候、自然世上為何動乱之儀候而、もし今度被成御定候五人之奉行之内、何も秀頼様へ逆心ニあらす候共、心／＼ニ候て、増右、石治、徳善、長大と心ちかい申やからあらハ、於吾等者、右四人衆と申談、秀頼様へ御奉公之事、（後略）

末尾に「右けしたる分、はじめの案、かた付は治少より也、使安国寺」とあるように、傍線部分は三成の加筆によつて訂正されたもので、五大老の中に四奉行と対立する者が出た場合、その者が秀頼に対する逆心を抱いていなかったとしても、四奉行に味方することが秀頼への奉公であるとしている点は重要であり、三成らは、五奉行が豊臣政権を主導していくべきという考えを強く持っていた。そして、「心ちかい申やから」とは、徳川家康の

ことであつた。次に挙げるのは、同年九月二日に毛利家臣の内藤周竹（隆春）が内藤元家へ宛てた書状である。

「史料2」(2)

（追而書略）

一 大閣様御事、去廿三日被成御遠行之由候、然者五人之奉行と家康半不和之由にて、当家御操半之由候、安国寺御使之由被仰下候、御手前之御氣遣少茂無之由候、御存命中被仰堅候事、も者や相違之分二候、菜塚大蔵・増田右衛門・浅弾正忠・石田治部少輔・徳善院右之奉行衆にて候

一 当家人数二万余被召置候、鉄砲七百丁、其外御家中相加候ハ、五千丁も可有之由候間、不及氣遣候由佐石（佐世元嘉）被申候

一 筑前をハ当家江預ケ可申之由候、近日人を被差渡けに候、是ハいまた密々にて候、不可有他言候

一 右之分二候間、已前申下候国分などの事、みな徒事ニ可罷成候、先々目出度候、某ニも被成御書候而、広島しかと可罷居之由被仰下候、今日宍 善兵（宍戸元富）被差上せ候

一 宮菊（内藤元忠）手前之事二候、梅隣（林就長）懇被申上候、少も不可有相違候由内儀候、然者木二（木原元定）下向之由只今到来候、定可被仰下候、重而可申下候、此由各江茂可被仰聞候、第一山田（元宗）可為氣嫌候

一 宇喜多事、日々殿様へ参之由候、家中者共之悦候事非大方之由風聞候、於于今ハ無余儀候

一 隠又下向之時具申下候、学又事不可有油断候、東堂様細々申入、細々申入、何之書物なり共可被得御意候
／＼、定而上表之儀追々可有御左右之条、重々可申下候、恐々謹言

九ノ二

周竹

又二郎殿まいる 申給へ

一条目より、奉行衆と家康の不和が表面化し、毛利氏は関係改善を模索していたようであるが、一方で二条目

からは万が一に備えて毛利氏も軍備を整えていた様子がわかる。ここから、八月二十八日の盟約は家康を仮想敵としたものといえ、軍備も奉行衆の側に立つことを想定してのことと考えられる。内藤隆春は、家康と対立したのは五人の奉行としているが、おそらく浅野長政を含めない四奉行と思われる。

三条目からは、筑前国が毛利氏に与えられる旨が伝えられたが、内密とあるため、毛利氏の奏者を担当していた三成や増田長盛から伝えられたと思われる。毛利・四奉行の連合を強固なものとするための、四奉行による配慮が見てとれる。

六条目では、宇喜多秀家が盛んに輝元の許を訪れていたことがわかり、毛利氏の家中も非常に歓迎していたようである。その背景として、第一章で触れたように、秀吉が輝元の嫡男松寿丸と秀家の娘との縁組を命じていたことや、輝元に秀家の後見を命じるなどして、毛利氏と宇喜多氏が強固に繋がるのを望んでいたことがあった。宇喜多氏は、先代の直家の時に毛利氏を離反した経緯があったが、内藤周竹が「於于今ハ無余儀候」と述べるように、両氏共に秀吉の意を汲んで親密な関係を構築し始めたといえる。このように秀吉が死去して間もない内に、毛利氏と四奉行、毛利氏と宇喜多氏、のちに関ヶ原の役で西軍の中核となる面々の間で結びつきが生じている。

一方の家康も、多数派工作を行っている。家康の多数派工作が史料で確認できるようになるのは、同年（慶長三年）十一月からである。『言経卿記』によると、伏見に居た家康が屋敷を訪れた大名は、十一月二十三日に織田信包⁽³⁾、同月二十五日に増田長盛⁽⁴⁾、同月二十六日に長宗我部元親⁽⁵⁾、十二月三日に新庄晟珊（直頼）⁽⁶⁾、同月五日に島津龍伯（義久）⁽⁷⁾、同月九日に長岡幽斎（藤孝）⁽⁸⁾、同月十七日の有馬則頼⁽⁹⁾である。

増田長盛は、前述のように家康と対立軸にある人物だが、山科言経も家康の増田邸訪問に同行しており、増田邸で歓待があったことが記されている。四奉行の中でも長盛は、反徳川という意識が三成ほど高くはなかったと思われる。

増田邸訪問の事例はあるものの、基本的に徳川家康は、三成や輝元とは異なり、五大老・五奉行の構成員と組

む動きはせず、長宗我部氏・島津氏・長岡氏など政権中枢に携わらない大名への影響力を求めて勢力の強化を図っている。

また、家康を次の天下人と見据えて関係を強固にしようとする豊臣系大名も現れる。朝鮮半島から帰国した黒田長政は、同年十二月二十五日に徳川家臣の井伊直政と誓紙を交わし、徳川方の立場を表明。井伊直政は、家康との間を取り次ぐことを約した⁽¹⁰⁾。家康の勢力は、家康自ら近寄って関係を構築した者だけではなく、黒田長政のように相手のほうから寄ってくるケースもあり、双方向から膨れ上がっていった。

一方、家康との交流を持った島津龍伯は、慶長四年（一五九九）正月三日に島津義弘（惟新）・忠恒（家久）父子に対して「内府様へ参候事、又私宅へ入御之事、曾別心有之儀不申入、又不承候」という誓紙を出している⁽¹¹⁾。島津氏の指南を行っている三成が朝鮮半島からの撤兵を差配するために伏見を不在にし、そして、義弘・忠恒も未だ帰国していない最中に、龍伯が家康に接近したことが問題となったのだろう。次の史料は誓紙と同時に出了れた覚書である。

「史料 3」（12）

覚

一内府様へ参候事、十一月拾日、使ハ流干と申仁にて承候、度々斟酌申候へ共、しいて被仰候間、柏原殿へたつね申参候、別条之儀、曾不申入、又不承候事

一大納言殿へ参候事、十月廿八日、是ハ治少様はかたへ御下向前二、幸侃を以御意ヲ参候事

一家康私宅へ入候事、最前流干を以、度々承候、雖斟酌申候、其後十二月朔日二、御家門様・道阿ミ御両所にて、又々被仰候間、不及力、十二月六日二入御候事

付徳善院・増田殿・長束殿へ、御案内申候、ました殿・長束殿よりハ、前之日二御音信二預候事

一たねかしましてつほう御所望之事、又こゝもとにて鉄放【（砲）】御あつらへ候事、此儀二付、度々御使給候

事

一^⑤血判を以誓紙上置候条、于今少モ別心無之候、此上者是非ニ御糺明、大望ニ存候事

正月三日

龍伯（花押）

又八郎殿

兵庫頭殿

龍伯は、家康の訪問前に増田長盛ら奉行衆の了承を得たとしており、龍伯・義弘・忠恒共に、島津氏は三成方（毛利・四奉行連合）に属しているという共通の意識を持っていたことがわかる。また、家康からの申し入れに對して「斟酌申候」、「不及力、十二月六日（五日）ニ入御候事」とあることから、家康と交流するのは決して好ましくないという認識もあつたことがわかる。

しかし、家康の島津氏に対する接触はなおも続いた。次に挙げる史料は、朝鮮半島出兵諸將と政權との間を取り次いでいた寺沢正成（広高）から、島津忠恒・立花親成（宗茂）・小早川秀包・高橋直次・筑紫茂成（広門）に宛てられた書状である。

「史料4」（13）

羽左近殿より何へも御届可有候

明後日七日之朝、内府様御茶可被進由候間、其御心得尤候、左候者、明晩御門まで御礼ニ御出候て可然候、兵庫頭殿ハ御煩を御存ニ而候間、又八郎殿迄御出可有之候、恐々謹言

寺志摩

正月五日

貞成判

嶋津又八郎殿

羽柴左近殿

羽柴藤四郎殿

高橋主膳殿

筑紫善吉殿

人々御中

家康が催す茶会への参加を促し、「明晩御門まで御礼ニ御出候て可然候」という心構えも説いている。小西行長と寺沢正成は、三成が「此兩人、拙子別而無等閑候」⁽¹⁴⁾と述べるほど、三成との間に親密な関係が築かれていたが、寺沢正成は関ヶ原の役で東軍に属することになる。一見すると、この時、正成は既に家康寄りの立場となっていたように感じられるが、同年閏三月に三成が奉行職を追われる一連の騒動において、三成方として登場しているため、この時はまだ三成寄りであつたと考えられる。家康が大老衆という立場から、朝鮮半島における諸将の働きを労う意向を示したため、正成は取り次いだのであろう。

島津義弘は、三成寄りの立場から、病を理由に欠席を届け出ていたと思われ、代わりに忠恒が招かれるに至っている。

第二節 家康の私婚問題

家康の多数派工作は激しさを増し、慶長四年正月中旬に、家康の私婚問題が浮上する。この時、問題とされた縁組の相手は、『関原軍記大成』では伊達政宗・福島正則・蜂須賀一茂（家政）である⁽¹⁵⁾が、編纂史料の中でも成立の早い『家忠日記追加』は伊達政宗のみを記し⁽¹⁶⁾、伊達成実の『伊達日記』も伊達政宗のみとなっている⁽¹⁷⁾。これらの史料には記されていないが、同時期（慶長四年四月）に加藤清正も家康の従妹（水野忠重の女）を娶っている⁽¹⁸⁾。おそらく、福島正則と蜂須賀家政の縁談が持ち上がったのは三成が失脚したあとのことでは

ないだろうか。

諸大名が勝手に縁組することは秀吉の命令によって禁止されていたが、第一章で述べたように、秀吉は死の直前に五大老が相互に縁組をして結束を強化するよう命じていた。輝元と秀家の縁組はその端緒といえる。本来であれば大老衆と縁組を進めなくてはならないところを、家康は地方の大名である政宗にそれを求めた。これは、秀吉の遺命に背くだけでなく、大老衆ではない地方の大名と手を携えるという独自の政治路線を宣言することの意味していた。

伊達政宗は三成が奏者を務める大名であり、信頼関係にある政宗が家康と縁組したことは、三成にとって衝撃的だったはずである。私婚問題が収束した直後の二月九日、三成が催した茶会に政宗が招かれている⁽¹⁹⁾が、これには政宗との信頼を確認する意味があったと思われる。

この私婚問題に関する記述として、『言経卿記』慶長四年正月二十四日条には、正月十九日に四大老・五奉行から家康のもとへ糾明使が派遣されたとある⁽²⁰⁾。これまで家康と対立軸にあった毛利・四奉行に、前田利家と、宇喜多秀家・浅野長政といった前田氏と繋がり深い者たち、そして上杉景勝も加わり、家康以外の全ての大老衆・奉行衆が家康と対峙するかたちとなった。

四大老・五奉行による詰問使の派遣は、『家忠日記追加』では同月二十一日となっている。また、十九日に関する記載は史料により様々で、『家忠日記追加』は、家康が有馬則頼邸で饗応を受け、その後、藤堂高虎と密談を行ったとしている⁽²¹⁾が、『慶長年中卜斎記』では、正月十九日に三成が徳川邸を襲撃するという風聞があり、徳川邸では備えを固めていたとしている⁽²²⁾。

また、『当代記』も同様に、正月に三成が徳川邸を襲撃するという風聞があったとしている。

「史料5」⁽²³⁾

慶長四年己亥正月自中旬、於伏見各物言、是亡家康公を度との企、専石田治部少輔執行、折節内府公衆歴々

自関東上着伏見、又大谷刑部少、内府公江荷担之間、彼組之衆多以同之、然而二月無為、内府家康公与羽柴筑前主^{北国}和平

江戸時代の史料には、三成を襲撃計画の首謀者とする記述が散見するが、大身の大名である四大老が味方にいる状態で、三成が単身決起に近い形で襲撃を企てるとは考え難い。次に挙げるのは、前田家臣の村井長明の覚書『亜相公御夜話』の記述である。

「史料6」(24)

(前略)二月初め頃、内府御法度どもをくづし被成候事を、御奉行衆・国大名衆十一ヶ条利家へ被得御意書立、伏見安芸毛利殿へ諸大名寄合被申候、伏見にて大納言様よりは、徳山五兵衛・村井豊後・奥村伊予三人を御名代に被遣、彼ヶ条家康へ有馬法印・浅野弾正殿を以被仰遣候、内府御返事の様子次第、大坂へ注進とひとしく、利家様淀橋まで秀頼御名代に御出馬のほずに極り申候、其時家康彼条々御覧候て、あやまり申候由にて、いか様とも十一ヶ条に点をかけなされ候、但江戸へ早々隠居仕候儀、此八月迄は御さしのべ候て被下候へ、今罷下候へば、太閤様御遠行候而ほども無御座候処に、我等御法度をやぶり申候得ば、上様御仕置もちがひたるに成申候間、八月秀頼様へ御暇申上、鷹野と申ならし罷下、中納言を詰させ、私隠居可仕候よし、内々御理に候、さらば先それに済申候へと被仰出、其方に成申候、是にはいろ／＼物語有之事

『亜相公御夜話』によると、奉行衆らが前田利家の了承のもと、十一ヶ条の弾劾状を作成して糾明使を派遣し、家康の返答次第では、利家が豊臣秀頼の名代として家康を征討することになっていた。これに対して家康は謝罪したが、江戸へ隠居する件は八月までの猶予を求めた。二次史料の記述である点は留意すべきだが、家康の隠居が争点となっている点は興味深い。なお、秀忠を代行者として残すとしたのは「遺言B」に基づいたものだろう。三成が単身決起に近いかたちで襲撃を企てた(私戦)とする通説よりも、四大老・五奉行が、豊臣秀頼の名のもとに家康征討を計画した(公戦)とする『亜相公御夜話』の記述のほうが真相に近いと思われる。江戸時代に

成立した諸史料が三成による徳川邸襲撃の風聞を記すのは、神君（家康）が豊臣公儀の中枢から半ば排斥された状態に陥り、征討の危機にも直面した不名誉な事件を矮小化させる意図があったのだろう。大老・奉行衆による家康征討の動きは、秀頼の名のもとに征討する「公戦」という性格を持っていたが、三成による襲撃計画とすることで公儀性を取り除かれ、いわゆる「私戦」へと塗り替えられたのである。しかし家康にとって決して好ましいとはいえないこの事件は、図らずも家康に政権奪取の道を示す結果となった。こののち、家康はこの事件に倣うかのように、大老衆の構成員を征討の対象にして排斥を進めていくのである。

四大老・五奉行による家康征討軍は組織されるに至らなかったが、家康に味方する諸大名は自邸を兵で固めると共に、征討軍に備えるために徳川邸へ参集した。この時、徳川邸に参じた諸大名は『家忠日記追加』によると、池田照政（輝政）および一門衆、福島正則、黒田如水・長政、藤堂高虎、森忠政、有馬則頼、金森素玄（長近）、織田有楽斎（長益）、新庄晟珊らであり、大谷吉継も家康に味方したとしている。

『黒田長政記』では「内府様御屋敷へ、長政様侍とも、弍拾人ほど被召連」と、長政が手勢を率いて徳川邸へ馳せ参じた様子が詳細に記され、「其外鍋嶋殿、加藤肥後などを、如水様長政様御才覚を以、内府様方へ御引籠被成候」と、地方大名を徳川党に味方させたのは黒田父子の功績としている^{（25）}。実際にそれを裏付ける史料として二月十四日付で徳川秀忠が長政に「別而貴殿被入御念、御肝煎之旨及承、祝着之至候」と述べている^{（26）}。

また、『黒田家文書』には正月二十三日付けで井伊直政が黒田長政に宛てた書状が残されている^{（27）}。その背景は『関原軍記大成』によると、二十二日の朝、長政は軍備を調べ、直政に、徳川邸に不慮のことがあれば一番に馳せ参じる旨を申し入れたとし、それに対する返書という^{（28）}。直政は、長政の申し入れに謝意を表し、家康に披露したことを伝えている。

長政が直政を通じて申し入れたのは、前月の盟約によって直政が長政の取次となったためだろう。六月三十日付で井伊直政が黒田長政に宛てた書状には、黒田長政、福島正則、藤堂高虎について、家康が「御両三人之儀者、

別而余人ニ相替」(29)と話したとあり、豊臣系大名の中でも三人は家康の信頼が厚かった。

なお、大谷吉継については、「史料5」にあるように『当代記』も、吉継が家康に味方したことにより三成派の武将たちの多くが家康に味方したとしている。しかし、後述するように、慶長四年閏三月の事件(通称、石田三成襲撃事件)において吉継は三成寄りの人物として登場し、さらに三成の盟友である毛利輝元が吉継に信頼を置いていることから、吉継が家康に味方したとする点は俄に信じ難い。

その後、伏見の勤番交替のために西上の途にあつた榊原康政が正月二十九日に上洛するなど、軍事的な緊張が続いた(30)。また、鍋島清茂(勝茂)は正月二十七日付けで国許にいる鍋島茂里らへ宛てて、鉄砲二百挺、弓五十張および選び抜かれた射手を新たに上方へ送るよう命じている(31)。このほかにも、清茂は国許へ送った鉄砲を再び上方へ戻すよう指示。また、三百石あたり鉄砲一挺だった軍役を二百石あたり一挺に改めており、諸将も緊急で軍備を調べていた様子が窺える。

日本に拘留されていた朝鮮人儒者の姜沆の記録『看羊録』は、この時の緊張を「何か変事が起こりそうで、「人々は」しよっちゅうびくびくし、店舗も半分は店を閉じた」と表現している(32)。また、『九九年度年報』には次のように記されている。

「史料7」(33)

(石田)治部少輔(三成)は(徳川)家康に対して公然と反対を唱え始め、次のように非難を浴びせた。国家の統治にあたってひどく権力を我がものにしており、また天下の支配権を獲得する魂胆の明白な兆候を示している。そこで(石田)治部少輔は武器を取り他の統治者たちの意見に従って、使者たちを(徳川)家康のもとへ遣わし、予のことで何が気に入らぬのかと公然と詰問させた。(徳川)家康はすべての点について穏やかに弁明し、己が行為についてなした非常に立派な諸理由を述べた。しかし彼は無防備のまま対面することはせず、己が諸国から三万の軍勢を召集し、これによって敵方の力に対してなした最大の兵力をも

って固めた。その当時、日本国の全諸侯は国主の宮殿に留まっていたが「太閤様が臨終の時に、最終的なものではなかったが、統治者たちに訓戒を与えた他の条項の中で、国王の宮殿の華麗さを保持するために、或る人々は都の近くの築城である伏見に居住し、或る人々は大坂に居住するようにした」、彼らの中でどちらか一方の派に味方しない者はいなかった。しかし自分はすべての抗争には無関係であると絶えず主張して、どちらかの派に対しても公然と好意を示していた者たちがいないわけではなかった。己が国主たちに召集されて、種々の領国から伏見と大坂へ集まった将兵たちはおびたしく、その数は二十万以上にのぼった。どの諸侯も自分の邸内で多数の護衛兵たちによって警護されているのが見られ、あたかも隙間のない包囲によって支えられているにすぎぬようだった。そして夜間には、この（伏見と大坂の）二城内では、諸々の武具の喧騒が非常に大きかったので、ただにそれらの城自体の崩壊のみならず、この世界の破滅が近づいているように思われた。それにも拘わらず日本人の自製の度合は、誰一人として敵に対して戦闘を挑まず、また相手方の派の将兵を殺害しようとして刀の鞘を払う者もない状況だった。なぜならもしそのようなことが行なわれたら、多くの人々の殺戮と、日本国全土の擾乱とが起りそうだったからである。また諸大名自身が、この種の不都合に対して警戒し、何らかの方法によって敵方に攻撃をしかけた者は死刑に処することを望んだからである。

軍事的な緊張は続いたものの、『九九年度年報』に記されているように衝突には至らず、二月十二日頃に家康と四大老・五奉行の間で誓紙が交換された⁽³⁴⁾。しかし、和解は形式的なものであり、家康と四大老・五奉行の関係そのものは改善されていない。こうした中、前田利家と親しい間柄にある長岡忠興・加藤清正・浅野長慶（幸長）が、前田氏と徳川氏の和解を斡旋する⁽³⁵⁾。そして、二月二十九日に利家は伏見の徳川邸を訪問⁽³⁶⁾。三月十一日には、家康が返礼のために大坂の前田邸を訪れたことにより、家康と利家は関係を改善した⁽³⁷⁾。

家康の前田邸訪問の三日前にあたる三月八日付で宇喜多秀家は家康宛ての誓紙を作成している⁽³⁸⁾。『亜相公御

夜話』は、家康の前田邸訪問をこの日（三月八日）としており（39）、三月八日説をとる先行研究もある（40）。しかし、家康が三月十三日付で前田利家へ歓待の礼を述べた書状を出しており（41）、同日付で浅野長慶や京極高次に前田邸訪問の様子を報じている（42）ところから、『高山公実録』が記すように十一日に家康は前田邸を訪問し、十三日に伏見へ帰還した（43）と考えた方がよいだろう。宇喜多秀家の誓紙は、前田邸訪問の際に作成されたのではなく、訪問に備えて事前に作成されたと思われる。

秀家は誓紙で「貴殿・利長被仰談 秀頼様江無御疎略上者、我等儀何様共御兩人同前二胸を合、御奉公可申覚悟二候事」と、家康と利長が協力して秀頼を盛り立てていくことに合意した上は、秀家もこれに協力すると誓い、家康との和解を謳っている。ここで家康と利家ではなく、家康と利長となっている理由は、三月時点の利家の容体を踏まえれば、すでに前田家の実権が利長へ移行していたと考えられること。そして、この誓紙が秀吉の生前に交わされた誓紙のような公的なものではなく、宛所が家康一人であるように、あくまで大名同士で交わされた私的なものだったため、五大老の利家ではなく、名実共に前田家の当主となった利長の名が記されたのだろう。ともあれ、形式的ではあるが、利家の女婿の宇喜多秀家を巻き込む和解となった。

また、利家が伏見の徳川邸を訪問した際は、利家は家康の向島への移徙を承認（44）。さらに、結城秀康から家康の前田邸訪問を報じられた徳川秀忠が、三月二十二日付で出した返書には「随而、六人のうちへ御入なされ候由、御尤ニ存候」（45）という文言がみられる。会見で秀康の大老衆加入の話が浮上し、利家はそれを了承したものであると思われる。

おそらく、利家は自らの死期が迫っていることを悟り、後継者である利長のことを家康に託す（46）ために妥協的になったのだろう。こうして家康と利家が和解したことにより、毛利輝元・石田三成らによる反徳川勢力と前田氏の結びつきは消滅し、利家に近い立場にあった加藤清正・浅野長慶らは三成らに対して攻勢に出るようになるのである。

第三節 石田三成襲撃事件の検討

慶長四年閏三月、加藤清正ら七将が石田三成の暗殺を謀って襲撃したとされる事件（通称、石田三成襲撃事件）が起きる。この事件は、七将が大坂にいる三成を暗殺するために襲撃を計画し、事前に計画を知った三成が伏見へ逃亡。三成を追いかける七将も軍勢を率いて伏見へ上ったことで、軍事的緊張が走ったが、家康の仲裁によって収束したといわれ、豊臣恩顧の大名の分裂を象徴する事件として位置づけられている。

まず、七将のメンバーについて検討すると、メンバーは史料によって異なっている。『関原始末記』は、池田輝政、福島正則、長岡忠興、浅野長慶、黒田長政、加藤清正、加藤茂勝（嘉明）の七人となっており⁽⁴⁷⁾、このメンバーは『関原軍記大成』や徳川幕府の正史『徳川実紀』に踏襲され、最も知られたものとなっている。

しかし、事件の最中に出された閏三月五日付徳川家康書状の宛所は、長岡忠興、蜂須賀一茂（家政）、福島正則、藤堂高虎、黒田長政、加藤清正、浅野長慶の七人となっており⁽⁴⁸⁾、後述する事件の展開で登場する人物とも照らし合わせると、この七人を七将と捉えるのが妥当と思われる。

なお、『慶長年中卜斎記』では、蜂須賀一茂と藤堂高虎の代わりに脇坂安治と加藤嘉明を加えた七人となっている⁽⁴⁹⁾が、覚書という性格上で起きた間違いだろう。

『義演准后日記』慶長四年閏三月十日条は「大名十人トヤラン申合訴訟云々」⁽⁵⁰⁾と、清正らの人数を十人くらいとしており、七人に限定していない。実際に、七将以外に黒田如水、浅野長政の関与が確認できることから、七人以上とする見方もできる。しかし、黒田如水と浅野長政は、七将メンバーの黒田長政と浅野幸長の父親であり、家を単位に考えれば七家に収まるほか、『舜日記』の慶長四年閏三月九日条に「石田治部少輔与七人大名衆、伏見申合在之」⁽⁵¹⁾とあることから、七将の呼称を踏襲して徳川家康書状の宛所に記された七人と定めておく。

事件について、徳川家臣の大久保忠教は『三河物語』で次のように記している。

「史料 8」(52)

(前略) 大坂より加賀大納言、をそしはやしと来らせ給ひて、兎角に向嶋へうつらせ給へと仰せければ、向嶋へうつらせ給ふ。其寄こと／＼く気をちがへて、我も／＼と申わけして、後には石田治部少輔一人にかけて、後には寄合て治部に腹を切らせんとする処に、家康御慈悲におわしましければ、各治部をゆるし給へと被仰けれ共、各きかざれば、其儀ならば石田は先さわ山へ引入て可有由を被仰出けれ共、道へ押かけて腹を切せんと各申由を聞召て、然者中納言をくれと御意の出ければ、越前中納言様のをくらせ給へば、さをぬなく石田は沢山へ行てゐたりけり。(後略)

『三河物語』は、私婚問題以降、利家が家康との関係改善に動いたのを契機として、諸大名が次々に家康へ味方するようになったという。そして、最後には三成一人に責任を負わせようと、切腹を迫ったとする。

『三河物語』の記載で注目すべきは、私婚問題から三成の失脚までを連続的に一連の流れで記している点にある。広く理解されている事件(通称、石田三成襲撃事件)の性格は、七将と三成の私戦である。したがって、三成が失脚したとしても事件の当事者として責任をとるのは当然といえ、徳川史観であれば因果応報として扱われるはずのところを、忠教は三成一人が責任を負うのは不当であるかのように記したのである。これは、事件の性格が七将と三成の私戦ではなく、私婚問題に始まる政争の延長線上にあるということではなかろうか。

もう一つ注目すべきは、七将が三成に政治的責任を負わせて切腹を迫ったとする点である。『関原軍記大成』では、前田利家が死去した閏三月三日、七将が大坂城で密談して三成暗殺を企て、それを秀頼に仕えていた桑島治右衛門が耳にして三成へ伝えたと記されている(53)ように、七将は自力で三成を殺害しようとしたというのが通説である。

しかし、『慶長年中卜斎記』には「右の衆達て訴訟被申候、堪忍候へと色々宥め候、各被申候ハ、御前をも討申

巧みを仕徒者は是非と被申由」と、七将は家康に三成の制裁を訴え、家康は七将を宥めたという。それに対して七将は、三成が過去に家康を討つ企てをしたことを挙げて家康の同意を得ようとしている。暗殺計画とは異なり、家康に三成の制裁（切腹）を訴えた事件となっているのである。その後、「此時治部少ハ、大坂に被居候、噉ひ済、治部少伏見へ被上候、大雨にて治部少跡に、加藤主計頭黒田甲斐守両人多勢にて、鉄砲計両大将の分三千人有之由、是ハ若仰の取扱変りて、道にて治部少を踏つぶせと被仰越候ハ、との心掛と申候」と、いったん家康と和解を済ませてから三成は伏見へ向かっており、加藤清正と黒田長政は合わせて約三千の鉄砲隊を率いて大雨の中、三成を追ったが、家康の意向の変化を期待してのことであって、襲撃は家康に制止されていた。七将は家康の統制下にあり、私意で三成を襲撃することはできなかったのである。

このほか、前述のように『義演准后日記』は、大名十人くらいが申し合わせて訴訟に及んだと記している。『伊達日記』には「其末々治部少輔一人惡逆ニ極切腹ニヲヨビ候処、佐竹義宣伏見ヨリ治部少輔へ御出、治部少輔ヲ義宣一ツ乗物ニ御ノセ御帰、御屋敷ニカクシヲカレ候」⁽⁵⁴⁾と、三成一人が惡逆の果てに切腹に及びそうなところを、佐竹義宣が伏見から駆けつけて三成を警護し、伏見の屋敷まで送り届けたとある。『北野社家日記』慶長四年閏三月七日条にも「大坂・伏見以外さハキ申、石治部殿を福嶋大夫殿・摂州など其外大名衆御申合候てはら御きらせ候はん由風聞申」⁽⁵⁵⁾と、小西行長が七将側に入れられている誤りがあるものの、福島正則ら大名衆が結託して三成に腹を切らせようとしたとする当時の風聞が記されている。

このように、当時の人物が記した記録から三成襲撃事件を見た場合、襲撃・暗殺計画といった性格のものではなく、七将が家康に三成の制裁（切腹）を訴えたというものとなる。仮に家康の同意が得られた場合、七将は実力行使で三成を切腹へ追い込んだかもしれない。しかし、この場合、家康の決定を行使したという位置づけになるため、七将の武力行使から「私戦」という面は薄れてゆく。

第四節 事件の背景

続いて、七将の動機が慶長の役の際に三成に対して抱いた私怨によるものとする点を検証していきたい。

七将が三成に私怨を抱いた原因は、慶長の役の中でも蔚山籠城戦後の処分問題にあったとされている⁽⁵⁶⁾。その理由として、秀吉に籠城戦後の追撃中止を咎められた蜂須賀一茂と黒田長政の処分が、事件後の閏三月十九日に五大老の連署状⁽⁵⁷⁾をもつて撤回されたこと、また、『看羊録』に処分問題に対する遺恨が武力蜂起の原因である旨が書かれていることが根拠となっている。そこで、七将の面々と処分問題との関わりを照らし合わせていきたい。

まず、浅野長慶と加藤清正は蔚山城に籠城していたため最も関わりが深い。蜂須賀一茂と黒田長政は蔚山城へ救援に駆けつけたものの、明軍を追撃しなかったことを秀吉に咎められている⁽⁵⁸⁾ので、両者にも関わりがある。

また、『看羊録』では藤堂高虎と加藤清正も秀吉から譴責を受けたとされる。内容は次の通りである。

「史料9」⁽⁵⁹⁾

(慶長の役)

丁酉の役から還つて来た福原右馬助(長堯)なる者が、治部(三成)を通じて、「諸部隊が」留まつたまま進軍しなかった、と「秀吉に」諸将を尽く訴えた。「蜂須賀」阿波守・「黒田」甲斐守・「藤堂」佐渡守・「加藤」

清正・「早川」主馬頭長政・竹中源介(重利)らが、みな譴責された。賊魁は、(秀吉)「早川」主馬頭や「竹中」源

介らの、豊後六万石の領地を奪つて、「福原」右馬助への賞とした。

蔚山籠城戦に加わっていない藤堂高虎の名があることや、早川長政と竹中重利(重隆)の領地没収が書かれていることから、蔚山籠城戦後に朝鮮在陣諸将が発案した蔚山・順天の放棄による戦線縮小案⁽⁶⁰⁾をめぐる問題についての記述と考えられる。姜沆は、福原長堯(直高)ら軍目付が戦線縮小案の非を秀吉に訴えたことが清正らの遺恨へ繋がったと認識していたのである。

このように、七将のうち五人は蔚山籠城戦や、その後の戦線縮小案に関わっている。しかし、長岡忠興・福島正則は関係を見出し得ない。『慶長年中卜斎記』が七将を「高麗陣七人衆」と記している⁽⁶¹⁾ことや、『看羊録』の記述などを踏まえると、蔚山籠城戦後の追撃中止や戦線縮小案をめぐる処分問題など、朝鮮半島での政治的軋轢が事件の起因であることは間違いない。しかし、事件の直接的な起因をこうした政治的軋轢のみに求めた場合、蔚山籠城戦や戦線縮小案と関わりのない長岡忠興と福島正則には動機が見出せないのである。

もともと、七人も人数がいれば全てが共通の思惑で行動するのは難しいかもしれない。しかし、共同戦線を張っている以上、共通の大義名分があるはずである。前述した『慶長年中卜斎記』の記述を振り返ると、家康から三成の制裁について同意を得られなかった七将は、三成が過去に家康を討つ企てをしたことを挙げて家康の同意を得ようとしていた。七将の行動が、「大義名分」と個々の「思惑」の二つで成り立つとした場合、慶長の役の際に抱いた私怨は「思惑」にあたり、表向きは、私婚問題をはじめとする家康と反徳川勢力の間に起きた政争の責任を三成に負わせようというものだったのだろう。

つまり、個々の思惑がどうであれ、この事件は私戦ではなく、政争として展開している。『三河物語』が、私婚問題から三成の失脚までを連続的に一連の流れで記しているのはそのためだろう。このことは、大久保忠教が「後には石田治部少輔一人にかけて」と、三成一人が責任を負うのは不当であるかのように記している点からも窺うことができる。

第五節 事件前夜の動静

事件が前田利家の死から間髪を容れずに起きていることから、利家の死が事件の引き金となった点は疑いない。しかし、利家が、清正ら武功派と三成ら吏僚派の対立を緩衝していたため、その不在によって事件へ発展したと

いう理解は正しいのだろうか。利家が、武功派と吏僚派の対立を緩衝していたと仮定しても、利家の死から一日も明けることなく事件となるのは早すぎる。この点を検証するため、まずは事件前夜の動静を見ていきたい。

『言経卿記』慶長四年三月二十九日条に「一昨日ヨリ大坂ニ雜説有云々」⁽⁶²⁾とあり、三月二十七日頃から大坂で不穏な空気が流れていたようである。この日、家康は前田利長に次の書状を送っている。

「史料10」⁽⁶³⁾

其元雜説申候由承候間、内々自是可申入と存候得共、即事静由候条、無其儀候処、被入御念、早々御折紙本望存候、羽越中殿其地へ御越之儀候間、萬可被仰談候、猶期後音之時候、恐々謹言

三月廿七日

家康（花押）

越中納言殿

家康は雜説となっている問題は静まったと認識していたようであるが、念のため利長に情報提供を求めている。また、大坂へ下っていた長岡忠興と相談するように助言している。「史料10」からは、利長が病床の利家の代行として大坂の要となっており、その利長を家康が気遣っている様子が窺える。

家康は前日（三月二十六日）にも利長へ書状を送っている⁽⁶⁴⁾が、そこには雜説について記されていないことから、大坂の雜説は、二十七日に伏見へ齎されたと考えられる。雜説について、家康は利長に忠興と相談するよう求めていることから、内容は利家の容体に関するのではなく、朝鮮半島での政治的軋轢についてではないかと思われる。

『関原軍記大成』によると、慶長四年三月十三日に加藤清正・黒田長政・浅野長慶は、池田照政・福島正則・長岡忠興・加藤茂勝（嘉明）を味方に引き入れて三成に使者を派遣し、蔚山籠城戦の際に軍監の福原長堯・垣見一直・熊谷直盛・太田一吉が清正らの軍功を詳細に秀吉に報告しなかった非を訴え、福原長堯らの切腹を要求したとある⁽⁶⁵⁾。清正らが福原長堯の死を望んでおり、三成らが長堯を援助したことは、『看羊録』にも記されてい

る（66）ため、こうした動きがあったことは確かであろう。

また、『看羊録』によると、福原長堯らに対する切腹要求と並行して、朝鮮半島撤兵に際しての和議不成立の問題が挙がっている。小西行長は、清正が和議成立の直前にぶち壊したと訴え、輝元らは行長の側に立ったという（67）。そして「議論はもつれにもつれ、反目はますます深まった」としている。『関原軍記大成』によると対立構造は、小西行長が加藤清正・鍋島直茂・黒田長政・毛利吉成を訴えたものであった（68）。『日本年報』は、小西行長の側には、石田三成、有馬晴信、大村喜前、島津義弘、立花親成および高橋直次・筑紫茂成、小早川秀包、寺沢正成が挙げられ、対する側には浅野長政、加藤清正、黒田長政、毛利吉成、鍋島直茂がいたとする（69）。

朝鮮半島での政治的軋轢は、二つの問題が並行して動いていたため、片方が相手側を一方的に追い詰めるというものではなく、展開によっては自身が追い込まれる可能性を秘めた予断を許さない問題であった。それゆえに対立は激化したと考えられる。『日本年報』にも同様の内容が記されている。

「史料 11」（70）

そのためこの両派は、もはや憎しみを隠さず互いに反目していた。そして彼らは都「ここに国主たちの居所がある」に到着すると、互いに批判を開始し、それに諸々の罪のなすり合いをし、そのうえ浅野弾正（長政）派は、全力を注いで自分の敵側の者を打倒しようと努めた。そして（徳川）家康その他の大名たちは、皆が敵対心を捨てて固い友情が結ばれるように何も試みないわけではなかったが、（小西）アゴスチイノ（行長）に有利に奉行所から宣告が下される以前には、彼らは何も推進させることはできなかった。しかし浅野弾正派の人々はそれで黙るべきではないと判断し、自分の意見の方へ他の重立った者、および特に主君の側にいるのを常としていた人たちを引き入れるに至ったので、ついに日本国のすべてが内乱に燃え立ち始め、これによって日本国の変革が恐れられていた。

「史料 10」の時点で家康は騒ぎ（雑説）が収まったと認識していたようであるが、実際は『北野社家日記』慶

長四年三月二十九日条に「今夜伏見一段さハキ申、当坊も夜中帰」⁽⁷¹⁾とあり、『多聞院日記』慶長四年閏三月朔日条にも「伏見物忝之由申候」⁽⁷²⁾とあるように、騒ぎは収まるどころか、むしろ伏見にまで波及していった。しかし、「史料7」にも「(伏見と大坂の)二城内では、諸々の武具の喧騒が非常に大きかった」と記されているように、こうした騒動は三月末に突然みられるようになったものではなく、正月の縁辺問題の段階から既にみられた点は留意すべきである。

第六節 前田利家の死と事件の勃発

三月末の段階で大坂・伏見に不穏な空気は漂っていたものの、事件へと発展することはなかった。これは「史料7」が伝えるように、刀の鞘を払ったら最後、收拾がつかなくなることを皆が理解していたからであろう。正月の縁辺問題から三月末まで、それを踏まえた上で緊張が続いていた。

しかし、閏三月四日になると大きな動きがみられるようになり、石田三成が大坂から伏見へ移動している⁽⁷³⁾。従来、三成は伏見の徳川邸へ駆け込んで匿われたとされていたが、実際に三成が入ったのは伏見城内にある三成の屋敷だったことが、『関原軍記大成』の「三成は伏見の城内に入りて、我屋敷に楯籠る」⁽⁷⁴⁾という記述や、『多聞院日記』、『慶長年中卜齋記』の記述から明らかとなっている⁽⁷⁵⁾。

石田三成襲撃事件に暗殺や私戦といった性格はなく、七将の行動は家康に三成の制裁(切腹)を訴えたものだった点は前述の通りである。では、なぜ三成は大坂から伏見へ移動しなくてはならなかったのだろうか。それは、毛利輝元が叔父の毛利元康に事件の状況を伝えた書状から窺うことができる。

「史料12」⁽⁷⁶⁾

たそ進之候而申度候へとも、左様之者ニハ用申付無寸暇候、先書中にて申候

① 一自治少、小西・寺沢被越候ハ、ねらいたて仕候者一かう珍事なく、結句手おきたる於于今ハ仕合候条、自
此方可被仕懸候、左候ハ、輝元天馬のことく罷下、陣取あまさきへ持つゝけ候様ニと被申候事

② 一面むきハさ様申候か、彼衆申所ハ、御城ハ彼方衆持候と聞へ候、此方衆一切出入とまり不入立之由候事

③ 一増右被申事ニ、とかく治少か身を引候ハてハ、すミましく候と被申たる由候

④ 一右分候時ハ、はや彼方へミな成候と聞へ候、此時ハかぢ之取さま肝心候間、禪高・兌長老を以内々調略可
申と安国被申候、何も爰元へやかて被越候而可相談にて候、禪高折ふし昨日被越候、種々引成たかり被申
候間、自此方申候者可成候、いかゝ被思召し候哉可承候

⑤ 一上様被仰置之由候而、昨日内府・景勝縁辺之使互ニ増右案内者にて調候、内心ハそれニハそミ候ハす候、
公儀ハ上様御意まゝと景勝ハ被申由候へとも、是もしれぬ物にて候／＼、とかくはやよいめに成行候間、
爰ハ分別之ある所候

⑥ 一御城つめニハこいてかたきりなと居候、是ハ内府かたにて候、如此候時ハ何もかもいらさる趣候

⑦ 一自大刑少被申事ニ、下やしき罷下之由不可然候、内府むかいつらに成候様ニ候との事候、治少へも此中秀
元に人数三千副遣たるとさた申候、大刑よく存候間、一円左様にてハなく候と申へく候、たゝ引取てかた
んむやくにて候、辻合はかり可然候との内意候

⑧ 一下やしき普請事ハ申付候するや、いかゝ候はんや、申付候而可然候すると存候／＼、被思召所可承候、先
あらまし申候、透候ハ、何にても可申候

⑨ 一御気分いかゝ候や、是非此節候、又いおうにてよく候や、具可承候、恐々かしく
内々たんきも此時候／＼、かしく

書状は日付を欠いているが、事件解決が全くの手付かずの状態なので事件初期のものであり、四条目に「禪高
折ふし昨日被越候、種々引成たかり被申候間」と、山名禪高（豊国）が仲裁に訪れたとあるため、三成が伏見へ

入った閏三月四日から一日以上が経過した五日以降のものであることがわかる。また、後掲する五点の元康宛輝元書状の内容を踏まえると五日に書かれた可能性が高い。

一条目より、輝元のもとを小西行長と寺沢広高が訪れて、三成からの要請を伝えた。三成は、こちらから仕掛けるべきであると積極的な姿勢をとり、輝元へ出兵を要請した。毛利軍を伏見から尼崎へ下らせることで大坂にいる敵を牽制させる構想であろうか。

しかし、二条目によると、行長と正成は大坂の正確な情勢も輝元に伝えており、大坂城は清正らに押さえられて、毛利・石田方は城に入ることができない状態だったという。その要因について、六条目では、大坂城の在番である小出秀政と片桐且元が「内府かた」（徳川方）だったためとしている。

輝元は、小出秀政や加藤清正らを「内府かた」と表している。西軍が家康を弾劾した「内府ちかひの条々」には「若き衆ニそくろをかい、徒党を立させられ候事」⁽⁷⁷⁾とあり、また、慶長五年七月三十日に石田三成が真田昌幸へ宛てた書状にも「長岡越中儀、大閣様御逝去已後、彼仁を徒党之致大将、国乱令雜意本人ニ候間」⁽⁷⁸⁾とあり、当時、家康を中心とした党派（徳川党）が形成されていたのである。

大坂城は徳川党の拠点と化していた。『九九年度年報』にも徳川党による大坂城占拠の様子が記されている。

「史料13」⁽⁷⁹⁾

ついに家康は、太閤様の息子である主君（秀頼）が住んでいた大坂城を占拠した。しかも彼は、このことを心中の意図によって非常に狡猾にやってしまい、そのため奇襲攻撃を受けた援軍に来ていた敵方には防衛の余裕を与えなかった。（大坂）城から遠くない邸にいて、六千の武装した軍勢に護られながら夜を過ごしていた（石田）治部少輔は、この思いもかけぬ不幸を阻止することができなかった。（石田）治部少輔はこの窮地に追い込まれると、同僚の統治者たちの権力下にあった伏見の城へ赴いた。

大坂城を家康に占領されたために、三成は「同僚の統治者たち」のいる伏見へ向かったという。当時の五大老・

五奉行の居所は、徳川家康・毛利輝元・上杉景勝・増田長盛・長束正家・前田玄以が伏見であり、前田利長・宇喜多秀家・浅野長政・石田三成は大坂である⁽⁸⁰⁾。実際は「史料13」に記されているような軍事クーデターを彷彿させる占領劇ではなく、三成が大坂城へ登城できないように門の周辺を兵で封鎖した程度と思われるが、大坂城には城内にも小出秀政や片桐且元といった徳川党の者がおり、大坂城は完全に徳川党に押さえられた。

事件から半年後の九月に家康が大坂へ異動した際、徳川家臣の伊奈令成（昭綱）が「兎角伏見ハ手遠ニ御座候之条、大坂ニ居住被申、諸事仕置等可被申付分候」⁽⁸¹⁾と述べているように、政治は豊臣秀頼の在る大坂城で動いていた。七将は三成の大坂城への登城を封じること、三成の政治的影響力を奪い、家康の主導のもと三成を切腹へ追い込もうとしたのではないかと思われる。また、奉行衆の中で唯一、三成とともに大坂にいた浅野長政は三成と対立関係にあり⁽⁸²⁾、後述するように長政は事件において息子長慶とともに徳川党として活動している。こうした動きを受けて、三成が毛利輝元ら反徳川勢力の集まる伏見へ移ろうと考えることは自然の成り行きであった。

三成は伏見へ向かう際、道中の安全を確保するために、家康の了承を得た上で向かっている⁽⁸³⁾。事前には伏見―大坂間で交渉が行われたあとで三成は移動していることから、使者の往復にかかる時間を踏まえると、七将らが大坂城を押さえたのは閏三月三日である可能性が高い。ではなぜ、突如として緊張状態という名の均衡が破られ、七将ら徳川党は大坂城を押さえるという行動を起こしたのだろうか。

これには閏三月三日朝に前田利家が歿した⁽⁸⁴⁾ことが大きく影響しているよう。仮に七将が利家の生前に大坂城を押さえる暴挙に出たあと、利家が快復に至った場合、大坂の監督を任されていた利家は面目を潰されたことになり、決して七将を許さないだろう。利家が快復する可能性を完全に否定することができない以上、利家が生存している間、七将は行動を起こすのを控えていたと思われる。刀の鞘を払うという最低限の禁忌を犯すことはなかったものの、利家の死を契機として七将が行動を起こしたことは、利家の存在が抑止力となっていたことの表

れである。では、利長の存在は恐れていなかったのかというと、実際に行動に移している点から、七将の中に、利長は七将を咎めることはないという公算があったと思われる。このことは鍋島直茂が鶴田善右衛門・久池井弥五左へ宛てた書状から窺える。

「史料14」(85)

幸便之条、一書令啓候、生札帰国之後、相かハる儀無之候、過半、内府様御存分之まゝニ罷成体候、大納言殿、去四日御遠行候、御息肥前殿、内府様別而被仰談候故、年寄衆五人之内、是又、過半家康ニ被申入之由申候、備前殿、中国まで相すミ、悦申儀候、今少、石治少、被仰事共候けに候、是も御無事ニ可成と存候、其面普請彼是不可有油断事、肝要候、右之分ニ、未二三人も依不相济体候、たゞ今も弓鎗取あハせ、走あひ候儀、やミ不申候、かハる儀候ハ、早速可申越候、此書面喜清次殿へ懇ニ可被申候、恐々謹言

鍋加守

閏三月七日

直茂（花押）

鶴善右

久弥五左

御宿所

ここでは利家の命日が四日となっているが、前田氏関係史料が三日となっているため、誤報と思われる。傍線部について、「年寄」が五大老と五奉行のいずれを指すかであるが、利長と家康はとりわけ相談して（良好な関係な）ので「年寄衆五人」の内で過半は家康に申し入れたとあるため、文脈上「年寄衆五人」の中に家康と利長は含まれないだろう。「年寄」を大老衆とするのであれば、「五人」ではなく、家康と利長を除いた「三人」という書き方になるからである。

また、閏三月九日付鍋島清茂書状には「御奉行中・御年寄衆御間、御沙汰ニ付而、此比伏見・大坂さわかしく

雑説申」(86)と、「奉行」と「年寄」の関係が噂となっているので伏見・大坂が騒がしく雑説が飛び交っているところがある。直茂の子である清茂が「御奉行中」を先に記している点も、「奉行」が五大老、「年寄」が五奉行を指しているのではないかと思われる。

したがって、傍線部の解釈は、利長と家康はとりわけ相談して良好な関係なので、五奉行の内でも過半は家康に和解を申し入れたとなる。利長は七将の背後にいる家康と良好な関係を続けていくことを望んでおり、家康に同調した。七将はそれを読んでいたと思われる。

第七節 伏見入城後の三成の動静

「史料12」四条目によると、多くの諸将が徳川党のほうへなびいていたという。安国寺恵瓊の助言は、山名禪高や西笑承兌といった仲裁に奔走している者たちを頼って和議をすすめていくというものであり、軍事力での勝利は期待できなかったといっている。

また七条目では、大谷吉継が輝元に家康と対峙するよう要請しているが、その内意は軍事均衡を図ればよいというものだった。輝元は、吉継は現状をよく理解している人物と評価しており、三成には毛利秀元に三千の兵を付けて派遣したと伝えたものの、その情報は嘘であることを吉継に伝えるつもりだとしている。ここから、抗戦的な姿勢を見せているのは三成のみであり、ほかの面々は芳しくない現状を直視して解決の糸口を探っている様子が窺える。

毛利輝元に戦意がないことは、七条目から明らかではあるが、一方で閏三月九日に軍勢を率いた吉川広家が摂津西宮に到着している。吉川広家は、祖式長好ら国許の家臣たちへ宛てた書状に次のように記している。

「史料15」(87)

吳々今夜山崎迄罷上候間、其方事至鳥羽可被罷越候、武具馬具等取つくろひ可被申候
只今至西宮上着候、其方なども早々伏見可被罷上候、為其急度申遣候、謹言

壬三月九日

(花押)

□□□

祖九右

福与右

桂右近

追而書によると広家は今夜中に山崎まで上ると述べているので、目的地は伏見、あるいは祖式長好らに駆け付けるように命じている鳥羽であったと考えられ、「史料12」一条目にある三成からの出兵要請とは直接の関係はない。また、広家は毛利輝元からの指示で国許から兵を率いて上ってきたと考えられるが、書状が到着するまでの日数や、進軍にかかる日数を踏まえると、事件を受けての指示とは思えない。おそらく、事件前(三月)にあった大坂や伏見の不穏な動きに備えるためのものと思われる。広家は、西宮のあたりで事件の報に接し、さらなる兵力の必要性を感じて祖式長好らに急ぎ駆け付けるように命じたのであろう。

この時の輝元の居所は、堀越祐一氏が示すように伏見の上屋敷であった(88)。堀越祐一氏が論拠としたのは輝元が家臣の栗屋元貞へ宛てた書状である。

「史料16」(89)

たゝいま上やしきへ候へく候、ともしゆ弓の者を十人はかり、いかにもみつ／＼にてこと／＼しくなく申付、
たゝいまいたし申候、為心得候、かしく

栗右近

事件を受けて輝元は弓衆約十人を連れて上屋敷へ入っている。前述のように『慶長年中卜斎記』は、加藤清正

と黒田長政が約三千の鉄砲隊を率いたとしているが、輝元は約十人の弓衆で軍備を調べたと思っているので、清正と長政も（待機させている人数は別として）武装させて率いた兵は各十人前後だったのではないかと思われる。双方共に手勢の用い方は、拠点の確保・防衛、敵方への牽制にあり、合戦をするつもりは全く無かったのだろう。

ここで注目したいのは、吉継が下屋敷へ下るのを制止しているように、徳川党と毛利・石田方の交渉において、輝元の下屋敷移動が争点となっている点である。輝元の上屋敷は、伏見城の西に位置し、蜂須賀一茂邸が南に隣接している。下屋敷は、上屋敷の西に隣接する位置にあり、堀尾忠氏邸が南に隣接、道を挟んだ北には福島正則邸、道を挟んだ西には池田長吉邸がある。また、上屋敷と伏見城大手門の間には前田利家邸、池田照政邸、浅野長慶邸が位置している（⁹⁰）。下屋敷と上屋敷では、上屋敷のほうが伏見城に近いものの、隣接しているため大差はなく、上屋敷でさえも、立地上、伏見城内の三成との連携において絶対的に適しているとは言いがたい状況である。このような状況で下屋敷移動が争点となっているのは、書状の中で輝元が述べているように下屋敷は普請中であり、上屋敷ほど防御は固くないことが推測できる。下屋敷移動は、輝元の武装解除を意味するのではないだろうか。

また、「史料12」五条目には、増田長盛を仲立ちとして家康と上杉景勝の縁談が調ったとある。その後、実行されていなかったために子細は不明だが、事件が未解決の時に突如として縁談が浮上するとは考えられないので、おそらく家康の私婚問題の軌道修正として以前から上がっていた話が、事件の早期解決を図るために急いで調べられたということだろう。

第八節 事件の展開と収束

三成が伏見城へ入った後、事件はどのように展開していったのか。本節では「史料12」以降の展開を探ってい

きたい。閏三月五日、家康は浅野長慶に次の返書を出している。

「史料 17」(91)

被入御念御飛札祝着之至候、此方江人数召連被罷越候由、被仰越候、相意得申候、弾正具可被申候、猶自兩人可申候間、不能具候、恐々謹言

後三月五日

家康御判

浅野左京大夫殿

家康は長慶が手勢を率いて伏見に来ることを了承している。「弾正（浅野長政）具可被申候」とあることから、この書状が書かれた時は、長慶はまだ大坂に居たと考えられる。また、同日付で七将へも返書が出されている。

「史料 18」(92)

重而御折紙被入御念之通、祝着之至候、如仰此方江被罷越候、尚替儀候者、従是可申入候、其地御番之儀、兩人如被申候被成之由尤候、万事能様肝要存候、委細井伊兵部かたより可申候、恐々謹言

閏三月五日

家康御判

丹後少将殿

蜂須賀阿波守殿

清須侍従殿

藤堂佐渡守殿

黒田甲斐守殿

加藤主計頭殿

浅野左京大夫殿

文中にある「其地御番之儀」とは大坂城の押さええと思われ、大坂城の押さええについて具体的な指示が伝えられ

たと考えられる。この記述から徳川党の大坂城占拠に七将が深く関わっていたことが裏づけられる。家康からの指示を伝える「兩人」は、「史料17」にある「兩人」と同一であろう。具体的に誰かは不明である。

三成が伏見へ移動し、家康も伏見に居たため、事件は伏見を中心に動いたが、展開によっては家康が大坂城へ入る可能性もあったのではないかと思われる。そして「史料17」「史料18」から、七将が家康の指示のもとに行動していたことが明らかとなる。家康は、事件の仲裁者としてのイメージが強いが、徳川党の盟主として七将に戦略的な指示を出していたのである。

『言経卿記』慶長四年閏三月七日条によると「石田治部少輔入道去四日ニ大坂ヨリ伏見へ被行也云々、今日も騒動了」「伏見雑説ニ付而京都騒動了」⁽⁹³⁾とあり、『北野社家日記』同日条にも「大坂・伏見以外さハキ申、石治部殿を福嶋大夫殿・摂州など其外大名衆御申合候てはら御きらせ候はん由風聞申」⁽⁹⁴⁾とあり、騒動は続いていたようである。

『義演准后日記』同日条は「世上静謐、珍重」⁽⁹⁵⁾と記している。他史料と比較すると違和感があるが、七章で後述するように七日に家康と輝元の間では内々に事件の裁定がまとまっているため、現状から乖離したものではない。また、前掲の閏三月七日付鍋島直茂書状「史料14」にも「過半、内府様御存分之まゝニ罷成体候」と記されており、また、奉行衆の過半は家康に和解を申し入れたとあるので、事件が収束に向かっていることは周知されていたのであろう。

「史料14」について考察をおこなうと、「備前殿、中国まで相すみ」は宇喜多秀家と毛利輝元も和解したという意味ではないだろうか。宇喜多秀家は『関原軍記大成』の記述では、三成を備前島の宇喜多邸で匿っている⁽⁹⁶⁾ので三成寄りの立場をといえるが、管見の限りでは一次史料から事件における動向を探ることはできない。しかし、この記述からは通説通りに秀家が三成側に立っていた可能性が考えられる。一方、三成は処分に対して反発したようであるが「是も御無事ニ可成と存候」とあるように、七日の段階では解決する見通しが立っていた。し

かし、「未二三人も依不相済体候」と、三成のほかにも問題が解決していない者が数人いたとしている。そして「たゞ今も弓鎗取あはせ、走あひ候儀、やミ不申候」の文言は、『言経卿記』、『北野社家日記』の記述と重なるとともに、騒ぎを起こしている者が武装した軍勢であったことが分かる。

七日まで騒動は依然として続いていたが、翌日には事態はほぼ収束したようである。『言経卿記』慶長四年閏三月八日条には「伏見雑説大閣政所御アツカイニテ無事成也云々、珍重々々」⁽⁹⁷⁾と、北政所の仲裁によって事件は解決したとあり、『北野社家日記』同日条には「伏見へ罷越、各大名衆見廻申、大谷形部少殿にて各御無事ノ様子承」⁽⁹⁸⁾と、北野天満宮祠官の松梅院禅昌は、伏見で大谷吉継から事件の解決を聞かされている。この日、家康は大坂にいる藤堂高虎へ次の返書を出している。

〔史料 19〕⁽⁹⁹⁾

被入御念、節々示預候通、相心得申候、然者其元之儀、弥静候由被仰越候、爰元も静ニ候間、可御心安候、猶期後音之時候、恐々謹言

後三月八日

家康

藤堂佐渡守殿

高虎は家康に大坂の騒ぎが静まったことを報じており、家康もまた伏見も静まったと記している。『義演准后日記』も翌九日条で「伏見申事、弥無異儀云々」⁽¹⁰⁰⁾と記しており、同日、家康は福島正則・蜂須賀一茂・浅野長政へ宛てた書状に次のように記している。

〔史料 20〕⁽¹⁰¹⁾

石田治部少輔佐和山へ閉口ニ相定、明日可参候、子息昨晚我ら所へ被越候、猶井伊兵部少輔可申候、恐々謹言

後三月九日

家康（花押）

清須侍從殿

蜂須加阿波守殿

浅野弾正殿

これによつて三成の処分は九日には正式に定まっていたことが分かる。また、八日晚には三成の息子重家が家康の許へ赴いていたことが分かるため、三成の処分の決定は八日まで遡ることができよう。重家は人質と思われる⁽¹⁰²⁾が、おそらく三成が佐和山へ下るまでの一時的な処置であろう。『北野社家日記』慶長四年閏三月十日条には「今朝石田治部少殿さほ山へ下、治少隠居也、隼人殿二家をゆつり被申候、熊半次・福原馬助などハ高野へ御参由風切申候」⁽¹⁰³⁾とあり、三成の隠居に伴つて重家が石田家の当主となっている。事件当時の毛利輝元の書状にも「治少ハ佐ほ山へ被罷越、息ハ大坂へ被罷居、秀頼さまへ御奉公候へとの事候」⁽¹⁰⁴⁾と同様のことが記されている。また、浅野幸長（長慶）が翌年の五月二十六日に書いた書状には「石治少子息隼人出陣ニ候へき者、此間為何儀ニ候哉ん、佐和山騒申ニ付、治少者罷立候様ニと此程被仰出之由候事」⁽¹⁰⁵⁾と、石田家が重家の会津征討従軍を拒否したため、代わりに三成が従軍するようにとの命が下つたとあり、出陣の対象となっていた石田家の当主は重家であつた。当主である重家が人質として留められるとは考え難く、結城秀康が三成の佐和山下向に同行して戻ってくるまでの限定的な処置と思われる。なお『北野社家日記』に熊谷直盛・福原長堯が高野山に入ったとする風聞が記されているのは、騒動の根本となる火種が、加藤清正らによる福原長堯らの切腹要求であつたということであろう⁽¹⁰⁶⁾。

閏三月九日の史料として、大谷吉継書状、鍋島清茂書状も確認されているので順に検討していく。

「史料 22」⁽¹⁰⁷⁾

以上

昨日者度々御使、忝存知候、今度者種々之御苦勞故、無異儀相済申候て、天下御静謐、上下之大慶不過之御

事候、去とてハ御尤之御噺共、併御心尽之段、可申上様無御座候、最以参上申上度候へ共、御存知之体候条、無其儀候、何も面上之節、相積儀可得御意候、恐惶謹言

閏三月九日

吉継（黒印）

この書状の宛所は欠損している。事件の仲裁を謝していることから一見すると家康に宛てられた書状のように感じられるが、宛所が家康のように吉継からみて絶対的に優位な立場にある人物に指定した場合、白峰氏が指摘するように傍線部が薄札であるように感じられる¹⁰⁸。「恐惶謹言」が用いられているように吉継が敬意を払わなくてはならない人物であることは確かであろうが、政治的な立場は対等に近いと考えられる。

また、「昨日者度々御使、忝存知候」の箇所からは吉継と直接的に遣り取りのあった人物であることが分かり、家康とは考え難い。「種々之御苦労故」の箇所からは、その人物は自ら足を運び、書状を認めるなど、実務的な面で仲裁に奔走したと考えられる。おそらく「史料12」に出てくる山名禅高や西笑承兌、あるいは彼らと同様の働きをした人物ではないだろうか。そして「史料21」からは、吉継が三成寄りではあったものの、事件の当事者ではなく、仲裁者の立場にあったことが分かる。このことは、前述の『北野社家日記』の記述「大谷形部少殿にて各御無事ノ様子承」からも窺える。

「史料22」(109)

以上

急度用飛札候、仍御奉行中・御年寄衆御間、御沙汰ニ付而、此比伏見・大坂さわかしく雑説申、此五三日は石治少一人御迷惑之体候つれ共、是も昨日相済、当分ハ御静謐之儀ニ候、然は鉄炮之者可被差上由申下候へ
□、先以相控候様可然存候、委は加州より被仰遣候、猶替儀候は追々可申入候、恐惶謹言

信濃守

閏三月九日

清茂（花押）

豊州様

生札

生三 まいる

この書状は、鍋島清茂が国許にいる伯父鍋島信房らへ宛てた書状である。大老衆・奉行衆の関係が噂となつていたので、このごろ伏見・大坂が騒がしく雑説が飛び交っているとする。この記述から、事件の対立構造が三成と七将といった個人間のレベルではなく、党派間の対立であつたことが裏付けられる。また、ここ数日は三成が窮地に立たされていたが、八日に解決したので当分は静謐になるだろうとの見通しを述べ、鉄砲兵を上方へ上らせるのを取り止めている。

前述のように鍋島氏は、加藤清正や黒田長政らと行動を共にしていたので、徳川党に近い立場といえる。しかし「史料14」や「史料22」の記述から、鍋島氏は事件の当事者ではなく、第三者の立場にあつたと思われる。鉄砲兵についても、警固を目的としたものだろう。しかし、こうした第三者の立場にあつた大名でさえも、国許から鉄砲兵を呼び寄せようとしていた点は重要である。騒動は、七将ら当事者の軍勢だけではなく、第三者の立場にあつた大名も大事に備えようと武装をはかったことにより、さらなる緊張を招いたと考えられる。

第九節 「厚狭毛利家文書」からみる和解交渉

ここまでの検討で、閏三月四日に三成が伏見城内の屋敷へ移動し、八日に三成の処分が公表され、同日晩に石田重家が家康のもとへ赴き、十日に三成は伏見を發つて佐和山へ蟄居したという大まかな事件の流れはつかむことができた。ここからは『厚狭毛利家文書』にある毛利輝元書状から和議に向けた動きを探っていきたい。毛利輝元が叔父の元康に事件の状況を伝えた書状は、筆者が閏三月五日と措定したものほかにも五点が確認されて

いる。詳細な内容が記されているものの、いずれも日付を欠いている。便宜上、筆者が閏三月五日と指定した「史料12」を書状Aとし、書状BからFまでを時系列に見ていきたい。

書状Bは、冒頭で事件は未だ解決していないとしているが、誓紙の交換という形で和議の内容が具体化され、書状Aの時から進展を見せている。書状の作成日は六日から七日に絞られるが、書状Cの内容を踏まえると六日に書かれたと思われる。書状Bの内容は次の通りである。

「史料23」(110)

面むきあつかい之事、いまた不澄候、増右・治少より被申分ニハ、景勝・我等覚悟次第、何に分ニも可相定との儀候条、景勝申談候而異見申候、可有分別哉と存候、趣可申候

① 一夕部禪高被越候而かたり被申候、内府入魂ハ非大かた候、於其上も神文等とりかハし候様ニとの被申事候、弥無異儀候、可御心安候

② 一下やしきへ罷下候と聞へ候て、尤可然と被申たる由候間、弥可相尋と申事候、一段可然被申様と聞へ申候、只今之あれまhari候物、氣ニ少もあい不申、又そこ用心ニ聞へ候、御賢慮之前候／＼、趣追々可申候

③ 一御気分可然候由肝心候、尚以不可有緩候時分からにて候夕部もそとハさわきたる由候、禪高よなかまでかたり候て、不存候つる／＼、早々しつまり申候様ニと申事候、かしく

書状Bによると、増田長盛と三成は事件の解決を輝元と上杉景勝に委ねており、書状Aでは抗戦的だった三成の姿勢にも変化が見られる。家康と輝元・景勝は、表向きは事件の仲裁者だったが、家康が七将の要求を代弁し、輝元・景勝は三成・長盛の側に立っていたことは明らかであり、実質的にはそれぞれの勢力の代表者として交渉を行っていた。通説では、家康は仲裁者として事件の裁定を下したとされているが、実際は勝利者としての裁定といえる。

二条目では、家康は輝元の下屋敷移動の話を聞いて同意したとあり、すでに輝元が下屋敷移動の意向を伝えて

いたことがわかる。文中の「あれまhari候物」とは、加藤清正や黒田長政ことであろうか。彼らが和議の動きに反発していたことを伝えようとしたものと思われる。また、「夕部もそとハさわきたる由候」と述べているところからは、『言経卿記』にも「今日も騒動」とあるように騒動が何日も続いていた様子が窺える。

つづいて書状Cは、追而書に和議について返事が来ていない旨が書かれているので、これも六日から七日に絞られる。内容は次の通りである。

「史料 24」(111)

面むきのあつかいの返事、いまたなく候、返事候者可申候／＼

御書中拝見候、誠於于今ハ弥彼間之調入事候、安国寺へも其申事候、彼方ことのほか入魂とハ聞え候、尚以調肝心と存候

一其元普請ハとかく早々調罷下度候間、普請急申事候、榎中被仰談候而可給候^①

一彼間ことニ申ふらし候ことせうし千万候、さたのかきりにて候、其用心之儀專一候、彼者書中ミ申候、先度以来次の番事をのミ申候つれとも、右之段をさとり候て無同心候処、それさへ此成候間、さたのかきりにて候、何よりわるきことハ如此事候、御方如此承候事 天道も照覧、ちかころの之御心中真実と存候、則 ■進申候、御書中も返し申候／＼

一御気分はや／＼よく候之由、一段悦申候、尚以不可有御油断候、灸尤可然候／＼、恐々かしく^②

輝元は、下屋敷の普請を早々に完了させて下りたいと述べているので、書状Cの時には下屋敷への移動がほぼ確実になったと思われる。輝元は元康に徳川方との交渉に関する情報を口外しないよう念を押しており、また、和議の返事が届いていないことに焦りを感じているところから、予断を許さない状況が窺える。つづいて書状Dの内容は次の通りである。

「史料 25」(112)

治少ことのほかおれたる被申事候、長老之ふミをミ、なミたなかし候、此一通事家康よりも一段みつ／＼候へとの事候、一人二も御さた候ましく候、よく／＼その御心へ候へく候、梅りん・渡飛・児若其元へ被召寄候而、みつ／＼にて被仰聞可給候、召上せ申候へ者こと／＼しく候、少も口外ましく候由、かたく可被仰候、かしく

昨日彼方と間如此相調候

一治少身上面むき之あつかい三人衆へ申渡候、是も此中あつかいかけ有之候由候、治少一人さほ山へいんきよ候て、天下事無存知候様との儀候、是二可相澄候、増右をもミな／＼種々申候へとも、治少一人にて可澄と内意候、さ候とも増右者其まゝにてハ被居候ましく候条、可為同然候、是ほと二澄候へ者可然候

書状Dは、前日に徳川方との協議が決着し、三成の処分について「三人衆」に伝えたとある。しかし、家康から内密にするようにとの打診が出ていたように内々の取り決めであり、正式な裁定には至っていなかった。

三成の処分は、佐和山へ引退して「天下事、存知なく候様」という厳しい処分だった。実際に三成は、慶長五年（一六〇〇）七月十七日に西軍が決起したあともすぐには奉行衆に復職しておらず、復職できたのは八月一日（あるいは七月三十日）頃であり、決起から約半月の期間を要した¹¹³。

また、七将は増田長盛の処分も要求していたようだが、家康の内意は三成一人の処分で済ませるというものだった。それにもかかわらず、輝元は長盛も三成と同様の処分になるだろうとの私見を加えている。七将らの反応次第で裁定が変わる可能性もあったということであり、家康の意向に清正らが必ずしも従うとは限らない状況を示している。また、長盛も処分されそうになっていることは、この時の争点が福原長堯の切腹から、奉行衆に対する政争の責任追及へとシフトしていたことを意味していよう。

追而書には三成の様子が記されており、仲裁にあたっていた西笑承兌からの書状を見て涙を流したとある。このことから、三成の処分は西笑承兌の書状で伝えられたことがわかる。そして家康からは、この書状の内容を内

密にするよう打診があったという。そのため、輝元は元康に口外を禁じると共に、林就長・渡辺長・児玉元兼にこのことを伝えるにあたっては、輝元が呼び寄せて伝えると仰々しくなるので、元康のほうから内密に伝えるよう命じている。三成の処分が決まりながらも、未だ公にはされていない状態であり、八日以前の書状であることがわかる。八日には、事件の解決が公にされているため、七日に書かれた可能性が高い。

なお、輝元が三成の処分を伝えた「三人衆」について、光成準治氏は書状Eとの関連から蜂須賀一茂・黒田如水・加藤清正と措定している¹¹⁴。しかし、書状Dから、三成の処分に関する情報を慎重に扱っていることがわかるため、事件の当事者であり、かつ殺気立っている一茂・如水・清正に伝えたとは考えられない。文中に「是も此中あつかいかけ有之候由候」と、調停に携わっていたとあるので、家康と輝元を除いた大老衆の上杉景勝・宇喜多秀家・前田利長ではないだろうか。

書状Eは、冒頭で「両三人」に書状の内容を伝えているか念を押しており、光成準治氏はこの「両三人」を書状Dに出てきた林就長・渡辺長・児玉元兼であるとして、書状Dのあとに出された書状とする¹¹⁵。ここは光成氏の説に従いたい。林就長らに西笑承兌の書状の内容を伝えたか念を押しているところから、書状Dから一日は経過していると思われるので、八日に書かれた可能性が高い。内容は次の通りである。

「史料 26」⁽¹¹⁶⁾

両三人ニ被仰聞候哉、可然候

① 一下やしきへ事尤候、我等も其申事まで候、此意わ一刻も急たく候、只今安国へも申候／＼、へいをも先急候へと榎中に申聞事候、御方も可被仰候而給へく候

② 一蜂阿・如水・加主さへハさたまりたる事候、とかくはや中国の大事まで候、然とも家康懇非大かた事候、彼衆身ニハあらぬと聞え候、何篇被思召寄所よるひる可承候、かしく

御方御気分よく候事肝心候、尚以不可有御緩候

一条目で下屋敷の普請を急がせており、堀の普請を最優先にしていることから、輝元は防御力が気がかりだったようだ。武装解除を示すための移動とはいえ、堀が頼りないのは安心できなかったのだろう。この時、輝元の下屋敷移動は確定していたものと思われる。

二条目では、毛利氏と関係の強い蜂須賀一茂、黒田如水、加藤清正が裁定に異論を唱えていると知り、「中国の大事」とまで述べている。おそらく三成ら奉行衆が清正らの望むかたちで処分されなかったことに対する不平不満だろう。しかし、一方で家康は好意的であるとしているので、清正らは家康の意向とは違った姿勢を示しており、家康が清正らを抑えきれていない様子が窺える。

書状Fは、調停の正式な決着を伝えているほか、元康を呼び寄せようとしている（書状Dのように仰々しくなることに配慮していない）ので八日以降のものであり、昨夜に石田重家が家康のもとへ赴いたとあるので九日に書かれた書状と考えられる。内容は次の通りである。

「史料 27」(117)

安国寺やかて治少へ被罷越候、弥様子可聞之候、内府へも被参候而万被申談候へかしと申候、気分悪せうし千万候、御気分如形候ハ、後刻可有御出候／＼、かしく

あつかい調、治少ハ佐ほ山へ被罷越、息ハ大坂へ被罷居、秀頼さまへ御奉公候へとの事候、為一礼夕部内府息被罷越候、右之趣不存候てやらん、夜前も所ニより大さわき候つる

事件は決着となったが、騒ぎを起こす者も一部いたようである。このことは前述の閏三月九日付鍋島清茂書状の内容とも重なる。おそらく加藤清正らのことだろう。

清正らは事件の裁定に不満を抱いていたようであり、『三河物語』は三成の処分を聞いた清正らが「道へ押かけて腹を切せん」⁽¹¹⁸⁾と口にしたとしている。清正らの姿勢は予断を許さないものがあり、強行的に三成を切腹に追い込みかねない状況だったのだろう。そのため、家康の二男である結城秀康が三成を護送する厳戒体制がとられ

た。『多聞院日記』慶長四年閏三月十一日条には「石田治部、佐保山へ家康子人質ニ取置候て城へハイリ候、先々静ニ成候」⁽¹¹⁹⁾とあり、『日本年報』にも「(石田)治部少輔が、彼らの間の安定した友情の人質として家康の幼童とともに自分の邸へ帰る時」⁽¹²⁰⁾と記されているように、周囲は結城秀康を三成の道中の安全を保障するための人質と捉えていた。

清正らの姿勢は、彼らに対する家康の統制力の限界を露わにした。裁定に不満を抱いた清正らは家康でも完全に制御することができず、身内に三成を護送させて清正らを牽制する以外に彼らの行動を確実に制止させる術がなかったのである。

『看羊録』は、事件後、三成の処分を不服とする清正が前田利長、宇喜多秀家、伊達政宗、細川忠興、黒田長政、浅野長政・幸長と同盟を結び反旗を翻したとする⁽¹²¹⁾。誇張されて伝わった情報と思われるが、全くの虚説でもないだろう。同盟を結んだとされる面々は伊達政宗と黒田長政を除けば、前田氏と関係の強い勢力で構成されていることから、裁定を不服とした清正と幸長が忠興と共に、前田利長を頼って裁定を覆すよう促したというのが真相ではないかと考えられる。

前田家臣の村井長明の覚書『象賢紀略(利長公御代之おぼえ書)』には「大納言様御逝去二七日過候て、肥前守様大坂より伏見大府公へ御城移を御見廻、治部少をさは山へおひはらひ被遣候」⁽¹²²⁾と、利長は利家の二七日法要を終えたのち、伏見城西之丸へ移った家康の許へ挨拶に赴き、三成を佐和山へ退かせたとある。家康の伏見入城は、『三藐院記』慶長四年閏三月十二日条によると閏三月十二日⁽¹²³⁾であるため、三成の処分公表(閏三月八日)とは時間が前後するが、利長が事件の裁定に関与した可能性を示す記述であり、「史料14」の「御息肥前殿、内府様別而被仰談候」は、このことを指している可能性もある。利長は家康と足並みを揃えていたと思われ、清正らの働きかけは徒労に終わったと考えられる。

『九九年度年報』は事件の裁定に至るまでの流れを次のように記しており、これまで見てきた内容と一致する。

しかし家康は、伏見の城への出発を遅らせるべきではないと考えた。彼は軍勢を率いてそこへ到着すると、諸侯の勧めを入れて次の条件で兵力を撤退させることを約束した。すなわち(石田)治部少輔は、これまで帯びていた官職を捨てた身分に落とされ、今後は国家統治の任を離れ、己がすべての軍勢とともに自領である近江の国にずっと引き籠っているように、と。このために両派の中の諸侯たちの間で調停が行われ、(石田)治部少輔が、彼らの間の安定した友情の人質として家康の幼童とともに自分の邸へ帰る時、(小西)アゴスチイノは連れ立って行くことを望んだ。(石田)治部少輔はこのことには賛成しなかった。

ここでは、家康が軍勢を率いていることになっているが、加藤清正・黒田長政に置き換えれば問題ない。文中の「両派の中の諸侯たちの間で調停が行われ」という言葉は、事件の性格をよく捉えている。事件の対立構造は、三成と七将といった個人間のレベルではなく、私婚問題に始まる一連の政争の流れで動いていたのである。

第十節 事件後の動静

事件のあと、閏三月十九日付けの五大老連署状をもって蜂須賀家政と黒田長政の蔚山籠城戦後の追撃中止の罪が撤回され、二人は名誉を回復した⁽¹²⁵⁾。そして閏三月二十一日、和議の取り決め通りに家康と輝元は誓紙を交換し、その中で家康は輝元を「兄弟」、輝元は家康を「親子」と表現し、両者の間で明確に上下関係を表した⁽¹²⁶⁾。なお、二日後の閏三月二十三日付けで黒田長政と吉川広家も誓紙を交換している⁽¹²⁷⁾。

また、石田三成の失脚によって、三成と関わりのあった諸大名が徳川氏に接近を始める。伊達政宗は、三成の処分が公表された閏三月八日には、家康への取次を務めた有馬則頼と今井宗薫に対して徳川氏寄りの立場を明確に示している。

覚

一^① 中納言殿御取合之事

一^② 何れニもかまハす、一筋ニ御手前守申上、行末共ニ、身上取立可被下事

一^③ 如何様之義成共、可被仰付候、毛頭不可存疎意事

一^④ 自然国へ之路次不自由之時、可預御吟味事

一^⑤ 節々如申、中惡衆へ御心付之事

一^⑥ 物色たち候て後、いつかたニても一ヶ所、御預被成候ハ、下々妻子共

ニ置可申事、口上

一^⑦ 弥秀頼様無御油断、可然事、以上

大崎少将

閏三月八日

政宗判

有馬中書様

宗 薫 様

この史料は、「有馬中務少輔殿・今井宗薫迄被指上候御返書写」とされる史料である。「返書」とあるように、家康との間を取り次いでいた有馬則頼と今井宗薫との遣り取りは以前から行われており、話が纏まった結果が「史料 29」といえる。つまり、政宗は、加藤清正らが三成の切腹を訴えたのを受けて三成の失脚を見通し、早急に徳川方と接触して事件の決着直前に徳川氏寄りの立場を明確にしたのである。

二条目、三条目では、徳川氏に対する忠誠を明言している。五条目にある「中惡衆」とは浅野長政のことであろうか。「中惡衆」に関して、政宗は徳川氏に配慮を求めている。具体的な内容は不明であるが、「節々如申」と

あるように、これ以前から、政宗は「中悪衆」との関わりにおいて徳川氏を頼っていたことがわかる。三成が失脚する以前は、三成と家康の双方を頼りにしていたと考えられるが、この段階で家康に一本化されたといえよう。

また、「史料29」の一カ月後には、有馬則頼と今井宗薫に対して誓紙を出している。

「史料30」(129)

敬白 起請文前書之事

一^①内府へ、惣別、御用之義、頼入ニ付而、虚言表裏、毛頭有間敷事

一^②密々之儀、為御聞候ニ、他言仕間敷事

一^③乍勿論、無二無三、内府公へ申合候間、向後縦如何様之世上ニ成行候共、一^④筋ニ内府御手前を守、可奉一命候間、万事御心安、可預御取成事、以上

右、条々於偽者

卯月五日

(神文略)

羽柴大崎少将

慶長四年卯月五日 政宗(花押)○血判

有間中書様

宗 薫 老

人々御中

「史料29」が徳川方の立場をとるにあたっての誓約であるのに対して、「史料30」は家康との間を取り次いでいた有馬則頼・今井宗薫に対して、家康への取り次ぎを正式に依頼したものである。一条目では「虚言表裏」がないこと、二条目では「密々之儀」を他言しないことを約している。則頼・宗薫と政宗の間で結ばれた盟約であり、

前述したように慶長三年十二月に井伊直政と黒田長政の間でも同様の盟約が結ばれている。彼らは、次の天下人は家康であると見通し、奏者との結びつきを強固にすることで、家康との関係を円滑に運ぼうとしたのである。また、三成が奏者を務めていた相良頼房も、閏三月中に徳川方の黒田長政と誓紙を交わしており、頼房は秀頼への忠誠と共に家康に対する奉公も誓約した⁽¹³⁰⁾。同じく三成が奏者を務める島津氏も、四月二日付で家康が島津義弘・忠恒父子に宛てた誓紙も確認できる⁽¹³¹⁾。この誓紙は、島津氏の秀頼に対する忠誠を賞し、家康と島津氏の友好を約したものであり、島津氏側も誓紙を提出したと推測できる。

結語

以上、本章では、先行研究では言及されてこなかった前田利家の死が事件（通称 石田三成襲撃事件）の引き金となっている点に着目して、その真相を究明した。その結果、この事件が通説でいわれているような襲撃・暗殺といった性格のものではなく、訴訟によるものである点が明らかとなった。

慶長四年三月末から朝鮮半島での政治的軋轢（福原長堯らに対する切腹要求と、朝鮮半島撤兵に際しての和議不成立の問題）が原因となり、大坂・伏見で不穏な空気が流れた。この流れが事件へと結びついたことは疑いないが、福島正則や長岡忠興といった朝鮮半島での政治的軋轢と関わりのない者が七将に名を連ねている点、和議不成立の問題では当事者となっている鍋島直茂が事件では第三者となっている点を踏まえると、この事件は朝鮮半島での政治的軋轢のみに起因する単純なものではなく、徳川党と反徳川勢力による一連の政争の流れで動いていたといえる。七将が三成を弾劾した口実は、一連の政争に対する責任追及であった。

三成の失脚は、対立構造に大きな変化をもたらした。毛利氏が家康に屈服したほか、これを契機に三成が奏者を務めていた相良氏・伊達氏・島津氏が家康に接近している。同じく三成が奏者を務めていた真田信幸も、この

頃には徳川氏寄りの立場をとっていたことが確認できる⁽¹³²⁾。事件によって三成の陣営は崩壊したといっている。その後、増田長盛ら三奉行や、寺沢正成、小西行長、大谷吉継といった吏僚衆が家康に協力的な立場へ移行するようになる。

この事件における家康の勝利は、私婚問題に始まる一連の政争すべてにおける勝利を意味していた。政争に勝利した家康は、加藤清正らと縁組を次々と結んでいく。

一方で事件は、七将に対する家康の統制力の限界を露わにした。七将は家康を盟主として仰ぎ、家康の監督下にあつたが、家康は三成の処分について内密にするよう輝元に打診しており、七将の反応に神経を使っている。また『言経卿記』に、北政所の仲裁によって事件が解決したとあるのは、三成の処分を公表する際に北政所の權威を頼ったためと推測できる。それでも裁定に不満を抱く清正らの姿勢は予断を許さないものがあり、身内の結城秀康に三成を護送させて清正らを牽制する以外に、彼らの行動を確実に制止させる術がなかったのである。

一方、前田利長は、徳川党の大坂城占拠によって面目を潰されたが、家康と協調的な姿勢をとった。しかし、利長の努力とは裏腹に、裁定に不満を抱く清正らが一時でも利長へ期待を寄せたことは、家康にとって軽視できる問題ではなかった。半年後、家康は大老衆の排斥において利長を最初の標的に定めたのである。

最後に、事件の位置づけをおこなうと、通説でいわれるように三成と七将といった個人間の対立ではなく、私婚問題をはじめとする政争の延長線上にある。その結果、三成陣営の崩壊というかたちで「(一時的な)決着」とすることができよう。以降、翌年(慶長五年)の関ヶ原の役まで三成・毛利輝元らと、家康の対立はみられなくなる。

註

(1) 慶長三年八月二十八日付毛利輝元起請文前書案「四奉行宛」『大日本古文書 家わけ第八 毛利家文書之三』

東京大学出版会、一九七〇年）へ以下『毛利家文書』と表記）九六二号。

- (2) (慶長三年) 九月二日付内藤周竹書状写「内藤又二郎宛」(『萩藩閥閥録』第三卷、マツノ書店、復刻版一九九五年、一六七頁)。

- (3) 『大日本古記録 言経卿記』九(岩波書店、一九七五年)へ以下『言経卿記』と表記）九六頁。

- (4) 『言経卿記』九七頁。

- (5) 『言経卿記』九八頁。

- (6) 『言経卿記』一〇一頁。

- (7) 『言経卿記』一〇三頁。

- (8) 『言経卿記』一〇七頁。

- (9) 『言経卿記』一一三頁。

- (10) (慶長三年) 十二月二十五日付井伊直政起請文案『黒田家文書』一卷(福岡市博物館、一九九九年)へ以下『黒田家文書』と表記）二一二、一号。(慶長三年) 十二月二十五日付黒田長政起請文案(『黒田家文書』二一二、二号)。

- (11) 慶長四年正月三日付島津龍伯起請文「島津忠恒・義弘宛」『大日本古文書家わけ第十六 島津家文書之二』(東京大学出版会、一九五二年)へ以下『島津家文書』と表記）一一四二号。

- (12) (慶長四年) 正月三日付島津龍伯事書覚「島津忠恒・義弘宛」(『島津家文書』一一四三号)。

- (13) (慶長四年) 正月五日付寺沢正成書状写「島津忠恒・立花親成・小早川秀包・高橋直次・筑紫茂成宛」『鹿児島県史料 旧記雑録後編 三』(鹿児島県、一九八三年)へ以下『旧記雑録』と表記）六四六号。

- (14) (文禄四年) 五月二十四日付石田三成書状「島津忠恒宛」『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之五』(東京大学出版会、二〇一六年) 一八八三号。

- (15) 『国史叢書 関原軍記大成』一（国史研究会、一九一六年）（以下『軍記大成』と表記）五七頁。
- (16) 「家忠日記追加」卷十三（『家忠日記増補追加』国立公文書館蔵）。
- (17) 「伊達日記」（『群書類従』第二十一輯 合戦部、続群書類従完成会、一九六〇年）二五九頁。
- (18) 『内閣文庫所蔵史籍叢刊 特刊第一 朝野舊聞哀藁』第九卷（汲古書院、一九八三年）二八九頁。
- (19) 「神谷宗湛茶会日記二飾付」慶長四年二月九日晚条「今日庵文庫所蔵」（『茶道文化研究』第七輯、今日庵文庫、二〇一五年）二五八頁。
- (20) 『言経卿記』一四五頁。
- (21) 同様の記載が、『戸田左門覚書』（民友社、一九一四年）にもみられるが、正月十七日としている。
- (22) 「慶長年中卜斎記」下之卷（『改定史籍集覧』第廿六冊、臨川書店、復刻版一九八四年）（以下『卜斎記』と表記）八〇頁。
- (23) 「当代記」卷三（『當代記 駿府記』続群書類従完成会、一九九五年）（以下『當代記』と表記）七一頁。
- (24) 「亜相公御夜話」下卷（『御夜話集』上編、石川県図書館協会、一九三三年）（以下『御夜話集』と表記）六六頁。
- (25) 「黒田長政記」（『続群書類従』第二十三輯上 合戦部、続群書類従完成会、訂正三版一九八三年）二六七頁。
- (26) 『黒田家文書』一八四号。
- (27) 『黒田家文書』二六号。
- (28) 『軍記大成』六一頁。
- (29) （慶長四年）六月晦日付井伊直政書状「黒田長政宛」（『黒田家文書』二七号）。
- (30) 『義演准后日記』第二（続群書類従完成会、一九八四年）（以下『義演』と表記）二〇頁。『新訂寛政重修諸家譜』第二（続群書類従完成会、一九六四年、二六二頁、榊原康政の項）に「慶長四年勤番の交替として、

隊下の士をゐて上京するのところ、三河国藤川にをいて石田三成等隠謀の企あるのよし風説ありければ、旅装をもあらためず、乱髪のままにて急ぎ伏見の御館にはせ参りしかば、御前にめされ御感の仰ありて、御手づから熨斗をたまはる。」とある。

(31) 慶長四年正月二十七日付鍋島清茂覚書「鍋島茂里・鍋島生三宛」「坊所鍋島家文書」(『佐賀県史料集成』古文書編十一巻、佐賀県立図書館、一九七〇年(以下『佐賀十一』と表記)一二九号)。

(32) 姜沆著・朴鐘鳴注釈『看羊録』(平凡社、一九八四年)(以下『看』と表記)一七〇頁。『海行摠載』第一(朝鮮古書刊行会、一九一四年)(以下『海』と表記)四一二頁。「」内は訳者の補足語を指している。

(33) 「一五九九年十月十日付、日本発信、巡察師アレシヤンドウロ・ヴァリニャーノのイエズス会総長宛、一五九九年度、日本年報」(松田毅一監訳『十六・十七世紀イエズス会日本報告集』第一期第3巻、同朋舎出版、一九八八年)(以下『日本年報』と表記)一二二頁。「」内はテキストにある補足語、()内は訳者の補足語、または注に入れるべき短文を指している。

(34) 慶長四年二月十二日付四大老五奉行連署起請文前書案(『毛利家文書』九六四号)。「伊藤本文書」(中村孝也『新訂 徳川家康文書の研究』中巻、日本学術振興会、一九八〇年)(以下『家康文書』と表記)などの写は二月五日付となっている。実際には、二月十二日頃に和睦はまとまったが、誓紙は日付を遡らせて二月五日付で作成されたということであろうか。二月五日付のものとして、慶長四年二月五日付五大老連署知行宛行状案「小早川秀秋宛」(『毛利家文書』一一一八号)ほか二通の知行宛行状もある。

(35) 『綿考輯録』二巻(汲古書院、一九八八年)一四二—一四四頁。

(36) 『御夜話集』六七頁。『當代記』七一頁。(慶長四年)三月五日付鍋島直茂・清茂連署状「鶴田善右衛門・河原成行・久池井弥五左宛」(「鶴田家文書」『佐賀県史料集成』古文書編七巻、佐賀県立図書館、一九六三年(以下『佐賀七』と表記)六七号)には「内府公・大納言殿御間、今程一段よく御成候様子」とある。

- (37) 『當代記』七一頁。「高山公実録」卷之七(『高山公実録』上巻、清文堂出版、一九九八年)〈以下『高山公』と表記〉一三七頁。
- (38) 慶長四年三月八日付宇喜多秀家起請文案「徳川家康宛」(『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之三』東京大学出版会、一九五二年)一二〇五号。
- (39) 『御夜話集』六九頁。
- (40) 高澤祐一「『前田利長の進退』補説」(『加賀藩の社会と政治』吉川弘文館、二〇一七年)〈初出二〇〇一年〉。
- (41) (慶長四年) 三月十三日付徳川家康書状「前田利家宛」「國田文書」(『家康文書』)。
- (42) (慶長四年) 三月十三日付徳川家康書状写「浅野長慶宛」「碩田叢史」(『家康文書』)。(慶長四年) 三月十三日付徳川家康書状「京極高次宛」「大阪城天守閣所蔵文書」(徳川義宣『新修 徳川家康文書の研究』第二輯、徳川黎明会、二〇〇六年)〈以下『新修家康文書』と表記〉。
- (43) 『高山公』一三七頁。
- (44) 『三河物語』などでは前田利家が徳川家康に向島へ移ることを提案したとするが、『慶長年中ト斎記』は生駒親正・堀尾吉晴・中村一氏の提案であるとし、慶長四年二月上旬には向島古城の作事を始めている(『ト斎記』八一頁)。会見の時には既に移転の準備が進行しているため、利家はこうした家康の行為を承認したにすぎないと思われる。しかし、利家の承認を得たことにより、その正当性を高める政治的効果は大きい。
- (45) (慶長四年) 三月二十二日付徳川秀忠書状「結城秀康宛」「大阪城天守閣蔵」(『特別展 豊臣と徳川』大阪城天守閣、二〇一五年)〈以下『豊徳』と表記〉三六号。
- (46) 『御夜話集』七〇頁。『當代記』七一頁。
- (47) 「関原始末記」上(『改定史籍集覧』第廿六冊、臨川書店、復刻版一九八四年)二頁。
- (48) (慶長四年) 閏三月五日付徳川家康書状写「七将宛」「譜牒余録」第二十二松平安芸守附家臣(『内閣文庫影

印叢刊譜牒余録』上、国立公文書館、一九七三年（以下『譜牒余録』と表記）六一四頁）。

(49) 『卜齋記』八二頁。

(50) 『義演』三七頁。

(51) 『舜旧記』第一（続群書類従完成会、一九七〇年）一七七頁。

(52) 「三河物語」（『家康史料集』人物往来社、一九六五年）三八八頁。

(53) 『軍記大成』一一七、一一八頁。

(54) 前掲註（17）二五九頁。

(55) 『北野社家日記』第五（続群書類従完成会、一九七二年）（以下『北野』と表記）一二〇頁。

(56) 笠谷和比古「豊臣七将の石田三成襲撃事件——歴史認識生成のメカニズムとその陥穽」（同『関ヶ原合戦と近世の国制』思文閣出版、二〇〇〇年）（初出同年）。

(57) （慶長四年）閏三月十九日付五大老連署状写「蜂須賀一茂・黒田長政宛」（『毛利家文書』九三三号）。

(58) （慶長三年）五月二十六日付熊谷直盛・垣見一直・福原長堯連署状「島津義弘・忠恒宛」（『島津家文書』九七八号）。

(59) 『看』一六八頁。『海』四一二、四一三頁。

(60) （慶長三年）正月二十六日付宇喜多秀家外十二名連署言上状案「石田三成・長束正家・増田長盛・徳善院玄以宛」（『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之三』（東京大学出版会、一九五二年）一二〇六号）。

(61) 『卜齋記』八二頁。

(62) 『言経卿記』一八六頁。

(63) （慶長四年）三月二十七日付徳川家康書状「前田利長宛」「内閣文庫所蔵」（『家康文書』）。

(64) （慶長四年）三月二十六日付徳川家康書状「前田利長宛」「徳川恆孝氏所蔵」（『新修家康文書』）。

(65) 『軍記大成』一一六頁。七将の構成員に誤りがあるが、七将の中で主体的に動いているのが加藤清正・黒田長政・浅野長慶の三名で他の者は同調したにすぎないとする点は注目すべきである。七将を主体的な者と同調者に区分することにより、朝鮮半島での政治的軋轢と関わりのない福島正則・長岡忠興が七将に名を連ねている理由が説明できる。

(66) 『看』一六八頁。『海』四一一頁。

(67) 『看』一六八頁。『海』四一一頁。

(68) 『軍記大成』一〇四頁。

(69) 『日本年報』一二二頁。「浅野弾正殿、カズエ殿、甲斐守、豊前の国の国主、イチノカミ、それに肥前の国主鍋島」とあるのに対して、谷徹也「秀吉死後の豊臣政権」(『日本史研究』六一七号、二〇一四年)は、「イチノカミ(片桐且元)」は「イキノカミ(毛利吉成)」の誤りであろうとし、これを受けて白峰旬『新視点 関ヶ原合戦——天下分け目の戦いの通説を覆す』(平凡社、二〇一九年)は「豊前の国の国主壱岐守(毛利吉成)」としている(九〇頁)。

(70) 『日本年報』一二二頁。

(71) 『北野』一一九頁。

(72) 『増補続史料大成』第四十二卷(臨川書店、一九七八年)〈以下『多聞』と表記〉八二頁。

(73) 『言経』一九〇頁。

(74) 『軍記大成』一一九頁。

(75) 前掲註(56)。

(76) (慶長四年閏三月)毛利輝元自筆書状「毛利元康宛」「厚狭毛利家文書」(『徳川家康没後四〇〇年記念 特別展 大関ヶ原展』二〇一五年)〈以下『関展』と表記〉三九号。日付を欠いている点については、毛利元康は

下屋敷に居たと思われ、同日中に交信が可能であることや、端裏書に「則火中」とあるように本来は残す書状ではなかった等の理由が考えられる。

(77) 徳川家康違背事書写 (『松井文庫所蔵古文書調査報告書』二、八代市立博物館未来の森ミュージアム、一九九七年) (以下『松井二』と表記) 四一九号。

(78) (慶長五年) 七月三十日付石田三成書状「真田昌幸宛」『真田宝物館収蔵品目録 長野県宝 真田家文書』一 (松代藩文化施設管理事務所、二〇〇四年) (以下『真田家文書』と表記) 五二号。

(79) 『日本年報』一二三頁。

(80) 前掲註(76)より、毛利輝元・上杉景勝の居所は伏見と考えられる。宇喜多秀家は、に従うと大坂の屋敷で三成を匿っているので大坂となる。輝元・景勝が三成襲撃事件の仲裁に入っているのに対し、秀家の介入はみられないため伏見から離れた大坂に居たと考えるのが妥当である。他の史料で裏付けられるならば、『看羊録』によると、秀吉は前田利長と秀家に大坂で豊臣秀頼を守護するよう遺命したとする(『看』一六四頁)。ただし、(慶長四年)九月十三日付毛利輝元書状「毛利秀元宛」「長府毛利家文書」(『特別展五大老』大阪城天守閣、二〇〇三年(以下『五大老』と表記)一二一号)で「東国衆之儀者在大坂、西国衆の儀者在伏見と大坂様御置目候之处、備前中納言殿在大坂之段、更不及分別之由、家康堅被申上之由候」と、家康が、秀家の大坂滞在は秀吉の遺命に背くと主張したとあることから、姜沆が記した遺命の存在は疑わしい。しかし、九月の時点で秀家の居所が大坂であったことがわかり、姜沆が秀家の大坂滞在は秀吉の遺命と認識していたのも慶長四年九月まで秀家が大坂に滞在していたからこそ生じたと考えられる。以上のことから、秀家は大坂に居たと判断する。奉行衆では、『多聞院日記』の慶長四年閏三月九日条に「伏見治部少輔・右衛門尉・徳善院一所ニ取籠由候」とあるから、伏見には増田長盛の他に前田玄以も居たことがわかる(『多聞』八三頁)。また、『看羊録』では伏見城に籠もる三成を説得して家康に謝罪させたのは長束正家とする(『看』一

七〇頁）。実際に説得を行ったかは別として、事件解決に正家が登場しているということは、正家も伏見に居たと考えていいだろう。そして、（慶長三年）八月五日付豊臣秀吉遺言覚書案「早稲田大学図書館所蔵」（『五大老』一〇三号）によるならば「奉行共五人之内、徳善院・長束大両人ハ一番ニして、残三人内老宛宛伏見城留守居之事」と、玄以・正家の他に「残三人内老宛」が伏見城の留守居とされている。右の状況から「残三人内老宛」には長盛が入ると考えられ、三成と浅野長政は大坂となる。つまり、大坂にいた面々は、前田利家・利長、宇喜多秀家、浅野長政、石田三成であり、大坂は前田系勢力で固められた拠点と位置づけられる。

（81）（慶長四年）九月二十三日付伊奈令成書状「島津龍伯・忠恒宛」『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之四』（東京大学出版会、二〇一一年）一六九三号。

（82）『日本年報』一二〇―一二一頁。

（83）『卜斎記』八二頁。『慶長見聞書』（国立公文書館蔵）。

（84）『御夜話集』七二頁。『寛永諸家系図伝』第十二（続群書類従完成会、一九八八年、七五頁、前田利家の項）。

（85）（慶長四年）閏三月七日付鍋島直茂書状「鶴田善右衛門・久池井弥五左宛」「鶴田家文書」（『佐賀七』六八号）。

（86）（慶長四年）閏三月九日付鍋島清茂書状「鍋島信房・石井生札・鍋島生三宛」「坊所鍋島家文書」（『佐賀十』一四一―一四二号）。

（87）（慶長四年）閏三月九日付吉川広家書状「祖式長好・福富春昌・桂家好ほか一名宛」「祖式家旧蔵文書」（『大日本古文書 家わけ第九 吉川家文書別集』（東京大学出版会、一九七〇年）六八〇号）。

（88）堀越祐一「関ヶ原合戦とその後の情勢」（同『豊臣政権の権力構造』吉川弘文館、二〇一六年）二一四頁。

（89）（慶長四年閏三月）毛利輝元自筆書状「栗屋元貞宛」（國学院大学図書館所蔵「毛利輝元自筆書状集 第三巻」）。

- (90) 新創社編『京都時代MAP 安土桃山編』(光村推古書院、二〇〇六年) 四二―四七頁。
- (91) (慶長四年) 閏三月五日付徳川家康書状写「浅野長慶宛」『譜牒余録』第二十二松平安芸守附家臣(『内閣文庫影印叢刊譜牒余録』上、国立公文書館、一九七三年(以下『譜牒余録』と表記)六一四頁)。
- (92) (慶長四年) 閏三月五日付徳川家康書状写「七将宛」『譜牒余録』第二十二松平安芸守附家臣(『譜牒余録』六一四頁)。
- (93) 『言経』一九〇頁。
- (94) 『北野』一二〇頁。
- (95) 『義演』三七頁。
- (96) 『軍記大成』一一八頁。
- (97) 『言経』一九一頁。
- (98) 『北野』一二〇頁。
- (99) (慶長四年) 閏三月八日付徳川家康書状写「藤堂高虎宛」『高山公実録』卷之七(『高山』一四二頁)。
- (100) 『義演』三七頁。
- (101) (慶長四年) 閏三月九日付徳川家康書状「福島正則・蜂須賀一茂・浅野長政宛」『大日本古文書 家わけ第二 浅野家文書』(東京大学出版会、一九六八年) 一一〇号。
- (102) 『看羊録』には「治部は、首謀者であつたので、自分の子を家康の人質にした」とある(『看』一七〇頁、『海』四一二頁)。
- (103) 『北野』一二一頁。
- (104) (慶長四年閏三月) 毛利輝元自筆書状「毛利元康宛」「厚狭毛利家文書」(『関展』四三号)。
- (105) (慶長五年五月二十六日) 浅野幸長書状写「浅野長政宛」「坂田家文書」(『甲府市史』史料編 第二卷 近世

一、一九八七年）六五号。

(106) 『看羊録』には「「福原」右馬助「長堯」は、「事の」張本人であつたので、その土地を奪って、「早川」主馬頭「長政」らに返した」とある（『看』一七〇頁、『海』四一二頁）。

(107) （慶長四年）閏三月九日付大谷吉継書状「大阪城天守閣蔵」（『豊徳』三七号）。

(108) 白峰句『新視点 関ヶ原合戦——天下分け目の戦いの通説を覆す』（平凡社、二〇一九年）七二頁。

(109) 前掲註（86）。

(110) （慶長四年閏三月）毛利輝元自筆書状「毛利元康宛」（『厚狭毛利家文書』（『関展』四〇号）。

(111) （慶長四年閏三月）毛利輝元書状「毛利元康宛」（『山口県史』史料編 中世三、二〇〇四年、厚狭毛利家文書三〇号）。

(112) （慶長四年閏三月）毛利輝元自筆書状「毛利元康宛」（『厚狭毛利家文書』（『関展』四一号）。

(113) 三成が奉行衆の連署に復帰するのは、（慶長五年）八月一日付二大老・四奉行連署状「蒔田広定宛」「廊坊篤氏所蔵文書」（『特別展五大老』大阪城天守閣、二〇〇三年、一二八号）が初見である。また、（慶長五年）七月三十日付大谷吉継書状「真田昌幸・信繁宛」（『真田家文書』五三号）は、西軍首脳部を「年寄衆・輝元・備前中納言殿・嶋津」と記しており、三成が「年寄衆」の括りに入れられている。

(114) 光成準治『関ヶ原前夜 西軍大名たちの戦い』（KADOKAWA、二〇一八年）（初出二〇〇九年）四六頁。

(115) 前掲註（114）。

(116) （慶長四年閏三月）毛利輝元自筆書状「毛利元康宛」（『厚狭毛利家文書』（『関展』四二号）。

(117) 前掲註（104）。

(118) 「三河物語」（『戦国史料叢書 6 家康史料集』人物往来社、一九六五年）三八八頁。

(119) 『多聞』八三頁。

- (120) 『日本年報』一二三—一二四頁。
- (121) 『看』一七一頁。『海』四一二頁。
- (122) 『御夜話集』七七頁。
- (123) 『三藐院記』(続群書類従完成会、一九七五年)六三頁。なお『多聞院日記』は家康の伏見城西之丸入城を閏三月十三日とする(『多聞』八三頁)が、『三藐院記』の十二日のほうが信憑性は高い。
- (124) 『日本年報』一二三—一二四頁。
- (125) 前掲註(57)。
- (126) (慶長四年)閏三月二十一日付徳川家康起請文「毛利輝元宛」(『毛利家文書』一〇一七号)。(慶長四年)閏三月二十一日付毛利輝元起請文案「徳川家康宛」(『毛利家文書』一〇一六号)。
- (127) 慶長四年閏三月二十三日付吉川広家起請文前書写「黒田長政宛」(『黒田家文書』二一五・一号)。慶長四年閏三月吉日付黒田長政起請文「吉川広家宛」『大日本古文書 家わけ第九 吉川家文書之二』(東京大学出版会、一九七〇年)九五二号。
- (128) (慶長四年)閏三月八日付伊達政宗覚書写「有馬則頼・今井宗薫宛」(『引証記』十八(『仙台市史』資料編十一 伊達政宗文書二、二〇〇三年、一〇四一号))。
- (129) 慶長四年四月五日付伊達政宗起請文「有馬則頼・今井宗薫宛」(『大阪歴史博物館所蔵文書』(『特別展伊達政宗』仙台市博物館、二〇一七年、五四号))。
- (130) (慶長四年)閏三月吉日付相良頼房起請文前書写「黒田長政宛」(『黒田家文書』二一二・三号)。
- (131) 慶長四年四月二日付徳川家康起請文「島津義弘・忠恒宛」『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之一』(東京大学出版会、一九五一年)一〇九号。
- (132) (慶長四年)閏三月二十五日付徳川秀忠書状「真田信幸宛」(『真田家文書』九号)。

第三章 会津征討の歴史的位置づけ

―加賀征討との関係性の検討―

はじめに

本章では、石田三成が失脚した後から会津征討が起きるまでの期間を扱い、主に加賀征討・会津征討に焦点を当てていく。

会津征討は関ヶ原の役の引き金となった重大な事件である。しかし、途中で三成ら西軍が挙兵して関ヶ原の役に入ったため、西軍の挙兵の「切っ掛け」、つまりは、家康が会津征討のために大坂を離れた所しか着目・言及されておらず、関ヶ原の役への「導入」としての見方しかされていない。紙幅を割いたものでも、もっぱら「直江状」の真偽や、石田・上杉の事前盟約の有無に焦点が当てられている。管見の限りでは会津征討をめぐる政治的動向を扱った専門的な研究はない。

しかし、会津征討は秀吉の死後に初めて軍勢の出征に至った大事件であり、政治的な対立から武力衝突への移行を意味している。また、西軍が檄文で家康の会津征討に非を鳴らしている点からも、権力闘争をみていく上で会津征討は重大な事件であり、事件の性格そのものを解明する必要があるといえよう。関ヶ原の役の発端としての位置付けしかなされず、事件の性格について目を向けられてこなかったことが会津征討の課題といえるだろう。そこで本章では、会津征討の前に取沙汰された加賀征討へ向かう動きを踏まえながら、会津征討が秀吉死後の権力闘争においてどのように位置付けられるのか、その歴史的な位置づけを解明していく。

第一節 庄内の乱と家康権力の伸張

慶長四年（一五九九）閏三月の前田利家の死去、石田三成陣営の崩壊は、対立構造に大きな変化をもたらした。三成処分が公表された閏三月八日、三成寄りの立場にあつた島津義弘・島津忠恒・寺沢正成・立花親成は、誓紙を交わしている。

〔史料1〕⁽¹⁾

天罰起請文前書之事

今度就談合、不殘心底奉申出候之儀、聊以他言申間敷事

右旨於違犯者

（中略）

慶長四年

羽柴左近太夫

閏三月八日

親成（花押）

寺澤志摩守

正成（花押）

嶋津又八郎

忠恒（花押）

羽柴兵庫入道

義弘（花押）

談合で何が話し合われたかは定かではないが、「不殘心底奉申出候之儀」の文言から、今後の動向について腹を割った話し合いが行われたものと思われる。三成の失脚を受けて、今後とも変わらず連携を保っていく盟約を交わ

したのであろう。

この時、島津氏は領国内で問題を抱えていた。一ヶ月前の三月九日、島津忠恒は伏見で家老の伊集院幸侃を殺害してしまふ。幸侃は、島津氏の家老であると同時に豊臣政権との繋がりも深かった。そのため、島津氏の指南をおこなっていた三成を立腹させることになった。そして、幸侃の嫡男忠真は、幸侃殺害の報に接すると都城に籠城した（庄内の乱）。次の史料は、国許に下っていた島津龍伯が閏三月一日付で三成に宛てた書状である。

「史料2」(2)

以上

三月十五日之御状、同廿九日ニ令拝見候、然者幸侃生害之儀、今度得御意急ニ仕出し候之歟と存候処ニ、又八郎短慮之仕立、言語道断不及是非候、曾以拙者へも談合無之候、曲事深重ニ候、兵庫入茂致不会之由申候歟、以可為同心候、誠ニ御腹立尤至極ニ存候、定而伺尊意如此候之哉と存候条、源二郎下城之儀申付候、最前ハ我等可任分別由申候つれ共、在所無動天耕作等可申付之由、貴老より被仰下之段、只今申来候間令遠慮候、彼是急度使節を以可申達候間令省略候、恐惶謹言

嶋修入

閏三月朔日

龍伯（花押）

石治少老

御報

龍伯は、幸侃の殺害に当たって三成の許可を得ていなかったことが、忠恒の「短慮」であるとし、三成の立腹は「尤至極」としている。本来であれば、三成の主導で庄内の乱の收拾が図られたであろうが、「史料2」が出されて間もなく三成は失脚し、家康が乱の收拾に介入することになる。

四月二日、家康から島津義弘・忠恒宛ての起請文が出されている。

「史料 3」(3)

敬白起請文前書之事

一被対^① 秀頼様、御疎略在間敷之由、尤候事

一対御父子御両三人、疎略毛頭在之間敷候付、拔手表裏有之間敷候事

一佞人之輩在之而、御間相さまたくる輩雖有之、直談申、互相晴可申事

右、若於偽申者

(中略)

慶長四年己亥

卯月二日

家康(花押、血判)

薩摩宰相殿

同少将殿

一条目より、秀頼への忠誠を前提としながらも、島津氏から家康に対して誓紙が出されていたことがわかる。誓紙の趣旨は、家康と島津氏の友好を約したものであり、三成寄りの立場であった義弘も、家康との距離を縮め始めていたのである。

庄内の乱が起きたことは、家康にとって好機であった。家康は乱の收拾を通じて、九州の諸大名への影響力を高めていく。次の史料は、同年七月九日に寺沢正成から島津忠恒に送られた書状である。

「史料 4」(4)

乍好便令啓候、いんしゆいん源二郎事、于今立籠在之由、就其、内府様より為御見廻、山口勘兵衛被仰付候、其元之様子、具ニ被仰上可然存候、此御使者上着次第得御意、拙者も罷下可申候、次ニ源二郎弟共之儀、近日佐竹へ可被遣旨ニ候、是又兵庫殿相談仕儀ニ候、爰元於様子者、涯分疎略不存候、猶追々可申入候条、具

二不能多筆候、恐惶謹言

寺志摩

七月九日

正成（花押）

薩摩少将様

人々御中

傍線部より、山口直友が使者として島津領へ下るので、そちらの様子を詳しく報告するよう指示すると共に、直友が帰還したら家康の意向を伺って、広高も島津領へ下ると伝えている。寺沢正成は、九州の諸大名と繋がりを持っていることに加え、長崎代官として国際外交に携わっていたため、国際交易構想を抱く家康にとって非常に欲しい人材だったと思われる。以後、家康と正成の関係は強まっていく。

アレックスサンドロ・ヴァリニヤーノが、西暦一五九九年十月二十二日（和暦・慶長四年九月四日）付でイエズス会マニラ学院長ファン・デ・リベラに宛てた書簡によると、壮大で現実と乖離していた家康の国際交易構想に困惑していた寺沢正成は、オルガンテイノに対して、家康から構想の実現性について尋ねられたら、本当のことを言って家康の迷いを覚まさせて欲しいと要請したという⁽⁵⁾。慶長四年九月頃には、家康の国際交易構想に対して頭を悩ますほど、正成は家康に近い存在になっていたのである。

家康は、秀吉が死去した慶長三年から島津氏へ接近を図り、また、庄内の乱においても「早々御成敗尤候」⁽⁶⁾と、島津忠恒の行為を支持して、島津氏に対して好意を示したが、その背景には、島津氏が九州の大大名であったことに加えて、琉球をはじめとしたアジア諸国との繋がりがあったであろう。慶長五年一月二十七日に島津義弘・島津忠恒・寺沢正成の三名が、大明総理軍務都指揮茅老爺に対して、勘合貿易の復活をはじめとした家康の意向を取り次いでいる⁽⁷⁾。島津義弘は、島津家の中で最も三成に近い立場にあったが、慶長四年八月六日の忠恒宛ての書状で「庄内之儀ニ付、從内府様別而被添御心、弥御懇之儀不大形候」と述べており⁽⁸⁾、家康との距

離は縮まっていた。

そのほかの九州の諸大名に対しても、家康は乱の鎮圧を命じることで影響力を高めた。次の史料は、家康が相良頼房に宛てた書状である。

「史料5」(9)

御下以来不申入候之間、以書状申候、仍伊集院源次郎居城相抱有之由承候、嶋津父子為御見廻、使者差下候、龍伯父子被仰次第、自身御立、御馳走尤候、猶期後音、不能具候、恐々謹言

七月九日

家康(花押)

相良左兵衛尉殿

家康は頼房に対して、島津龍伯・忠恒の要請を受け次第、自ら出陣して島津氏を援助するように命じている。立花親成も、家康の命令を受けて援兵を整えている(10)。

寺沢正成と同様に三成と親密な関係にあった小西行長に対しても、家康は影響力を高めようとした。『一五九九年一一六〇一年、日本諸国記』には、家康が小西行長を味方に引き入れようと努めた様子が記されている。

「史料6」(11)

(石田) 治部少輔追放後、内府様は(小西)ドン・アゴスチイノを己れの味方に引き入れようと努めた。まず第一に、彼の朝鮮における大いなる事績を、次いで彼がその友人の(石田) 治部少輔に対して示した多大の忠誠心を、それぞれ称賛することによってである。その上、内府様は、日本の他の諸侯から徴したのと同様に(小西)ドン・アゴスチイノからも或る誓約を取りつけようとした。(すなわち)内府様が政権をとった時には、自分たちは必ず内府様を助け、その陣営に立つであろうという内容である。しかし、(小西)ドン・アゴスチイノは、若君秀頼様の栄誉や身分を傷つけぬよう万全を尽くすという条件を別にしては、その誓約に応ずることを欲しなかった。このように、彼の秀頼様への熱意と忠誠心には並々ならぬものがあつた。し

かし、彼はそのために、内府様が、何らかの機会をとらえて自分を追放し、虐待するやもしれぬ危険の中に、我と我が身を投ずることになった。他の諸侯は、すべてまったくの無条件で、いとも容易にかの誓約に応じた。結局、内府様は婚姻という手をつかつて彼を味方に引き入れようと努めた。すなわち自分の曾孫―自分の嗣子と信長の娘（との間に生まれた）娘の子女―を（小西）ドン・アゴスチノの嫡子に嫁がせようとした。内府様の曾孫といえは高貴の身分であり、この婚姻は彼にとっておおきな名誉であつたにも拘わらず、（小西）ドン・アゴスチノはいとも勇敢であつたので、彼に（何度も）懇請させた。（小西）ドン・アゴスチノは肥後の自領にいたが、内府様はこの縁談を彼の妻であるドナ・ジュスタ―彼女は（小西）ドン・アゴスチノの妻であり、今は十五歳にはなっている（であろう）少年の母である―のもとへ持ち込んだ。内府様は肥後のドナ・ジュスタに宛てて書状を送り、「この件に決着をつけるため急ぎ大坂へ来ること。さもなければ本件に同意する旨（伝言）を寄こされよ」と要求した。しかしながら彼女は、この件については、いずれそちらへ赴いた折に談合するつもりである。両名ともにまだ少年ゆえ、急ぐ必要はありますまい、と述べて、事を引き延ばした。しかし彼女は、後日、大坂へ赴き、ふたたび内府様と執拗に談合して、この件に同意して内府様を大いに満足させた。しかしこれは（単なる）挨拶に過ぎなかったように見えた。けれど、内府様はその希望どおり、（小西）ドン・アゴスチノと連携するには十分でなかったのである。

『一五九九年一一六〇一年、日本諸国記』は小西行長が家康に完全には服していなかったとするが、行長は庄内の乱の平定にあたるようにという家康の内意を受けて領国に下っており（12）、寺沢正成と同様に家康の指揮下にあつた。

このように島津義弘、寺沢正成、立花親成、小西行長らは、庄内の乱への対応を通じて家康の影響を受けるようになっていったのである。

また、八月十四日、家康が常御所で後陽成天皇に謁見した際、宴で三献がおこなわれている（13）。藤井讓治氏

は、この参内の様子は、秀吉やそれ以前の室町将軍が参内した折のものと変わりなく、天皇の側が事実上、家康が「天下人」であることを承認したことを意味していた⁽¹⁴⁾。『多聞院日記』が伏見城への入城を果たした家康を「天下殿ニ被成候」⁽¹⁵⁾と評しているように、慶長四年当時から家康を天下人と見なす者は少なからずいただろうが、実際に家康が天下人として武士の頂点にいたかは別の話である。石田三成陣営の崩壊によって家康の権力が伸張したことは確かであるが、これを過大評価してはならない。大坂には前田利家の跡を継いだ利長が健在であり、徳川氏と前田氏による勢力均衡は保たれていた。

第二節 家康暗殺計画の風聞

石田三成陣営の崩壊から半年後、前田利長が領国へ下っていた最中に事件が発生する。慶長四年（一五九九）九月七日、家康は秀頼に重陽の節句の祝詞を述べるために伏見から大坂へ下り、備前島の石田三成邸を宿所とした⁽¹⁶⁾。三成邸が宿所となったのは、接待する側を気遣ったことであり、三成邸が空き屋敷だったためとされている⁽¹⁷⁾。そして、三成邸に入った家康のもとに、家康暗殺の企てがあるという風聞がもたらされる⁽¹⁸⁾。

『関原軍記大成』によると、家康暗殺計画の風聞は、前田利長を首謀者とし、浅野長政、大野治長、土方雄久が、重陽の節句の際に登城する家康を討ち取る計画というものである。七日夜に増田長盛と長束正家が、家康のもとを訪れて風聞を告げたという⁽¹⁹⁾。

『慶長年中卜斎記』では、家康に風聞を告げたのは増田長盛のみであり、暗殺計画については記されているのは、実行者とされた大野治長、土方雄久のみである⁽²⁰⁾。

一方、『看羊録』は風聞を詳細に記している。第二章で触れたが、三成が失脚した一連の事件で、三成の処分を不服とする加藤清正が前田利長らと反家康同盟を結んだところに話は遡る。『看羊録』では、家康暗殺計画は反家

康同盟による計画とされている。前田利長は伏兵を忍ばせて、重陽の節句の際に登城する家康を討ち取ろうと計画。その際、土方雄久は自ら家康を刺そうと請うたという。繰り返しとなるが、反家康同盟の話は、誇張されて伝わった情報と思われる点を付言しておく。

『看羊録』では、家康に暗殺計画の風聞を告げたのは三成とされており、加藤清正らと反目していた三成は、家康に媚びようという心積もりもあって、計画を書状で家康に報じたという。これを受けた家康は、浅野長政に暗殺計画について問い質したが、長政は否定。次に増田長盛に問い質したところ、長盛はこうした風聞があると肯定したため、家康は計画を黙秘した浅野長政を自刃させようとしたが、君命にしか従えないと長政が拒否したので、領国の甲斐へと追放。さらに、家康は「淀殿を室として政事を後見し」という秀吉の遺命を盾に、淀殿を室にしようとしたが、すでに淀殿は大野治長と通じて妊娠していたので拒絶。家康は怒り、治長を捕らえて関東へ流し、さらに途中で死を与え、土方雄久も捕らえて関東へ流したという。

この時、淀殿は妊娠しておらず、大野治長も死罪になってはいない。それゆえ、『看羊録』の伝える内容は正確とはいえない。しかし、『多聞院日記』九月十七日条も、秀吉の遺言に基づいて大坂で淀殿と家康が祝言を挙げたとする風聞に続いて、大野治長が淀殿を連れて高野山へ駆け落ちしたとする風聞を載せており、最後に「珍重」と述べている。暗殺計画の一件に関する姜沆の認識は、正確とはいえないものの、当時の人々の認識（風聞）に近かったということができる。また、国王である宣祖に上奏することを想定して日本の情勢を記録した『看羊録』の史料性格を踏まえれば、こうした風聞があったことは確かだろう。

毛利家臣の内藤周竹も十月一日付で息子又二郎へ宛てた書状において、大野治長が淀殿と密通したとする風聞を載せており、治長が処刑されそうになったところを宇喜多秀家が匿ったとし、異説として治長は処刑されたと、高野山へ逃れたとする噂もあるとしている（21）。

『慶長年中卜斎記』と『関原軍記大成』は、治長が家康暗殺計画に関与していたとするのに対して、『看羊録』

での治長は淀殿との密通を理由に処罰されている。しかし、内藤周竹書状を踏まえると、『看羊録』のほうが当時の風聞を正しく記しているといえるのである。

しかし、内藤周竹書状に宇喜多秀家が治長を匿ったとする噂が記されていることや、『垂相公御夜話』に大野治長、宇喜多秀家、土方雄久、前田利家が合戦について談話した逸話が記されていることなどから、治長と前田系の勢力との間には親交があったと思われる、家康暗殺計画の一件に治長が巻き込まれていた可能性も捨てきれない。だが、処分の直接的な原因は、淀殿と密通したとする風聞と思われる。

一方、『慶長年中卜斎記』と『看羊録』の記述の共通点は、浅野長政が暗殺計画者の中に名を連ねていないこと、増田長盛の証言が事件の決め手となったという点である。なぜ、暗殺計画に加わっていない浅野長政が謹慎処分になったのか。推測となるが、『看羊録』が伝える通り、長政は利長を庇ったがために巻き込まれたと思われる。家康暗殺計画の一件については、事件の詳細を記した一次史料が未だ確認されておらず、家康に風聞を告げたのは誰かなど、定かでない点が多い。しかし、家康暗殺計画に関する風聞を姜沆が記録していることや、前田利長が九月二十七日付で堀秀治に宛てた書状において「対我等へ如何様之申成も有之内府御不審之子細も候故歟」「如御存、連々对内府へ毛頭不存疎心儀ニ候間」といった旨を述べている⁽²²⁾ことから、当時、利長が家康から何かしらの嫌疑をかけられていたことは確かである。家康暗殺計画の風聞があつて利長が嫌疑をかけられたとする大筋の流れは間違いないだろう。

第三節 家康の大坂入城と「遺言体制」の改変

家康暗殺計画の風聞を受けて、『慶長年中卜斎記』では、九日夜に平岩親吉率いる徳川軍が、家康の命令によって急ぎ伏見城から大坂城に駆け付け西之丸や大手口などを固めたという⁽²³⁾。しかし、『北野社家日記』九月十一

日条に「今夜大坂雜切候て伏見より人数下也、御ちやあ御宿ニて咄」⁽²⁴⁾とあり、徳川軍が大坂に向かったのは十一日のことと思われる。

事件は朝廷の耳にも入り、山科言経の九月十二日の日記によると「大坂ニテ雜説種々有之、方々人ヲ遣了、相尋了」と、情報収集をおこなっている⁽²⁵⁾。また、同日に勧修寺光豊が秀頼・家康の許へ勅使として遣わされるまでに至った⁽²⁶⁾。しかし、山科言経は翌日の日記に「大坂雜説大略シツマル也云々、猶々未休也」と記し⁽²⁷⁾、義演も『義演准后日記』同月十三日条で「大坂雜説静謐、珍重」と記している⁽²⁸⁾。勅使として遣わされた勧修寺光豊も十四日に「無事無殊事」という返事を持ち帰っている⁽²⁹⁾。豊臣政権側が朝廷に騒動を伏せようとした政治的配慮もあるであろうが、この頃には解決とまではいかなくても、騒動自体は一段落したとみていいだろう。これら日記の書かれた日付からみて、騒動が広まり京都を動揺させた要因は、伏見城から徳川軍が移動したことにあつたと思われる。

九月十三日付で毛利輝元が毛利秀元に宛てた書状によると、大坂に下った家康は三つの要求を出している。

「史料7」⁽³⁰⁾

返々 大閤様被仰置と候ても 勅諭を御違背之段者、非御本意之由、家康被申之由候、何もかやうの妨を申人在之由候条、此節可相究之由、堅被申候て相聞之候、為御心得候、火中

急度申候、今月七日内府大坂へ被罷下候、其題目者、

一中納言殿女中江戸へ指下、一所ニ候やうに在度之通言上候、自然別腹ニ子共出来候へハ、気のさゝハリニ以来罷成儀候条、是非右之女中御下候やうにとの家康被申事候つる、多分秀頼様御袋様、此中者御分別候つる、何と共候哉、此節御下有間敷之由 御意の段、於家康外実無曲次第候、内々申妨仁在之由承及候条、是非申□被仰聞候やうにと□御存分被申之由候

一^② 当今様当春御隠居被成、近衛殿御腹王子ニ御代を御相続有度之由、勅諭候所ニ、中山殿御腹王子ニ御相続

之通、大閤様被仰置候之条、無御分別之通被仰切候事、更無曲次第之由、家康達而被申之由候

一東国衆之儀者在大坂、西国衆の儀者在伏見と大閤様御置目候之处、備前中納言殿在大坂之段、更不及分別之由、家康堅被申上之由候、備前中納言之儀者在伏見二大かた澄候由候、其外の儀者未相聞之候、家康人数追々大坂へ被指下候、家康事者石柰丸二一昨日より被罷居之由候、右三ヶ条之辻、如何可相澄候哉、いつれも趣追々可申候、其元の儀御隙も可入候へ共、少々の儀者被聞、御上可然候、かやう申候とても、事々敷御上りハ在ましく候、為御心得候、恐々謹言

右馬頭

九月十三日

輝元（花押）

秀元

進之候

一つ目は、家康は秀忠の正室（崇源院）を国許に戻したいと申し出たが、秀頼の裁可が下りなかったという。遺憾に思った家康は、何者かが申請を阻もうとしたことを知り、怒りを露わにしたようである。

二つ目は、後陽成天皇の皇位継承者についての問題である。後陽成天皇は、政仁親王（のちの後水尾天皇）を皇位継承者にする勅諭を下したが、豊臣政権側は、良仁親王を皇位継承者とする秀吉の意向に反するとして拒絶した。家康はこれを非難し、天皇の意向に沿うよう訴えている。

三つ目は、西国衆は伏見に在るようにとの秀吉の遺命があるにもかかわらず、宇喜多秀家が大坂に居ることを家康が非難したというものである。秀家は抵抗したようであるが、伏見への転居を余儀なくされている（31）。

秀忠正室の江戸下向と、皇位継承者の問題から、物事の裁許が大坂の秀頼のもとで下されており、勅諭への対応も大坂で処理され、家康は関わっていなかったことがわかる。『多聞院日記』で「天下殿ニ被成候」と評されながらも、政治の中心は、家康の居る伏見ではなく、秀頼の居る大坂だったといえる。また、家康が要請した秀忠

正室の江戸下向が阻まれている点も無視できない。

家康は、この状態にもどかしさを感じていたのであろう。「史料7」三条目によると、家康は九月十一日、石田正澄邸に居所を移している。理由は、三成邸が城外にあったのに対して、正澄邸は城内にあったためである（32）。『慶長年中卜斎記』によると、正澄邸へ移る前の二日間、増田長盛邸に居たようであり、家康の転居に伴って正澄は堺へ移ったという（33）。その後、九月二十二日には北政所が大坂城西之丸を家康に譲るといふ話が浮上しており、二十六日に北政所は京都へ移った（34）。程なく、家康は大坂城西之丸を居所としている（35）。家康は一時的に大坂へ下ったはずだったが、事件を口実として完全に腰を落ち着けた。

徳川家臣の伊奈令成（昭綱）は大坂転居について「兎角伏見ハ手遠ニ御座候之条、大坂ニ居住被申、諸事仕置等可被申付分候」と記している（36）。家康は、前田利長が不在の間に大坂に入ることと秀頼との一体化を図ったのである。

九月二十一日付の島津惟新の書状（37）によると、家康は、前田利長および加藤清正が上方へ入って来られぬように迎撃態勢を整えている。利長に対しては大谷吉治と三成の内衆一千余が越前へ配置され、清正に対しては菅達長と有馬則頼が淡路へ配置された。従って、公家衆の日記が記す「大坂雑説静謐」とはあくまで大坂の騒ぎが静まったのみで、事件の根本的な解決は未だ手付かずであった。

事件の経過について、毛利家臣の内藤周竹は十月一日付書状で次のように記している。

「史料8」（38）

（前略）

一 去月十三四比、家康俄大坂石田殿之宅まで被参之、則二丸へ被押入候、内衆にハ武具ニて則時来候へと被申置候、三万計有之由候、息三河殿ニ二万被副置之由候、其趣をハ当家江被仰通之由候

一 おひろい様之御局をハ大蔵卿と申之、其子ニ大野修理と申御前能人候、おひろい様之御袋様と密通之事共

候か、可相果之催共ニて候処、彼修理を宇喜多被拘置候、被相果候共申候、高野江逃候共申候由候、兎角若衆計祇候被申候へハ、無正儀事ニて候間、家康・輝元ハ大坂ニ御座候へハ不可然候、伏見にハ三河守殿・秀元御座候て尤可然之由、被仰談之由候、下々之衆ハ祝之由申候、定而左右あるへく候、今日迄之沙汰ニ候

(後略)

家康は毛利氏に大坂城内へ徳川軍を入れた件を報告している。また、大野治長が淀殿と密通したとする風聞を受けて、秀頼の周囲に「若衆」ばかり仕えるのは良いことではなく、不祥事が起こらないように家康と輝元が大坂に腰を据え、伏見には結城秀康と毛利秀元を置く体制を毛利氏に提案している。

三成の陣営が崩壊したあと、増田長盛ら奉行衆は家康に協力的な立場をとり、毛利輝元も閏三月二十一日に家康と誓紙を交わして関係を改善していた。当時、家康と輝元は対立関係ではなかったため、家康は前田氏と対峙するにあたって輝元との連携を模索したのである。『看羊録』は当時の輝元について「二酉（の家康と輝元）がすでに和睦していた」としているため、家康と協調したと考えられる³⁹。

大野治長の処分については、伊奈令成が九月二十三日付の書状で「於爰元、秀頼様御為悪事申ニ付て、大蔵卿局・大野修理退出被申候」⁴⁰と記している。「悪事申」の指す内容が密通の風聞に止まるか否かによるが、秀忠の正室の江戸下向を阻止しようとしていた人物が大野治長で、密通の風聞を理由に配流された可能性も考えられる。

家康の言う「若衆」には宇喜多秀家も含まれていたと思われる。第一章で触れたように秀家は、徳川秀忠、前田利長と共に次代の政権を担う人材として位置づけられていた。また、秀次事件直後の文禄四年（一五九五）八月三日に出された五ヶ条の定書⁴¹では、徳川家康、宇喜多秀家、上杉景勝、前田利家、毛利輝元、小早川隆景の中で秀家だけが「若年衆」として乗物の使用を許可されていない。秀家を「若年衆」とするのは共通認識とし

であつたといえる。おそらく秀家も、秀頼の周囲に置いておくことは危険と判断され、西国衆は伏見に在るようにとの秀吉の遺命を理由に伏見への転居を余儀なくされたのだろう。ただし、秀吉の遺言により、伏見は大坂と対をなす重要拠点として位置づけられており、これ以降も大老衆の連署状に秀家も花押を据えていることから、伏見への転居は秀家の失脚を意味するものではないことは付言しておく。

慶長四年九月は、家康があらゆる変革に挑んだ一ヶ月だった。皇位継承者の問題では、勅諭に背くことは秀吉の本意ではないという建前をとって、秀吉の遺命に真っ向から立ち向かつてはいないものの、秀吉の遺命を退けようとしている点は注目に値する。

そして十月一日、「遺言体制」は家康によって再び改変された。家康による改変は、失脚した浅野長政を除いた三奉行の連署状によって諸大名に通達されている。

「史料9」(42)

今度 秀頼様御番御置目等被相改被仰付候、就其惣様之儀、今迄ハ諸事猥之儀も雖有之、此以前之事者被打捨候、然者向後之儀、若被相含悪心、御法度御置目於被相背者、其罪科嚴重ニ有御糺明、雖為傍輩可有御成敗、又御法度御置目をも被相守、於被抽忠切者、身上被引立、可有御恩賞之条、其段為御届可申入旨候間、如此候、恐々謹言

長束大蔵

十月一日

正家（花押）

増田右衛門尉

長盛（花押）

徳善院

玄以（花押）

常陸侍從殿

人々御中

「秀頼様御番御置目等被相改被仰付候」と、秀頼の命令という名目のもと、秀頼に近侍する者と「遺言体制」が改められた。そして「今迄ハ諸事猥之儀も雖有之、此以前之事者被打捨候」として、乱れた秩序を一新するという大義が掲げられた。

「遺言体制」改変の全貌は未詳であるが、知行配当に大きな改変があつたことが同史料から確認できる。知行配当は、慶長三年八月八日に現状維持の鉄則が崩された⁽⁴³⁾ものの、知行に関する五大老連署状のほとんどが安堵状であるように、前提は現状維持だった。しかし、今回の改変では、人一倍忠誠を尽くした者は引き立てられ、恩賞を与えられるとされており、現状維持の前提すら崩されている。のちに「内府ちかひの条々」で弾劾される長岡忠興や森忠政への領知加増⁽⁴⁴⁾は、この改変に基づいたものといえるだろう。

家康は、家康暗殺計画と、大野治長の密通、二つの風聞をきっかけとして、乱れた秩序を一新するという大義のもとで変革に着手した。前田利長をはじめ、大野治長、浅野長政、宇喜多秀家といった前田氏と親しい勢力を大坂から排除し、豊臣秀頼との一体化に成功。権力を大坂の家康に一極集中させた。こうした歴史的展開から鑑みれば、二つの風聞が家康から発せられた可能性は高い。

この改変は秀頼の命令という名目で行われているように、秀吉の遺命を、秀頼の命令で上塗りしている。この時期から家康は、秀吉の遺命を退けようと動いており、「遺言体制」の否定に入つたと評価できる。のちに「内府ちかひの条々」で非難される家康の施策は、これ以降に行われたものが多くを占めており、家康は本格的に豊臣政権の篡奪に入つたのである。

こうした一連の変革の一環であろう九月十八日付で宮部長熙が徳川氏に誓紙を提出している。

敬白靈社起証文前書之事

右 秀頼様御為被思食 内府様御座候間、向後猶以奉対 内府様不可存表裏別心疎略候、自然惡逆無道を存立、申懸者雖有之、一切不致同心、無二可抽忠節候、若此旨於有偽者、忝モ此靈社起請文御罰深厚ニ可罷蒙者也、仍前書如件

慶長四年

宮部兵部少輔

九月十八日

長熙

新庄駿河入道殿

山岡八郎左衛門入道殿

江雪斎

これ以前にも家康（の取次）と大名の間で誓紙の遣り取りはあったものの、同年四月五日の伊達政宗の誓紙（46）では、家康と政宗の間を取り次いでいた有馬則頼・今井宗薫に対して、取次を正式に依頼するにあたっての誓約であり、大名と取次の間での盟約といった意味合いが強かった。前年の十二月二十五日付けで交わされた黒田長政の誓紙（47）も同様であるのに対し、「史料10」は、大名と取次の関係には一切言及されておらず、家康に対する忠誠のみが記され、文面が定形化されている。おそらく、「史料10」と同文の誓紙を徳川氏に提出した大名が他にもいたと思われる（48）。家康は、諸大名との間に豊臣政権（公）とは別の私的な主従関係の形成に動き始めたのである。

第四節 前田利長の対応と軍事的緊張

家康の大坂入りを前田氏はどのように受け止めたのか、『象賢紀略』は次のように記している。

「史料 11」(49)

あんのごとく金沢へ利長様御下跡に、大府公大阪西之丸へ俄に伏見より御はいり候て、其時奥村伊予は大阪に芳春院様へつきて居被申候、村井豊後は伏見御たやに万事申付候て有之、其時に豊後儀、家康公之人数にまぎれ物に成候て、大坂へかけ入、芳春院様御泪をながされ、大納言様に此通みせ申度と豊後に御意にて、辱由申候事、其時より方々から利長様へ注進御座候へば、扨利長様と大府公と御中あしく、色々さま／＼之事

記述には、家康が大坂城西之丸に入つたとあるため、九月七日に三成邸へ入つた時ではなく、家康が西之丸に入つた九月二十七日以降、あるいは徳川の軍勢が大坂城へ入つた九月十一日以降の話と考えられる。前田氏が秀吉から託された大坂を家康に占拠されたことを、芳春院をはじめ前田家は恥辱と感じ、徳川氏との関係は「御中あしく」となったという。『看羊録』は、大坂に入つた家康が、前田邸の留守居に対して屋敷の門楼を破却するよう命じ、それを拒否した留守居との間に一触即発の危機があつたと記している(50)。

こうした家康の動きに対して、領国にいた利長の許では抗戦か否かで方針が論じられていたと『象賢紀略』は記している。

「史料 12」(51)

右最前大府公大坂西之丸へ御は入候注進方々より有之刻、富山にて太田但馬・横山大膳兩人に御前にて御相談の時、但馬被申は、早々御人数おひ／＼に成共御上洛被成可然由申候、如何々と御意の時、大膳被申候は、今ほど御上洛御大事如何と被申候、扨又但馬被申候は、やれ大膳、秀頼様御もりに被為成大納言様は、や御遠行、今大坂を人に御とられ口惜次第、今ひつきり御上洛候は、上方に有之国々大名過半は御味方被仕衆有之と、つまりは一戦被成可然、殊御みだい様・御母儀芳春院様上方に御座候、孫四郎様も御座候へば、今日御分別所と但馬被申候へ共、大膳申すやうにおぼしめし、一日々と相延申候(後略)

太田長知は「今大坂を人に御とられ口惜次第」として大坂を取り戻すために上洛すべきだと主張し、それに対して横山長知は慎重になるべきだと説き、利長も慎重論を採ったという。

前述のように、家康は利長が上方へ入って来られぬように大谷吉治と石田三成の家来一千余を越前に配置した。『看羊録』にも「家康は、遂に関東の諸将に令して、肥前（利長）が倭京に上ってくる路を塞ふさぎ、また、石田治部少輔に令して、近江州の要害を防備させた」（52）と、同様の趣旨が記されている。『細川忠興軍功記』によると、長岡忠興の領国に対しても丹波衆が押さええとして置かれたという（53）。

ここで、九月における家康の軍事行動を整理すると、まず、大坂へ下った四日後にあたる九月十一日に伏見から軍勢を呼び寄せている。自身が大坂入りした時ではなく、あえて後日に、京都の人々を騒然とさせるほどの軍勢を動かし、それを秀頼の居る大坂城に入れたということは、周囲を納得させられる理由があつたということである。

そして次に、前田利長らの上洛を阻止するために、三成ら周辺の大名に軍役を課して迎撃部隊を配置している。三成らは家康の家臣ではなく、豊臣政権の軍役として出兵しており、彼らを動かすには大義名分が不可欠となる。

『関原軍記大成』は「或説」という扱いで、前田利長・利政は領国へ下る時に土方雄久に対して、家康が大坂へ入ったら大野治長と共に家康を討ち取るよう命じ、家康の死を受けて利長らは上方を制圧する計画を語った話を載せている（54）。おそらく当時、これに近い風聞があつたのだろう。秀頼や家康の安全を確保するという理由で大坂城に徳川軍を入れ、クーデターを阻止するという理由で三成らに軍役を課したと考えられる。

九月二十七日付で前田利長が堀秀治に宛てた書状によると、堀秀治は利長を案じて上方の変事を報じ、利長に上洛するようにと助言していた。

「史料 13」（55）

御状畏入存候、如貴意我等も此砌可罷上存候処、路次所々兵士居置、往還之族相改之由、其聞候、然者對我

等へ如何様之申成も有之内府御不審之子細も候故歟、兎角無御心元仕合候、如御存、連々対内府へ毛頭不存疎心儀ニ候間、幾重も御理可申達存、上方へ使者為指上、始末申窺候事候、於様子者可御心安候、猶追而可申談候、恐々謹言

羽肥前

九月廿七日

利長（花押）

羽久太様

御報

文意から「史料13」の指す上洛は、「史料12」で太田長知が主張した上洛とは異なり、弁明のための上洛と考えられる。堀秀治の領地のある越後国は、前田領の東に位置しているため、堀秀治は利長を牽制するように家康から指示を受けていたと思われる、事件の情報が得られたのであろう。利長も秀治と同様に上洛して弁明する意向であったが、家康が兵を配置し、往還する者を取り調べしているとの情報が入り、叶いそうにないと見通している。そのため、使者を遣わすことで弁明しようとしていた。

越前へ派兵された牽制軍は、前田軍の上方制圧を阻止することを名目とし、前田氏に軍事的圧力をかけることを目的としたであろうが、「史料13」によると弁明のための上洛すら儘ならなかったことがわかる。家康は、豊臣政権内で利長謀反の容疑を確定させるまでは、利長に弁明の機会を与えないようにしたのであろう。『前田家雑録』によれば、使者として派遣された横山長知でさえ、越前舟橋（福井市）の関所で通行を遮られ、宇喜多秀家の執り成しで漸く通行できたという（56）。

利長は家康との和平の道を模索する一方で、九月二十八日付で家臣の高畠定吉らに防備を整えるように命じている（57）。牽制軍が置かれている以上、当然の成り行きといえる。この時点では戦端が開かれる可能性も大いにあったのである。豊後臼杵の大名太田一吉は次の風聞を記している。

態以書狀申入候、先度者為御見舞以使者申入候間、定參着可申候、其後御左右承不申候、其元様子無御心元存候事

① 昨日從上方申越候、内府様、羽肥前殿へ御間之儀少被仰分御座候て、雜説雖御座候、先々無相替儀之由候、乍去、近日中村式部少輔・堀尾帯・生駒うたを以、羽肥前殿へ御使を被立由候、か様之儀にて如何成行可申哉と存候間、為御心持態申入候、定從兵庫殿可被仰遣候へとも、海上不自由時分候間、自然をそく候はんかと存、申入候、御仕立等之御心持にも可罷成かと存候て申入候、弥無御油断可被仰付候、慥成儀ハ無之候、風聞ニハ、右之衆羽肥前殿へ御使ニ被遣候上にて、いかゝ可成行哉と申候間、其御心得候て万御心遣尤候

(二条目略)

③ 一上方之雜説付、我等も可罷上と存候処、彦山之儀、当国と境目候間、か様之儀付而罷上候儀も無用と、從上方も申越候間、不罷上候間、何にても御用之儀可被仰越候、猶々追々可申入候、恐惶謹言

太田飛彈守

九月廿八日

一吉(花押)

薩摩少将様

人々御中

家康が利長に対して言い分があつたことで、雜説があつたが、ともあれ変わりはないこと。しかし、風聞によると、近いうちに中村一氏、堀尾吉晴、生駒親正が使者として利長のもとへ遣わされるので、成り行きが注目されているという。

一条目に「昨日從上方申越候」とあることや、三条目に「罷上候儀も無用と、從上方も申越候間」とあること

から、太田一吉は国許にあったと考えられ、上方と豊後の距離を考慮すると、この情報は九月中旬のものといえる。中村一氏、堀尾吉晴、生駒親正が使者として利長のもとへ遣わされると記している点は重要であり、この三名は、『関原軍記大成』によると、慶長四年正月に浮上した家康の私婚問題で、西笑承兌とともに詰問使として家康の許に派遣されている（59）。もつとも、詰問使については、村井長明の覚書『亜相公御夜話』では有馬則頼・浅野長政となっており（60）、検討の必要があるが、三名は『慶長年中卜斎記』では家康に向島への移住の進言をおこなっており、また、伏見城入城を要請する使者としても登場する。三名の政権内の役割については不明な点が多いが、二次史料のみではなく、「史料14」からも三名に関する記載が確認できることから、政権内で起きたトラブルの対処をはじめとして、何かしらの職務があったことは確かである。おそらく、豊臣公儀の重大な案件を扱う使用者として活動していたと思われる。

中村一氏らが利長のもとへ遣わされるというのは、あくまで風聞であり、実際には北陸まで派遣されることはなかったと思われるが、周囲がこうした認識を抱いたということは、事件の構造が単なる徳川氏と前田氏のトラブルではなく、利長が公儀から詰問される立場にあったということである。なお、家康の私婚問題の際は、詰問使に対する家康の返答次第では、前田利家が豊臣秀頼の名代として家康を征討することになっていたが、立場を逆転している。いわば、家康は意趣返しをしたのである。

その後の展開として、通説では、家康は十月三日に諸将を大坂城西之丸に招集し、加賀出征の号令を下したとされている（61）。また、その際に加賀小松の大名丹羽長重は先鋒を請い、翌日に家康から吉光の脇差を与えられたという。

しかし、会津征討の事例を踏まえれば、これは後世の創作と思われる。会津征討では、号令が出される前に家康は長岡忠興らに先鋒を命じ、島津惟新に伏見城の防備を命じている。諸大名に号令を下す前に重要な役割を担う者たちに声をかけて出征の手筈を整える用意周到さが、通説となっている加賀征討の筋書にはみられない。ま

た、会津征討の際は、号令が下ると諸大名はすぐさま戦支度をはじめて軍事行動に入っているが、加賀征討の際には軍事行動への移行がみられない点。そして、多数の大名に加賀出征が周知されたのであれば、それに言及した一次史料が一点は伝存してもよさそうであるが、確認できない点から加賀出征の号令は下っていないと判断する。

『寛永諸家系図伝』によれば、丹羽長重は家康の厳命により国境を塞いだという⁽⁶²⁾。ここでは出征や先鋒に関する話は書かれておらず、吉光の脇差は国境を塞いだ恩賞として与えられている。会津征討の際、出征前から伊王野資信が上杉氏を牽制し、包囲網の一端を担っていた事例と重なるものであり、『寛永諸家系図伝』の内容は事実に近いと考えられる。

だが、出征の号令が下っていないことが加賀征討の動きを否定するものではない。『象賢紀略』には和睦交渉の際に「おまん殿と申家康公御息を、利長公御養子に被成、加賀二郡御渡候など、申、色々有之候事」と、家康の五男信吉を利長の養子として加賀二郡を譲渡する話が挙げたという⁽⁶³⁾。『当代記』にも「金沢城に廿萬石の城領を添、内府公息を養子し可譲之由也、扨も無事了、肥前母儀并家老の人質江戸へ被下、依之内府公心悦、右之金沢城領も無抑留、子息養子も止了」⁽⁶⁴⁾とあり、芳春院が人質となること以外にも、信吉を利長の養子として前田氏の本城である金沢城と領地を割譲するよう要求があったのは確かであろう。このような全面降伏に等しい条件が、軍事的脅威なくして提示されるとは到底考えられるものではない。また、私婚問題の際に征討軍を向けられる危機に瀕した経験有する家康が、豊臣公儀から疎外された利長に対して征討軍というカードを用いなければならない。既に包囲網は形成されていることから、征討軍の組織と、出征の号令を残すのみであったといえよう。

前述のように、家康は前田利長のみならず、前田氏と繋がり深い浅野長政や細川忠興にも嫌疑をかけていた。しかし、忠興が赦免される過程においては忠興の交渉努力よりも徳川方の尽力によるところが大きかった。

当時、忠興は領国へ下っており、長岡幽斎は大坂、忠隆（忠興長男）は伏見に在り、松井康之は伏見の自邸に居たものの、幽斎・忠興の勘気を蒙って蟄居していた⁽⁶⁵⁾。そのため、金森素玄と有馬則頼が松井康之に書状を送り、働きかけをおこなっている。

「史料 15」⁽⁶⁶⁾

尚以、今其様御手前御用有之時分候へ共、去とてハ少之間御上可有候、猶期後音候間不具候、以上

幸便候条一書令啓上候、仍去月七日ニ 内府様大坂へ御下被成、当表御置目法度

秀頼様御為可然様ニ被仰付候、何も上洛ニ而候間、御上候而可然存候、就其、此比ハ越中へ其様御中不会之由承及候、此時候間、越中殿御為可然様ニ御馳走候而尤ニ存候間、早々御上可給候、幽斎へハ此方ニ而理申候へハ御合点ニ候、越中殿へハ此方ニ而かげの御奉公被成候者、可然存候、委曲追而可申入候、恐々謹言

神無月十七日

素玄（黒印）

「史料 16」⁽⁶⁷⁾

尚／＼、急度御下まち申候、式太へ之儀、其方御下候ハね者、不相濟候条、幽斎も内々其御存分候、御由断候ましく候、以上

態申候、幽斎其方御間相滞候由、近日承、金法申談、氣遣申候処ニ、彼御前相濟候間、此書状相届次第、夜船にて御下待申候、第一越州御身上の儀、櫛式太氣遣被申候、就其貴所談合有度由候間、若御煩候共、御下候て於此方可有御養生候、所用之儀候て、我等伏見へ廿日比ニ上申候、其内二片時も急御下まち申候、昨日便宜ニ以書状申候、定而可相届候、此方弥相替儀無之候、猶期面之時候、恐々謹言

有中

拾月十八日

(花押)

松佐州

御宿所

「史料15」では、康之が大坂へ赴いて幽斎に事情を説明することが和解に繋がり、また、忠興のために大坂で「かげの御奉公」をすべきであるとして、長岡家への復帰と、事件への対処を促している。また、「史料16」傍線部より、金森素玄・有馬則頼の働きかけには榊原康政の意向が働いていたことがわかる。

同月十八日付で有馬則頼から長岡忠隆に対しても書状が出されており⁽⁶⁸⁾、「第一榊式太へ被相談候事共、松井被罷下候ハねハ、きり／＼と不相届候、急度御下候やうニと式太内存ニ候、旁松佐此地被下次第、越州へも各より氣遣申、被召出候様ニ馳走可申との儀候条、何時も御急候て御下有へく候」と、康之の復帰による大坂下向が肝煎の条件となっており、「仍松佐事、幽斎へ金法相談、氣遣申候処ニ、相済候」と、康之の大坂下向の前に徳川サイドが既に幽斎の勘気を解いていたことがわかる。

こうして長岡家に復帰した康之は、同月二十日に大坂へ入り、登城して徳川方との交渉がおこなわれた。そして、榊原康政から幽斎・興元(忠興弟)・康之の連判誓紙を提出するように告げられている。翌二十一日には金森素玄・有馬則頼から連判誓紙の案文を提示されたが、長岡興元と松井康之は忠興の意向を確認したいと申し出た⁽⁶⁹⁾。これを受けて素玄・則頼から忠興に次の書状が出されている。

「史料17」⁽⁷⁰⁾

返々、御ためニ候間、彼返事ニ不構、誓紙請乞候てさせ可申候間、為御心得如此候、以上
急度申候、御身上事 内府様へ申入候、一たん御懇之返事、然者幽斎公・玄蕃殿・松井ニせいしを仕候へと
の御意ニ候、其通各へ申渡候処ニ、貴様^{其方}へ尋ニ飛脚を被遣之候間、其一返事次第可仕旨候、左様ニ相延候へ

ハ、貴様之御内意を御両三人難計付キ、たつねニ被遣之候と、内府公思召候へハ、此中御疎略なき通、相違申候様ニ候間、御為ニ候条、

貴所御まへ

各請乞、せいしさせ可申候、為御心得令申候、恐々謹言

拾月廿一日

有中

金法

越中殿

素玄・則頼は、忠興の意向を待っていては逆に家康の不信を招くため、「御ためニ候間」として、忠興の返事に
関わず幽斎ら三人に誓紙を出させると告げている。また、翌二十二日付で興元・康之に対して次の書状が出さ
れている。

「史料 18」(71)

兩人御誓紙之義、越州へ無御届御判形、御迷惑之由無余儀候、併公儀相究上遅足候へハ悪候条、既ニ兩人か
たより越州へ右之様子御届候、殊ニ案紙を被出上、被相延候事不可成候、若越州不相届様ニ被仰候者、其時
御家之為ニ御兩人御身上可被相果候、只今何角ニ候へハ、越州御覚悟を御兩人も御うたかいと可被思召候、
就其幽斎も達而被仰事候間、御同心専一候、猶以越州御前をハ請乞申候、為其二令申候、恐々

廿二日

有中

金法印

長 玄蕃殿

松 佐渡殿

傍線部より、幽斎は、当主（忠興）の意向を確かめずに誓紙を出すことに反対であったのであろうか。幽斎の

「御同心専一」を説いている。長岡家の当主権力に関わる問題であるため当然ではあるが、大坂にいる三名（幽斎・興元・康之）いずれも、忠興の意向を待つことなく誓紙を出すことに躊躇するものがあつた。しかし、素玄・則頼は、かえって「公儀」（ここでは家康）の不信を招くことになるとして早急に誓紙を出すように要請したのである。

領国にいた忠興は素玄・則頼からの書状（史料17）に対して次の返書を出している。

「史料19」⁽⁷²⁾

尚々、御きも入共忝次第に候、以上

御折紙令拝見候、拙者身上之儀 内府様へ被仰上候処ニ、御口引能御座候由、御きも入故と存候、いまめかしく御礼不申入候、就其幽斎・玄蕃・松井ニ誓紙可仕由被仰出由候、いかやうにも御淀次第ニ仕候へと、はや今朝申遣し候、重而も我等へ御とゞけニ不及候、御両所次第ニて候、恐々謹言

羽越中

十月廿三日

忠興 判

有中様

金法様

御報

忠興は、則頼・素玄の肝煎に感謝するとともに、幽斎・興元・康之が誓紙を出すことに同意した。そして、同日付で忠興から興元に「いかやうニも御意次第ニ可被仕候、起請前書文言ニいかやうの御このミ候とも、越中ニ申きかせてから可仕なとゞ不被申ニ、なんと成共可被仕候」と指示が出された。興元に宛てられた書状は二十五日に到着したようで、二十五日付で興元から康之に忠興の意向が伝えられた⁽⁷³⁾が、忠興からの指示が届く一日前の十月二十四日に幽斎・興元・康之の連判誓紙が榊原康政・有馬則頼・金森素玄に宛て提出された⁽⁷⁴⁾。忠興

も十一月に大坂へ上り、康政・則頼・素玄宛ての誓紙を提出している。

「史料 20」(75)

敬白起請文前書之事

一秀頼様御取立之上、奉対 内府様・中納言様、毛頭別心疎略奉存間敷事

一親類縁者傍輩たりと云共 内府様ニ存替、聊も構別儀表裏を奉存間敷候、何様ニも奉守 内府様御下知、

違背申間敷候事

一自然 内府様御為悪敷承届候は、速ニ可申上候事

右之条々若構曲節於令違犯は

神文

羽柴越中守

慶長四年十一月日

忠興 判

榊原式部大輔殿

有馬法印

金森法印

豊臣秀頼への忠誠を前提としながらも、文面の大半は家康・秀忠に対する忠誠を誓約するものとなっている。また、三男の光千代を人質として江戸に差し出すこととなり、慶長五年正月二十五日に光千代は大坂から江戸へ向けて出立している(76)。徳川氏の拠点である江戸へ人質を送ることは、豊臣公儀ではなく、家康個人に対する忠誠を意味するものであった。

このように、松井康之の復帰から長岡氏の赦免までの一連の流れをみると、それを成し得たのは、徳川方の尽力に拠るところが大きい。長岡忠興の領国である丹後国は、浅野長政や加藤清正らの領地と比べて、前田氏の領

国である加賀国に近い場所に位置しており、前田氏と連携する可能性を秘めているため、家康は長岡氏を追い込む気はなかったように感じられる。

家康は長岡氏に対して、前田系勢力と徳川党の両方に属する状態から、徳川党へ一本化することを望んでいた。長岡氏の反発を招くことなく、一本化が円滑に進むように、榊原康政や有馬則頼ら取次は、長岡氏が赦免に至るまでのレールを敷き、忠興や康之を導いていった。長岡氏側も、これに従順に従い、ついには江戸へ人質を出すに至った。こうして長岡氏は、家康個人に対する忠誠を明確に示した。この時、家康と利長との間に和談は成立しておらず、仮に加賀征討という事態に発展した場合、長岡氏は徳川方の立場に立つことを意味していたのである。長岡氏の行動は少なからず、前田利長の対抗心を削いだと考えられ、事件を早期解決へと導いたと考えられる。浅野氏も同様に長政の三男長重を人質として江戸へ送っている⁽⁷⁷⁾ことから、この事件を通じて、家康は前田系勢力（宇喜多秀家、加藤清正を除く）を取り込んだといえるだろう。

第六節 征討の回避と事件の収束

家康と利長の間で軍事的緊張が続いたが、翌年（慶長五年）一月になると事態は好転し、和談に向けた動きが見られるようになる⁽⁷⁸⁾。その大きな要因として、利長が会津の上杉景勝と盟約を結んだとする風聞が飛び交っていたことが挙げられる。『杉本義隣覚書』によると「神君思惟し玉ふは、東に景勝、北に利長楯籠ては及大乱、又当世の人の心も無覚束ければ、飽厭の御心地依有之、利長公には越中一国を被退、秀頼公江御詫和順可然由被仰達」⁽⁷⁹⁾と、家康は利長が景勝と連携することを危惧し、利長が恭順の姿勢を示し、領地を割譲することで事態を収めようとしたという。無論これは後世の記述であるが、『看羊録』にも次の記述がある。

家康が秀吉に代わるに及んで、肥前守「前田利長」と家康が不仲になった。景勝は、勝手に自分の領地に帰り、肥前守と兵を連ねて越後の地を攻奪しようとした。「堀」久太郎「秀治」は大いに懼れ、数家康しばしばに報告した。家康も根本「の関東」を気にし、数「景勝に」手紙を送って京にもどるように勧めたが、景勝は従わなかった。へ倭人は、みなこう言ったという。「景勝が、ほんとうに肥前守と兵を連ねて、直ちに家康の根本を擣くとしよう。家康がもどって「根本である関東を」救援しようとするれば、多分、「加藤」清正らがいつせいに立ち上がるであろうから、西京「である大坂」は、自分の所有ではなくなるであろう。帰って救わなければ根本がまず破れ、腹背に敵を受けることになる。景勝らが動けば成功しないはずはないが、惜しいかな、景勝らは、「愚」鈍・懦「劣」である。必ずや、自ら奮発しようとしないうであらう」

前田・上杉の連携に関する風聞は、『一五九九年—一六〇一年、日本諸国記』もみられ、「この景勝はきわめて勇敢な武将で、(石田)治部少輔や(前田)肥前殿、その他内府様に良からざる領主たちと密かに気脈を通じ連繫を保っていたので、内密に、これ以上はありえぬほど巧妙な策略「日本ではこれを武略と呼ぶ」をめぐらした」⁽⁸¹⁾と記されている。実際に関ヶ原の役で共闘する三成は別として、東軍に属した利長についても連携をとっていたと書かれていることから、前田氏と上杉氏が盟約を結んだとする風聞は実しやかに上方で広まっていたといえる。

家康は、前田氏と縁戚関係にある長岡氏からは誓紙や人質を徴収したが、同じく縁戚関係にある宇喜多秀家に對しては謀反の嫌疑をかけていない。また、利長と盟約を結んだとの風聞がある景勝についても、干渉を行うのは利長との和睦がまとまってからである⁽⁸²⁾。家康は大老衆を二人以上相手にすることを避けおり、利長と景勝が連携する可能性を取り除くまでは出征に踏み切ることとは出来なかったのである。

『慶長年中卜斎記』によると「去冬より北国陣と下々雑説申候、相手ハ越中の中納言殿なり、二月時分より北国陣の沙汰止み、奥州陣と専沙汰仕候」⁽⁸³⁾と、二月頃に加賀征討は回避の方向へ向かい、それに代わるかのよう

に今度は会津を征討するとの風聞が盛んになったとある。『象賢紀略』にも「上方より横山大膳・有がゆうかを御上せ候へ由、あつかひ心に大谷刑部少より申越、明三月上り被申候」⁽⁸⁴⁾と、(二月に)大谷吉継から横山長知と有賀有賀斎を上洛させるよう要請があつたとしているので、慶長五年二月には大方解決しており、和睦交渉を残すのみであつたといえよう。

和睦交渉は、芳春院が江戸へ下向することと決着し、五月に芳春院は江戸へ向けて出立する。次の史料は、三奉行が遠州浜松の堀尾忠氏へ宛てた書状である。

「史料 22」⁽⁸⁵⁾

以上

羽柴肥前守殿御袋、江戸へ御下ニ付而、浜松ニ一夜御泊之賄用ニ、八木五石、大豆壱石之分、奥村伊予守・村井豊後守兩人ニ、可被相渡候、恐々謹言

五月十三日

長大

正家(花押)

増右

長盛(花押)

徳善

玄以(花押)

堀尾信濃守殿

御宿所

芳春院が江戸へ向かう途次、浜松で一泊するので賄料を奥村永福・村井長頼に渡すように堀尾忠氏に命じている。芳春院が向かうのが江戸であることから、家康が私的に徴発した人質であることは明らかであるが、三奉行

が差配していることは、表向きは豊臣公儀の施策であつたことを物語っている。なお、「内府ちかひの条々」には「五人之奉行衆内、羽柴肥前守事、遮而誓紙を被遣候て、身上既可被果候処ニ、先景勝為可討果、人質を取、追籠候事」⁽⁸⁶⁾とあり、芳春院の江戸下向は、会津征討の準備として行われたとされている。表向きは家康暗殺計画の風聞に端を発した一連の事件の処理として行われているが、この段階で家康は会津征討を行う意向を強く抱いていたということだろう。

家康暗殺計画の風聞に端を発した一連の騒動によって、徳川氏は大坂城へ入城を果たし、また、徳川氏に對抗し得る権利を有していた前田氏から人質を徴収して服従させている。これによって、秀吉の遺言に基づいた徳川氏一前田氏による勢力均衡は崩れ、豊臣政権内での権力は家康に集中し、家康による独裁的権力が形成されたのである。

九月に阻まれた秀忠正室の江戸下向は、同年十二月に実現している⁽⁸⁷⁾。また、翌年（慶長五年）の七月三十日付で大谷吉継が真田昌幸・信繁（幸村）父子に宛てた書状によると、真田信幸の正室（大蓮院）も慶長四年中に国許へ下っていた⁽⁸⁸⁾。秀忠の正室でさえ九月の江戸下向は実現していないことから、おそらく信幸正室が国許へ下ったのも十二月だったのではないかと思われる。

九月中旬からは徐々に加賀征討の可能性も浮上し始めており、『看羊録』によると、家康が上方を留守にした場合、加藤清正らが挙兵すると人々は口にしていた⁽⁸⁹⁾とあるので、家康としては、加賀征討が現実になった時に備えて、秀忠正室を江戸へ下向させる必要性はより高まったといえる。家康が徳川氏にとって重要な女性たちを関東へ下したことは、大名妻子の上方集住という秀吉の遺命を覆したと評価できる。秀忠正室の江戸下向が実現した十二月は、家康の独裁的権力が高まりつつある一つの指標としてみることもできるだろう。

第七節 加賀征討から会津征討へ

慶長四年八月に会津へ帰国したあとの上杉景勝と家康のやり取りの初見は、翌月（九月）十四日の家康書状である。

「史料23」（90）

内々自是可申入処、遠路御札、本望之至候、路次中無何事御下国之儀、珍重候、然者、此間大坂へ罷下、仕置等申付候、無相替儀候条、可御心安候、猶期後音候間、令省略候。恐々謹言

九月十四日

家康（花押）

会津中納言殿

景勝は無事に帰国したことを家康に報告していたことが判る。それに対して家康は、景勝の無事を喜び、自身は大坂へ下って仕置を申し付けたこと伝え、こちらは変わったことはないから安心して欲しいと述べている。会津征討が取り沙汰される慶長五年二月頃までに、景勝宛ての家康文書はほかに二点存在する。

「史料24」（91）

御報令披見候、当表弥無相替儀候間、可御心安候、其元仕置被仰付之由、尤候、猶期後音候条、令省略候、恐々謹言

十月廿二日

家康（花押）

会津中納言殿

「史料25」（92）

為御見舞御折紙祝着存候、仍爰元仕置等万事無油断申付候間、可御心安候、猶於替儀在之者、可申達候条、不能具候、恐々謹言

十一月五日

家康（花押）

会津中納言殿

「史料 23」と同様、「史料 24」も景勝からの報せに礼を述べるとともに、家康のいる上方はいつそう変わりないから安心して欲しいと述べており、「史料 25」も上方の仕置は抜かりなく申し付けているから安心するようにと述べている。また、「史料 24」では「其元仕置被仰付之由、尤候」と、景勝が領内で行っている仕置に対して同意を示している。両者は互いの様子を報告・承認し合っていたのだろう。

しかし、上方では九月から十月にかけて、家康暗殺計画の風聞に端を発した一連の騒動で緊張が走り、大坂へ入った家康によって政治体制が改められるなど、「無相替儀候」とは程遠い状況であった。表面上、両者の関係は良好であったが、家康は景勝を警戒しており、景勝の関心を上方から逸らそうとしていたといえる。

表面上、取り繕った関係さえも崩れるのは慶長五年二月以降であり、前述のとおり、二月頃に加賀征討は回避の方向へ向かい、それに代わるかのように今度は会津を征討するとの風聞が盛んになる。利長が家康に恭順し、景勝と連携する可能性を取り除いたことで、家康は景勝に対する干渉を始めたといえる。

通説では、堀氏による訴えは慶長五年二月とされている⁽⁹³⁾。しかし、『看羊録』（「史料 21」）には「肥前守と兵を連ねて」、「数家康に報告した」とあるので、慶長四年冬頃から翌年にかけて幾度か行われたと考えられる。家康が上杉氏に対する監視体制を敷いていたのと同様に、上杉景勝も徳川方の動きを警戒していた。慶長五年三月二十日、景勝は家臣吉田源左衛門尉らに宛てた書状で、赤津（福島県郡山市）にある拠点の再築を急ぐように促している。

「史料 26」⁽⁹⁴⁾

赤津再興令遅々ニ付而、榆井修理亮差越候条、一日片時無油断、出来候様ニ相稼、肝要候、此度之儀候間、別而可入念候、謹言

三月廿日 御判

吉田源左衛門尉殿

田川与三左衛門尉殿

徳川方の動きを警戒して防備を固める一方で、景勝は同年二月十日に神指城の築城を直江兼続に命じている⁽⁹⁵⁾。会津藩士である向井吉重が著し、寛文二年（一六六二）に成立した『会津四家合考』によると「剰へ若松城の内狭ければ、又何方の要害にか城を築きて、府を移さんとして」⁽⁹⁶⁾と、神指の築城は広い土地に遷府するためという。徳川治世下においても都市計画として認知されていた点は重要である。慶長五年二、三月頃の上杉氏は、都市計画と領国の防衛の両面に力を注いでいた⁽⁹⁷⁾。

第八節 糾明使の派遣と上杉氏の回答

会津征討に至るまでの経緯は、慶長五年六月十日に上杉景勝が抗戦の意思を示すために安田能元ら重臣五人に宛てた書状に示されている。

「史料 27」⁽⁹⁸⁾

今度上洛不成様子、第一家中無力、第二分領仕置之ため、秋中迄延引之趣、奉行衆へ令返答之处、重而逆心之讒言を以、是非上洛無之者、向当郡可被及行之旨候、就之存分雖有之、元来無逆心筋目之条、抛万事可令上洛覚悟落着、併讒人糺明之一ヶ条申入候处、無是非、只不相替上洛与計有之而、剩日限を以催促如此被押詰、上洛之儀者如何にしても不成候、数通之起請文反古ニなり、堅約も好も不入、讒人之糺明も無之体、時刻到来無二思詰候条、譜代・旧功・牢人不依上下、右之趣、無抛分別仕候者ハ、供之用意可申付候、自然、無分別を以、理不尽之滅亡与述懐を存候者ハ、何者成共無相違可出暇候、然者、上方勢下候日限聞届次第、半途へ可打出候、諸口之儀ニ候条、領分端々被押破、地下等心替可仕義必然候、其時節、或在所を無心元存

知、或妻子ヲ難捨心中候者、当座之不覺、末代之名をくたすべく候条、兼而肉を切而、可存是候、内々無疑心仕置無二奉公存詰者之糾明直ニ申出候者、人ニより遠慮可有之候条、各以分別急度可被相究者也

六月十日

景勝（花押）

安田上総介殿

甘糟備後守殿

岩井備中守殿

大石播磨守殿

本庄越前守殿

傍線部より、①上杉氏は当初、財政に余裕がないことや、領内の仕置を理由として上洛の期日を秋まで延ばして欲しいと要求していた。②しかし、謀反を企てているとの讒言があったとして再び上洛の催促があり、上洛がない場合は征討軍を遣わす旨が告げられた。四月に派遣された伊奈令成ら糾明使によるものであろう。③これに対して上杉氏は万事をなげうって上洛することに決め、同時に「讒人糺明之一ヶ条」を申し入れた。④しかし、家康は讒言者の糾明を容れることはなく、日限を設けて上洛の催促をおこなった。これは「史料31」に記されている五月二十三日に上方を発った使者によって上杉氏に齎されたものであろう。⑤これを受けた上杉氏は抗戦を決意し、上洛を拒否した。

六月十日頃に上杉景勝が出した結論は上洛拒否であるが、四月に派遣された糾明使に対しては上洛に応じる回答をしている。上洛に応じた上杉氏は、讒言者を問い質すよう「讒人糺明之一ヶ条」を申し入れたが、容れられなかった。最終的に上洛拒否に至ったのは、「讒人糺明之一ヶ条」が容れられなかったことが大きい。

「讒人」とは、『慶長軍記』（寛文三年成立）、『会津陣物語』（延宝八年成立）によると堀秀治の老臣・堀直政であるが⁹⁹、いずれも偽文書である「直江状」¹⁰⁰が承応三年（一六五四）に刊本として流布した後の成立であり、

「直江状」七条目にある「讒人之堀監物」の影響を受けている可能性は否定できない。しかし、姜沆の記録『看羊録』に「堀里久大郎」（堀秀治）とあることから¹⁰¹、堀氏サイドから情報提供があったことは確かである。

前田氏と上杉氏が盟約を結んだとする風聞があったため、家康は上杉領国周辺の諸大名に情報提供を求めたと考えられる。家康は、慶長四年十一月二十日に戸沢政盛へ宛てた返書において「其表之様子得其意候」¹⁰²と述べており、監視体制を敷いていた。堀氏が上杉氏の動静を報じたのは、家康が求めていた情報提供の一環であったと考えられる。半年後の史料であるが、家康は堀秀治に対しても「其表之様子、切々示給候、得其意候」と述べている。

「史料 28」¹⁰³

其表之様子、切々示給候、得其意候、委細西尾隠岐守可申候条、不能具候、恐々謹言

五月廿日

家康（花押）

越後侍従殿

慶長五年四月十日、伊奈令成ら糾明使は会津へ向けて出立した¹⁰⁴。「史料 27」から、これ以前に上杉氏は秋まで上洛の猶予を求めていたが認められず、糾明使が最後通牒を突きつけるために派遣されたことが判る。

四月二十七日付島津龍伯宛島津惟新書状によると、糾明使が持ち帰る上杉氏の返答が家康の意に添わなかった場合という前提のもと、伏見城の守備を任されることになったという¹⁰⁵。これと同様の内容は、五月七日付で最上義光が仁賀保氏ら由利衆に宛てた書状でも言及されており、家康は近々出陣する意向を示しており、糾明使に対する上杉氏の返答次第で出征が行われるか否かが決まるとし、十に九は出征となるだろうという見通しまで述べている¹⁰⁶。

また、家康は五月三日付で下野那須氏の支族である伊王野資信に対して、白河口の守りを堅固にするよう命じ、あとから家康も出陣する旨を伝えている。

今度会津表之儀注進候、其口堅可被相守候、追付令出馬可討果候、恐々謹言

五月三日

御諱御書判

伊王野下総守殿

通説では、糾明使の帰還は五月三日であるが、京・大坂界限から会津までの行程は十三日とされている⁽¹⁰⁸⁾ため、往復路の日数が足りない。『鹿苑日録』慶長五年五月十一日条の「自直江来状之返札調之」⁽¹⁰⁹⁾より、五月十一日に西笑承兌が直江兼続に対して返信を書いていることから、糾明使は五月十日頃に上方へ帰還し、家康へ上杉氏の回答が伝えられたと思われる。家康は、上杉氏の返答を待つことなく出陣の意向を表明しており、伊王野資信が糾明使の帰還以前に家康から出兵の意思を伝えられていることから、上杉領周辺の領主たちは上杉氏を牽制するよう命じられていて、家康の出征前から上杉包圍網が形成されていたと考えられる。

また『細川忠興軍功記』によれば、家康の意向で新たに与えられた領地である豊後杵築に下っていた長岡忠興は、福島正則、加藤茂勝と共に会津征討の先鋒を家康から命じられた旨を四月二十八日に大坂の長岡邸からの報によつて知ったという⁽¹¹⁰⁾。『細川忠興軍功記』の記述を裏づけるものとして、『舜旧記』慶長五年五月二十九日条に「幽斎帰国、依出陣用意也」⁽¹¹¹⁾と、長岡幽斎が出陣の用意のために帰国したとある。後述するように、会津征討の正式決定が諸大名全般に示され、号令が下されたのは六月上旬と考えられるため、長岡氏は諸将よりも先立って出征の軍令を受けていたこととなる。

長岡氏が諸将に先立って出征の軍令を受けていた点は、ほかの近畿・西国の諸大名が、近江国愛知川で西軍に進軍を制止された中、忠興は下野国に入ることができた点が証左となっている。忠興や加藤茂勝のほか、同じく西国に領地があるにもかかわらず東国へ下ることができた黒田長政、藤堂高虎、宮部長熙らも、諸将に先立って会津征討について聞かされていたと推測できる。

このように、家康は糾明使が上杉氏の回答を持ち帰る以前から、一部の者に出征に関する指示を出しており、水面下で会津征討の準備を進めていた。このことから、会津征討は通説どおりに家康の一存で決められたと見る
ことができ、「公戦」という体裁をとりながらも、私戦に近いものだったのである。

前述のように、上杉氏は糾明使に対して上洛に応じると回答し、讒言者を問い質すよう「讒人糺明之一ヶ条」を申し入れた。徳川秀忠が五月十八日付で森忠政に宛てた書状には、次のように記されている。

〔史料 30〕⁽¹¹²⁾

遠路被入御念、御懇書本望存知候、如仰今度為御見舞被差越林長兵衛、祝着之至候、将又会津之事先書ニも如申入候、伊奈図書頭被差遣候処、景勝上洛ニ被相定之由候間、右之使者罷上候、乍去京都之様子いまた不相聞候間、不能細筆候、替儀候ハ、従是可申伸候、恐々謹言

江戸中納言

五月十八日

秀忠（花押）

羽柴右近殿

御報

傍線部より、景勝は上洛の意向を示し、糾明使はその返答を上方に伝えるに向かっているとしている。『中川家文書』にも「景勝方無別条相済上洛之由、修理様へ加藤主計頭清正より御状被為進候旨、其比者七月下旬ニ而御座候」⁽¹¹³⁾とする覚書抜書があり、景勝が上洛の意向を示したことを伝えている。

一ヶ月前、秀忠は次のように「唯今之分には上洛仕間敷候様ニ相聞申候」という認識を示している。

〔史料 31〕⁽¹¹⁴⁾

尚々被入御念貴札本望至極候、誠ニ久敷不懸御目、御床敷存計候

御飛札本望之至令存候、然者其元相替義無御座、御静謐之由、珍重存候、殊 秀頼様弥御息災御成人被成之

由、目出度令存候、如仰北国之義相濟申之由、被入御念被仰越候、得其意存候、次会津之義被仰越候通にて、
唯今之分には上洛仕間敷候様ニ相聞申候、爰元珍敷儀も無之候、万事従是追而可申伸候、恐々謹言

四月廿日

秀忠（花押）

江中納言

堀信州様

秀忠

御報

京・大坂界限から会津までの行程は十三日とされている⁽¹¹⁾ため、四月十日に出立した糾明使が会津に到着したのは四月下旬と考えられる。よって「史料31」は糾明使が会津に到着する以前のものである。「史料31」と「史料30」を比較すると、上杉氏が糾明使に対して事態を良好に進展させる前向きな回答をしたことが判る。ただし、秀忠が「乍去京都之様子いまた不相聞候付、不能細筆候」と述べているように、この時点では大坂にいる家康の反応については把握できていない。

第九節 糾明使帰還後の展開

前述のとおり、西笑承兌は五月十一日に兼続に対して返信を書いている。片道の行程を十三日に措定すると、四月十日に出立した糾明使は同月二十三日に会津に到着し、会津で逗留することなく即日出立しても帰還は五月七日となる。「史料30」から、会津から上方へ戻る途中で江戸の秀忠の許へ立ち寄ったことは明らかであり、伊奈令成の身分を考えると一般の使者よりは余裕をもった行程で進んだと思われる。これらを踏まえると、伊奈令成らは五月十日頃に上方へ帰還し、家康へ上杉氏の回答が伝えられたと考えられる。

四月一日付で西笑承兌が兼続へ宛てた書状の写⁽¹¹⁶⁾が伝わっていることから、書信の遣り取りは、四月一日付の承兌書状に対して兼続が返書を出し、そして承兌が五月十一日に返信を書いたと考えられる。しかし、四月一日付西笑承兌書状写は、偽文書である「直江状」と対をなす関係にある点や、『西笑和尚文案』から案文が確認できない点も踏まえると、「直江状」と照応させるために文面が創作された可能性は否定できない。

『鹿苑日録』によると、三月二十九日の時点で承兌は在坂しており、四月一日に相国寺に帰還している⁽¹¹⁷⁾。また、四月二十一日に家康と榊原康政が豊光寺の承兌を訪れて、家康が白布五十端と金子三枚、康政が白楮五十束と白銀三枚を贈っている⁽¹¹⁸⁾ことを踏まえると、通説どおり承兌が家康の意を受けて兼続宛ての書状を書いた点は認めていいだろう。しかし、伝存する四月一日付西笑承兌書状写の文面を信用するのは慎重にならなくてはならない。

糾明使が上方に帰還した後の経緯は、浅野幸長（長慶）が慶長五年五月二十六日に記した浅野長政宛ての書状に記されている。

「史料 32」⁽¹¹⁹⁾

五月十八日之御書、同廿二日至伏見到来忝拝見仕候、並町野左近書中被下、具致披見候

① 一会津より伊那図書江罷上様子聞江、内府様弥御機嫌悪御出陣ニ相定、六月十六日大坂可被成御立旨、被仰候事

② 一奉行衆ニ被仰付、図書罷上者早道候ハ、去廿三日会津被遣候様子之儀、景勝七月中ニ伏見迄罷上、八月朔ニ秀頼様へ御礼可申上、並直江妻子六月廿日江戸へ可相越候、尤於相違者急度可有御働との紙面見御座候、此御返事二者無御構、有無ニ江戸迄ハ被成御下国、景勝於罷上者武蔵様被召連御上洛与、内府様者於江戸御年とられ来春可有御上洛由候事

③ 一昨今之体ハ御出陣ニ相究申候、何も兵粮用立ニ与遣候間、可被成其御心得候、竹腰新蔵おふす山の御算用

之儀被仰下候、新蔵只今ハ江州ニ居申候間、召寄八嶋ニ申付算用相聞、米何程御座候与書付、急度可致進上候事

一濃州御代官所殘米千石御座候間、川船へ出し江戸へ相廻申候事^④

一秀頼様御袋様より、内府様御下候儀御留有度と御奉行衆為御使就被仰付候、内府様へ奉行衆被参候へハ御機嫌悪被成于今不被申出候「政所様、明日廿七日」「秀頼様為御見廻大坂へ被成御下候ハ、是も御内儀者内府様御留有度由ニとの御下と申候事

一石治少子息隼人出陣ニ候へき者、此間為何儀ニ候哉ん、佐和山騷申ニ付、治少者罷立候様ニと此程被仰出之由候事^⑤

一北国之儀弥相済、御袋並横山大膳・前野対馬・山崎七衛門・土方但馬人質江戸へはや御下し候、肥前殿御内加賀殿・孫四郎殿ハ北国へ御下候、有之しまつも相済申、為御礼五三日已前横山大膳・土方但馬罷上候事^⑦

一中式少御煩未然共、無之候へハ爰元候ハ万事氣つまりニ候の条下国候也、可有御養生候て御暇して、去廿四日御下シ御座候事^⑧

一我等儀一昨日内府様へ罷出候処、手先之儀候之条、急度罷下用立可仕旨被仰出候間、来月十日頃ニ大坂を罷立可申と存候間、頓而不着仕可申と何分可令得御意候、恐惶謹言^⑨

(年月日欠)

浅左京

弾正様

一条目より、会津から帰還した伊奈令成から子細を聞いた家康は、機嫌を悪くして出陣することに決め、六月十六日に大坂を出立すると言ったという。五月十七日付島津忠恒宛島津惟新書状に「内府様奥州会津への御出陣、来月中ニ相定候」⁽¹²⁰⁾とあり、同月五日付の惟新書状⁽¹²¹⁾には六月に出征する旨が記されていないことから、惟

新も糾明使の帰還以降に出征の決定を聞かされたことが判る。

二条目より、五月二十三日に再び会津へ使者が遣わされ、その使者は、景勝が七月中に伏見へ上り、八月一日に秀頼に伺候すること、六月二十日に兼続の妻子が江戸へ人質として赴くこと、を要求した書状を携えていたという。この内容は「史料 27」の記述と重なる。また、上杉氏の返答にかかわらず、家康は江戸まで軍勢を率いて下向する予定であるという。

五条目より、豊臣秀頼と淀殿が家康の出陣を思い止まらせようと、奉行衆を使者として遣わしたが、家康の機嫌が悪くなり、奉行衆は諫言できないでいるという。この事態を受けて、北政所も翌二十七日に秀頼の見舞いという名目で大坂に下り、家康の出陣を制止する予定であるという。

一条目にある家康の機嫌が悪くなったとする記述は、一見すると上杉氏が上洛を拒否したように感じてしまうが、「史料 30」で秀忠が「景勝上洛ニ被相定之由」と述べているように、その可能性は否定される。

秀忠は、糾明使派遣の直前に当たる三月二十一日付の景勝宛ての書状においても「其元御普請以下被仰付由、尤存候」⁽¹²²⁾と述べているように、上杉氏への対応において家康と温度差が感じられる。家康は上杉氏を追い詰める意向であったが、秀忠はこうした家康の意を介することなく、物事を素直に受け止めていたということである。「史料 30」で「乍去京都之様子いまた不相聞候付、不能細筆候」と述べているように、五月十八日の時点では秀忠は大坂にいる家康の反応を把握できていない。その後、秀忠の認識は改まることとなる。

「史料 33」⁽¹²³⁾

久不能面上、御床敷存候処ニ、御懇札本望之至候、然者、景勝不罷上ニ付而、内府可為出陣旨蒙仰候、左候へハ、貴所も可為御出陣之由候之間、以面談積義可申述候、令満足候、北国之義、相済申ニ付而、御上之由、令得其意候、万々被入御念様子共、被仰越、令祝着候、猶重而可申伸候、恐々謹言

五月廿六日

御名乗御直判

金森出雲守殿

御返報

傍線部より、景勝が上洛を拒んだために家康が出陣する旨を伝えられたという。「蒙仰候」とあることから、この情報は家康から齎されたといえる。景勝が上洛を拒んだとあるが、秀忠は景勝が上洛の意向を示した旨を糾明使から直接伝えられている。また、景勝が上洛の意向を示したことは加藤清正の耳にも入っている（¹²⁴）ため、間違いないだろう。

また「史料27」より、景勝が上洛拒否の結論に至るのは六月十日頃であるため、五月二十六日の時点で上杉氏から上洛拒否が通達されたとは考え難い。「史料32」一条目の「内府様弥御機嫌悪」が深く関係していよう。

家康の機嫌が悪くなった根本的な要因として、上杉氏が讒言者を問い質すよう申し入れた「讒人糺明之一ヶ条」にあったと考えられる。上杉氏の立場では、正当性の証明は当然の主張であるが、家康の目的は上杉氏の排斥にあるため、上杉氏の正当性が証明されては元も子もない。到底受け入れられるものではなかった。

また、前田利長が景勝と連携する可能性を取り除いた以上、家康が軍事行動を躊躇する理由はなかった。家康は軍事指揮権の掌握を図るために会津征討は是が非でもおこないたかったであろう。上洛に応じた上に、自身の正当性を証明しようとする上杉氏の反応は、家康にとって都合の悪いものであった。

上杉氏の謝罪と恭順、これらは家康にとって絶対に譲れない点であり、「讒人糺明之一ヶ条」は容認できるものではなかった。「讒人糺明之一ヶ条」が容れられない場合、上杉氏が上洛を取り下げる可能性がある。このような理屈で、家康は「讒人糺明之一ヶ条」をもって、上杉氏の上洛拒否とみなしたと考えられる。そして、五月二十三日に遣わされた使者が携えた兼続妻子の江戸下向などの追加要求は、上杉氏の「罪」を演出する狙いがあった

と思われる。

しかし、このような理屈は、家康以外の他者には共感し得ない。上杉氏が上洛に応じた旨を知る者は、（加藤清正をはじめ）ある程度いたと推測できる。道理に反しているのは家康であり、家康の出征を制止する声も多く上がっている。

そのため、家康は「御機嫌悪」を最大限に利用して周囲の口を塞いだと考えられる。加藤清正は家康へ意見したが、家康は立腹し、清正に対して機嫌が数日間、悪くなったという¹²⁵。

五月十七日付島津忠恒宛島津惟新書状にあるように、五月十七日の時点で一部の者は出征の決定を聞かされていた。また、「史料 32」九条目より、浅野幸長も五月二十四日に家康と対面した際に先鋒を命じられており、前田利長も五月二十二日付の書状で「又々あいづの義、いまだすみ不申候、御出陣あるべきやうニ、うけ給候、我等義、いづかたへなりとも、大ふ御さしづしだい、まかりたち可申候」¹²⁶と、出征を事前に伝えられている。五月二十三日の使者派遣は形式的なものだったといえる。

六月二日、家康は本多康重ら家臣に対して次の書状を送り、会津征討の準備を命じている。

「史料 34」¹²⁷

急度申越候、仍七月下旬奥州表出陣事候条、無油断用意専一候、日限事自京都可被仰出候間、重而可申遣候也

六月二日

御黒印

本多彦二郎とのへ

また、六月六日には吉田兼見が生絹と勝軍祓を進上している¹²⁸。『武家事紀』は、この日に家康は大坂城西の丸に諸将を集めて評定をおこない、会津征討における部署を定めたとする（『関原軍記大成』では六月八日）¹²⁹。島津惟新や浅野幸長など、一部の者は既に聞かされていたが、会津征討の正式決定が諸大名全般に示され、号令

が下されたのは六月上旬と考えられる。

前述のように、五月二十三日に遣わされた使者が会津に到着し、景勝が上洛拒否の結論に至るのは六月十日頃であることから、号令は上杉氏の反応に関係なく下されている。「史料32」二条目より、上杉氏の返答にかかわらず、家康は江戸まで軍勢を率いて下向する予定であった。仮に使者に対して上杉氏が上洛に応じると回答したとしても、秀忠に連れられての上洛となり、会津征討軍に対する上杉氏の屈服と謝罪が演出された。家康は、上杉氏の謝罪と恭順を引き出すべく会津出征の号令を下したのである。会津征討は既定路線であった。

『会津旧事雑考』によると、神指城の築城は六月一日に中止となり、理由は「神指城半止者、是世謂有景勝逆心而、内府公欲東征、故景勝亦拋險募兵欲防守也」¹³⁰と、会津征討の動きを受けて守備を固めるためであった。都市計画と領国の防衛の両面に力を注いでいた状態から、防衛に一本化した方針転換であり、「史料27」を踏まえても、上杉氏が抗戦を決意し、会津征討軍を迎撃する準備を本格的に始めたのは六月上旬といえるだろう。

結語

以上、本章では加賀征討へ向う動きと、会津征討の関係性をみることで、会津征討の位置づけをおこなった。結果、家康の政敵（五大老構成員）排除の方針が明らかとなり、会津征討もその延長線上にあった点も明らかとなった。その詳細を述べたい。

権力闘争に勝ち続けた家康は、政敵を失脚あるいは服属させることで独裁的権力を形成していった。家康が老衆の中で真つ先に標的にしたのは、前田利長であった。しかし、家康は、前田氏と縁戚関係にある長岡氏からは誓紙や人質を徴収したが、同じく縁戚関係にある宇喜多秀家に対しては謀反の嫌疑をかけていない。また、利長と盟約を結んだとの風聞がある上杉景勝についても、干渉を行うのは利長との和睦がまとまってからである。

家康は大老衆を二人以上相手にすることを避けており、利長と景勝が連携する可能性を取り除くまでは出征に踏み切ることはできなかったのである。家康の方針は大老衆一人ひとりを豊臣公儀から孤立させ、排斥していくというものであった。

会津征討の可能性が浮上したのは、前田利長の問題が大方解決に向かった慶長五年二月である。会津征討も加賀征討をはじめとする権力闘争の一端として位置づけることが出来る。会津征討は、家康が反徳川勢力の挙兵を誘発して一網打尽にするために打った大博打ではなかった。通説では、会津征討は三成の挙兵を誘う「呼び水」とされてきたが、会津征討に三成の挙兵を誘う意図はなく、家康の大老衆排斥の一端として位置づけたのは本章の新たな知見である。

加賀征討から会津征討への移行については、家康の権力闘争の方針として一貫性・連続性が認められる。一方で西軍の挙兵は、家康の意図したものではなく、会津征討と西軍挙兵に、家康の方針としての連続性は認められない。このことは、西軍挙兵という事件が、歴史的展開を激変される出来事であったことを明確に示しており、三成らが家康を先制したクーデターとして位置づけられよう。

註

(1) 慶長四年閏三月八日付島津義弘・忠恒・寺沢正成・立花親成連判起請文『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之三』(東京大学出版会、一九五二年)一五〇〇号。

(2) (慶長四年)閏三月一日付島津龍伯書状写「石田三成宛」「御文庫四拾八番箱義久公卷中」『鹿児島県史料 旧記雑録後編 三』(鹿児島県、一九八三年)(以下『旧記三』と表記)六九四号。

(3) 慶長四年四月二日付徳川家康起請文「島津義弘・忠恒宛」『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之一』(東京大学出版会、一九五一年)(以下『島津一』と表記)一〇九号。

- (4) (慶長四年) 七月九日付寺沢正成書状「島津忠恒宛」『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之二』(東京大学出版会、一九五二年)へ以下『島津二』と表記へ一〇七三号。
- (5) 一五九九年一〇月二二・二八日付、志岐発、ヴァリニャーノのファン・デ・リベラ宛書簡(清水有子『近世日本とルソン』東京堂出版、二〇一二年)。
- (6) (慶長四年) 七月九日付徳川家康書状「島津忠恒宛」(『島津一』一一一号)。
- (7) 『旧記三』一〇二五号。
- (8) (慶長四年) 八月六日付島津惟新書状「島津忠恒宛」(『島津二』一一五三号)。
- (9) (慶長四年) 七月九日付徳川家康書状「相良頼房宛」『大日本古文書 家わけ第五 相良家文書之二』(東京大学出版会、一九七〇年) 八六八号。
- (10) (慶長四年) 七月二十四日付立花親成書状「島津忠恒宛」(『島津二』一〇七四号)。
- (11) 「一五九九年一一六〇一年、日本諸国記」(松田毅一監訳『十六・十七世紀イエズス会日本報告集』第一期第3巻、同朋舎出版、一九八八年)へ以下『日本報告集』と表記へ二四三、二四四頁。「」内はテキストにある補足語、()内は訳者の補足語、または注に入れるべき短文を指している。
- (12) (慶長四年) 八月十五日付小西行長書状「島津忠恒宛」(『島津二』一〇七六号)。
- (13) 『大日本古記録 言経卿記』十(岩波書店、一九七七年)へ以下『言経』と表記へ二三頁。
- (14) 藤井讓治『徳川家康』(吉川弘文館、二〇二〇年)。
- (15) 「多聞院日記」閏三月十四日条(『増補続史料大成』第四十二巻、臨川書店、一九七八年、八三頁)。
- (16) 『義演准后日記』第二(続群書類従完成会、一九八四年)へ以下『義演』と表記へ八一頁。
- (17) 『国史叢書 関原軍記大成』一(国史研究会、一九一六年)へ以下『軍記大成』と表記へ一五二頁。
- (18) 姜沆著・朴鐘鳴注釈『看羊録』(平凡社、一九八四年)へ以下『看』と表記へ一七二頁。『海行摠載』第一(朝

鮮古書刊行会、一九一四年）（以下『海』と表記）四一二、四一三頁。

(19) 『軍記大成』一五二頁。

(20) 「慶長年中卜齋記」上之卷（『改定史籍集覽』第廿六冊、臨川書店、復刻版一九八四年）（以下『卜齋記』と表記）四三頁。

(21) （慶長四年）十月一日付内藤周竹書狀写「内藤又二郎宛」『萩藩閥閥録』第三卷（マツノ書店、復刻版一九九五年）一六八頁。

(22) （慶長四年）九月二十七日付前田利長書狀「堀秀治宛」「徳川美術館所蔵」（原史彦「新出史料『前田利長書狀 堀秀治宛』『堀家文書』『徳川秀忠書狀 越前宰相（結城秀康）宛』について」『金鯢叢書』第三七輯、二〇一一年）。

(23) 『関原軍記大成』では、徳川軍は八日酉戌ごろに伏見を發ち、九日早朝に大坂に到着とする（『軍記大成』一五四頁）。

(24) 『北野社家日記』第五（続群書類従完成会、一九七二年）一六八頁。

(25) 『言経』四三頁。

(26) 『言経』四四、四五頁。

(27) 『言経』四四頁。

(28) 『義演』八二頁。

(29) 『言経』四四頁。

(30) （慶長四年）九月十三日付毛利輝元書狀「毛利秀元宛」「長府毛利家文書」（『特別展五大老』大阪城天守閣、二〇〇三年）（以下『五大老』と表記）一二一号。

(31) 『看』一七三、一七四頁。『海』四一三頁。

(32) 『鹿苑日録』第三卷（続群書類従完成会、一九三五年）二五八頁。

(33) 『卜齋記』四四頁

(34) 『義演』八四頁。

(35) 前掲註⁽²¹⁾から、家康は十月一日までには大坂城西之丸へ移ったと判断できる。筆者は「会津征討前夜――『直江状』の真贋をめぐる」(『研究論集 歴史と文化』第一号、二〇二三年)をはじめとして旧稿において、十月十七日付徳川家康書状写「最上義光宛」の年次比定を、中村孝也『新訂 徳川家康文書の研究』中巻（日本学術振興会、一九八〇年、四五〇頁）に倣って慶長四年として、同史料の文言「去廿七日大坂相移、無残所申付条、可御心易候」から、九月二十七日に家康は大坂城西之丸へ移ったとしてきた。しかし『寛永諸家系図伝』第二（続群書類従完成会、一九八〇年、五七頁）にあるように、同史料は慶長五年に比定するのが正しいと考えられる。関ヶ原合戦後の大坂城入城は九月二十七日と合致するほか、慶長四年においては、家康は西之丸へ移徙する以前から大坂城内の石田正澄邸を居所としているため、「去廿七日大坂相移」は違和感が生じる。よって訂正したい。

(36) (慶長四年) 九月二十三日付伊奈令成書状「島津龍伯・忠恒宛」(『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之四』東京大学出版会、二〇一一年) 一六九三号。

(37) (慶長四年) 九月二十一日付島津惟新書状「島津忠恒宛」「島津家文書（御文書（義弘公）一九一七一〇）」。
『旧記三』八八四号。

(38) 前掲註⁽²¹⁾。

(39) 『看』一七三頁。『海』四一三頁。

(40) 前掲註⁽³⁶⁾。

(41) 文禄四年八月三日付徳川家康・宇喜多秀家・上杉景勝・前田利家・毛利輝元・小早川隆景連署定書「個人

蔵」(『五大老』九六号)。

- (42) (慶長四年) 十月一日付三奉行連署奉書「佐竹義宣宛」(『千秋文庫所蔵佐竹古文書』東洋書院、一九九三年、二二三号)。

- (43) 慶長三年八月八日付前田利長・宇喜多秀家・徳川秀忠請文前書写「五奉行宛」『慶長三年誓紙前書』(東京大学史料編纂所蔵)。「但し三人なから別紙也」とあるように本来は連名ではなく一人ずつ誓紙を作成している。

- (44) 豊後国速見郡・由布院知行方目録(『松井文庫所蔵古文書調査報告書』一、八代市立博物館未来の森ミュージアム、一九九六年)一一―二三号。慶長五年二月朔日付徳川家康知行宛行状写「森忠政宛」「森家先代実録」(『岡山県史』第二十五巻 津山藩文書、一九八一年)二七頁。

- (45) 慶長四年九月十八日付宮部長熙自筆記請文前書案「新庄晟珊・山岡道阿弥・岡野江雪斎宛」「早稲田大学図書館蔵」(『特別展秀吉家臣団』大阪城天守閣、二〇〇〇年、一五一号)。

- (46) 慶長四年四月五日付伊達政宗起請文「有馬則頼・今井宗薫宛」「大阪歴史博物館所蔵」(『特別展伊達政宗』仙台市博物館、二〇一七年、五四号)。

- (47) (慶長三年) 十二月二十五日付黒田長政起請文案(『黒田家文書』一卷、福岡市博物館、一九九九年、二二二―二二二号)。(慶長三年) 十二月二十五日付井伊直政起請文案(同二二二―一〇号)。また、慶長四年閏三月に相良頼房が黒田長政に出した誓紙(同二二二―三三三号)も「於此上者、貴所様可預御馳走候事、専一二候」とあるように、家康への忠誠を背景とした頼房と長政の盟約と位置づけられる。

- (48) 前田氏との繋がりから嫌疑をかけられた長岡忠興が、二ヶ月後にあたる慶長四年十一月付で提出した「史料20」は霊社起証文とはなっていないが、徳川氏に対する忠誠や、謀反人に同調しない旨を誓約している点は同じである。

- (49) 『御夜話集』上編（石川県図書館協会、一九三三年）（以下『御夜話集』と表記）七八頁。
- (50) 『看』一四〇頁。『海』四〇四頁。『綿考輯録』第二卷（及古書院、一九八八年）（以下『綿』と表記）では、門楼の問題は利長の在坂中の出来事としており、時期が異なっている（一七六頁）。
- (51) 『御夜話集』八六、八七頁。
- (52) 『看』一四二、一四三頁。『海』四〇四頁。
- (53) 「細川忠興軍功記」（『改定史籍集覧』第十五冊、臨川書店、復刻版一九八四年）（以下『忠興』と表記）一〇四頁。
- (54) 『軍記大成』一五六頁。
- (55) 前掲註（²²）。
- (56) 「前田家雜錄」（『加賀藩史料』第一編、清文堂出版、一九二九年）（以下『加賀』と表記）七二二頁。
- (57) （慶長四年）九月二十八日付前田利長書状「高畠定吉・篠原一孝・岡田長右衛門宛」「高畠家文書」（大西泰正編『前田利家・利長』戎光祥出版、二〇一六年、三〇五頁）。
- (58) （慶長四年）九月二十八日付太田一吉書状「島津忠恒宛」『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之五』（東京大学出版会、二〇一六年）一九五六号。
- (59) 『軍記大成』五六頁。
- (60) 『御夜話集』六六頁。
- (61) 『武家事紀』上（山鹿素行先生全集刊行会、一九一五年）三九〇頁。
- (62) 『寛永諸家系図伝』第十（続群書類従完成会、一九八六年、九七頁、丹羽長重の項）。
- (63) 『御夜話集』七八頁。
- (64) 『當代記 駿府記』（続群書類従完成会、一九九五年）七二頁。

(65) 「松井家先祖由来附」『松代市史』近世史料編八（八代市教育委員会、一九九九年）（以下『松代』と表記）八四頁。『綿考輯録』は、「康之病と称して出仕せず」としている（『綿』一七七頁）。「史料2」に「若御煩候共、御下候て於此方可有御養生候」とあることから、康之が蟄居した表向きの理由は病とされていたことがわかる。

(66) （慶長四年）十月十七日付金森素玄書状「松井康之宛」（『松井文庫所蔵古文書調査報告書』十、八代市立博物館未来の森ミュージアム、二〇〇六年）（以下『松井十』と表記）一八四九号。

(67) （慶長四年）十月十八日付有馬則頼書状「松井康之宛」（『松井十』一八五一号）。

(68) （慶長四年）十月十八日付有馬則頼書状「長岡忠隆宛」（『松井十』一八五〇号）。

(69) 「松井家先祖由来附」（『松代』八八、八九頁）。

(70) （慶長四年）十月二十一日付金森素玄・有馬則頼連署状写「長岡忠興宛」（『松井十』一八五五号）。

(71) （慶長四年十月）二十二日付金森素玄・有馬則頼連署状写「長岡興元・松井康之宛」（『松井十』一八五七号）。

(72) 『綿』一八〇、一八一頁。「松井文庫所蔵」の長岡忠興書状は十月二十六日付となっている（『松井十』一八五六号）が、忠興は十月二十三日付で興元に誓紙を提出ように指示しており（註73）、「いかやうにも御錠次第二仕候へと、はや今朝申遣し候」とする「史料5」の内容と重なる。「松井文庫所蔵」の書状の日付を二十三日に書き換えて収載した可能性はあるものの、二十三日に「史料19」と同一のものが出されたことは確実である。一方で「史料19」を二十六日付とした場合、「はや今朝申遣し候」の箇所がそぐわない。

(73) （慶長四年）十月二十三日付長岡忠興書状写「長岡興元宛」・（慶長四年）十月二十五日付長岡興元自筆添状「松井康之宛」（『松井十』一八五三号）。

(74) 慶長四年十月二十四日付松井康之・長岡興元・長岡幽斎連署起請文前書案「榊原康政・有馬則頼・金森素玄宛」（『松井十』一八五九号）。

- (75) 『綿』一八二、一八三頁。
- (76) 『綿』一八三、一八六頁。
- (77) 『新訂寛政重修諸家譜』第五（続群書類従完成会、一九六四年）三四七頁。
- (78) （慶長五年）正月九日付徳川秀忠書状写「前田利長宛」「加賀古文書」（『加賀』七三〇頁）。
- (79) 「杉本義隣覚書」（『加賀』七二三頁）。
- (80) 『看』一四一頁。『海』四〇四頁。
- (81) 『日本報告集』二四二頁。
- (82) 『当代記』は「此三月の比より、会津長尾景勝と内府公不快」とする（前掲註⁶⁴）。
- (83) 『卜斎記』四四頁。
- (84) 『御夜話集』七八頁。
- (85) （慶長五年）五月十三日付三奉行連署状「堀尾忠氏宛」『尊經閣古文書纂 諸家文書二』（八木書店、二〇二二年）当家文書一一号。
- (86) 徳川家康違背事書写『松井文庫所蔵古文書調査報告書』二（八代市立博物館未来の森ミュージアム、一九九七年）（以下『松井二』と表記）四一九号。
- (87) （慶長四年）十二月六日付徳川秀忠書状「太田金右衛門宛」「太田家文書」（『宮崎県史』史料編 中世2、宮崎県、一九九四年）六六七頁。
- (88) （慶長五年）七月三十日付大谷吉継書状「真田昌幸・信繁宛」『真田宝物館収蔵品目録 長野県宝 真田家文書1』（松代藩文化施設管理事務所、二〇〇四年）五三号。
- (89) 『看』一四二頁。『海』四〇四頁。
- (90) （慶長四年）九月十四日付徳川家康書状「上杉景勝宛」『大日本古文書 家わけ第十二 上杉家文書之三』（東

京大学出版会、一九八一年）（以下『上杉三』と表記）一〇八八号。

(91) (慶長四年) 十月二十二日付徳川家康書状「上杉景勝宛」(『上杉三』一〇八九号)。

(92) (慶長四年) 十一月五日付徳川家康書状「上杉景勝宛」(『上杉三』一〇九〇号)。

(93) 参謀本部編『日本戦史 関原役』(元真社、一八九三年)（以下『日本戦史』と表記）三六頁。「会津陣物語」(『改定史籍集覧』第十四冊、臨川書店、復刻版一九八四年)（以下『会津陣』と表記）七六七頁。ただし、『日本戦史』は、一月中旬に千坂景親が上杉景勝に「会津ノ挙動ヲ怪ミ家康ニ密告スル者アリ」と報じたとする。

(94) (慶長五年) 三月二十日付上杉景勝書状写「吉田源左衛門尉・田川与三左衛門尉宛」「覚上公御書集」卷十九(『覚上公御書集 下』臨川書店、一九九九年)。

(95) 「会津旧事雑考」卷之九(『会津資料叢書』第八、会津資料保存会、一九二〇年)五六頁。「会津旧事雑考」は、寛文十二年、保科正之の命によって向井吉重が編集を行った。神武天皇即位の年より寛永二十年正之の会津入部に至るまでにおける会津の旧聞雑事を編年体で記している。

(96) 「会津四家合考」卷之七(『戦記資料 会津四家合考』歴史図書社、一九八〇年)三六九頁。「会津四家合考」は、保科正之の家臣向井吉重が著し、寛文二年に完成して主君正之に献上された。会津を領有した蘆名・伊達・蒲生・上杉が会津を領有していた時代の変遷が記されている。

(97) 石田明夫「神指城と関ヶ原——上杉景勝の城づくり」(『会津若松市史研究』第三号、二〇〇一年)、本間宏「神指城跡の再検討」(『福島県歴史資料館研究紀要』第三一号、二〇〇九年)など、神指城が都市計画であることは定説化していると考えていいだろう。

(98) (慶長五年) 六月十日付上杉景勝書状「安田能元・甘糟景継・岩井信能・大石元綱・本庄繁長宛」(『越後文書宝翰集 毛利安田氏文書』新潟県立歴史博物館、二〇〇九年)四—五号。

- (99) 「慶長軍記」寛文三年本（井上泰至・湯浅佳子『関ヶ原合戦を読む——慶長軍記 翻刻・解説』勉誠出版、二〇一八年）〈以下『慶長軍記』と表記〉八〇頁。『会津陣』七六七頁。
- (100) 直江状（承応三年刊本）「東京大学総合図書館所蔵」請求番号 A004631。「直江状」の内容は上杉氏が伊奈令成ら糾明使に対しておこなった回答とは真逆のものであり、実在したとは考えられない。
- (101) 『看』一四一頁。『海』四〇四頁。
- (102) （慶長四年）十一月廿日付徳川家康書状写「戸沢政盛宛」「譜牒余録」卷四十五 戸澤能登守（『内閣文庫影印 叢刊譜牒余録』中、国立公文書館、一九七四年）〈以下『譜牒余録』と表記〉四五四頁。
- (103) （慶長五年）五月二十日付徳川家康書状「堀秀治宛」「岐阜関ヶ原古戦場記念館所蔵」（『思文閣古書資料目録』第二七五号、思文閣出版、二〇二二年、五六号）。
- (104) （慶長五年）四月八日付島津惟新書状「島津忠恒宛」「島津家文書（御文書 義弘公 一九一八―五）」。「旧記三」一〇八一号。
- (105) （慶長五年）四月二十七日付島津惟新書状「島津龍伯宛」「島津家文書（御文書（義弘公）一九一八―九）」。「旧記三」一〇九八号。
- (106) （慶長五年）五月七日付最上義光書状写「仁賀保・赤尾津・滝沢宛」「大野文書」（『能代市史』資料編中世二、一九九八年）四二六号。
- (107) （慶長五年）五月三日付徳川家康書状写「伊王野資信宛」「譜牒余録」卷五十六（『譜牒余録』七八一頁）。
- (108) 宮本義己「直江状研究諸説の修正と新知見」（『大日光』八二号、二〇一二年）四七頁。
- (109) 『鹿苑日録』第三卷（続群書類従完成会、一九三五年）〈以下『鹿苑』と表記〉三三〇頁。
- (110) 『忠興』一〇六頁。
- (111) 『舜旧記』第一（続群書類従完成会、一九七〇年）〈以下『舜旧記』と表記〉二二八頁。梵舜と長岡幽斎の間

に親交があつたため得られた情報と思われる。もとより、梵舜は秀吉が歿した慶長三年八月十八日に「太閤御死去云々」と記しているほどであり、政権の中枢の出来事に関しては諸大名以上に情報収集力があつたと思われる。

(112) (慶長五年) 五月十八日付徳川秀忠書状(影写本)「森忠政宛」『伊佐早文書』東京大学史料編纂所蔵(請求記号 3071.25-3-2)。

(113) 神戸大学文学部日本史研究室編『中川家文書』(臨川書店、一九八七年) 九〇号。

(114) (慶長五年) 四月二十日付徳川秀忠書状「堀尾忠氏宛」「大阪青山短期大学所蔵」(徳川義宣『新修 徳川家康文書の研究』第二輯、吉川弘文館、二〇〇六年) 三二二頁。

(115) 前掲註(107)。

(116) (慶長五年) 四月一日付西笑承兌書状写「直江兼続宛」『歴代古案』第五(続群書類従完成会、二〇〇二年) 一一五八号。

(117) 『鹿苑』三二〇頁。

(118) 『鹿苑』三二四頁。

(119) (慶長五年五月二十六日) 浅野幸長書状写「浅野長政宛」「坂田家文書」(『甲府市史』史料編 第二卷 近世一、一九八七年) 六五号。

(120) (慶長五年) 五月十七日付島津惟新書状「島津忠恒宛」「島津家文書(御文書 義弘公 一九一八―一一)」。『旧記三』一一〇七号。

(121) (慶長五年) 五月五日付島津惟新書状「島津忠恒宛」『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之二』(東京大学出版会、一九五二年) 一一五〇号。

(122) (慶長五年) 三月二十一日付徳川秀忠書状「上杉景勝宛」(『上杉三』一〇九三号)。

(123) (慶長五年) 五月二十六日付徳川秀忠書状写「金森可重宛」(『岐阜県史』史料編 古代中世四、一九七三年)「金森文書」六号。

(124) 前掲註(113)。

(125) (慶長五年) 七月二十一日付加藤清正書状「黒田如水宛」「田中家文書」(山田貴司「関ヶ原合戦前後における加藤清正の動向」同編『加藤清正』戎光祥出版、二〇一四年収載)。清正は、出征そのものではなく、家康の出陣に反対したとされている(『慶長軍記』八九、九〇頁)が、家康が不在で征討軍が纏まるとは考え難い。家康の出陣を制止することは、実質的に出征そのものを制止することに繋がると考えられる。

(126) (慶長五年) 五月二十二日付前田利長書状「種村肖樵寺宛」(『前田育徳会尊経閣文庫所蔵 武家手鑑 解題・釈文』臨川書店、一九七八年、下ノ四〇)。

(127) (慶長五年) 六月二日付徳川家康黒印状写「本多康重宛」「譜牒余録」卷三十三 本多越前守(『譜牒余録』三九頁)など。

(128) 『舜旧記』二二九頁。

(129) 『武家事紀』中(山鹿素行先生全集刊行会、一九一六年)一八九、一九〇頁。『軍記大成』二二五頁。

(130) 前掲註(95) 六〇頁。

第四章 西軍の結成過程と目的についての一考察

はじめに

近年では西軍の位置づけについて再評価が進んでいる。布谷陽子氏が西軍の首謀者は石田三成のみではなく、毛利輝元・宇喜多秀家の二大老、前田玄以・増田長盛・長束正家、そして三成の四奉行が中心となって形成されたと指摘した⁽¹⁾のを受けて、白峰旬氏は、二大老四奉行による連署状の発給の事例や、西軍が失領していた大友吉統（義統）を大名に復帰させるべく、吉統に領知を宛行った事例などから、西軍が豊臣公儀から大老の一人であった家康を排除（政権から放逐）して石田・毛利連合政権が成立したとし、毛利輝元・宇喜多秀家と石田三成の三人が政権の中心人物であったと、西軍を「公儀」と評価した⁽²⁾。白峰氏と同様に、中野等氏も「秀頼を推戴する新たな『公儀』の成立」⁽³⁾とし、堀越祐一氏も「秀頼を擁する三成方は、いわば『政府軍』であり」⁽⁴⁾とするなど、近年では西軍を「公儀」と評価する方が多数派といえる。だが、こうした場合、会津征討軍が解体せずに東軍となって反転西上したほか、九州の黒田如水や加藤清正、越後の堀秀治など、地方に在国した諸将のほとんどが家康の味方となり、家康が依然として諸大名の支持を失っていない点の説明できない。西軍を「公儀」と評価するのは検討が必要であろう。

本章では、第一章でみてきた五奉行の役割を踏まえながら、西軍の結成過程をみていくことで、西軍の掲げたスローガンを明らかにする。そして、西軍の位置づけについて検討をおこなう。

第一節 佐和山引退後の石田三成

通説では、徳川家康は石田三成の挙兵を誘うために会津征討を行ったとされる。しかし、第三章で見てきたように、家康の方針は大老衆一人ひとりを豊臣公儀から孤立させて排斥していくものであり、家康暗殺計画の風聞に端を発した一連の動きの延長線上に会津征討はあった。いわゆる権力闘争の一端であり、けっして、三成の挙兵を誘発し、反徳川勢力を一網打尽にするために起こした軍事行動ではない。そもそも、三成が家康の留守を衝いて挙兵に及ぶと当時の人々は思っていたのだろうか。

姜沆の記録『看羊録』は、上杉景勝が前田利長と協力して関東を攻撃し、家康が関東へ戻った場合、上方で加藤清正らが挙兵すると人々は口にしていてと記している⁽⁵⁾。もともと、清正と家康の関係は、家康暗殺計画の風聞に端を発した一連の事件の最中は冷え込んだが、事件の解決を経て改善されている。姜沆は慶長五年（一六〇〇）四月二日に伏見を離れ、同年五月十九日に釜山へ着いて帰国していることから、それ以前の情報であることを留意しなくてはならないが、少なくとも加賀征討が取沙汰されていた時は、三成が疑われていた様子はない。むしろ『看羊録』は、この頃の三成の動向について興味深い記述を残している。

第三章で見てきたが、『看羊録』は、暗殺計画があると家康に密告したのは三成としている。そして、「家康に媚びようという心積もりもあって」と三成の行動を評している⁽⁶⁾。もともと、管見の限りでは同時代の人物で三成を密告者と記したのは姜沆のみであり、三成が本当に密告したかはわからない。『看羊録』の史料性格からすると、噂にすぎない可能性がある。細川（長岡）氏の家史『綿考輯録』など日本側の史料にも三成の密告が記されている⁽⁷⁾ものの、徳川治世下に編纂された二次史料であるため、鵜呑みにはできないだろう。しかし、姜沆が当時の三成を「家康に媚びようという心積もりもあって」と評している点は無視できない。

島津惟新は九月二十一日付で息子忠恒へ宛た書状において次の様に述べている（一条目、二条目抜粋）。

「史料 1」（8）

① 今度於大坂 内府様天下之御仕置被仰定候ニ付、いかやうの子細候之哉、羽柴肥前守殿当時賀州へ在国候ヲ、無上洛様にと被仰下候、自然強而於上洛者、越前表にて可被相留之由候て、刑少殿の養子大谷大学殿・石治少之内衆一千余、越前へ被下置候事

② 一加藤主事も無上洛様にと被仰付候、其上ニ罷上ニおひてハ、淡路表にて可被相支之由候て、菅平右衛門尉殿・有馬中書兩人ニ被仰付彼表へ被指越候、如斯必定承付候間、為心持申入候、乍不申諸人不承様に、校量肝心候、其故ハ京都之出合、国元へ申通候と露頭候へは、爰元の仕合も難計候之事

近江佐和山にいた三成は、家康からの出兵要請に応じて、前田利長の軍勢が上方へ入って来られぬように一千余の軍勢を越前へ派兵している。この三成の出兵は、『看羊録』にも記されている。むろん、これは豊臣政権の軍役であり、三成はあくまで秀頼の命令で出兵したという立場である。これをもって家康の配下になったというわけではない。

しかし、未だ家康の独裁的権力が盤石ではない時期において、戦局の要となる場所に三成の軍勢を充てたことは、家康が三成に対して一定レベルの信頼を寄せていたことは認めざるを得ないだろう。さらに、三成が家康に對して協力的な姿勢をとった事例はほかにも見られる。

重陽の節句（九月九日）に向けて大坂へ入った家康が宿所としたのは、備前島の三成邸だった（⁹）。その後、大坂城の曲輪の中に屋敷を有する石田正澄（三成の兄）が、家康に自身の屋敷を提供し、堺へ移っている（¹⁰）。うちに家康は大坂城西之丸へ居を移すが、正澄邸には平岩親吉を入れている（¹¹）。つまり、石田一族は家康に、大坂における拠点を提供していたのである。

家康暗殺計画の風聞に端を発した一連の事件で、三成は家康に対して大坂における拠点を提供し、家康の出兵要請にも応じている。三成は、家康の執政を認める一大名として、「家康に媚びようという心積もりもあって」と評されるほど協力的な姿勢をとり、家康も三成の姿勢を認めて、利長の牽制に三成を充てたのである。また、三

成が家康に対して協力的な姿勢を示す一方で、家康が三成に対して強い影響力を持っていたことも窺うことができる。

家康が三成に対して強い影響力を持つことができたのはなぜなのか。第三章で見てきたように、三成陣営が崩壊したあと、家康は三成陣営に与していた吏僚たちの懐柔を図った。『日本諸国記』には、家康が小西行長を味方に引き入れようと努めた様子が記されている。

「史料2」(12)

(石田) 治部少輔追放後、内府様(家康)は(小西)ドン・アゴスチイノを己れの味方に引き入れようと努めた。まず第一に、彼の朝鮮における大いなる実績を、次いで彼がその友人の(石田) 治部少輔に対して示した多大の忠誠心を、それぞれ称賛することによってである。その上、内府様は、日本の他の諸侯から徴したのと同様に(小西)ドン・アゴスチイノからも或る誓約を取りつけようとした。(すなわち)内府様が政権をとった時には、自分たちは必ず内府様を助け、その陣営に立つだろうという内容である。しかし、(小西)ドン・アゴスチイノは、若君秀頼様の栄誉や身分を傷つけぬよう万全を尽くすという条件を別にしては、その誓約に応ずることを欲しなかった。

『日本諸国記』は、このあと、家康は行長との縁組を画策し、懐柔に苦心していた様子を伝えている。しかし、差異はあるものの、小西行長、寺沢正成、大谷吉継をはじめ、三奉行(増田長盛・長束正家・前田玄以)といった三成陣営に与していた吏僚たちは、徐々に家康の執政へ協力的な立場をとることとなる。

特に大谷吉継は、奉行衆に準じる格で登用されたといっても過言ではないほど、家康の独裁政権下で重用されている。吉継は、慶長四年十月二日に島津忠恒へ宛てた書状で、庄内の乱における家康の意向を取り次いだ(13)のを初見として、宇喜多家の家中騒動の仲裁(14)や、家康と利長の和平交渉に携わっている(15)。真偽は定かではないものの、四月一日付西笑承兌書状によると、会津出征前夜においては増田長盛と共に上杉氏との交渉にも

携わっている（16）。三成に次いで浅野長政も失脚し、奉行衆の中で二名も欠員がいると執政に差し支えがあったのか、吉継は政権中枢で起こる事件に必ずといっていいほど登場し、奉行衆に準じた働きをしている。

一方、三成は慶長四年閏三月の騒動によって佐和山へ引退に追い込まれたが、三成の引退に伴って息子重家が石田家の当主となり、石田家は保たれていた。家康の裁定によって三成は失脚となったが、石田家を存続させたのも家康だったのである。姜沆に「家康に媚びようという心積もりもあつて」と評されるほどの家康に対する協力的な姿勢は、石田家の存続を保つために必要なものだったといえる。

一般的な三成のイメージは、専横を振るう家康に対して異を唱え、反家康の立場を終始貫いたとするものである。しかし、実際の三成は闇雲に家康に立ち向かったりはせず、佐和山に引退していた時期は家康に協力的な姿勢をとっていたのである。

第二節 関ヶ原前夜の石田三成

三成が「家康に媚びようという心積もりもあつて」と評されるほど家康に対して協力的な姿勢をとった理由は何だったのだろうか。関ヶ原の役を見据えて、時が来るまで家康の警戒を解くことにあつたのか、単に家の存続を図つたものだったのか、正確にはわからない。しかし、これから見ていく内容を踏まえると、前者のほうが強かったのではないかと思われる。

一時は家康に協力的な姿勢をとっていた三成だったが、会津出征の際に家康とトラブルを起こしている。浅野幸長が慶長五年五月二十六日に記した書状によると、石田家は重家の会津征討従軍に猛反発したため、代わりに三成が従軍するようにと家康の命が下つたとある（17）。また、上杉家臣の来次氏秀は六月十日付の書状で、勝右衛門という景勝に仕える船頭が大坂から下国して語った情報として、家康が三成と福島正則に対して、会津征討

のために佐和山城と清須城の借用を要請したが拒絶されたという話を記している（18）。

石田家が重家の従軍に猛反発したのは、十代の重家を従軍させたくないということよりも、挙兵計画が背景としてあったものと思われる。三成が挙兵したあと、関東に差し掛かった重家が人質とされることを危惧したため、重家の従軍を拒否したのではないだろうか。

慶長五年の七月晦日付で真田昌幸へ宛てた書状の中で、三成は昌幸に対して決起を事前に知らせなかったことを詫びている（19）。三成は挙兵計画を報せなかったことを詫びているので、挙兵計画に大きく関わっていたことは間違いない。しかし、「世上不成立ニ付てハ、御一人御得心候ても無詮儀と存思慮」と、昌幸一人だけ味方になっても仕方がないとしており、情勢を重要視している。三成は、少数での決起は考えておらず、単独で計画を練るつもりはなかったのである。情勢を覆す力が伴って初めて挙兵計画は始動したのである。

挙兵計画を始動させた、情勢を覆す力とは何だったのだろうか。三成と上杉景勝が会津出征以前から連携をとっており、家康を東西から挟撃する作戦だったとする事前盟約説が存在する。しかし、前述の七月晦日付の書状をもつて、会津へ向かう三成の使者に対して案内する者を付けて欲しいと昌幸に依頼していることから、この頃の三成は景勝との交信ルートを有していなかったといえる。また、八月十日付真田昌幸・信繁宛石田三成書状（20）では「菟角早々会津へ使者を被立、公儀無御如在、拙者と被仰談候由、可被仰合候」と述べていることから、三成が挙兵した段階では、三成と景勝の間に盟約は結ばれておらず、挙兵後に協力関係を築こうとしており、事前盟約説は否定されよう。情勢を覆す力は上杉景勝ではなく、ほかのところにあったのである。なお、『日本諸国記』は西軍が決起した流れを次のように記している。

「史料3」（21）

内府様（家康）は急いでいたし、全員がただちに後続するものと考えていたので、自信をもって全兵力を率いて関東に向かった。幾人かの奉行は内府様に従ったが、その歩みは緩慢だった。その一人は（石田）治部

少輔の城を通過する時に彼と連絡をとり、兼ねて仕組んでおいた計略を明らかにしようと思決意した。そこで、あとからやって来た者たちと談合し、全員大坂へ帰ることで一致し、すぐに行動した。このようにして、たちまち両者の関係は決裂して、日本のほとんどすべての諸侯の間に、内府様に背反する同盟が結成された。

重立った奉行、および大坂にいた三名の奉行も彼らと合流し、彼らと一致団結し、内府様に敵対する立場を明らかにして内府様を政治から放逐した。彼らは内府様に自らの領国にとどまるようにとの伝言を送り、幼君秀頼様に対し、またその父君太閤様の命に背き犯した数ヶ条の罪状を突きつけた。

傍線で示した三つの「奉行」について整理を行うと、最初の「幾人かの奉行」の「奉行」は原文では「領主」や「大身」などと訳すことが多い *senhores* が用いられている。それに対して、残りの「重立った奉行」「大坂にいた三名の奉行」の「奉行」には一般的には「統治者」を意味する *governador* が用いられている²²。つまり、前者は大名、後者は大老衆・奉行衆を指しており、「大坂にいた三名の奉行」は増田長盛・長束正家・前田玄以の三奉行が該当し、「重立った奉行」には毛利輝元、もしくは宇喜多秀家を加えた二大老が当てはまると考えられる。そして、佐和山城を通過する時に三成と連絡をとったとされる人物は、毛利氏の外交僧安国寺恵瓊もしくは大谷吉継であろう。通説と大きな差異はなく、イエズス会の宣教師は入手した情報に手を加えず、そのまま記したと考えられる。当時の人々の認識を知る上で信用できる記述といえるだろう。

また、七月十五日付で島津惟新（義弘）が会津の上杉景勝に宛てた書状には、次のように記されている

「史料4」⁽²³⁾

雖未申通候、今度内府貴国へ出張ニ付、輝元・秀家を始、大坂御老衆・小西・大刑少・治部少被仰談、秀頼様御為ニ候条、貴老御手前同意可然之由承候間、拙者も其通候、委曲石治より可被申候、以上

羽兵入

七月十五日

惟新

景勝

人々御中

惟新は、毛利輝元、宇喜多秀家、三奉行、小西行長、大谷吉継、石田三成が西軍を組織したとしている。三成
の副状が出されること、惟新が個人的に出したものではなく、組織（西軍）の意向が働いて出さ
れた書状である。この書状はあくまで写であるが、七月三十日付真田昌幸・信繁宛大谷吉継書状にも「年寄衆・
輝元・備前中納言殿・嶋津、此外関西之諸侍一統を以」⁽²⁴⁾とあるので、輝元（および安国寺恵瓊）、秀家、三成、
三奉行、行長、吉継、惟新が西軍の中枢を担ったと考えていいだろう。

三奉行は次の書状で輝元に上坂を要請し、後述するように、西軍総帥に就けるという重要な役割を果たしてい
る。

「史料5」⁽²⁵⁾

大坂御仕置之儀付而、可得御意儀候間、早々可被成御上候、於様子者、自安国寺可被申入候、長老為御迎、
可被罷下之由候へ共、其間も此地之儀申談候付而、無其儀御座候、猶、早々奉待存候、恐惶謹言

七月十二日

長大

増右

徳善

輝元様

人々御中

上坂要請状を受けとった輝元は、同月十五日に広島から出舟。光成準治氏は、十二日付で出された上坂要請状
は十五日に到着した可能性が高いとし、輝元の対徳川闘争への即断を指摘している⁽²⁶⁾。また、輝元は上坂要請
状の写しを副えて、十五日付で書状を肥後熊本に在国していた加藤清正へ送っている。

「史料 6」(27)

急度申候、従両三人、如此之書状到来候条、不及是非、今日十五日出舟候、兎角秀頼様へ可遂忠節之由言上候、各御指図次第候、早々御上洛待存候、恐々謹言

芸中

七月十五日

加主

御宿所

三奉行が上坂を要請した意図として、三成と吉継の挙兵を鎮圧するよう依頼したとする説もある(28)。しかし、『松井家先祖由来附』によると「其此安芸中納言輝元卿は御在国にて候処、長束大蔵太輔・増田右衛門尉・前田徳善院より、急二大坂へ被越候様ニと七月十二日飛船を以申下候付、同十五日輝元卿御出船ニ付、加藤主計頭殿を味方ニ被相招旨、以書状被申越候得共、主計頭殿元より御同意無之、即刻御使者を以、右来状の写共康之へ御贈、委細被示聞候」(29)と、三奉行から上坂要請状を受け取った毛利輝元は、清正を西軍に誘ったが、清正は同意せず、「史料 5」と「史料 6」を康之に送ると共に詳細を伝えたのであるので、その説は否定されよう。

「史料 5」を見ると、輝元と三奉行の間で、恵瓊が三奉行の使者として輝元を迎えに行く段取りになっていたようである。そして、詳細を説明する恵瓊の下向が無いにもかかわらず、輝元は同月十五日に広島から出舟している。輝元は書状の内容をすでに把握していたがゆえに、口上を述べる使者が必要なかったのだろう。これらのことから、上坂要請状は、輝元および恵瓊の側から三奉行に発給するよう要請したと考えられる。

「史料 6」では、輝元は清正の上洛を促している。自身の動向まで記しており、西軍総帥として諸大名に対して協力を命じるといったものよりも、私信に近い文言となっている。清正と家康の関係は、加賀征討をめぐる一連の事件の解決を経て改善されていたが、輝元は、対徳川闘争に清正が参加すると期待していた様子が窺える。

清正が九月二十九日付で鍋島直茂に宛てた書状には「関東表之合戦輝元方敗軍ニ付而」⁽³⁰⁾と西軍を「輝元方」として扱っており、これには「史料5」が影響しているだろう。また、黒田如水は吉川広家に「天下之儀てるもと様御異見被成候様にと奉行衆被申、大坂城御うつりなされ候事、目出度存候」⁽³¹⁾と外交辞令を述べており、上坂要請状が輝元に「天下之儀」に携わってもらい、つまり西軍総帥に就くよう要請したものであることは広く知れ渡っていた。輝元を西軍総帥の地位に就けたのは三奉行であり、輝元の正当性は三奉行によって裏づけされたものだったのである。

しかし、『慶長年中ト斎記』によると、増田長盛は徳川家臣の永井直勝に七月十二日付で三成と吉継に不穏な動きがあるという風聞を記した次の書状を出しており、前田玄以と長束正家からも上方の動静が徳川氏に報じられたとある。

「史料7」⁽³²⁾

一筆申入候、今度於樽井、大刑少両日相煩、石治少出陣之申分、爰元雜説申候、猶追々可申入候、恐々謹言

七月十二日

増田右衛門尉

長盛

永井右近大夫殿

『慶長年中ト斎記』は覚書という性格上、慶長四年閏三月に石田三成を失脚に追い込んだ七将のメンバー二名に誤りが見られるなど、特に人名が列記される箇所には誤りが出てくる。前田玄以と長束正家の名が記されている箇所には、上方の動静を報せた人物として生駒親正・蜂須賀一茂・滝川雄利・新庄直頼・柘植与一・浅野長政も名を連ねており、浅野長政は関東に居ることから誤りであるが、滝川雄利は七月二十二日付徳川秀忠書状によつて、動静を報じていたことが確認できる⁽³³⁾。前田玄以と長束正家についても、家康は七月二十三日付で最上義光へ宛てた書状において「大坂之儀者、仕置等手堅申付、此方ハ一所に付、三奉行乃書状為披見進之候」⁽³⁴⁾と、

三奉行から届いた書状の写しを副えるとしているので、三奉行が家康の味方であることを示す書状（おそらく上方の動静を報じたもの）がもたらされたと考えてよいと思われる。

「史料7」については、白峰旬氏が、①原文書がなく写の文書しか伝存しない、②内容的に文章が短すぎる、③反家康として活発に動いていた安国寺恵瓊の動きについて全く触れていない、といった疑問点を指摘している（³⁵）。原文書の不在はさておき、歴史的に重要な文書でありながら『慶長年中卜斎記』と同時期（十七世紀中期以前）に成立した編纂史料に見られない点、覚書という体裁をとっているにもかかわらず所在不明の文書の文面を復元している点からも、白峰氏の指摘は正しいと思われる。

「史料7」が偽文書であったとしても、三奉行が上方の動静を報せた可能性は高く、その理由を考えなくてはならない。推測となるが、三奉行は家康の独裁権力下においてポジションを有していることから、クーデターを起こす利点は三成と比べて大きいとはいえない。クーデター失敗に対する危惧も少なからずあっただろう。こうした要素から三奉行は、当初は家康にも通じており、毛利氏が大阪城を占拠した十七日頃から本格的に西軍に参画したと考えられる。

また、大谷吉継の動向についても、八月二十二日付で佐々正孝（行政）が出羽湊（秋田県秋田市）の秋田実季に宛てた書状で、「先度上方御人数此表へ就出陣、大刑部少も可罷下旨候て、つるかより催人数、たるい辺まで罷立候処ニ、石治部少方より使をよひ越、於佐保山二日令談合如此企別心、内府様・奉行衆御手切之様ニ罷成、上下機遣共可被成御推量候」（³⁶）と、吉継が垂井まで進軍したところ、三成からの使者が来て佐和山で二日間談合したという情報を記しているので、当時こうした風聞があったことは確かだろう。この情報通りであるならば、吉継は会津征討に従軍するために垂井まで進軍しており、その後、上方へ引き返していることから、挙兵計画の首謀者ではなかったと考えられる。

小西行長は『日本諸国記』で、次のように西軍の重立った者として位置づけられている。

この同盟に参加していた重立った者は、(小西)ドン・アゴスチノ(行長)と、その親友(石田)治部少輔であった。両名は非常な勇気と智略に富み、太閤様から賜った大いなる恩義を感じていた。太閤様は存命中、この兩人に対して深い愛情を常に抱いていたし、両者が大領主になったのも太閤様のおかげであったからである。したがって両者にとり、太閤様の若君(秀頼)が、内府様のために世襲封土を剥奪され、栄誉や身分の点での毀損を被ることに我慢がならなかった。このために両者は、若君に対する忠臣として、どうしたらその身分を今まで通りにとどめることができるか、絶えず心を労してきた。そして両者は、この一点につき諸大名と談合の結果、最終的にこの同盟を結ぶに至った。その成否はママかかってかの策略にあったが、日本の政治史においてこの同盟くらい入念に仕組まれたものはなかった。これによって大いなる名声と栄誉が、殊にかの二人の領主に帰したのであった。

しかし、行長は正月十一日付けで島津龍伯へ宛てた書状(38)で一兩日の間に上洛すると伝えて以降、国許への帰還はないことから、挙兵を想定して上方に居たとは考え難い。

本戦当時は十四歳で、島津惟新に従っていた神戸久五郎(松岡千熊)の咄覚によると、島津惟新の伏見城守備の話は、伏見城の留守居だった鳥居元忠らに拒絶されて反故になったという(39)。事の真偽はともかく、義弘は七月十四日付けで国許にいる島津忠恒に宛てた書状で「手前無人にて、何を申候ても罷成間敷と迷惑此時に候」(40)と、手勢の少なさを嘆いていることから、行長と同様に挙兵を想定して上方に居たとは考え難い。

宇喜多秀家は、輝元に上坂要請状が出される以前から西軍としての行動が確認できる。秀家は、六月十一日の在国が確認できるが(41)、上洛して七月五日に秀吉を祀る豊国社で神馬を奉納して武運を祈っている(42)。また、二日後には秀家の正室(樹正院)の指示で湯立の儀式が行われ、北政所の名代として東殿が参詣している(43)。これらの儀式の目的は、関ヶ原の役の戦勝祈願である。光成準治氏が指摘するように、会津征討の武運を祈る

ものだとすると、出陣前に執り行はずであり、秀家の名代として出陣した宇喜多詮家が豊国社への参詣に同道した形跡がない⁽⁴⁴⁾。その可能性は否定されよう。

また、上杉家臣の来次氏秀は、大坂からの情報として、輝元と秀家は秀吉の生前から東国への出兵は免除されていると（会津征討の従軍拒否を）押し切ったという話を記している⁽⁴⁵⁾。もとより、輝元は吉川広家と安国寺恵瓊、秀家は宇喜多詮家を名代として従軍させているので、彼ら自身が会津征討に従軍する必要はない。秀家の行動は、挙兵を目的としたものと考えていいだろう。

七月七日に秀家の正室が執り行った湯立において、北政所から名代が派遣されている点は重要である。七月二十三日に秀家が豊国社に参詣した同日には北政所からの指示で祈禱が行われている⁽⁴⁶⁾。秀家夫妻は、共に秀吉の猶子・養女であり、豊臣家との結びつきが強い。おそらく、秀家夫妻からの説得によって、北政所は七月七日頃には西軍に同調していたと思われる。また、北政所の名代を務めた東殿は、大谷吉継の母親であることから、吉継の西軍参画が七月七日以前である可能性は高い。

大谷吉継、小西行長、島津惟新の三名は、対徳川闘争の積極性はあるものの、首謀者だったかという点、その可能性は低い。それに対して、輝元と秀家は挙兵の直前まで領国に在国しており、覚悟をもって上洛している。三成を挙兵へと誘った情勢を覆す力は、輝元と秀家の存在ではないだろうか。

「史料4」で惟新が「輝元・秀家を始」という書き方をしているように、秀吉が西国のリーダーとして定めた輝元や、同じく西国の大大名である秀家が味方していることを広めることで、西軍は諸将を味方に引き込もうとしていたと考えられる。

『日本諸国記』は安国寺恵瓊を「反内府様同盟の張本人」とし、三成は「もつとも重罪で、同盟の張本人」としており、捕縛された三成、行長、恵瓊の三名が街路を引き回される順番は、罪の重さによって三成、恵瓊、行長の順になったという⁽⁴⁷⁾。三成が挙兵計画に大きく関わっていたことは間違いない。しかし、真田昌幸や上杉

景勝といった親しい面々に事前に計画を伝えることなく、挙兵後に協力を求めていることから、三成が単独で計画を発案、始動させたとは考え難い。一人の味方もいない上、失脚していた三成が、消極的な毛利輝元と宇喜多秀家を対徳川闘争へ引きずり込んだという構図は不自然であり、むしろ、輝元と秀家の側に積極性があつたと考えたほうが自然である。三成は少数での決起は考えておらず、輝元、秀家という情勢を覆す力が伴って初めて挙兵計画は始動したのである。

第三節 「内府ちかひの条々」からみる西軍の目的

慶長五年七月十七日、毛利秀元が家康の居所となっていた大坂城西之丸を占拠⁽⁴⁸⁾。同日付で三奉行の檄文が発せられ、そこに家康の罪状を十三ヶ条に亘って書き連ねた「内府ちかひの条々」が副えられた。これらには西軍の政治的な主張が述べられており、西軍の目的を探る上で重要な史料といえるだろう。それぞれ内容は次の通りである。なお、「内府ちかひの条々」は奉行衆が出したものであるため、文中の「奉行」は大老を、「年寄」は奉行を指している。

「史料9」⁽⁴⁹⁾

急度申入候、今度景勝発向之儀、内府公上卷之誓紙并被背 大閤様御置目、秀頼様被見捨出馬候間、各申談
及楯梓候、内府公御違之條々別紙ニ相見候、此旨尤と思召、 大閤様不被相忘御恩賞候ハヽ、 秀頼様へ可
有御忠節候、恐惶謹言

七月十七日

正家（花押）

長盛（花押）

玄以（花押）

「史料 10」(50)

内府ちかひの条々

一 ① 五人の奉行五人之年寄共、上卷之誓紙連判候て無幾程、年寄共之内式人被追籠候事

一 ② 五人之奉行衆内、羽柴肥前守事、遮而誓紙を被遣候て、身上既可被果候処ニ、先景勝為可討果、人質を取、追籠候事

一 ③ 景勝なにのとかも無之二、誓紙之筈をちかへ、又ハ太閤様被背御置目、今度可被討果儀歎ケ敷存、種々様々其理申候へ共、終無許容被出馬候事

一 ④ 知行方之儀、自分ニ被召置候事ハ不及申、取次をも有るましき由、是又上卷誓紙之筈をちかへ、忠節も無之者共ニ被出置候事

一 ⑤ 伏見之城、大閤様被仰出候留守居共を被追出、私ニ人数被入置候事

一 ⑥ 拾人之外、誓紙取やりあるましき由、上卷誓紙ニ載せられ、数多取やり候事

一 ⑦ 政所様御座所ニ居住之事

一 ⑧ 御本丸のこたく殿守を被上候事

一 ⑨ 諸侍の妻子、ひいき／＼ニ候て、国元へ被返候事

一 ⑩ 縁篇之事、被背御法度ニ付て、各其理申、合点候て、重而縁辺不知其数候事

一 ⑪ 若き衆ニそくろをかい、徒党を立させられ候事

一 ⑫ 御奉行五人一行ニ、一人として判形之事

一 ⑬ 内縁之馳走を以、八幡之検地被免候事

右誓紙之筈ハ少も不被相立、大閣様被背御置目候へハ、何を以たのミ可在之候哉、如此一人宛果候て之上、秀頼様御一人被取立候はん事まことしからす候也

慶長五

七月十七日

檄文では「各申談」と、皆で相談してという表現が用いられているが、「史料4」でも「被仰談」と、相談という表現が用いられているように、西軍側は皆で話し合って決めた豊臣政権の総意であるということのアピールしている。家康の独裁を意識し、対極をなす総意の概念を前面に出したのだろう。

檄文と「内府ちかひの条々」共に、「上巻之誓紙」という文言が見られるが、慶長三年八月五日と九月三日の誓紙はいずれも上巻之誓紙であり、何を指しているのかわかりづらい。これは、五大老と五奉行が交わした誓約の総体と捉えるのがいいだろう。例えば、「内府ちかひの条々」六条目にある十名以外の者との誓紙のやり取りの禁止は、慶長三年九月三日付五大老・五奉行連判誓紙にしか見られない項目である。しかし、同じく四条目の大名領知の現状維持は、五大老・五奉行連判誓紙には見られず、慶長三年八月五日付で家康と利家が五奉行に提出した誓紙にある項目である。

「内府ちかひの条々」の内容を整理すると、一条目から三条目までは、家康が五大老・五奉行の構成員を排斥したことに非を鳴らしたものであり、一条目の「年寄共之内式人」は五奉行の石田三成と浅野長政を指し、二条目と三条目は五大老の前田利長・上杉景勝の排斥を指している。この冒頭の三ヶ条こそが最も大きい挙兵の動機ではないだろうか。毛利輝元が青木重吉に対して協力を求めた七月二十七日付の書状では「殊更奉行・年寄一人宛被相果候てハ、秀頼様争可被取立候哉」⁽⁵¹⁾と述べられており、「内府ちかひの条々」の最後の文とも重なっている。五大老・五奉行の構成員を排斥していく家康の動きに対して、強い危機感を抱いていたことがわかる。

『吉川家文書』には、吉川広家が東軍と密約を結んだことについて輝元への弁明を記した案文が残されており、

安国寺恵瓊は広家に対して、挙兵に至った経緯を「内府様会津御出馬被相定候（中略）為各度々雖言上候、無御承引、今度御出馬被相極候、彼表之儀可相果迄二候、か様二候へハ、諸大名進退更無安堵之事二候、已来之儀者秀頼様御為も如何可有御座候哉、会津堅固之内、各申合、可及弓矢之通」⁽⁵²⁾と語ったと記している。

もつとも、この案文は文中に「去七月」「去年の御和平」という文言が見られるように、本戦の翌年（慶長六年）に書いた体裁をとっているが、所々に「大御所様」の文言が混じっている。それゆえ慶長十年以降の作成であることは間違いなく、広家が政治的思惑をもって慶長六年に書いたように偽装したものである。

このように問題のある史料ではあるが、広家が恵瓊の言動を美化する理由はない。恵瓊が広家に語った内容は大方この通りだったのではないだろうか。家康の政敵排斥に対して、諸将は危機感を抱いていた。特に輝元と秀家の危機感は強かったと思われ、二人を挙兵に向かわせた大きな要因になったと考えられる。

「内府ちかひの条々」の四条目以降は、家康が独裁権力下で行った施策に対する非難が主となる。四条目の「忠節も無之者共」に対する知行宛行とは、慶長五年二月一日の森忠政に対する信州川中島（長野市）への加増転封、二月九日の長岡忠興に対する豊後杵築（大分県杵築市）加増を指している。

知行に関する書状は大老衆の連署の形がとられていたが、森忠政への知行宛行状は家康一人で発給している⁽⁵³⁾。大老衆の連署という形が消滅したわけではなく、同年四月にも大老衆（家康・輝元・秀家）連署の知行安堵状が見られるため、この二月の知行宛行が家康の独断で行われた異例のことなのである。「内府ちかひの条々」十二条目は主としてこのことを指している。また、長岡忠興の豊後杵築の加増に対する家康の知行宛行状は確認できないが、三奉行が発給した知行方目録に「内府公被任御一行之旨」⁽⁵⁴⁾とあるように、家康の意向によるものであることが示されている。

石田三成が八月六日付で真田昌幸に宛てた書状には、「長岡越中守事破御法度、内府を誑、御若輩之 秀頼様を申掠、新地を取候故、遺恨深候」、「羽右近儀者各別之遺恨候、其故者御若輩之 秀頼様を申掠、新地拝領、曲事

との被申事二候」と長岡忠興・森忠政の加増を「御若輩之 秀頼様を申掠」と非難し⁽⁵⁵⁾、昌幸に対して森忠政の川中島を制圧するよう指示している。また、七月三十日付の書状では、「長岡越中儀、大閣様御逝去已後、彼仁を徒党之致大将、国乱令雜意本人二候間、即丹後国へ人数差遣、彼居城乗取、親父幽斎在城へ押寄」⁽⁵⁶⁾と、長岡忠興は家康を徒党の大将にし、国を乱れさせた張本人なので丹後（京都府北部）へ出兵したと述べている。これらことから、西軍側は不当に知行を得た長岡忠興と森忠政を家康と同様に征討の対象としていたことがわかる。

五条目および十一条目は、慶長四年閏三月の三成が失脚に至った騒動について述べている。三成の制裁（切腹）を訴えた加藤清正ら七将は、家康の統制下にあった。十一条目は主にこれを指していると思われる。また、伏見城の留守居は前田玄以・長束正家と残りの奉行衆の中から一人の計三名と定められていたが⁽⁵⁷⁾、騒動のあと、家康は伏見城に入城しており、五条目はこれを指している。

六条目と七条目は、慶長四年九月の出来事を指している。家康は暗殺計画の風聞を口実にして大坂城に居座り、「遺言体制」の变革に着手した。家康は諸将に忠誠を誓わせ、慶長四年九月十八日付で宮部長熙（因幡鳥取城主）が徳川氏に誓紙を提出している⁽⁵⁸⁾。同年九月二十六日には北政所が大坂城西之丸を退去し⁽⁵⁹⁾、程なく家康は大坂城西之丸を居所とした⁽⁶⁰⁾。そして八条目にある通り、慶長五年二、三月頃から、藤堂高虎を普請奉行として西之丸の天守建設に着手している⁽⁶¹⁾。

九条目は、徳川秀忠の正室（崇源院）や真田信幸の正室（大蓮院）といった徳川氏にとって重要な女性たちを関東へ下したことを指している。慶長四年九月十三日の毛利輝元の書状⁽⁶²⁾によると、この頃から家康は私的な思惑から秀忠の正室を国許に戻そうと動いていた。しかし、「多分秀頼様御袋様、此中者御分別候つる。何と共候哉、此節御下有間敷之由 御意之段、於家康外実無曲次第候」と、秀頼・淀殿の「御下有間敷」という「御意」により出来なかったという。実際に江戸へ下ることができたのは同年十二月のことであった⁽⁶³⁾。また、慶長五

年七月三十日に大谷吉継が真田昌幸・信繁に宛てた書状に「伊豆殿女中改候間、去年くたり候時」⁽⁶⁴⁾とあるように、真田信幸の正室も慶長四年中に国許へ下っていた。秀忠の正室でさえ国許へ下るのに難航していることから、信幸の正室の下向が政権中枢の権力者の後ろ楯なしに実現するとは考えられず、家康の政治的配慮が働いたと考えてよいだろう。こうした自身に連なる者達の妻子を国許へ下向させたことを非難したものである。

十条目は、慶長四年正月の私婚問題で糾弾されたにもかかわらず、利家の死や三成の失脚によって政局が有利になると、福島正則、蜂須賀一茂、加藤清正、黒田長政と次々に縁組を行ったことを「重而縁辺不知其数」と非難している。

十三条目は、家康の側室（相応院）が石清水八幡宮の田中家の分家（志水氏）出身であったことから検地を免除したことを非難したものである。

このように「内府ちかひの条々」に書かれた条文は、五大老・五奉行のメンバーの排斥と、家康が独裁権力下で行った施策の大きく二つに大別される。西軍側が家康の独断によって知行を拝領した長岡忠興と森忠政を征討の対象としたことや、権力闘争で奉行職を失った三成が慶長五年八月一日には奉行職に復帰して連署に加わっている⁽⁶⁵⁾ことから、西軍のスローガンは「内府ちかひの条々」で指摘した家康の行為の否定、つまり、家康に排斥された五大老・五奉行の構成員の復権による「遺言体制」の立て直しと、家康の独裁権力下で行われた施策の白紙化にあったと考えられる。

大谷吉継が七月三十日付で真田昌幸・信繁父子に宛てた書状には、「内府去々年以来御仕置、大閤様御定被背相、秀頼様御成立難成由候而、年寄衆・輝元・備前中納言殿・嶋津、此外関西之諸侍一統を以、御仕置改申候事」⁽⁶⁶⁾とあり、これまで家康が行ってきた施策を「御仕置改」として白紙化しようとしていたことが、史料から確認できる。

第四節 西軍の挙兵に対する徳川家康の反応

家康が西軍挙兵の報に接した時期については、『慶長年中卜斎記』によると、「史料7」が七月十九日申の刻に永井直勝のもとへ到着したという⁽⁶⁷⁾。しかし、前述のように「史料7」の真偽は疑わしい。そこで、ほかの史料を見ると、七月二十日付で徳川家臣の加藤成之が美濃黒野（岐阜市）の加藤貞泰に宛てた書状に「就其許雑説、御出陣被相延候由被仰越候、尤之由即返事被進之候」⁽⁶⁸⁾とあるので、二十日には徳川方は挙兵に関する風聞に接していたといえる。

七月二十一日付で長岡忠興が杵築城代の松井康之らへ宛てた書状には、「石治部・輝元申談、色立候由、上方より内府へ追々御注進候」⁽⁶⁹⁾とある。

『細川忠興軍功記』によると、忠興は東海道ではなく、東山道を進んでおり、美濃国（岐阜県）・信濃国（長野県）を経由し、徳川領国である上野国（群馬県）を経由して下野国（栃木県）へ入っている⁽⁷⁰⁾。江戸を経由していないことから、家康に注進がもたらされたという情報を忠興は時間を置いて知ったことになる。したがって、実際に家康のもとに注進が届いたのは、二十一日以前となる。家康は二十一日以前の段階で、輝元が西軍に関与していることを把握したことになるが、毛利氏による大坂城占領は十七日のことであり、後述するように同じく十七日付で出された「内府ちかひの条々」の存在を家康が二十九日頃に把握しているところから判断すると、輝元の関与については風聞と捉えるのが妥当である。

大坂にいた蜂須賀一茂が、七月十六日付で毛利家臣の堅田元慶に宛てた書状には、「兩人（三成・吉継）御同意之儀、初者雑説と存、不実候処、安国寺より承候旨ハ、今度東国へ之御人数被指留之由、蒙仰ニ付而、驚入候」⁽⁷¹⁾とあることから、輝元が関与しているということは、十六日の段階ですでに風聞として広まっていた。そして、一茂は、初めは輝元の関与を信じていなかったとしていることから、一茂が最初に風聞に接してから書状を

出すまでには時間差があり、風聞が広まったのは十六日以前といえる。上方と江戸の距離を踏まえると、家康にもたらされた注進というのは、一茂が信じていなかったとしたレベルの噂と考えられる。

風聞だったためか、この時期の家康は事態を樂觀的に捉えているように感じられる。依然として会津征討は予定通りに進行し、忠興書状の日付と同じ二十一日に家康は会津へ向けて江戸を発っている。しかし、二十三日には情報が具体的になってきたのだろう。家康は七月二十三日付で最上義光に書状を送って会津侵攻を制止している。

「史料 11」(72)

急度申入候、治部少輔、刑部少輔以才覚、方々触状を廻付而、雑説申候条、御働之儀、先途令御無用候、從此方重而様子可申入候、大坂之儀は仕置等手堅申付、此方ハ一所に付、三奉行の書状、為披見進之候、恐々謹言

七月廿三日

家康御判

おそらく、家康は会津征討を続行すべきか否かを七月二十三日の段階で思案し始めたと考えられる。家康が挙兵を三成・吉継によるものと考えていたのは、前述の蜂須賀一茂書状に「今度、石治、大刑逆意」とあるように、大坂にいる者たちも三成・吉継と考えており、その情報が関東に流れたためだろう。なぜ、三成と吉継が周囲に注目されていたのかという点については、「史料 11」の情報によると二人が諸将の説得工作を行っていたからとなる。

二十三日の時点での家康の認識は、三成・吉継の反乱であり、輝元には注目していない。また、三奉行を味方と思い込んでいるゆえか、「大坂之儀は仕置等手堅申付」と、大坂城が占拠されている事態は全く予想だにしない。一見、外様の勢力に対する虚勢ともとれるが、二十九日頃に三奉行の離反を知った家康は、同日付で最上義光にこの事態を伝えている(73)ことから、不利な情報を伏せているのではなく、当時の家康の認識がそのまま

記されていると見ていいだろう。上方の動静を報じてきた山崎家盛と宮城豊盛に対して家康は二十三日付で返書を出して「其元之様子具被申越候、祝着之至候」と述べている（⁷⁴）ため、上方の諸将から次々と情報が寄せられていたこともあり、上方の諸将は依然として自分を支持していると、家康が考えていたことが背景にあったと思われる。

第三章で見てきたように、家康の方針は大老衆一人ひとりを豊臣公儀から孤立させ、排斥していくものであり、輝元と秀家が上方で挙兵し、三人同時に相手をする事などは想定していなかった。通説では、家康は三成の挙兵を誘うために会津征討を行ったとされるが、そのメリットは三成が輝元と秀家を味方にして、それを家康が一网打尽にするところにある。しかし、輝元と秀家が挙兵することを想定していない家康に、失脚した三成を倒すメリットはない。この点からも通説は否定され、会津征討はあくまで上杉景勝の排斥を目的とした政争だったといえるのである。

二十三日の時点での家康の認識は、三成・吉継の反乱だったが、最上義光の会津侵攻を制止したように二十三日が一つの転換点となったことも事実であり、七月二十六日付小出秀政宛徳川家康書状に「今日廿六日、先手之衆上申候」とある（⁷⁵）ように、会津征討を中断して福島正則らを上方の鎮圧へと向かわせるのである。

福島正則らが西上を開始したことにより、東軍の方針は定まったかに見えたが、三日後に家康はさらなる対応に迫られることとなる。七月二十九日付で家康は黒田長政に次の書状を出している。

「史料 12」（⁷⁶）

先度御上以後、大坂奉行衆別心之由申来候間、重可令相談と存候處、御上故無其儀候、委細之様子羽三左へ申渡候之間、能様可被相談候、猶山本新五左衛門・犬塚平右衛門可申候、恐々謹言

七月廿九日

家康（花押）

黒田甲斐守殿

ここに至ってようやく、家康は三奉行が西軍に加担していたことを把握するのである。三奉行の離反を知った家康は、さらなる対応を迫られ、池田照政（輝政）を通して西上する豊臣系大名に対して事態に備えるよう伝えたのである。同様の書状が田中吉政にも出されており（⁷⁷）、両者に限らず、東海道を西上するほかの豊臣系大名にも出されたと思われる。

前述の通り、風聞ではあったものの、二十一日の時点で輝元が西軍に関与しているという情報が入っていた。黒田長政を通じて吉川広家から、輝元は西軍に関与していない旨を釈明された家康は、八月八日付黒田長政宛の書状で「從吉川殿之書状、具令披見候、御断之趣、一々令得其意候、輝元如兄弟申合候間、不審存候処、無御存知儀共由承、致満足候」（⁷⁸）と述べているので、それ以前の段階で輝元に関与は、家康や会津征討に従軍した諸将のところに確かな情報として入っていたということである。

輝元の間与は、西軍が多数派工作のために故意に流した情報であるため、風聞の域を出て確かな情報となるのに時間がかかるとは思えない。七月十六日には蜂須賀一茂が恵瓊から輝元の間与を聞かされていることから、十日付で出された「内府ちかひの条々」よりも早く確かな情報として伝わっているはずである。二十六日に豊臣系大名を西上させた時には輝元の間与も正確な情報として把握していたと思われる、少なくとも風聞としては情報が届いていることから、輝元が西軍に関わっていることも想定して豊臣系大名を西上させたと考えなくてはならない。当然、輝元が関わっているとなれば豊臣秀頼を推戴され、上方を占拠されることも想定できたはずである。にもかかわらず、三奉行の離反によってさらなる対応を迫られたことは、三奉行が、家康にとっては輝元よりも都合の悪い相手であり、事態がより深刻化したことを物語っている。

第一章で見てきたように、直臣で構成されている奉行衆は、いわば豊臣家の家老であり、豊臣秀頼の意思を代弁する立場にあった。慶長四年閏三月に三成陣営が崩壊して以降、三奉行は家康の執政に協力的であり、また家康も三奉行を信頼しており、小山評定と同日にあたる七月二十五日付で長束正家に西上する軍勢のための兵糧米

の準備を命じている（79）。

三奉行の存在は、家康権力の正当性を裏づけていた。その証左として「史料11」では、三奉行からの書状を副えて三奉行との繋がりをアピールしている。三奉行の離反は、家康の正当性の剥奪を意味し、その点が軍事力の問題にとどまる輝元とは異なり、家康の危機感をさらに煽ったのである。

第五節 西軍の評価の再検討

豊臣秀頼の意思を代弁する三奉行が西軍に味方したことによって、理論上、三成ら西軍は「公儀」となり、一方の家康は、三奉行が発した檄文と「内府ちかいの条々」によって会津征討の正当性を奪われたことになる。

実際に、八月五日付真田昌幸・信幸・信繁宛石田三成書状によると、越後春日山城主の堀秀治の西軍に対する対応は「無二ニ秀頼様へ御奉公可申」（80）と、秀頼に対して忠誠を誓うというものだった。また、加藤清正も「越中殿御身上之儀、秀頼様方曲事ニ被思召候由にて、丹後国へ隣国衆を差遣、城請取候へと、従奉行衆被申付候由候」（81）と、長岡忠興が秀頼の命令で所領を没収された旨を長岡家臣の松井康之と有吉立行に報じている。西軍の側に三奉行が味方し、豊臣秀頼を推戴したことは、諸将にとって軽率に扱うことのできない問題だった。そのため、冒頭で述べたように近年の研究では、西軍を「公儀」とする傾向にある。

三成が奉行職に復帰しているように、西軍が「遺言体制」を立て直して二大老・四奉行による新たな「公儀」を自称するのは自然な流れといえる。しかし、結果は理論通りに運んでいない。西軍が「公儀」を自称したことと、「公儀」として周囲に認められたかは別となる。堀秀治や加藤清正は、西軍の軍門に下ることはなかった。そして、会津征討軍が真田昌幸などのわずかな離脱者にとどまり、解体することなく東軍として西上している点から、家康は依然として諸大名の支持を失ってはいなかったのである。多くの諸将は、秀頼の命令には従うとい

う立場を表面的に示したものの、西軍への協力は拒絶しているのである。諸将のこうした行為は、西軍が出した秀頼の命令を、家康が再び秀頼の命令として覆す可能性があったからにはかならない。

黒田如水は八月一日付で吉川広家に対して、「内府公上国ハ必定あるへきと存候、左様時ハ、又貴所様御きもりにて、てるもとさま御事相澄可申候、とかく此節御分別専用候」⁽⁸²⁾と、家康の西上は必至であるとし、それまでは毛利輝元を対徳川闘争から手を引かせるように促しているように、家康は西上してクーデターを鎮め、再び秀頼を推戴するものと考えられていた。そして、黒田如水が（本戦の結果を知る前の）九月十六日付で藤堂高虎に宛て「加藤主計・拙者事ハ、今度切取分、内府様以御取成を、秀頼様より拝領仕候様に」⁽⁸³⁾と、九州の戦闘において自力で切り取った土地を秀頼から拝領できるよう家康に取り成して欲しいと述べているように、依然として家康は秀頼の命令を取り成すことができる存在だったのである。

また、三奉行が発した檄文や「内府ちかひの条々」が、諸大名の去就にどれだけ影響を与えたかという疑問もある。豊後岡（大分県竹田市）の中川秀成の事例を見ると、三奉行は七月二十六日付で秀成に対して、「去十七日折紙并一書を以申入候」⁽⁸⁴⁾と、檄文や「内府ちかひの条々」について念押しした上で上洛を促しているが、秀成は応じていない。

西軍に与同した諸将は、近江国（滋賀県）から西に所領を持つ者が多い。最も大きな要因としては石田正澄が近江国の愛知川に関を設けて会津征討に従軍するために関東へ下ろうとする諸将を足止めたことが挙げられる。『勝茂公譜考補』は鍋島勝茂（清茂）が西軍に与した背景を次のように記している。

「史料 13」⁽⁸⁵⁾

慶長五年七月初旬、勝茂公・毛利豊前守吉政被仰合、藤八郎殿御年十五御同前ニ、多久与兵衛家久・須古市兵衛信昭以下被召連大坂御出陣、江州愛智川マテ御越有シカトモ、何角少ノ間御延引有ケル故、早其間ニ石田木工頭正澄治部兄也一万計ノ人数ヲ以愛智川ニ関ヲスヘ、関東発向ノ衆一人モ通シ不申ニ付テ、当家ノ御

人数モ不及力、跟ヒ罷在ノ処ニ、石田治部少輔ヨリ安国寺ヲ以、関東御越ノ儀無理ニ差留メ、其上菊首座ト申ス出家ヲ出シ、家康公ノ御非義ヲ一々書立、国大名・小名ヲ不残相招キ演説ニ付テ、大半彼ノ下知ニ被一味

勝茂の父鍋島直茂は、家康の私婚問題の時には黒田長政らと共に徳川邸に馳せ参じており⁽⁸⁶⁾、また、関ヶ原の役においても黒田如水と通じていた⁽⁸⁷⁾ように、鍋島氏は親徳川の立場にあった。本戦後、家康が直茂の忠節を考慮して勝茂を許している⁽⁸⁸⁾点からも、それを窺うことができる。また、勝茂と行動を共にしている毛利吉政の父吉成と直茂は、加藤清正、黒田長政と共に朝鮮からの撤退問題で小西行長ら吏僚衆から糾弾を受けている。これらの要素から勝茂が望んで西軍に与したとは考え難く、こうした親徳川の者でさえ流れに従うしかなかったということだろう。

このような上方の情勢を義演は、『義演准后日記』慶長五年七月二十日条で「伏見御城へ秀頼様衆押寄戦在之」⁽⁸⁹⁾と、西軍を「秀頼様衆」と認識し、伏見城は「内府衆留主居」としている。「史料3」が「内府様を政治から放逐した」と表現したように、上方では勢力が塗り変えられ、家康の豊臣政権内の立場は否定された。家康の施策である会津征討も否定されたため、会津征討のために関東へ下ることが困難になったということである。

蜂須賀一茂は、慶長四年閏三月に三成を失脚へと追い込んだ七将の一人であり、また、嫡男の至鎮（豊雄）に家康の養女（小笠原秀政の女）を娶らせて縁組も行った。安国寺恵瓊から毛利輝元が決起に加わっていると聞かされた時は、堅田元慶に輝元を思いとどまらせるよう要請したほどだったが、家政でさえも、領地返上、高野山へ退去という手段をとって西軍への協力を拒絶したのが最大限の抵抗だった。

西軍によって武力制圧された上方に位置している公家衆は、西軍を「秀頼様衆」と評したものの、「内府ちかひの条々」による家康の放逐が、家康の失脚に結びつくとは考えていなかったようである。『言経卿記』慶長五年九月二十七日条は、本戦に勝利して大坂城に入った家康について「内府大坂へ御出也云々、秀頼卿和睦也云々」⁽⁹⁰⁾

と、秀頼と和睦したとしている。

二十年にも満たない間に、足利義昭から織田信長、豊臣秀吉へと権力の交代を目の当たりにしてきた経験則と、豊臣秀頼と主従関係を有していない客観的視点から、公家衆は、家康の権力が主君の秀頼と肩を並べつつあることを見抜き、関ヶ原の役で東軍が勝利した場合、家康が豊臣政権という枠から完全に脱却し、新たな公儀となることが分かっていたのであろう。

公家衆ほどではないにせよ、諸大名も、家康の権力が諸侯の枠を超えた別格なものとなっていたことは感じていたはずである。長岡忠興は、人質として徳川氏のもとにいる光千代に対して徳川秀忠の供をして出陣するように伝え、もし叶わなければ、夜を徹してでも秀忠より先行して、秀忠の着陣ごとに陣屋を見舞うようにせよとの心構えを説いている（⁹¹）。

また、忠興は出陣前に家臣に対して、大坂に残した正室ガラシャ（秀林院）が人質に取られそうな時はガラシャの命を絶つようにと命じていた（⁹²）。さらに『細川忠興軍功記』によると、小山評定の翌日に忠興は、二男興秋を人質として宇都宮に遣わしたが、すでに光千代を人質に出しているため不要として戻されたという（⁹³）。忠興の奉公すべき対象は豊臣秀頼だったが、実際は家康のほうを向いていたといっている。忠興は特別な事例だが、実質的に徳川大名となっていた者もいたという点は重要である。

秀吉が歿して以降、たび重なる権力闘争によって家康の権力は伸張を続けていった。そして、関ヶ原の役当時、諸大名が御家の存亡を賭ける選択に直面した時、奉行衆が有する正当性は、家康の実力に抗えるものではなかった。西軍に与した諸将の多くは、石田正澄が近江国の愛知川に関を設けたために会津征討に従軍できなかった者たちや、岐阜城主の織田秀信が西軍に味方したために西軍へ与した美濃の領主たちであり、西軍が掲げる「公儀」の秩序を浸透させるには、武力制圧が条件だった。伊勢（三重県）などで領主が西軍に抵抗したことや、九州に在国した諸将の多くが西軍に非協力的だったことを踏まえると、西軍が掲げる「公儀」の秩序は上方から遠ざか

るにつれて及ばなくなっていくと考えるてはならないのである。

結語

西軍は、家康に排斥された五大老・五奉行のメンバーの復権による「遺言体制」の立て直し（家康を除いた四大老・五奉行制の再構築）と、家康の独裁権力下で行われた施策の白紙化をスローガンとした。そのため、西軍は毛利輝元の軍事力を背景としながらも、秀頼の意向を代弁する立場にあった三奉行を前面に押し出し、檄文および「内府ちかひの条々」で家康を弾劾することで周囲に西軍が「秀頼様衆」であると印象づけた。

三奉行が西軍に味方したことによって、理論上、三成ら西軍は「公儀」となり、一方の家康は、三奉行が発した檄文と「内府ちかひの条々」によって会津征討の正当性を奪われたことになる。しかし、会津征討軍から離脱したのは、真田昌幸などわずかにとどまり、依然として家康は諸大名の支持を失ってはいなかった。

秀吉が歿して以降、たび重なる権力闘争によって家康の権力は伸張を続けていった。そして、関ヶ原の役当時、諸大名が御家の存亡を賭ける選択に直面した時、奉行衆が有する正当性は、家康の実力に抗えるものではなかった。西軍に与した諸将の多くは、石田正澄が近江国の愛知川に関を設けたために会津征討に従軍できなかった者たちや、岐阜城主の織田秀信が西軍に味方したために西軍へ与した美濃の領主たちであり、西軍が掲げる「公儀」の秩序を浸透させるには、武力制圧が条件だった。伊勢などで領主が西軍に抵抗したことや、九州に在国した諸将の多くが西軍に非協力的だったことを踏まえると、西軍が掲げる「公儀」の秩序は上方から遠ざかるにつれて及ばなくなっていくと考えるてはならない。西軍を「公儀」とするのは過大評価といえよう。

- (1) 布谷陽子「関ヶ原合戦の再検討――慶長五年七月十七日前後」(谷徹也編『石田三成』戎光祥出版 二〇一八年)〈初出二〇〇五年〉。
- (2) 白峰旬「豊臣公儀としての石田・毛利連合政権」(『史学論叢』 四六号、二〇一六年)。
- (3) 中野等『石田三成伝』(吉川弘文館 二〇一六年) 四三八頁。
- (4) 堀越祐一「関ヶ原合戦と家康の政権奪取構想」(同『豊臣政権の権力構造』吉川弘文館、二〇一六年)。
- (5) 姜沆著・朴鐘鳴注釈『看羊録』(平凡社、一九八四年)〈以下『看』と表記〉一四二頁。『海行摠載』第一(朝鮮古書刊行会、一九一四年)〈以下『海』と表記〉四〇四頁。
- (6) 『看』一七二頁。『海』四一二頁。
- (7) 『綿考輯録』第二卷(及古書院、一九八八年)〈以下『綿』と表記〉一八二、一八三頁。
- (8) (慶長四年)九月二十一日付島津惟新書状「島津忠恒宛」「島津家文書(御文書(義弘公)一九一七―一〇)」。『鹿児島県史料 旧記雑録後編 三』(鹿児島県、一九八三年)〈以下『旧記三』と表記〉八八四号。
- (9) 『義演准后日記』第二(続群書類従完成会、一九八四年)〈以下『義演』と表記〉八一頁。
- (10) 「慶長年中卜斎記」上之卷(『改定史籍集覧』第廿六冊、臨川書店、復刻版一九八四年)〈以下『卜斎記』と表記〉四四頁。
- (11) 『卜斎記』四四頁。
- (12) 「一五九九年―一六〇一年、日本諸国記」(松田毅一監訳『十六・十七世紀イエズス会日本報告集』第一期 第3巻(同朋舎出版、一九八八年)〈以下『日本報告集』と表記〉二四三頁。「」内はテキストにある補足語、()内は訳者の補足語、または注に入れるべき短文を指している。
- (13) (慶長四年)十月二日付大谷吉継書状「島津忠恒宛」『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之五』(東京

大学出版会、二〇一六年）一九五七号。

(14) 『卜齋記』四五頁。

(15) 「象賢紀略」(『御夜話集』上編、石川県図書館協会、一九三三年)七八頁。

(16) (慶長五年)四月一日付西笑承兌書状写「直江兼統宛」『歴代古案』第五(続群書類従完成会、二〇〇二年)一一五八号。

(17) (慶長五年五月二十六日)浅野幸長書状写「浅野長政宛」「坂田家文書」『甲府市史』史料編第二卷 近世一、一九八七年、六五号)。

(18) (慶長五年)六月十日付来次氏秀書状「春日元忠宛」「杉山悦郎氏所藏文書」(『愛知県史』資料編十三 織豊三、二〇一一年)〈以下『愛知』と表記〉八九二号。

(19) (慶長五年)七月晦日付石田三成書状「真田昌幸宛」『真田宝物館収蔵品目録 長野県宝 真田家文書』一(松代藩文化施設管理事務所、二〇〇四年)〈以下『真田家文書』と表記〉五二号。

(20) (慶長五年)八月十日付石田三成書状「真田昌幸・信繁宛」『大日本古文書 家わけ第二 浅野家文書』(東京大学出版会、一九六八年)一一三号。

(21) 『日本報告集』二四二頁。

(22) 東光博英氏の御教示による。

(23) (慶長五年)七月十五日付島津惟新書状写「上杉景勝宛」(『旧記三』一一二六号)。

(24) (慶長五年)七月三十日付大谷吉継書状「真田昌幸・信繁宛」(『真田家文書』五三号)。

(25) (慶長五年)七月十二日付三奉行連署状写「毛利輝元宛」『松井文庫所藏古文書調査報告書』二(八代市立博物館未来の森ミュージアム、一九九七年)〈以下『松井二』と表記〉四一五号。

(26) 光成準治『関ヶ原前夜 西軍大名たちの戦い』(KADOKAWA、二〇一八年)〈初出二〇〇九年〉六二頁。

- (27) (慶長五年) 七月十五日付毛利輝元書状写「加藤清正宛」(『松井二』四一六号)。
 - (28) 笠谷和比古『関ヶ原合戦と近世の国制』(思文閣出版、二〇〇〇年) 五二頁。
 - (29) 「松井家先祖由来附」(『八代市史』近世史料編八、一九九九年) (以下『松代』と表記) 九六頁。
 - (30) (慶長五年) 九月二十九日付加藤清正書状写「鍋島直茂宛」「直茂公譜孝補」十(『佐賀県近世史料』第一編 第一卷、佐賀県立図書館、一九九三年、七九〇頁)。
 - (31) (慶長五年) 八月一日付黒田如水書状「吉川広家宛」『大日本古文書 家わけ第九 吉川家文書之二』(東京大学出版会、一九七〇年) (以下『吉川二』と表記) 九五〇号。
 - (32) 『卜斎記』四七、四八頁。
 - (33) (慶長五年) 七月二十二日付徳川秀忠書状写「滝川雄利宛」(中村孝也『新訂 徳川家康文書の研究』中巻、日本学術振興会、一九八〇年 (以下『家康文書中』と表記) 五二六頁)。
 - (34) (慶長五年) 七月二十三日付徳川家康書状写「最上義光宛」「譜牒余録後編」巻四 交代寄合之三 最上刑部 (『内閣文庫影印叢刊譜牒余録』下、国立公文書館、一九七三年) (以下『譜牒余録後編』と表記) 七三頁。
 - (35) 前掲註 (2)。
 - (36) (慶長五年) 八月二十二日付佐々正孝書状「秋田実季宛」「秋田家史料」(『愛知』九七〇号)。
 - (37) 『日本報告集』二四三頁。
 - (38) (慶長五年) 正月十一日付小西行長書状「島津義久宛」『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之四』(東京大学出版会、二〇一一年) 一六九七号。
 - (39) 「神戸久五郎咄覚」(『旧記三』一一四四号)。
 - (40) (慶長五年) 七月十四日付島津惟新書状「島津忠恒宛」「島津家文書(御文書(義弘公)一九一八―一六)」。
- 『旧記三』一一二二号。

- (41) 『義演』一七九頁。
- (42) 『舜旧記』第一(続群書類従完成会、一九七〇年)〈以下『舜旧記』と表記〉二三二頁。
- (43) 『舜旧記』二三二頁。
- (44) 前掲註(26)。
- (45) 前掲註(18)。
- (46) 『舜旧記』二三四頁。
- (47) 『日本報告集』二八〇頁。
- (48) 『義演』二〇二頁。
- (49) (慶長五年)七月十七日付三奉行連署状「真田昌幸宛」『真田家文書』五一号。
- (50) 徳川家康違背事書写(『松井二』四一九号)。
- (51) (慶長五年)七月二十七日付毛利輝元書状「青木重吉宛」「大阪城天守閣蔵」(『特別展豊臣と徳川』大阪城天守閣、二〇一五年、四二号)。
- (52) 吉川広家自筆覚書案(『吉川二』九一七号)。
- (53) 慶長五年二月一日付徳川家康書状写「森忠政宛」「森家先代実録」(『岡山県史』第二十五卷 津山藩文書、一九八一年)二七頁。
- (54) 豊後国速見郡・由布院知行方目録(『松井文庫所蔵古文書調査報告書』一、八代市立博物館未来の森ミュージアム、一九九六年)一一―二三号。
- (55) (慶長五年)八月六日付石田三成書状写「真田昌幸宛」「長国寺殿御事蹟稿」卷之九(『新編信濃史料叢書』第十五卷、信濃史料刊行会、一九七七年)三五〇頁。
- (56) 前掲註(19)。

- (57) (慶長三年) 八月五日付豊臣秀吉遺言覚書案「早稲田大学図書館所蔵」(『特別展 五大老』大阪城天守閣、二〇〇三年)へ以下『五大老』と表記)一〇三号。
- (58) 慶長四年九月十八日付宮部長熙自筆起請文前書案「新庄晟珊・山岡道阿弥・岡野江雪斎宛」(早稲田大学図書館蔵)(『特別展秀吉家臣団』大阪城天守閣、二〇〇〇年、一五一号)。
- (59) 『義演』八四頁。『舜旧記』一九四頁。『大日本古記録 言経卿記』十(岩波書店、一九七七年)へ以下『言経』と表記)五〇頁。
- (60) (慶長四年) 十月一日付内藤周竹書状写「内藤又二郎宛」(『萩藩閥閥録』第三卷、マツノ書店、復刻版一九九五年、一六八頁) から、家康は十月一日までには大坂城西之丸へ移ったと判断できる。
- (61) 『卜斎記』四四頁。
- (62) (慶長四年) 九月十三日付毛利輝元書状「毛利秀元宛」(『長府毛利家文書』(『五大老』一二一号)。
- (63) (慶長四年) 十二月六日付徳川秀忠書状「太田金右衛門宛」(『太田家文書』(『宮崎県史』史料編 中世2、宮崎県、一九九四年) 六六七頁。
- (64) 前掲註(24)。
- (65) (慶長五年) 八月一日付二大老・四奉行連署状「蒔田広定宛」(『廊坊篤氏所蔵文書』(『五大老』一二八号)。
- (66) 前掲註(24)。
- (67) 『卜斎記』四七頁。
- (68) (慶長五年) 七月二十日付加藤成之書状(影写本)「加藤貞泰宛」(『大洲加藤文書坤』(東京大学史料編纂所蔵) 請求番号 3071.83)。
- (69) (慶長五年) 七月二十一日付長岡忠興書状「松井康之・有吉立行・魚住昌永宛」(『松井文庫所蔵古文書調査報告書』三、八代市立博物館未来の森ミュージアム、一九九八年) 四三一号。

- (70) 「細川忠興軍功記」(『改定史籍集覧』第十五冊、臨川書店、復刻版一九八四年) 一〇七頁。
- (71) (慶長五年) 七月十六日付蜂須賀一茂書状「堅田元慶宛」(『大日本古文書 家わけ第八 毛利家文書之三』(東京大学出版会、一九七〇年) 一〇一九号)。
- (72) 前掲註 (34)。
- (73) (慶長五年) 七月二十九日付徳川家康書状写「最上義光宛」(『譜牒余録後編』七五頁)。
- (74) (慶長五年) 七月二十三日付徳川家康書状写「山崎家盛・宮城豐盛宛」「山崎主税助所藏」(『家康文書中』五二二頁)。
- (75) (慶長五年) 七月二十六日付徳川家康書状「小出秀政宛」「脇坂文書」(『家康文書中』五三四頁)。
- (76) (慶長五年) 七月二十九日付徳川家康書状「黒田長政宛」(『黒田家文書』一卷(福岡市博物館、一九九九年) 四号)。
- (77) (慶長五年) 七月二十九日付徳川家康書状「田中吉政宛」「戸田家文書」(『家康文書中』五三九頁)。
- (78) (慶長五年) 八月八日付徳川家康書状「黒田長政宛」(『大日本古文書 家わけ第九 吉川家文書之一』(東京大学出版会、一九七〇年) 一四六号)。
- (79) (慶長五年) 七月二十五日付徳川家康書状「長束正家宛」「光明寺所蔵文書」(徳川義宣『新修 徳川家康文書の研究』第二輯、徳川黎明会、二〇〇六年、三八〇頁)。
- (80) (慶長五年) 八月五日付石田三成書状「真田昌幸・信幸・信繁宛」(『真田家文書』五四号)。
- (81) (慶長五年) 七月二十七日付加藤清正書状「松井康之・有吉立行宛」(『松井二』四二四号)。
- (82) 前掲註 (31)。
- (83) (慶長五年) 九月十六日付黒田如水書状写「藤堂高虎宛」「高山公実録」卷之九(『高山公実録』上卷、清文堂出版、一九九八年) 一七七頁。

- (84) (慶長五年) 七月二十六日付三奉行連署状「中川秀成宛」『中川家文書』(臨川書店、一九八七年)八九号。
- (85) 「勝茂公譜考輔」(『佐賀県近世史料』第一編第二卷、佐賀県立図書館、一九九四年)(以下『勝茂公譜考輔』と表記)。
- (86) 「黒田長政記」(『続群書類従』第二十三輯上 合戦部、続群書類従完成会、訂正三版一九八三年)二六七頁。
- (87) (慶長五年) 八月十日付鍋島直茂書状「黒田如水宛」「川崎氏所蔵文書」(『佐賀県史料集成古文書編』第二一卷、佐賀県立図書館、一九八〇年)一號。
- (88) 『勝茂公譜考輔』二二九頁。
- (89) 『義演』二〇二頁。
- (90) 『言経』二二四頁。
- (91) (慶長五年) 七月九日付長岡忠興書状「光千代宛」『大日本近世史料 細川家史料』一(東京大学出版会、一九六九年)一號。
- (92) 『日本報告集』二四五頁。
- (93) 『忠興』一〇九頁。

第五章 本戦後の国割に関する一考察

はじめに

関ヶ原の役は、豊臣秀吉が遺した「遺言体制」と徳川家康の最終決戦であり、家康の勝利によって五大老・五奉行制は完全に崩壊した。豊臣家の家老である五奉行の消滅は、家康に論功行賞の名のもと、豊臣領国体制の再編成（国割）を可能にさせた。

本戦後の国割については、藤野保氏、笠谷和比古氏、曾根勇二氏、藤井譲治氏の研究が主著として挙げられる。

藤野保氏は、中国・四国・九州や東北の大部分および畿内とその西・南・北辺地帯には、減転・転封・加転による旧族・豊臣大名が配置されたため、徳川幕藩領国体制の貫徹地域は、東海、東山、北陸・東北の一部、および畿内東辺地帯に限られ、そこに徳川幕藩体制成立史上における関ヶ原の役の意義と限界をよみとることができるとした⁽¹⁾。また、本戦後の戦後処理による領国体制の変動を地方・国別に考察し、さらに徳川政権期における領国体制の変動を段階別に分析している⁽²⁾。

笠谷和比古氏は、この国割によって西国で豊臣系国持大名が多数誕生した一方で、西国方面において徳川勢力は国持大名クラスの大身大名はいうまでもなく、中小の譜代大名ですら配置されていないとし、その政治的意義を深化させている。また、本戦後の全国的な領知配分に際して、領知宛行状や領知目録が交付されなかった点に着目した笠谷氏は、領知配分・給付の主体は依然として豊臣秀頼であって、家康の名をもってすることはできなかったため、家康は領知配分・給付の主体が誰かという問題を意図的に曖昧にしたと指摘している⁽³⁾。

曾根勇二氏は、領知宛行において大久保長安と加藤正次の存在が大きいとしながらも、片桐且元と小出秀政も

関与しなければならぬ部分もあった点を指摘するとともに、両者による豊臣家直轄領の運営を明らかにしている（４）。

藤井譲治氏は、国割の結果から考察するのではなく、領知宛行の史料から検討をおこない、国割の様子を詳細なものとした。そして、本戦直後の戦後処理である「国割」が、家康のヘゲモニーのもとでなされたものの、①諸大名への領知は家康側で一方向的に決められたものではなく、大名側の意向を忖度して決められたこと、②領知朱印状を発給しえなかったこともあわせ、この段階での家康が所持した領知宛行権に限界があったこと、③毛利氏や島津氏の処分においても、家康が領知を「宛行」うのではなく、起請文という形式で領知を「進置」くものであり、家康の圧倒的優位性をみることはできないと指摘した。また、慶長六年に交付された知行目録においては、①片桐且元と小出秀政が加判する事例が存在すること、②文末文言に「重而御朱印申請可進候」とみえるものの、この文言に対する「御朱印」は一通も確認できないことから、実質的には家康による領知宛行にもかかわらず、豊臣政権の枠組みを無視しえない状況があったと指摘している（５）。

これら先行研究によって、国割の政治史的意義として、東海、東山、北陸・東北の一部、畿内東辺における徳川幕藩領国体制の貫徹と、家康の領知宛行権の限界が示された。しかし、慶長五年十月から慶長七年末の二年間に亘る国割を、時期を区別することなく一緒くたに論じた点は検討の余地があると思われる。藤井氏は、本戦直後と慶長六年に時期を区別した考察をおこなっているが、家康の領知宛行権の脆弱さを指摘する趣旨全体に変わりはない。また、先行研究は、家康の領知宛行権の脆弱さから、豊臣系国持大名を多数輩出し、徳川政権の確立にあたっての課題を残した点を指摘するにとどまり、家康の領知宛行権が、征夷大將軍就任以前に強固となったか否かという点は言及されておらず、曖昧となっている。

そこで本章では、二年間に亘る国割において、慶長五年十月・十一月と、慶長六年正月、慶長七年九月を節目として三つの時期に区分し、家康の領知宛行権が強固となる過程を明らかにする。

第一節 関ヶ原の役後の領国再編成

本戦の後、西軍の総大将毛利輝元は同月二十五日に大坂城を出て木津の毛利邸に退いた⁽⁶⁾。その後、家康は同月二十七日に大坂城に入城する⁽⁷⁾。

大坂に入った家康は、論功行賞に着手する。『義演准后日記』慶長五年十月十五日条には「諸大名知行分在之云々、福島左衛門大夫備後・安芸両国、輝元城ヒロ嶋城拝領之云々、前月今日ハ美州合戦ノ日也、如夢」⁽⁸⁾とあり、本戦から丁度一ヶ月が経過した十月十五日に、義演は福島正則が備後国・安芸国を与えられたという情報に接している。同日付で福島正則が「入左近」なる人物に宛てた書状には「われら事、さいこくにて両こくはいれういたし候」とあり、「そのほう御事、よく御しのひ候て、あきのひらしまへ御こし候へく候」⁽⁹⁾と、入左近に広島への下向を命じていることから、実際に正則が二ヶ国拝領した日との差はそれほどないと思われる。

西軍の総大将であり、備後国・安芸国の旧主でもある毛利輝元の処分が一段落したのが九月三十日⁽¹⁰⁾であり、正式に周防国・長門国を安堵されたのが十月十日である⁽¹¹⁾ことから、福島正則に対する論功行賞は比較的早い段階で行われたと考えられる。家康は十月十五日付で伊達政宗へ宛てた書状で次のように述べている。

「史料1」⁽¹²⁾

書状令披見候、仍此表之儀、国割申付、各国々へ指下候、可御心安候、会津之儀者、来春令出馬、可致成敗候、其内無聊爾様、御分別專一候、雖然最上表有加勢、無異儀様被仰付尤候、委細山岡志摩守口上ニ申候条、令省略候、恐々謹言

十月十五日

家康（花押）

大崎少将殿

家康は「此表之儀、国割申付」と述べていることから、十月十五日頃から論功行賞が行われていたとみていいだろう。「各国々へ指下候」と、ここでは如何にも論功行賞が完了したように記されているが、長岡忠興が十月二十三日付で家臣松井康之へ宛てた書状には次の文言が記されている。

「史料2」(13)

爰元之様子、存之外御知行割済兼申体にて候、羽左太ハ安芸・備後拝領候、両国ニ三十八万石程在之由候、左候へ者、一陪ニ者不被成候、羽三左ハ播州拝領ニ候、浅左京、紀伊国拝領候、高野領を逸、廿五万石在之事候、左候へ者、漸老万石之加増ニ候、国之近を取所と相聞候、残之儀も、大形聞候と思事候

十月二十三日の段階で、福島正則のほかには池田照政、浅野幸長の論功行賞が完了していた。しかし、長岡忠興が十月二十七日付で康之へ宛てた書状には「我々知行方之儀、未何共不仰出候、但、何れの衆も不済候事」(14)とあり、忠興をはじめ多くの諸将には未だ恩賞の話はなかったようである。「史料1」は、伊達政宗に対する政治的配慮として、上方の問題が片付いたことを強調するために、論功行賞が全て完了したかのような表現が使われたものと思われる。

本戦で活躍した豊臣系大名に対する最も早い論功行賞は、福島正則、池田照政、浅野幸長と考えていいだろう。しかし、京極高次は三名よりも早くに若狭国を拝領している。

「史料3」(15)

御折紙殊生鯉到来、祝着至候、将又其国之儀、雖小国候、爰元手寄候間、先進之候処、御氣入御有付之由承候、左様候得者、弥令満足候、猶井伊兵部少輔可申候、恐々謹言

十月十四日

家康公御直判

京極宰相殿

家康は生鯉に対する礼とともに「其国之儀、雖小国候」と述べていることから、若狭一国を拝領した高次が、

若狭から家康に生鮭を献上したと思われる。この書状が十月十四日付であることから、高次の若狭入国はそれ以前となる。

高次の大津城での奮戦を家康は高く評価しており、家康の意を受けた井伊直政が九月十九日付で高次に書状を出している¹⁶。しかし、同月二十三日になっても高次からの返信が届かないため、同日付で直政は再び書状を送って高野山からの下山を促している¹⁷。高次は大津城を西軍に落とされて所領を失っていた。家康が早期に高次に若狭一国を与えたのは、高次が大功を立てていた点と、高次が所領を失っていた点の二つの理由からとられた特別な処置とみていいだろう。

十月二十七日の段階では長岡忠興に対する論功行賞は完了していなかったが、榊原康政の家臣久代景備が十月三十日付で那須衆の大関資増へ宛てた書状によると、十月三十日頃には、長岡忠興や山内一豊、前田利長、堀尾忠氏に対する論功行賞も決まったようである。

「史料 4」(18)

已上

追而申候、仍此表之儀、松惣左へ懇ニ申入候

一毛利殿之儀ハ国を悉指上被申候、残而二ヶ国周防・長門計を拝領被申候^①

一安芸・備後ハ福嶋殿御拝領候事^②

一豊前をハ羽柴越中殿へ被進候、高卅万石之積ニ御座候、豊前にて不足之所、豊後にて被進之候^③

一山対馬殿へハ伊与を居成ニと被仰付候、其外何も御国割半ニ御座候事^④

一嶋津事も御侘言申上筋目有之由候、定而落着程有間敷候間、是又御心易可被思召候^⑤

一其表之儀も直江所々使者を為上申様有之由、取沙汰申候、此方ニ居申候留守居共方々使をも下申候、是も御存分ニ落着可仕と奉存候^⑥

一羽柴肥前殿へハ加賀を二郡被進之候、左様ニ候へハ、かゝ一國皆御拝領ニ候事

一堀信濃殿へハ出雲・隱岐兩國被進候事

一爰元之体、具可致言上候へ共、別替儀無御座候間、不能其儀候、委細者惣左へ申入候、恐惶謹言

十月晦日

景備（花押）

十月末には、長岡忠興の論功行賞は決まっていたが、忠興が松井康之ら家臣へ豊前国および豊後国の国東郡・速見郡の拝領を報じたのが十一月二日付であることから、忠興が新たな領知を正式に伝えられたのは十一月二日頃と思われる。

「史料5」（19）

以上

急度申候、我々事豊前一國ニ豊後にて國崎郡・速見郡相副拝領候、木下右衛門大夫ニも、豊後にて早主馬拝領之郡可被遣由候、左候へハ、我々拝領之郡へ并候、無残所忝儀候、此状参着次第、玄番・松井・菅勝兵・平左早々豊前へ被罷越、城々可被請取候、具、吉左ニ申候、可被得其意候、次、丹後之儀、当年所務被下候、是又忝儀候、納所儀、急度可申付候、恐々謹言

越

十一月二日

忠興

玄番殿

松井殿

勝兵衛殿

五右衛門殿

曲斎

新太郎殿

新五殿

平左衛門殿

また、忠興は「史料5」と同日（十一月二日）付で黒田如水へ宛てた書状において「甲州筑前被成御拝領、御外聞実儀珍重不得申儀候、拙者儀、豊前、其外豊後にて国崎郡・速見郡拝領仕候」（20）と述べており、黒田長政の論功行賞も同時期に完了したことが分かる。

「史料4」で山内一豊の領国が伊予国となっている点については、当初は土佐国ではなく伊予国を拝領する予定であった可能性と、誤伝の双方の可能性が考えられるが、通説では十一月上旬に榊原康政から土佐国の拝領を伝えられている（21）。いずれにしても、長宗我部盛親の上坂が十一月十二日（22）であることから、家康が長宗我部氏から土佐国を没収することを決めたのと、一豊が土佐国を拝領することが決まったのは、同時期であったといえよう。一豊が十一月十四日に書いたと思われる家臣宛の書状において「長宗我部一昨日罷上候付而、土佐へ井兵少より城請取ニ使者被差越候、我等者共も明日か明後日可遣と存、船以下相拵□□様子可心安候」（23）と述べているように、この段階では長宗我部氏の本城である浦戸城の接收は完了しておらず、井伊直政と一豊が連携して浦戸城の接收に当たっている。

『義演准后日記』慶長五年十一月九日条には「三河守是ハ越前拝領云々、下野守尾張国云々、大坂・伏見内府ノ留主アルヘキ云々」（24）とあり、この頃には結城秀康の越前国拝領と、松平忠吉の尾張国拝領も決まったようである。

この時期に領知を宛行われているのは、本戦で大功を立てた諸将が中心であったが、「史料5」によれば、木下延俊に早川長政の旧領が与えられる予定であったという。これには、木下延俊の所領のあった播磨が池田照政に

与えられたことに加えて、延俊が忠興の縁者（妹婿）であったことも関係していよう。しかし、順調にはいかなかったようで十一月六日付の忠興書状には「木下右衛門大夫事、きハマりかね、于今大坂二とうりう申候」（²⁵）とある。延俊は翌年（慶長六年）四月に豊後国速見郡内で十八ヶ村を宛行われている（²⁶）。

「史料4」四条目に「其外何も御国割半二御座候事」とあり、『慶長年中卜斎記』に「十一月西国大名衆へ知行割（創業記に知行割の事、十月末にあり）」（²⁷）とあるように、本戦で大功を立てた諸将に対する論功行賞は十月下旬から十一月にかけて集中的に行われ、一段落したとみていいだろう。そのため、未だ領知を宛行われていない吉川広家は焦りを感じたのであろう。黒田長政は十一月十八日付の書状で広家に対して「御知行などの儀ハ、前かとの首尾於相違仕者、御断申、拙者内ニて成共、可進之心中候之条、少も被懸御心間敷候」（²⁸）と、かねての首尾と異なる場合は長政の所領を割いても広家に提供するつもりであるから安心するようにと伝えている。

広家は慶長五年九月二十九日付で井伊直政・黒田長政に宛てた誓紙において「小早川・吉川儀ハ自先年之別家之儀ニ候、其御心得尤候、諸事隠ミつの事、不可有他言事」（²⁹）と述べているように毛利家からの独立を図っていた。そして、この頃、毛利輝元は広家に何かしらの嫌疑をかけており、両者の関係は悪化している（³⁰）。嫌疑の内容は、広家の独立に向けた動きであろう。独立に向けた動きを輝元に察知された広家は、独立はおろか、毛利家中においても立場が危うくなっただと思われる。そのため、黒田長政は自領を割いても広家に領知を与えるつもりであると述べたのであろう。広家の不安な様子からも、本戦で大功を立てた諸将に対する論功行賞は、十一月中旬頃に一段落していたと考えられる。

二次史料からみると、『寛永諸家系図伝』は、有馬豊氏の丹波福知山への加増転封を慶長五年とする（³¹）（拝領した月の記載はなし）。『寛政重修諸家譜』は、金森素玄（長近）の美濃国武儀郡（上有知・関）および河内金田（大阪府堺市）の加増を同年十月とし（³²）、遠藤慶隆は同年十一月に美濃八幡城を請け取ったとしている（³³）ので、本戦（あるいは美濃国内）で功を立てた豊臣系大名に対する論功行賞が十一月中旬頃に一段落していたとす

る筆者の推測は、二次史料の記述とも矛盾していない。

例外は、一柳直盛である。『寛政重修諸家譜』は、直盛の尾張黒田から伊勢神戸への加増転封を慶長六年とする（³⁴）。『寛永諸家系図伝』は伏見で家康より拝領した旨を記す（³⁵）のみで時期は明確に記されていないが、同じく伊勢国に配置され、同国の中核を担う本多忠勝が慶長六年一月に桑名を拝領している（³⁶）点や、同年三月に分部光嘉が伊勢国奄芸郡内で一万石を加増されている（³⁷）点を踏まえると、慶長六年と考えてよいと思われる。直盛は大垣城と南宮山の間位置する長松（岐阜県大垣市）を守備していたため、本戦には加わっていないが、岐阜城攻略の前哨戦である米野（岐阜県笠松町）の戦いで功を立てているため、功績と比べると論功行賞が遅いように感じられる。また、東海道に所領を有する大名は、遠江久能の松下重綱、三河刈谷の水野勝成、伊勢上野の分部光嘉、伊勢安濃津の富田信高、伊勢松坂の古田重勝、伊勢林の織田信重など、本領安堵や加封据置によって従来の領知を維持した事例を除けば、福島正則のように西国に移されたのが殆どである。しかし、直盛は移封を伴いながらも加増を受けた上で依然として東海道に置かれている。

これには、本多忠朝が直盛の女婿（³⁸）（直盛と本多忠勝が縁者）であることが関係していると思われる。もともと、中核となる大名の周囲にその一族・血縁者を配置する特徴が指摘されるのは大坂の陣後である（³⁹）が、直盛の伊勢神戸への配置は、同一の政治的配慮をもっておこなわれたと思われる。本多忠勝の周囲に配置するために、直盛は功を立てているにもかかわらず、論功行賞が遅れたのであろう。直盛は豊臣系大名の中でも特異な事例といえる。

慶長五年の国割は、毛利輝元が備中国の大半（上房・阿賀・哲多・川上・小田・後月・下道・浅口八郡）・備後国・出雲国・隠岐国・伯耆西半国（汗入・会見・日野三郡）・石見国・安芸国・周防国・長門国の九ヶ国から、周防国・長門国の二ヶ国の領主になったのと同時期に福島正則が旧毛利領の備後国・安芸国を与えられた。その後、堀尾忠氏が旧毛利領の出雲国・隠岐国を与えられている。翌月には、旧福島領の尾張国が松平忠吉に与えられて

いる。

黒田長政が拝領した筑前国では、これまで筑前を一国支配していた小早川秀秋が備前国へ加増転封となつてゐる。備前国の旧主宇喜多秀家は未だ行方不明であり、領主不在であることから、小早川秀秋の加増転封は比較的最早い段階で決まったと推測できるため、筑前国を空所とした後に黒田長政へ同国が与えられたと考えられる。豊前中津を領有していた黒田長政が筑前国へ移ったことによつて、長岡忠興が豊前国を与えられている。忠興は黒田如水へ宛てた書状において「今度両国にて御請取之城々、兩人ニ被成御渡可被下候、貴殿御持分之城々之儀者、態々と可被成御用意候、いつにても御左右次第請取可申候」(40)と、兩人(長岡興元・松井康之)に黒田氏が領有する城を引き渡すように要請しており、長岡氏の入国は黒田氏と入れ替わりで行われたことがわかる。また、忠興も十二月五日付で松井興長へ宛てた書状において「急度申候、其城、来十五日ニ羽柴修理殿へ可相渡候間、得其意、掃地以下、急度申付、可相待事」(41)と、京極高知へ城を引き渡すための準備を命じている。

このように家康による国割は、改易・減封によつて出来た闕所に東軍に属した大名を移し、その大名が移動したことで生まれた新たな空白地へ、また別の領主を入れていく形で行われたといえる。しかし、「史料4」五条目、六条目にあるように島津氏や上杉氏の問題は完全に解決していたわけではなく、未だ戦乱が続いていた点を留意する必要がある。当時、家康が西軍の大名から没収した所領は、近畿地方や中国・四国・九州といった西国が中心であり、福島正則ら大功を立てた豊臣系大名の領知も全て東海地方より西に位置していたことから、豊臣系大名の領知が西国に集中したのは自然の成り行きであつた。関ヶ原の役後の国割は、まっさらな空白地図から家康の理想とする形を描いたわけではなく、こうした制約があつた点を留意しなくてはならない。

慶長六年に入ると、一月十七日に本多忠勝が伊勢桑名を拝領した(42)のを皮切りに徳川家臣に対しても領知配分がおこなわれるようになる。『当代記』は、井伊直政、本多忠勝、松平忠吉、奥平信昌、石川康通、本多康重、松平家清、松平忠頼、松平定勝、酒井忠利、内藤信成、天野康景、大久保忠佐、本多康俊、戸田一西といった徳

川家臣の東山道および東海道への配置を慶長六年二月とする⁽⁴³⁾が、前述のとおり松平忠吉への宛行は慶長五年十一月であり、本多忠勝への宛行は慶長六年正月である。このほか、戸田尊次は慶長六年三月五日に三河田原を拝領しており⁽⁴⁴⁾、菅沼定仍の美濃国各務郡および尾張国海西郡内への加増転封が同年五月二十四日⁽⁴⁵⁾、松平忠利の三河国額田郡内への移封が同年七月十九日⁽⁴⁶⁾である。

『寛永諸家系図伝』によると、井伊直政は「同（慶長五年）十月、大権現大坂の御城にいらせられ天下一統のうへ、諸将をの／＼国郡を封ぜらる、のち直政を御前にめされて、天下の大戦をあらそひ度々先手の将として勝利を得る事まことに開国の元勲なり、これによりて今度の敵将石田治部少輔が居城ならびにかの領地これを直政にたまはるのむね仰いだされ、佐和山の城、同江州にをひて領地十八万石拝賜す、翌年正月、入部せしむるのとき、従四位下に叙せらる」⁽⁴⁷⁾とあることから、慶長五年の可能性がある。奥平信昌についても「慶長六年三月、大権現、信昌をして美濃国にうつし、加納の城をまもらしむ」⁽⁴⁸⁾とある。これらは二次史料の記述であるが、戸田尊次、菅沼定仍、松平忠利の事例を踏まえても、徳川家臣の東山道および東海道への配置は二月に一括しておこなわれたのではなく、一年を通して進められたといえよう⁽⁴⁹⁾。

福島正則ら本戦で大功を立てた諸将は慶長五年十月・十一月に領知を拝領していたが、残りの豊臣系大名も、慶長六年一月二十八日の片桐且元・貞隆に対する知行宛行⁽⁵⁰⁾を皮切りに、領知配分がおこなわれるようになる。そして、同年七月二十四日に会津の上杉景勝は上洛し⁽⁵¹⁾、翌月（八月十六日）出羽米沢に減封となる⁽⁵²⁾。翌年（慶長七年）には常陸の佐竹義宣も出羽国秋田郡・仙北郡に減転封となり⁽⁵³⁾、東国の戦後処理が完了する。九州の島津氏については、慶長七年四月十一日付で家康は島津龍伯に対して誓紙を送り、本領安堵を約した⁽⁵⁴⁾。そして、十二月二十八日に当主の島津忠恒が家康に出仕した⁽⁵⁵⁾ことで、島津氏は正式に存続が認められ、関ヶ原の役後の国割は完結するのである。

第二節 慶長五年十月・十一月の国割

国割において、笠谷和比古氏は領知宛行状も領知目録も交付されなかった点に着目し、領知配分・給付の主体は依然として豊臣秀頼であって、家康の名をもってすることはできなかったため、領知配分・給付の主体が誰かという問題を意図的に曖昧にしたとする。藤井譲治氏も同様の立場で、家康の名分上の地位が豊臣氏の重臣から抜け切れておらず、自ら領知宛行状を出すことができなかったと評価している⁵⁶。この問題を考えるにあたって、本節では慶長五年十月・十一月の国割が如何にしておこなわれたのかをみていきたい。

後年（寛永九年）、長岡忠興（細川三斎）が、細川忠利に宛てた六月二十三日付の書状には「只今其方被取候豊前・豊後之知行、三十万石之つもりにて被下候、御朱印拝領不申候」⁵⁷とある。この「三十万石之つもりにて」とする記述は、「史料4」三条目とも重なる。同じく寛永九年の十一月二十日付書状の四条目、五条目には次のように記されている。

「史料6」⁵⁸

一権現様方、豊前一国、豊後之内拝領申候時、御書出少も無之候、我等ニ不限、何も其分にて候つる、台徳院様方之御書出ニ、目録在別紙ニと在之者、此方方上候帳を御覧候てから、其時可被下との儀かと推量申候事

一三十万石被下と御奉行衆之言葉計ニ而、村付などの儀ハ念も無之候つる、其子細ハ、昨日も如申候、如水申様にて二万石不足にて被下候を、我々才覚申、如水之状を取、佐渡殿・相模殿迄上候てから、速見郡之内にて二万石被下候、是にて、村付などの儀なきハよくしれたる事にて候事

四条目より、本戦後の論功行賞では、いずれの大名に対しても、領知宛行の朱印状も領知目録も発給されなかったという。また、五条目によると、忠興の三十万石の拝領は、徳川氏の吏僚から口頭で伝えられたのみで、領

内の村々などの確認はされていなかったという。そのため、実際は二万石の不足があり、忠興は二万石の不足を証明するための書状を黒田如水から受け取り、本多正信・大久保忠隣に訴えて速見郡内において二万石が与えられることになったという。

山内一豊についても「土佐国拝領仕候、但御判物者頂戴不仕候」(59)とあり、慶長五年十月・十一月に知行を拝領した大名には、領知宛行状と領知目録が発給されていなかったと考えていいだろう。

では、領知宛行はどのように行われたのであろうか。先述のように、山内一豊は榊原康政から土佐国の拝領を伝えられている。このほかにも、『慶長年中卜斎記』は福島正則へ備後国・安芸国の拝領が伝えられた際の様子を次のように記している。

「史料7」(60)

此度忠節の仁なれハ、福島殿へ安芸備後両国被遣候、御使に本多中務大輔、井伊兵部少輔兩人を被遣候、両国被遣候を若不足に被存候てハと兩人も間の取申出して如何と様子を見合、御意の通り兩人被申候得ハ、思の外機嫌克過分に奉存と被申、兩人大悦

正則の許へ本多忠勝と井伊直政が遣わされ、二人は正則の反応を気にしながら口頭で備後国・安芸国の拝領を伝えたという。また、『綿考輯録』は長岡忠興の知行拝領の過程を次のように記している。

「史料8」(61)

関原落去以後、井伊直政江黒田長政対談之時、御恩賞国ニ於ハ一ニ伊予、二ニ筑前、三ニ豊前、望ニ奉存候と被申しを、榊原康政御聞候而、其段世間ニ広く御沙汰無用と押留、忠興君へ御出有てひそかに此旨御語被成、伊予ハ子細有之不被遣候、筑前・豊前両国の内ニ而は其様御望と承り申候間、御前ニ於て御執成可被仰と有ければ、忠興君、迎も西国のはてに被流候ハ、豊前望ニ候、子細ハ上方ニ便よく国しまりてよく候、筑前ハ不しまりなる国ニ候ゆへ、望ニ不被思召と被仰候也

黒田長政に対して井伊直政が伊予国、筑前国、豊前国の中から希望する国を与えると伝えたところ、それを聞いた榊原康政が世間にこうした話をするものではないと押し止めたという。しかし、榊原康政も長岡忠興に対して筑前国と豊前国の内、希望する方を家康に執り成すと伝えている。

井伊直政は黒田長政の取次であり（62）、第三章でみたように榊原康政は長岡忠興の取次であった。論功行賞において、井伊直政・榊原康政といった取次が自身の影響力を誇示するために、取次の対象となる大名に有利な条件を提示できるように奔走していたことや、それゆえに衝突する場面もあったことが分かる。

京極高知の場合も、井伊直政から「江州高嶋郡に越前の敦賀をくはへ給らんや、又丹後国を給らんや、宜しく所望によるべし」（63）と、近江国高島郡に越前敦賀を加える形と、丹後国の一円支配の二つを提示されて、後者を選択したという。また、『池田家履歴略記』も池田照政の播磨国拝領の過程を次のように伝えている。

「史料9」（64）

神君内々仰ありて、播磨・美濃両国の内いつれにても望にまかすへしとの御事也、国清公家老をあつめ異見を問給ふ、衆皆、中国は不案内也、美濃は旧領なれば濃州を望給はん事然るへしと云、独伊木豊後黙して論せず、国清公伊木に向ひ其意を尋給ふに、豊後は播州然るへし、そのゆへは里諺に「播磨二越前と申て播州は大上々の国たる事歴然也、天下兵乱に及は、東西の戦場多く尾濃の間也、されは末代に至ては関東より制せられ御手広く成へからず、播州は西備前を隣り南に淡路あり、是永世基業を起すへき地なり」といふ、国清公を始め此儀に同じ衆評一決す、故に吉田を転して播磨国を賜ひしといふ

家康から播磨国と美濃国の二つを内々に提示された池田照政は、家臣を集めて意見を求めた。家臣たちは旧領の美濃国を推したが、伊木忠次が、播磨国は等級で最も上位の大国である上に立地も良いと播磨国を推したことで、播磨国に決したという。

これらの事例から、慶長五年十月・十一月に領知を拝領した大名は、徳川氏から重臣が遣わされて口頭によつ

て伝達がおこなわれたといえる。また、拝領する領知については、事前に徳川氏の重臣から案が提示され、大名側の同意を得た上で決定している。限られた範囲内ではあるものの、大名側の希望も反映された。これらの論功行賞のあり方は、家康が絶対的な立場で大名へ恩賞を下賜するというものではなく、相互の協議・同意によって決められたという印象が強い。

このことは、家康の名分上の地位が豊臣氏の重臣から抜け切れておらず、自ら領知宛行状を出すことができなかったとする笠谷和比古氏・藤井譲治氏の評価が示すように、領知宛行権の脆弱さともみてとれる。しかし、立花尚政（宗茂）が十二月十四日付の書状の中で、黒田長政から国割の過程を次のように聞かされたと報じている点は無視できないだろう。

「史料 10」（65）

兎角かみかたの計ハ、秀頼様衆之分ハ、申事一切御聞入候ハす候、時々御目見へ一篇之由候、内府様衆計ニて諸篇調之由候、就夫 秀頼様御たい所之たき木以下迄、太閤様の時の金銀ニて御かい候分ニて候由ニて候間、可有其分別候、とかく井伊兵部・本田佐渡兩人ニて候由ニて候、秀頼様衆ニハ小出播磨・片桐市正・寺澤志摩三人ニて候由、甲州被申候

曾根勇二氏が、領知宛行において片桐且元と小出秀政も関与しなければならぬ部分もあったと指摘しているように、国割には「秀頼様衆」（小出秀政・片桐且元・寺沢正成）も参画していたが、彼らの意見は無視され、「内府様衆」（井伊直政・本多正信）が万事主導していた。それによって、豊臣家の家政経済は円滑に回らず、秀吉が蓄えた金銀を切り崩して賄う有様であったという。

また、イエズス会の史料『一五九九年一一六〇一年、日本諸国記』は、本戦後の家康の権力を次のように評している。

「史料 11」（66）

かくて内府様は日本では未曾有の最大の権力者となった。ただちに毛利（輝元）殿から七カ国を、その银山ともども没収し、わずかに二カ国のみを残し、この二カ国もいずれ没収するやも知れぬという含みをもたせた。内府様は己れの関東八カ国、および太閤様の領有であつたすべての諸国を収めた。かくて太閤様を凌いで強大化し、他の大名の畏怖を一身に集めて今日に及んでいる。内府様は欲することすべてをなし得るし、（他に）恐るべき領主なるものはいない。かつて太閤様は、内府様に対し、また毛利殿に対して、両者とも大国の主であるから、それなりの敬意を払っていた。しかし、今の内府様には、そのような敬意を払うべき相手すらもはやいないのである。

「秀頼様衆」を形式的でも国割に参画させなくてはならないという制約はあつたものの、決定権という面においては、家康権力に脆弱さはみられない。国割に際して福島正則ら大名側の意向を伺い、同意を得た上で決めたのは、領知宛行権の脆弱さや、豊臣秀頼に対する遠慮に基づいたものではなく、豊臣系大名の功績が絶大であつたがためにとられた政治的配慮だつたのではないだろうか。

第三節 長岡氏に対する領知目録の交付

領知配分・給付の主体が豊臣秀頼であつたため、家康は領知宛行状を意図的に発給しなかつたとする笠谷説は一定の説得力がある。しかし、領知目録を交付しなかつたのは意図的だつたのであろうか。

「史料4」三条目からは、一ヶ国の一円支配を基準としながらも、「卅万石之積」と、大雑把ではあるが、少なからず石高を意識していることが分かる。慶長五年十月・十一月の国割では領知目録は交付されなかつたものの、翌年（慶長六年）の正月十七日に伊勢国桑名を拝領した本多忠勝へ宛てられた領知目録（68）を初見として、領知目録がみられるようになる。忠勝の桑名領は十万六十八石七斗余とあり、長岡忠興に対する「卅万石之積」と比

べると詳細になっている。

そして、慶長六年四月十六日に忠興に対しても領知目録（68）が交付されている点は重要である。慶長五年の国割において豊臣系大名に領知目録の交付がなかったのは、意図的であったとは考え難い。そこで本節では、忠興に領知目録が交付されるまでの流れを追いながら、慶長五年の国割において領知目録が交付されなかった理由を解明していきたい。

第一節でみたように、慶長五年十一月二日頃に忠興は、豊前国および豊後国の国東郡・速見郡の拝領を伝えられた。これは「卅万石之積」で宛行われ、不足ぶんを豊後国の国東郡・速見郡で補うというものであった。忠興は十一月二十八日付で三男忠辰（忠利）に宛てた書状で「我々事、豊前一国、豊後にて拾壺万石令拝領候、忝儀候」（69）と述べているので、豊前国を十九万石として宛行われたといえる。

翌年の二月に忠興は取次の榊原康政に知行目録（70）を送り、豊前国は「合拾八万九千七百七拾五石三斗八升九合」であり、国東郡の内で宛行われたのは「拾万九百九拾石九斗壺升三合」であるため三十万石を満たしておらず、「九千貳百卅三石六斗九升八合不足」と訴えている。当初は、長岡領に速見郡は含まれておらず、国東郡を十一万石として宛行われたことが分かる。

また、三月十七日に大坂に入り、同月十九日に家康の許に参上した忠興は、三月二十三日付で篠山五右衛門（飯河宗祐）ら国許の重臣に宛てた書状の三条目で次のように記している。

「史料 12」（71）

一木付の儀も大十兵と令相談、是又相済候、併豊前の知行の高の儀、如水申上様ニ相違なり、只今それを改^⑧申事ニ候、是又太慶ニ候、様きわり次第慥成者可下ニて候刻、口上ニ具可申候、紙面ニ中ノ難尽候事「木付の儀」とは、忠興は四月十日付の書状で「先書ニ内々申候木付之儀、此中色々申上、弥相済、拝領仕極候、於其廻知行壺万石余拝領候」（72）とあることから、慶長四年に宛行われた豊後杵築を拝領できるように大久

保長安に相談していたことがわかる。

傍線部は、前述した「史料6」五条目の内容を指しているよう。忠興に与えられた知行高は、調査したところ黒田如水が申告した数字より少なく、それを改めているという。このことから、与えられた領知の石高は旧領主の申告を基に算出していたことがわかる。『綿考輯録』は「福智山の城ハ小野木目録前二而、有馬玄蕃頭豊氏へ牧新五・篠山与四郎を以て御引渡被成」(73)と、攻略した丹波福知山を有馬豊氏へ引き渡す際、旧領主である小野木氏を作成した目録を基におこなったとしている。

忠興の交渉の甲斐あって、速見郡の内、杵築城の周辺で八千八十三石が長岡氏に与えられることとなった。そして、四月十六日に忠興に対して領知目録が交付される。

「史料13」(74)

御知行方目録 豊後国速見郡

村所高付等略仕候

高合九千四百七拾四石壺斗四升八合

此内三百九拾壺石壺斗八升八合 海川成引

残て八千八拾三石也 有高二て渡ス

一拾万千九百拾七石 国東郡一円渡ス

合拾壺万石者

右御知行三拾万石為都合致進之候、重て御朱印申請可進之候、以上

慶長六年

加藤喜左衛門

四月十六日

正次判

大久保十兵衛

長安判

彦坂小刑部

元正判

片桐市正

且元判

羽柴越中守殿

参

こうして国東郡一円と速見郡内で合わせて十一万石、豊前国と合わせて三十万石が整えられた。二月に忠興が榊原康政に知行目録を送っているように、「史料¹³」の作成には、忠興が調査した数値が大きく影響したことは間違いないだろう。徳川方は「卅万石之積」という数値を算出するに当たって、旧領主である黒田氏からの申告と、新領主である忠興が自発的に調査して得た情報に大きく依存していた。

本戦当時、現役の奉行衆であった前田玄以・増田長盛・石田三成・長束正家の内、土地に通じていた長盛・三成・正家の三名が全て豊臣政権から姿を消している。本戦から約一ヶ月しか経っていない時期に、このような状況下で国割をおこなえば、領知配分が大雑把になるのは当然といえる。

では何故、家康は全国を村々に至るまで詳細に把握する前に国割をおこなったのであろうか。これには第二部でみてきたように、伊達政宗が切り取り次第の承認を獲得した⁽⁷⁵⁾ことや、黒田如水も切り取り次第の承認を求めていた⁽⁷⁶⁾ことが物語るように、関ヶ原の役を契機として領土拡張を図ろうとする領土欲は、多かれ少なかれ諸大名にあった。

加えて、東軍の勝利において豊臣系大名の貢献度は圧倒的に高かった。本戦に至るまでに幾多の前哨戦が行われたが、家康は本戦まで采配をまったく振っていなかった。また、本戦においても、前線で主力として戦った徳

川家臣は、井伊直政、松平忠吉、本多忠勝くらいであり、戦場の前線に占める徳川軍の割合は約五分の一であった。東軍の勝利において、豊臣系大名による貢献の比重は大きく、ゆえに大功を立てた豊臣系大名には、その後において十分な政治的配慮が必要となったのであろう。

もつとも、国割が早急におこなわれた理由として、大功を立てた豊臣系大名の要望を早期に叶える必要性のほかに、石田三成や大谷吉継のように滅亡した大名の所領が闕所となっている問題が考えられる。しかし、織田秀信の旧領に奥平信昌が入ったのは慶長六年三月であり⁽⁷⁷⁾、岐阜城陥落から半年以上が経過している。当面は大久保長安ら徳川家臣が支配に当たったこともあり、闕所の問題にそれほど緊急性はなかったようである。国割が早急におこなわれたのは、豊臣系大名の要望を早期に叶える必要があったことが主な理由であろう。ゆえに、統治機構の未成熟を承知の上で、国割をおこなわざるをえなかったと考えられる。そのため、本戦で活躍した豊臣系大名の領知宛行には、領知目録が交付されなかったのである。

第四節 諸侯に対する領知宛行状の発給

では、領知宛行状については如何に考えるべきであろうか。笠谷説に対して種村威史氏は、慶長七年に佐竹義宣と長岡幽斎に対して領知宛行状が発給されている点を指摘したが、「進」「御知行」「被」と、相手に対して敬意を表現する文言を使用せざるを得なかった点にも言及しており、家康の立場が豊臣政権の枠組みに拘束されたものであったとする点は笠谷氏や藤井氏と同様である⁽⁷⁸⁾。

なお、慶長七年において家康が諸侯（本章では豊臣系と旧族系の大名を「諸侯」と呼称する）に対して発給した領知宛行状は、佐竹義宣⁽⁷⁹⁾と長岡幽斎⁽⁸⁰⁾のほかに、前田茂勝宛ての慶長七年九月十九日付の黒印状が確認されている⁽⁸¹⁾。しかし、ここでは「右宛行訖、全可領知者也」であり、相手に対して敬意を表現する文言は使

用されていない。家康は、全ての諸侯に対して敬意を表現する文言を使用していたわけではない。長岡幽斎は関ヶ原の役で大功を立てており、佐竹義宣は国持大名である。諸侯の中でも、こうした立場を有する者にのみ、家康は敬意を表現する文言を使用したと考えた方がいいだろう。

五大老の家康が単独で発給した領知宛行状として、関ヶ原の役の半年前にあたる慶長五年二月朔日付で田丸忠昌（直昌）と森忠政に対する発給が確認されている（⁸²）が、いずれも「被宛行訖、目録別紙ニ有之、全可有領知（中略）如件」、「目録別紙ニ有之、被宛行畢、全可有領知之状如件」と、五大老連署の知行宛行状（⁸³）と形式は同一であり、五大老としての発給とみていいだろう。田丸忠昌宛ての書状は判物であり、森忠政宛ての書状は写で「御朱印之写」「御判なし」とするが、田丸忠昌の事例や、五大老の発給文書は印判状ではなく判物である点から、判物と考えられる。

関ヶ原の役の最中、家康は慶長五年八月二十二日付で伊達政宗に対して領知宛行状を発給している。

「史料 14」（⁸⁴）

覚

一 荀田 一 伊達 一 信夫 一 二本松 一 塩松 一 田村 一 長井

右七ヶ所、御本領之事候之間、御家老衆中へ為可被宛行、進之候、仍如件

慶長五年八月廿二日 家康（花押）

大崎少将殿

これは戦時中において切り取り次第を承認したものであり、論功行賞の領知宛行状とは性格を異にする。しかし、五大老連署の知行宛行状とは形式が異なるものであり、豊臣政権の枠組みに拘束されながらも、五大老としてではなく、東軍総大将として発給したという点は注目されよう。ここでは「御家老衆中へ為可被宛行、進之候」と、「進」の文言が使用されている。

前述のように、慶長六正月十七日に本多忠勝、同年一月二十八日に片桐且元・貞隆に対して領知目録が交付される。本多忠勝宛てのものは「右分爲御知行被遣之候、御仕置可被仰付候、已上」であるが、片桐且元・貞隆宛てのものを初見として「重而御朱印申請可進候、已上」の文言がみられるようになる。藤井氏をはじめとする先行研究は、こうした文言を組み入れながらも実際には領知宛行状が発給されていない点に着目して、家康の領知宛行権に限界があったこと示す材料としてきた。確かにそうではあるが、筆者は「重而御朱印申請可進候」を組み入れたことは家康が豊臣政権の枠組みを抜け出すにあたって大きな画期となったと考える。

まず、「御朱印」とは誰の発給を指すかという問題であるが、家康と豊臣秀頼の両者が想定されるものの、関ヶ原の役以前において秀頼の発給文書はなく、幼少の秀頼に代わってその機能を代行していたのが、五大老の連署状であった。また、「重而御朱印申請可進候」の文言は、分部光嘉ら豊臣系大名、松平忠利ら徳川家臣を問わず、いずれにも用いられている⁽⁸⁵⁾。この二つの理由から、「御朱印」は家康の発給を指すと考えられる。種村威史氏は、旧豊臣系大名や秀頼直臣の領知目録にある「御朱印」は、秀頼の意を受けた奉書形式であり、家康直臣に対する「御朱印」は家康の直状と考えるべきであると、「御朱印」には二通りの含意が存在するとしたが⁽⁸⁶⁾、五大老の発給文書は印判状ではなく判物である点から、秀頼の意を受けた奉書形式ではなく、全て家康の直状と考えていいだろう。

黒田如水が「加藤計拙者事ハ、今度切取候間、内府様以御取成を秀頼様方拝領仕候様ニ、井兵被仰談御肝煎頼存候、数年無御等閑者此節ニ候」⁽⁸⁷⁾と述べているように、豊臣恩顧の諸将にとって領知配分・給付の主体は豊臣秀頼であって、家康は「取成」という立場にすぎなかった。しかし、領知目録に「重而御朱印申請可進候」の文言を組み入れることで、領知配分・給付の主体は家康であると、諸侯に対して示唆したのである。

慶長七年になると佐竹義宣、長岡幽斎、前田茂勝に対して領知宛行状が発給される。佐竹義宣は判物、長岡幽斎と前田茂勝は黒印状である。

〔史料 15〕（88）

出羽国之内、秋田・仙北両所進置候、全可有御知行候也

慶長七年七月廿七日

御判形

佐竹侍從殿

〔史料 16〕（89）

山城国久世郡灰方村九百四拾七石六斗三升

同紀伊郡下三栖之内四拾七石壹斗貳升

同相樂郡山田村千五石貳斗五升

丹波国何鹿之郡、物之部之内八百七拾三石七斗四升

同桑田郡上村百六石壹斗三升四合

又林之内貳拾石壹斗貳升六合

合三千石之事全可被領知者也

家康公

慶長七年九月廿五日

御黒印

幽斎

〔史料 17〕（90）

丹波国多喜郡四万参千八百七拾六石八斗・同桑田郡之内四千九百五拾七石八斗・摂津国太田郡之内千壹石五斗・菟原郡之内百六拾参石六斗、合五万石之事
右宛行訖、全可領知者也

慶長七年九月十九日

（黒印）

前田主膳正殿

佐竹義宣に対しては出羽国秋田郡・仙北郡の全域を与えており、石高ではなく国郡を基準としている。慶長五年十月、十一月の領知配分は、国郡を基準とする宛行であったが、慶長六年以降は石高を基準としており、女婿の蒲生秀行を会津に配置したのを除いて国持大名の輩出も抑えている。長岡幽斎、前田茂勝に対する領知宛行状が黒印状であるのに対して判物である点、また、この時期においても「進」の文言が使用されている点から、佐竹義宣に対する処置は大大名であるが故の特別な事例とみることができる。

「史料16」は、前年の十二月二十九日に伊奈忠次ら奉行が同一の内容で領知目録を交付している（91）ことから、それに対する黒印状といえる。黒印状の発給に至るまで九ヶ月を要していることから、慶長七年九月頃になって漸く、諸侯に対して印判状による領知の給付が可能になったと考えられ、領知宛行状発給の画期として位置づけられる。

「史料17」は、「史料16」と同様に石高が詳細に記されているほか、家康が五大老として連署、あるいは単独で発給した領知宛行状にあるように、「任帳面旨」や「目録別紙有之」といった文言はみられない。おそらく、「史料17」に対する領知目録は交付されていないのではないのだろうか。

また、同時期（慶長七年九月三十日）に徳川家臣の水野正重にも黒印状が発給されているが、「史料17」と形式がほぼ同一である。

「史料18」（92）

江州坂田郡志賀谷村九百九拾四石三斗九合、本庄村之内五石壺斗壺升七合、都合千石之事、宛行訖、全可領知者也、仍如件

慶長七年九月晦日

御黒印

水野平右衛門とのへ

この形式は、大名としての家康が家臣に発給した領知宛行状（93）に類似しており、これは同時に諸侯に対する領知宛行状が、豊臣政権（五大老連署状）の形式から、徳川氏の形式に改められたといえる。

これ以降も奉行の領知目録は交付される（94）が、「重而御朱印申請可進候」の文言はみられない。また、秋田実季、戸沢政盛に交付された領知目録はいずれも村々の石高まで詳細に記されたものであることから、純粹に目録としての役割で交付されたとみていいだろう。家康の領知宛行権は強固となり、奉行の領知目録は、領知宛行状の代わりとしての役割を終えたといえる。そして、領知宛行は、徳川家臣と諸侯の区別なく、（国持大名を除いて基本的に）印判状による給付に統一されたと考えられる。十月二日付で万石未満の徳川家臣に対して領知宛行の印判状が約二十通、一斉発給（95）されているが、家康の領知宛行権確立と無関係ではないだろう。

なお、家康が毛利氏や島津氏に対して「周防・長門両国進置候事」（96）、「薩摩・大隅・諸県之儀、此間被相抱候分、相違有間敷候」（97）と、起請文のなかで領知を宛行った事例を、領知宛行状発給に準じるものと評価する先行研究も存在する（98）。確かに領知の宛行を誓約しているが、黒田如水が「内府様以御取成を秀頼様を拝領仕候様ニ」と述べているように、家康が「取成」という立場で誓約した可能性を想定すべきであり、領知配分・給付の主体は誰かという問題を依然として含んでいる。島津氏に対する起請文は慶長七年四月であるため、判断は難しいが、毛利氏に対する起請文は、本戦から一ヶ月にも満たない慶長五年十月十日付であり、時期から「取成」と考えるべきである。誓約した際の家康の立場は、豊臣政権の枠組みに拘束されたものであり、「史料14」を発給した時と同様である。

黒田如水の言葉が示すように、豊臣恩顧の諸将にとって領知配分・給付の主体は豊臣秀頼であった。本戦の直後では、大勝利を収めたとはいえ、豊臣系大名に対して（秀頼の意を受けた奉書形式ではなく、家康の直状として）家康が領知宛行状を発給することは不可能であったであろう。仮に、慶長五年十月・十一月の論功行賞において家康が領知宛行状を発給した場合、大功を立てた豊臣系大名との関係性から、秀頼の意を受けた奉書形式に

よる判物で発給されたであろう。また、慶長六年においても、奉行による領知目録（99）の方が、家康の発給文書を避けるという点で都合が良く、かつ「重而御朱印申請可進候」の文言を組み入れることで、領知配分・給付の主体が家康であると示唆する布石を打つことが出来た。これらのことから、先行研究が、家康は領知宛行状を意図的に発給しなかったと評価した点は正しいといえる。

結語

笠谷和比古氏が指摘するように、毛利輝元は、家康によって「周防・長門両国進置候事」と、防長二ヶ国の領有という形で存続を認められ、黒田長政の筑前国拝領についても、本多忠勝が「筑前之国、甲州江被進候」（100）と報じているように、慶長五年十月・十一月の国割は、国郡を基準とする宛行であった。

もつとも、長岡忠興の宛行に「卅万石之積」とあるように、少なからず石高は意識されていた。しかし、家康権力の統治機構が未成熟であったがゆえに、石高を基準とする宛行には限界があった。東軍の勝利において、豊臣系大名による貢献の比重は大きく、そのため、統治機構の未成熟を承知の上で、早急に国割をおこなわざるをえなかったのである。ゆえに、本戦で活躍した豊臣系大名に対する領知配分には、領知目録が交付されなかった。

豊臣系の国持大名の多数輩出は、慶長五年十月・十一月の論功行賞の時に生じたものである。この二ヶ月は、領知目録が交付されず、国郡を基準として領知配分がおこなわれた。また、大名側の同意を得た上で拝領する領知が正式に決まるなど、（国割の全体からみれば）異質なものであった。しかし、この二ヶ月は、家康の豊臣系大名に対する政治的配慮という点において、関ヶ原の役の性格を顕著に表している。

慶長六年正月からは領知目録が交付されるようになり、領知配分の基準も国郡から石高へと移行していく。残りの豊臣系大名や、徳川家臣に対しても領知配分がおこなわれるようになることから、国割をおこなうに当たっ

て十分な統治機構が整ったのは、慶長六年以降といえる。

しかし、豊臣恩顧の諸将にとって領知配分・給付の主体は豊臣秀頼であり、家康の名をもって領知宛行状を発給することはできなかった。そのため、伊奈忠次ら奉行による領知目録をもって領知配分がおこなわれたのである。家康は領知宛行状を発給しないことで、秀頼の意を受けた奉書となることを避け、領知配分・給付の主体が誰かという問題を曖昧にした。そして、領知目録に「重而御朱印申請可進候」の文言を組み入れることで、領知配分・給付の主体は家康であると示唆する布石も打っていた。

そして、慶長七年九月には諸侯に対して印判状による領知宛行が確認できるようになる。この時をもって、領知配分・給付の主体が家康であることが明確となり、家康は領知宛行権を完全に掌握した。それは、家康と「遺言体制」の戦いの終着点として位置づけられる。

以上、本章では①慶長五年十月・十一月の論功行賞で領知目録が交付されなかった理由を明らかにし、②領知目録にある「重而御朱印申請可進候」文言は、領知配分・給付の主体は家康であると示唆する布石である点、③慶長七年九月には、家康は領知宛行権を完全に掌握していた点の指摘をおこなった。

註

(1) 藤野保『新訂幕藩体制史の研究』（吉川弘文館、一九七五年）。

(2) 藤野保『近世国家史の研究——幕藩制と領国体制』（吉川弘文館、二〇〇二年）。では、関ヶ原の役後の戦後処理による領国体制の変動を地方・国別に考察し、さらに徳川政権期における領国体制の変動を段階別に詳述している。

(3) 笠谷和比古「関ヶ原合戦後の地政学的状況」（同『関ヶ原合戦と近世の国制』思文閣出版、二〇〇〇年）。以下、本稿で取り上げる笠谷氏の見解は右記に基づく。

- (4) 曾根勇二「関ヶ原の戦後の片桐且元」(同『近世国家の形成と戦争体制』校倉書房、二〇〇四年)。以下、本稿で取り上げる曾根氏の見解は右記に基づく。
- (5) 藤井譲治『徳川将軍家領知宛行制の研究』(思文閣出版、二〇〇八年)。以下、本稿で取り上げる藤井氏の見解は断りがない限り右記に基づく。
- (6) 『大日本古記録 言経卿記』十(岩波書店、一九七七年)〈以下『言経』と表記〉二二三頁。
- (7) 『言経』二二四頁。
- (8) 『義演准后日記』第二(続群書類従完成会、一九八四年)〈以下『義演』と表記〉二二二頁。
- (9) (慶長五年)十月十五日付福島正則書状「入左近宛」「三溪園所蔵文書」(『愛知県史』資料編十三 織豊三、二〇一一年)〈以下『愛知』と表記〉一〇二五号。
- (10) (慶長五年)九月晦日付福島正則・黒田長政連署状「吉川広家・福原広俊・渡辺長・宍戸元統宛」『大日本古文書 家わけ第八 毛利家文書之三』(東京大学出版会、一九七〇年)一〇二七号。
- (11) 慶長五年十月十日付徳川家康起請文「毛利輝元・毛利秀就宛」「毛利元公爵家文書」(中村孝也『新訂徳川家康文書の研究』中巻、日本学術振興会、一九八〇年)〈以下『家康文書中』と表記〉。
- (12) (慶長五年)十月十五日付徳川家康書状「伊達政宗宛」『大日本古文書 家わけ第三 伊達家文書之一』(東京大学出版会、一九六九年)七一六号。
- (13) (慶長五年)十月二十三日付長岡忠興書状「松井康之宛」(『松井文庫所蔵古文書調査報告書』三、八代市立博物館未来の森ミュージアム、一九九八年)〈以下『松井三』と表記〉四六四号。
- (14) (慶長五年)十月二十七日付長岡忠興書状写「松井康之宛」(『松井文庫所蔵古文書調査報告書』一、八代市立博物館未来の森ミュージアム、一九九六年)〈以下『松井一』と表記〉一一―二号。
- (15) (慶長三年)十月十四日付徳川家康書状写「京極高次宛」「宮内省呈譜」(徳川義宣『新修 徳川家康文書の

研究』第二輯、徳川黎明会、二〇〇六年）〈以下『新修家康文書二』と表記〉二九六頁。

- (16) (慶長五年) 九月二十三日付井伊直政書状写「京極高次宛」「譜牒余録」卷第四十六(『内閣文庫影印叢刊譜牒余録』中、国立公文書館、一九七四年)〈以下『譜牒中』と表記〉四七〇頁。

- (17) 前掲註(16)。

- (18) (慶長五年) 十月晦日付久代景備書状「大関資増宛」「大田原市黒羽芭蕉の館所蔵大関家文書」(『戦国遺文下野編』第三卷、東京堂出版、二〇一九年、二四五六号)。

- (19) (慶長五年) 十一月二日付長岡忠興書状写「長岡興元・松井康之ほか六名宛」(『松井三』四六二号)。

- (20) (慶長五年) 十一月二日付長岡忠興書状「黒田如水宛」(『黒田家文書』一卷、福岡市博物館、一九九九年)〈以下『黒田家文書』と表記〉二二五号。

- (21) 『山内家史料 第一代一豊公紀』(山内家史料刊行委員会、再版一九九九年)〈以下『一豊公紀』と表記〉三八一頁。

- (22) 平井上総「関ヶ原合戦と土佐長宗我部氏の改易」(『日本歴史』七一八号、二〇〇八年)。

- (23) (慶長五年十一月十四日) 山内一豊書状写「宛所未詳」(『一豊公紀』三九一頁)。

- (24) 『義演』二二八頁。

- (25) (慶長五年) 十一月六日付長岡忠興自筆書状「松井康之宛」(『松井一』一一一六号)。

- (26) 慶長六年四月十六日付片桐且元・彦坂元正・大久保長安・加藤正次連署知行書立写「木下延俊宛」「木下文書」(辻治六『日出年代史』日出町立万里図書館、一九六九年)。

- (27) 「慶長年中卜齋記」中之卷(『改定史籍集覧』第廿六冊、臨川書店、復刻版一九八四年)七二頁。

- (28) (慶長五年) 仲冬十八日付黒田長政書状写「吉川広家宛」(『黒田家文書』二一六―三三三)。

- (29) 慶長五年九月二十九日付吉川広家起請文前書写「井伊直政・黒田長政宛」(『黒田家文書』二一五―二二五)。

- (30) 慶長六年八月二十四日付毛利輝元自筆起請文案「吉川広家宛」『大日本古文書 家わけ第八 毛利家文書之一』(東京大学出版会、一九七〇年) 三六二号。
- (31) 『寛永諸家系図伝』第十三(続群書類従完成会、一九九〇年)(以下『寛永十三』と表記)二〇三頁、有馬豊氏の項。
- (32) 『新訂寛政重修諸家譜』第六(続群書類従完成会、一九六四年、二五二頁、金森長近の項)。
- (33) 『新訂寛政重修諸家譜』第九(続群書類従完成会、一九六五年、一二五頁、遠藤慶隆の項)。
- (34) 『新訂寛政重修諸家譜』第十(続群書類従完成会、一九六五年)(以下『寛政十』と表記)一五五頁、一柳直盛の項。
- (35) 『寛永十三』二九頁、一柳直盛の項。
- (36) 慶長六年正月十七日付伊奈忠次・彦坂元正・大久保長安・加藤正次連署知行書立写「本多忠勝宛」「本多文書」(『文書集成』五四六号)。
- (37) 慶長六年三月五日付彦坂元正・大久保長安・加藤正次・小出秀政・片桐且元連署知行書立「分部光嘉宛」「分部文書」(中村孝也『新訂徳川家康文書の研究』下巻之一、日本学術振興会、一九八〇年)(以下『家康文書下』と表記)。
- (38) 『寛政十』一五五頁。
- (39) 小宮山敏和「近世初頭における譜代大名の機能」(同『譜代大名の創出と幕藩体制』吉川弘文館、二〇一五年)。
- (40) 前掲註(20)。
- (41) (慶長五年)十二月五日付長岡忠興書状「松井興長宛」『松井文庫所蔵古文書調査報告書』二(八代市立博物館未来の森ミュージアム、一九九七年)二九〇号。

(42) 前掲註 (36)。

(43) 「当代記」卷三(『當代記 駿府記』続群書類従完成会、一九九五年)七五頁。

(44) 慶長六年三月五日付彦坂元正・加藤正次・大久保長安連署知行書立写「戸田尊次宛」「河合文書」(『文書集成』六八八号)。

(45) 慶長六年五月二十四日付彦坂元正・大久保長安・加藤正次連署知行書立「菅沼定仍宛」「菅沼文書」(『文書集成』七六一号)。

(46) 慶長六年七月十九日付伊奈忠次・板倉勝重・加藤正次・大久保長安連署知行書立「松平忠利宛」「本光寺文書」(『文書集成』七七四号)。

(47) 『寛永諸家系図伝』第七(続群書類従完成会、一九八四年、二四〇頁、井伊直政の項)。

(48) 『寛永諸家系図伝』第六(続群書類従完成会、一九八三年、一四〇頁、奥平信昌の項)。

(49) 「寛永諸家系図伝」によると、松平定勝の遠江掛川三万石の拝領は慶長六年(『寛永諸家系図伝』第一、続群書類従完成会、一九八〇年、二〇八頁)、本多康重の三河岡崎五万石拝領は慶長六年春(『寛永諸家系図伝』第八、続群書類従完成会、一九八五年、二五九頁)、戸田一西の近江国大津三万石の拝領は慶長六年(『寛永諸家系図伝』第十、続群書類従完成会、一九八六年、八三頁)。

(50) 慶長六年正月二十八日付彦坂元正・大久保長安・加藤正次連署知行書立写「片桐且元宛」「譜牒余録」卷第五十七(『譜牒中』八一五頁)。慶長六年正月二十八日付彦坂元正・大久保長安・加藤正次連署知行書立「片桐貞隆宛」「成實堂文庫片桐文書」(芥川龍男『武家文書の研究と目録上』お茶の水図書館、一九八八年)二九七号。

(51) (慶長六年)八月二日付鎌田政近書状写「伊勢貞昌・本田親商・喜入久正宛」『鹿児島県史料 旧記雑録後編 三』(鹿児島県、一九八三年)一五二九号。

- (52) 『上杉家御年譜』第三卷 景勝公 二(米沢温故会、一九七六年) 二二七頁。
- (53) 慶長七年七月二十七日付徳川家康知行宛行状写「佐竹義宣宛」「義宣家譜」(『家康文書下』)。
- (54) (慶長七年)四月十一日付徳川家康起請文案「島津龍伯宛」『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之一』(東京大学出版会、一九五一年)〈以下『島津一』と表記〉一二〇号。
- (55) (慶長七年)極月卅日付山口直友書状「島津惟新宛」『島津一』四八四号。
- (56) 藤井讓治『徳川家康』(吉川弘文館、二〇二〇年)二四五頁。
- (57) (寛永九年)六月二十三日付細川三斎書状「細川忠利宛」『大日本近世史料 細川家史料』四(東京大学出版会、一九七四年)〈以下『細川四』と表記〉九七四号。
- (58) (寛永九年)十一月二十日付細川三斎書状「細川忠利宛」(『細川四』一〇一六号)。
- (59) 「譜牒余録」卷第二十五(『内閣文庫影印叢刊譜牒余録』上、国立公文書館、一九七三年、七四〇頁)。
- (60) 前掲註(27)。
- (61) 『綿考輯録』二卷(汲古書院、一九八八年)〈以下『綿考二』と表記〉三九〇頁。
- (62) (慶長三年)十二月二十五日付黒田長政起請文案(『黒田家文書』二一二―二号)。(慶長三年)十二月二十五日付井伊直政起請文案(『黒田家文書』二一二―一号)。
- (63) 『寛永十三』七二頁、京極高知の項。
- (64) 池田家履歴略記「岡山大学附属図書館所蔵池田家文書」(『姫路市史』第十卷 史料編 近世一、一九八六年)二号。「池田家履歴略記」は池田照政の播磨国拝領を十二月十三日とするが、前掲註(13)から十月の誤りといえる。
- (65) (慶長五年)十二月十四日付立花尚政書状「小野鎮幸・由布惟次宛」「限部文書」(『柳川市史』史料編 近世文書前編、二〇一一年)。

- (66) 「一五九九年一一六〇一年、日本諸国記」(松田毅一監訳『十六・十七世紀イエズス会日本報告集』第一期第3巻(同朋舎出版、一九八八年)二五五頁。)(内は訳者の補足語、または注に入れるべき短文を指している。
- (67) 前掲註(36)。
- (68) 慶長六年四月十六日付片桐且元・彦坂元正・大久保長安・加藤正次連署知行書立写「長岡忠興宛」「松井家先祖由来附」(『八代市史』近世史料編八、一九九九年)(以下『八代』と表記)一七二頁。
- (69) (慶長五年)十一月二十八日付長岡忠興書状「長岡忠辰宛」『大日本近世史料 細川家史料』一(東京大学出版会、一九六九年)五号。
- (70) 慶長六年二月付長岡忠興知行目録控「榊原康政宛」(『松井一』一一―五号)。
- (71) (慶長六年)三月二十三日付長岡忠興書状写「篠山五右衛門・松井康之・有吉立行・牧興相・加々山興良・加納曲斎宛」「松井家先祖由来附」(『八代』一六八頁)。
- (72) (慶長六年)四月十日付長岡忠興書状「松井康之宛」(『松井三』四六三号)。
- (73) 『綿考二』三九一頁。
- (74) 前掲註(68)。
- (75) 慶長五年八月二十二日付徳川家康領知判物「伊達政宗宛」『大日本古文書家わけ第三 伊達家文書之十』(東京大学出版会、一九六九年)三二八二号。
- (76) (慶長五年)九月十六日付黒田如水書状写「藤堂高虎宛」「高山公実録」卷之九(『高山公実録』上巻、清文堂出版、一九九八年)一七七頁。
- (77) 前掲註(48)。
- (78) 種村威史「慶長期徳川政権の領知宛行」(『史学研究集録』二九号、二〇〇四年)。

- (79) 前掲註 (53)。
- (80) 慶長七年九月二十五日付徳川家康領知黒印状写「長岡幽斎宛」『綿考輯録』第一卷（汲古書院、一九八八年）
（以下『綿一』と表記）二七九頁。
- (81) 慶長七年九月十九日付徳川家康領知黒印状「前田茂勝宛」「米山豊彦氏所蔵文書」(『新修家康文書二』四七三頁)。
- (82) (慶長五年) 二月朔日付徳川家康領知判物（影写本）「田丸忠昌宛」「田丸文書」(『岐阜県史』史料編 古代中世四（一九七三年、田丸文書一号）。慶長五年二月朔日付徳川家康知行宛行状写「森忠政宛」「森家先代実録」(『岡山県史』第二十五卷 津山藩文書、一九八一年)（以下『岡山』と表記）二七頁。
- (83) 慶長四年二月五日付五大老連署知行宛行状案「小早川秀秋宛」『大日本古文書 家わけ第八 毛利家文書之三』(東京大学出版会、一九七〇年) 一一一八号ほか。
- (84) 前掲註 (75)。
- (85) いずれも写であるが、木下延俊に交付された知行書立写（前掲註26）、慶長六年五月二十三日付大久保長安・彦坂元正・加藤正次連署知行書立写「森忠政宛」「森家先代実録」(『岡山』二八頁) にはみられない。
- (86) 種村威史「慶長六年の徳川家康の自筆知行宛行状」(『國學院雜誌』一二四二号、二〇一〇年)。
- (87) 前掲註 (76)。
- (88) 前掲註 (53)。
- (89) 前掲註 (80)。
- (90) 前掲註 (81)。
- (91) 丑（慶長六年）十二月二十九日付伊奈忠次・加藤正次・大久保長安連署知行書立写「長岡幽斎宛」(『綿一』二七九頁)。

(92) 慶長七年九月晦日付徳川家康領知黒印状写「水野正重宛」「水野文書」(『家康文書下』)。なお、慶長七年九月以前における徳川家臣に対する領知宛行状として、慶長六年五月朔日付加藤太郎右衛門尉宛の朱印状写「因幡志」(『家康文書下』)などが確認されている。

(93) 天正二十年二月朔日付徳川家康領知朱印状「蒔田頼久宛」「宮崎義司氏所蔵文書」(『家康文書中』二〇〇頁)。
(94) 寅(慶長七年)十一月十一日付長谷川長綱・島田重次・伊奈忠次連署知行書立「秋田実季宛」「秋田文書」(『文書集成』九三七号)。寅(慶長七年)十一月十一日付長谷川長綱・島田重次・伊奈忠次連署知行書立写「戸沢政盛宛」「新庄古老覚書」(『文書集成』九三八号)。

(95) 慶長七年十月二日付徳川家康領知朱印状「由良貞繁宛」「由良文書」(『家康文書下』)など。

(96) 前掲註(11)。

(97) 前掲註(54)。

(98) 前掲註(78)。

(99) 大久保長安ら徳川系の奉行の位置づけであるが、片桐且元と小出秀政の関与が確認できることから、徳川氏の奉行としてではなく、豊臣公儀の奉行として知行目録を交付したと考えられる。

(100) (慶長五年)十一月十四日付本多忠勝書状「黒田如水宛」(『黒田家文書』三六号)。

終章 関ヶ原の役の位置づけ

最後にこれまでの考察をまとめ、関ヶ原の役の位置づけをおこなう。

第一章では、先行研究が言及しなかった「遺言体制」の成立過程を明らかにしたものとした。その結果、政權闘争の前段階として、「遺言体制」のあり方をめぐる主導権争いがあり、秀吉死後の政權運営が、秀吉の遺言どおりではなく、対立する陣営同士の協議と妥協によって生まれた体制でおこなわれたことが明らかとなった。

「遺言体制」では、知行配当は徳川家康と五奉行の多数決、政務は五奉行の多数決となっており、家康と五奉行は、ほかの大老衆に対して優位性を持っていた。しかし、石田三成ら四奉行は毛利輝元と盟約を結んで派閥を形成するなど、本来であれば最も協力し合わなければならない家康と四奉行の対立によって「遺言体制」は上手く機能しなかった。結果、慶長三年（一五九八）九月三日付五大老・五奉行連判誓紙において「遺言体制」の改変が行われ、十名の多数決による政權運営が誕生した。そして、秀吉死後の政局は、十名の多数決制を土台とし、その十名の中から政敵を排除していくのが政争の流れとなったのである。

第二章では、加藤清正ら七将が石田三成の暗殺をはかり襲撃したとされる事件（通称 石田三成襲撃事件）について、その意義を明らかにした。事件は、通説でいわれるように三成と七将といった個人間の対立ではなく、私婚問題をはじめとする政争の延長線上にあった。その結果、三成陣営の崩壊というかたちで政争は「（一時的な）決着」をみることになった。

第三章では、会津征討について位置づけをおこなった。通説では、会津征討は三成の挙兵を誘う「呼び水」とされてきたが、会津征討に三成の挙兵を誘う意図はなく、家康の大老衆排斥の一端として位置づけられることが明らかとなった。

第四章では、西軍を「公儀」と評価する先行研究に対して検討をおこない、西軍を「公儀」とするのは過大評価であると指摘し、「遺言体制」の立て直し（家康を除いた四大老・五奉行制の再構築）と、家康の独裁権力下で行われた施策の白紙化をスローガンとするクーデター勢力と位置づけた。

第一章から第四章にかけての考察によって、秀吉死後の権力闘争の構造は、家康と「遺言体制」の戦いであり、関ヶ原の役は、その最終決戦として位置づけられる。

慶長四年正月の私婚問題の際に家康の隠居が争点となったものの、家康は失脚を免れた。最初に脱落したのは、慶長四年閏三月の騒動で奉行職を追われて政治的影響力を剥奪された三成である。この騒動では、増田長盛も政治的影響力を剥奪される可能性があったが、長盛は難を逃れている。

「内府ちかひの条々」一条目に「年寄共之内、式人被迫籠候事」⁽¹⁾とあることから、慶長四年閏三月の騒動で「さほ山へいんきよ候て、天下事無存知候様」⁽²⁾と、奉行職を追われた三成のほか、浅野長政も慶長四年九月に起きた家康暗殺計画をめぐる一件によって排斥されていたことがわかる。これについては、『北野社家日記』慶長五年七月十七日条に「大坂御城へ御奉行衆悉被籠由申来」⁽³⁾とあることから、現役として残った奉行が増田長盛・前田玄以・長束正家の三名しかいなかったことが裏づけられる。

一方、五大老においては前田利長が排斥されている。「内府ちかひの条々」二条目には、利長の排斥について「遮而誓紙を被遣候て、身上既可被果之处、先景勝為可討果、人質を取、追籠被申候事」と記されている。身上が「果」というのは、宮部長令（長熙）が寛永十年（一六三三）八月二十七日付で自身が改易された経緯を記した書上⁽⁴⁾を「身上相果申科之次第」と題しているように、改易という意味で使われることが主である⁽⁵⁾。しかし、前田氏は大名として存続しているため、似た意味で別のことを指していよう。また「追籠」の文言は一条目とも重なる。おそらく「果」は政治的立場の失墜、「追籠」は政権に関与しないよう領国にとどめられたという意味ではないだろうか。利長が大老職を追われた明確な時期については、おそらく大谷吉治と石田三成の軍勢が越前に配置され

て迎撃態勢が整えられた時⁽⁶⁾が事実上の政治的影響力剥奪と推測できるが、「内府ちかひの条々」に利長が誓紙を差し出したとあるように、徳川・前田の和談成立の時に利長が政権中枢に関与しない旨を誓約した可能性もある。いずれにしても、関ヶ原の役の時には、大老職を追われていたことは確かである。

上杉景勝に関しては、大老職剥奪を史料上から明確に示すことはできない。しかし、利長が大老職を追われている点を踏まえると、豊臣公儀から放逐されて会津へ征討軍が向けられている景勝も大老職を追われたと考えられる。

西軍は、家康に排斥された五大老・五奉行のメンバーの復権による「遺言体制」の立て直し（家康を除いた四大老・五奉行制の再構築）と、家康の独裁権力下で行われた施策の白紙化をスローガンとした。そのため、西軍は毛利輝元の軍事力を背景としながらも、秀頼の意向を代弁する立場にあった三奉行を前面に押し出し、檄文および「内府ちかひの条々」で家康を弾劾することで周囲に西軍が「秀頼様衆」であると印象づけた。

前田利長や上杉景勝との対立では、家康の側に三奉行が付いていたため、同じ大老衆の争いでありながらも、政治的に家康が優位に立っていた。三奉行に正当性を補完させることで、家康は常に優位に立つことができ、大老衆の構成員を全て排斥するまでは三奉行との連携を保ちたいというのが家康の心情だっただろう。

西軍に三奉行が味方し、豊臣秀頼を推戴したことは、諸大名にとって軽率に扱うことのできない問題だった。西軍の勧誘に対する越後春日山（新潟県上越市）の大名堀秀治の反応は、秀頼に対して忠誠を誓うというものであった。加藤清正は、長岡忠興が秀頼の命令で所領を没収された旨を長岡家臣の松井康之らに報じている。三奉行が西軍に味方したことによって、理論上、三成ら西軍は「公儀」となり、一方の家康は、三奉行が発した檄文と「内府ちかひの条々」によって正当性を奪われたのである。

しかし、結果は理論通りに運んでいない。堀秀治や加藤清正は、西軍の軍門に下ることはなかった。そして、会津征討軍が真田昌幸などのわずかな離脱者にとどまり、解体することなく東軍として西上している点からも、

家康は依然として諸大名の支持を失ってはいなかったといえる。多くの諸大名は、秀頼の命令には従うという立場を表面的に示したものの、西軍への協力は拒絶しているのである。

秀吉が歿して以降、たび重なる権力闘争によって家康の権力は伸張を続けていった。そして、関ヶ原の戦い当時、諸大名が御家の存亡を賭ける選択に直面した時、三奉行が有する正当性は、家康の実力に抗えるものではなかった。西軍に与した諸大名の多くは、石田正澄（三成の兄）が近江国の愛知川に閘を設けたために会津征討に従軍できなかった者たちや、岐阜城主の織田秀信が西軍に味方したために西軍へ与した美濃国の領主たちであり、西軍が掲げる「公儀」の秩序を浸透させるには、武力制圧が条件だった。伊勢国などで領主が西軍に抵抗したところや、九州に在国した諸將の多くが西軍に非協力的だったことを踏まえると、西軍が掲げる「公儀」の秩序は上方から遠ざかるにつれて及ばなくなっていくと考えなくてはならないのである。

家康の視点から関ヶ原の役の意義を見た場合、攻略目標だった景勝のみならず、二大老（毛利輝元・宇喜多秀家）を一度に破ったという点は大きい。家康は大老衆を同時に二人以上相手にすることを避けてきており、関ヶ原の役がなければ大老衆を一度に破ることはなかっただろう。大老衆の排斥という面では、想定外の危機に直面しながらも結果的に目的の達成を早めることになった。

しかし、秀頼の意向を代弁する立場にあった三奉行との戦いに突入したことのほうが、より大きな意義がある。家康にとって三奉行との対決は望まざるものだったが、三奉行の離反によって否が応でも戦わなくてはならなくなってしまった。それは、大老衆の排斥にとどまっていた家康の殻を破ると共に、五大老・五奉行のメンバーの中で現役の者すべてが家康の敵になったことを意味した。

家康による五大老・五奉行のメンバーの排斥は、いわば「遺言体制」の否定である。家康は慶長四年十月一日に「遺言体制」を改変し、本格的に豊臣政権の篡奪に入った。それに対して西軍は、三成を奉行職に復帰させて「遺言体制」の立て直しを図り、二大老・四奉行による新たな「公儀」を自称。「御仕置改め」として家康の施策

を否定した。

ゆえに、関ヶ原の役は、家康と「遺言体制」の最終決戦と位置づけられる。そして、家康の勝利によって五老・五奉行制は完全に崩壊したのである。

豊臣家の家老である五奉行の消滅は、家康に論功行賞の名のもと、豊臣領国体制の再編成（国割）を可能にさせた。

本戦後の国割について、先行研究では、慶長五年十月から慶長七年末の二年間に亘る国割を、時期を区別することなく一緒に論じた点や、家康の領知宛行権の脆弱さを指摘するにとどまるといった課題を抱えていた。第五章では、これらの課題に取り組んだ。

本戦直後（慶長五年十月・十一月）の領知配分は、国郡を基準とする宛行であった。長岡忠興の宛行に「卅万石之積」とあるように、少なからず石高を意識していたが、家康権力の統治機構が未成熟であったがゆえに、石高を基準とする宛行には限界があった。

また、統治機構が未成熟であったにもかかわらず、大功を立てた豊臣系大名の領土要求を早期に叶えなくてはならない必要性に加えて、諸大名が「国持」を理想としていた点も、国郡が基準とならざるをえなかった要因として挙げられる。

翌年（慶長六年）には家康権力の統治機構が整い始め、領知目録が交付されるようになり、領知配分の基準は国郡から石高へと移行していく。また、領知目録にある「重而御朱印申請可進候」文言は、領知配分・給付の主体は家康であると示唆する布石であった。

そして、慶長七年九月には諸侯に対して印判状による領知宛行が確認できるようになる。この時をもって、領知配分・給付の主体が家康であることが明確となり、家康は領知宛行権を完全に掌握したと位置づけられるとした。

藤井讓治氏は天下人であるための条件として、軍事指揮権と領知宛行権の二つを同時に掌握することで天下人の地位は確固たるものになると論じている⁽⁷⁾。これに則れば、家康は関ヶ原の役を通して、軍事指揮権と領知宛行権のいずれも掌握しているため、慶長八年の征夷大將軍任官前に天下人たる基盤は築いていたといえる。くり返しとなるが、関ヶ原の役は、家康と「遺言体制」の最終決戦と位置づけられる。軍事指揮権は、会津征討や本戦の勝利を通して実質的に家康が掌握したとみていいだろう。そのため、領知宛行権の掌握は、家康が天下人となるための最後の課題となった。そして、家康は本戦後の国割を通して、慶長七年九月には領知宛行権を獲得している。この時をもって、家康は「遺言体制」を完全に克服したといえよう。広義でとらえれば関ヶ原の役の結果、徳川政権の基盤が築かれたということができよう。

註

(1) 徳川家康違背事書写(『松井文庫所蔵古文書調査報告書』二(八代市立博物館未来の森ミュージアム、一九九七年)〈以下『松井二』と表記〉四一九号。

(2) (慶長四年閏三月)毛利輝元書状「毛利元康宛」「厚狭毛利家文書」(『徳川家康没後四〇〇年記念 特別展 大関ヶ原展』二〇一五年、四一号)。

(3) 『北野社家日記』第五(続群書類従完成会、一九七三年)二七七頁。

(4) 寛永十年八月二十七日付宮部長令書上「宮部文書」(『愛知県史』資料編十三 織豊三、二〇一一年、一〇九三号)。

(5) (慶長二年)十一月九日付宇都宮国綱書状「結城朝勝宛」「真崎文庫所収文書」(『戦国遺文 下野編』第三卷、東京堂出版、二〇一九年、二三五七号)は「仍不斗様子を以身上相果候、天道浅間敷存迄候」と、突然の改易は天道によるものだとしても嘆かわしいとしている。また、(慶長五年)七月二十七日付加藤清正書状「松

井康之・有吉立行宛」(『松井二』四二四号)では「越中殿御身上之儀、秀頼様方曲事ニ被思召候由にて、丹後国へ隣国衆を差遣、城請取候へと、従奉行衆被申付候由候」と、長岡忠興が領知没収となって丹後へ軍勢が派遣されたことを報じている。

(6) (慶長四年) 九月二十一日付島津惟新書状「島津忠恒宛」「島津家文書(御文書(義弘公)一九一七一〇)」。
『鹿児島県史料 旧記雑録後編 三』(鹿児島県、一九八三年) 八八四号。

(7) 藤井讓治『日本近世の歴史 1 天下人の時代』(吉川弘文館、二〇一一年) 二五一、二五二頁。